
バカと暴風と召喚獣

小鳥丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと暴風と召喚獣

【NZコード】

N1732W

【作者名】

小鳥丸

【あらすじ】

Aクラスレベルのオリ主 宇童 空うどりがFクラスに振り分けられてしまい……

バカテス、エア・ギアを知らない方でも問題なく読めるようなものにしたいと考えています。

基本的にバカテスですがたまにエア・ギアと絡みます。（できればエア・ギアとの絡みを多くしたい）

現在3巻終わりにエア・ギアとの絡みあり。エア・ギアは『小鳥丸』が『無機ネット』戦を終えたくらい。

更新は1週間に1話……の予定。

想像力、妄想力豊かな方はグロ注意？

1巻・2巻+閑話を修正しました。前なかつたことがつけたされて
います。読みやすくなつていれば幸いです。

3巻以降は来年修正予定。

誤字脱字、『こじがおかしい』等がありましたらお知らせください。

P・S・感想待ってます！

バカと俺とクラス分け（前書き）

1巻開始
編集しました

バカと俺とクラス分け

俺がこの文月学園に入学してから2度目の春が訪れた。学園へと続く坂道の両脇には満開の桜が咲き誇つており、俺こと宇童 空は、悪友の吉井 明久と並んで学園へと歩いて行く。

「宇童、吉井。遅刻だぞ」

玄関の前に浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男があり、ドスのきいた声で呼び止められる。

「お、鉄人。おはよう」

「鉄じ　じゃなくて、西村先生。おはようございます」

俺らを呼び止めたのは生活指導の西村 宗一。通称『鉄人』。目をつけられると口クな目に遭わない、とは明久の談。

「宇童、鉄人と呼ぶな。西村先生と呼べ。
それと吉井も鉄人って言わなかつたか?」

「ははっ。気のせいですよ
「ん、そうか?」

隣にいる明久が冷や汗を流しながら答える。

「それにしても、普通に『おはよ〜』やります』じゃないだろうが
「あ、すいません。えーっと 今日も一段と肌が黒いですね」
「あー、それには俺も同意見だ。
この時期にどうやって焼いてんだ?」

日焼けサロンにでも行つてんのか?

「……お前らには遅刻の謝罪よりも俺の肌の方が重要なのか?
「そっちでしたか。すいません」
「あー、悪い悪い。
ま、細かいことは気にすんな
「まったく貴様らは……いくら罰を『えても全然懲りないな」

溜め息混じりに鉄人が咳く。

こつ言われると、俺たちが遅刻の常習犯のように聞こえるな。

明久は兎も角俺はそうそう遅刻はしてねえ。

「俺はあんま遅刻したことねえよ?
「遅刻は、な。ほら、受け取れ」

何か含みがある言い方だが気にせず、俺は鉄人が箱から取り出した封筒を受け取る。

「どーも」「あ、さんきゅ」

今受け取ったこの封筒。

中には今年のクラスが書かれた紙が入っている。

掲示板とかに張り出せば楽だつてのに一枚一枚手渡しとは……試験

校つてのは大変だな。

ま、そんなことより今はクラス分けのことだ。
実はこのクラス分けのこと楽しみにしてたんだよな。

「明久、お前はどのクラスだと思つ?」

「DかCが妥当なとこじゃないかな?よくできたんだし。
ちなみに空の予想は?」

「お前のできたはアテになんねえからな。

ま、俺はAだろうな」

「空つて何気に頭いいもんね。1年のときもトップを争つてたし有
り得るかもね」

「……お前に『何気に』とか言われたくねえ」

そつ言いつつ封筒を開け、書かれていたクラスを確認する。

『宇童空… Fクラス』

「……F……?」

「先生!僕がFクラスなんて何かの間違えですよ!?」

明久もFクラスだったようで鉄人に抗議の声を上げる。

「吉井、諦める。それは間違いなくお前の実力だ。

宇童に関して名前の書き忘れだ。今度から見直しあつかりするこ
とだ」

「……なん……だと……」
……………名前の書き忘れ…………。

「…………」

こうして俺の最低クラス生活が幕を開けた。

バカと俺とFクラス（前書き）

編集しました

バカと俺とFクラス

廊下

「……なんだう、このばかデカい教室は」

今、俺たちは1クラスの生徒数・約50人が授業を受けるには過剰なほどの広さがある教室の内部を廊下から覗きこんでいる。その教室の壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげなく置かれており、高級ホテルのロビーのようだ。

「確かにでけえな。普通の教室の5倍はあるんじゃねえか？」

「そうだね。これが噂のAクラスなのかな？」

「たぶんそうだろうな。

てか黒板がねえってどういうこと？」

そう、俺が告げた通りこの教室には黒板がない

がその変わ

り巨大なディスプレイが一つ。

……なんと言うか規格外だな。

ディスプレイに向けていた視線を少し下にずらすと、壇上に髪を後ろに団子状にまとめ、眼鏡をかけスーツをきつちり着こなした知的な女性がいた。

彼女は学年主任の高橋 洋子（以後、羊羹）。

おそらくAクラスの担任だう。

その羊羹がAクラス生徒に自己紹介をし終えると次は設備の確認を

しだした。

『 ノートパソコン、個人用パソコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他設備に不備のある人はいますか？ 』

「 …… Aクラスって豪勢だね」

明久が呆れたように呟く。

『 足りない物は全て学園が支給致します 』

「 そうだな。ノートパソコンは……まあ、よしとしよハ。許容範囲内だ……。」

だがつ、個人用パソコンやら冷蔵庫やらはどう考へてもやり過ぎだろー。冷蔵庫の中身も学園が支給してくれるらしいし優遇されすぎだろー！

？」

……おっと失礼。少々 Biā Voīce (発音は滑らかに) が出ていたようだ。

そうやって見ていると、黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような少女が席を立ち教室の前へ出る。

彼女はAクラス代表霧島翔子。坂本の幼なじみ。同性愛者ではないかという噂があるが、本当は。

……ん？ 続きが何か気になるか？

だが、こつから先は俺の口からじや言えねえトップシークレットだ。潔く諦める。

つと、こわしちゃいられねえ。俺たちも自分のクラスに行かねえと。

「明久。そろそろ行くぞ」
「あ、うん。わかった」

そう言いつと俺たちは走り出さない程度に廊下を進んでいった。

Fクラス教室

2年F組と書かれたプレートのある教室に着いたが、明久が何か躊躇しているようで中に入れない。

「明久、何戸惑つてんだ？」
「えつと……新年度なのに遅刻してみんなに悪い印象持たれないかな？つて」
「考えすぎだろ。明久らしくねえ。
にしてもお前がそんなこと心配するつてことは明日は雨か？
傘持つて来ねえとな」
「それはバカにし過ぎだと思つよ」
「ははつ、悪い悪い」

ちょっとからかうといつもの様子に戻ったようで、やつと中に入る。そして詫びの言葉を俺は普通に明久は愛嬌たっぷりに言い放った。明久を気持ち悪いと思つたのは心に留めておく。

「悪い、遅れた」

「すいません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ、ウジ虫共」

初っぱながら罵倒とか誰だ「ヲ」、と思いながら教壇に立っている男を見る。

その背は意外と高く、180センチ強くらい。やや細身だが華奢なわけではなく、ボクサーのような機能美を備えた細さを感じる。顔は意志の強そうな目をしており野性味たっぷり。短い髪の毛がツンツンと立っている。

……あれだ。俺の悪友の坂本 雄一だ。教師じゃなかつた。

「……坂本何やつてんだ？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がつてみた」

「先生の代わりって、雄一が? なんで?」

「一応このクラスの最高成績者だからな。要するにこのクラスの代表だ。」

それはそうと、何故空がここにいるんだ? テストの時に休んでたか?

?

「いや、テストは受けたんだが名前書き忘れてな」

「ははっ、空も意外とバカだな」

「ハッ、バカにバカつて言われたかねえな」

「…………(ガンのくれあい)」

「まいい。わざわざ席につけ」

「へいへい」

そつまつて窓側の空いている席につく。

「それにしても……流石はFクラスだね」「確かに。Aクラスとの差が尋常じゃねえ。カビ臭えし」

そうやつて明久と話しているとドアが開き、寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相に着た、いかにも冴えない風体のオッサンが入つて来た。

そのオッサンは霸氣のない声で話し出す。

「えー、おはよひじやれこます。

私は2年F組担任の福原 慎です。よろしくお願ひします

そう言ってオッサンは、薄汚れた黒板に名前を書こうとしたが、チヨークがなかつたのか書くのをやめる。チヨークすらまともにないのは流石に涙が出てくる。

「皆わん全員に卓袱台と座布団は支給されますか?不備があれば申し出て下さい」

するとクラスメイトが設備の不備を申し出る。

『せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入っていないですー』

「あー、はい。我慢してください」

『先生、俺の卓袱台の脚が折れています』

「木工ポンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

『センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど』

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請してお

まあしょい。

……他に何もないのであればこの話は終わりです。必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

結局、不備を申し出ても改善してくれないらしい。
聞いた意味無くねえか？

「では、自己紹介でも始めましょうか。

廊下側の人からお願ひします」

オッサンがそいつひとつと生徒が立つ。

「つむ、木下 秀吉じや。演劇部に所属しておる。今年一年よろしく頼むぞい」

爺言葉の小柄で、肩にかかる程度の長さの髪をゆつたりと縛つてい
る男子生徒が自己紹介をする。

おー、誰かと思えば秀吉じやねえか。

可愛らしい顔立ちのためよく女子に間違えられるらしい。告られる
ことも結構あるらしい。もちろん男から。

今流行りの男の娘ってやつだよな、たぶん。

ちなみに秀吉は「近所さんだ。朝なかなか起きられないためよく起
こしに来てくれる。

秀吉とは違つて賢い双子の姉がいるんだが何クラスなんだ?もしか
してAクラスか?

Aクラスにそれらしき影が見えたような見えなかつたような……。

そう考へていると隣で明久がなにやらいやらしい笑みを浮かべた後、頭をぶんぶん振っていた。

おそらく秀吉に対する邪念を振り払つてんだろうが端から見たら気持ち悪いことこの上ない。

しかも男相手に何考へてんだよこのホモ野郎。……今思つたんだが『桃太郎』と『ホモ野郎』ってなんか似てるよな?『ホモ太郎』ってしても全然違和感ねえ。

「…………土屋 康太」

続いて小柄で寡黙そうな男子生徒。

こいつも知り合いだ。

康太は小柄だが引き締まつた身体で運動神経がいい
となしい。

隠れてムツツリ商会なるものを経営しているため目立つことは避けたいんだろう。

それにもしても、男しかいねえな。
むさ苦しいつたらありやしねえ。

学力最低クラスになると、女子はほとんどいねえのか?潤いが欲しいな……。

「…………です。海外育ちで、日本語は会話できるけど読み書きが苦手

です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は

「

少し考え方をしていくうちにまた次の人が自己紹介を始める。

今度はこのクラスには珍しく女子の声。初の潤いか!、と思ひ顔を向けてみるとまたしても知り合いだった。

彼女は島田 美波。

実はA君のこと好きな乙女。

青春だな。

「 趣味は吉井 明久を殴ることです 「

……その趣味はやめておいた方がいいだろ。愛しのA君がめちゃくちゃビビッてんじゃねえか。

島田の自己紹介が終わり、その後は淡々と自分の名前を告げるだけの作業が進む。

次は、明久のようだ。

「 ハホン。えーと、吉井 明久です。
気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね 」

『『ダアアーリイーーン』』

明久がそう告げると即座に野太い声の大合唱が返つてくる。
うぶつ、こじつけやべえ。吐き気がする。

「……失礼。忘れて下さって。とにかくよろしくお願ひ致します」

明久が口元を押さえながら席に着く。

考えなしに変なことを言つからこんなことになるんだよ。

その後もじばらぐ前を告げるだけの単調な作業が続き、俺の番かと思ったその時、不意にガラガラと教室のドアが開き、息を切らせ胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん…」

「丁度良かったです。

今自己紹介をしていくといふので姫路さんもお願ひします」「は、はい！　あの、姫路　瑞希といいます。よろしくお願ひします…」

小柄な身体をさらに縮こまらせるようにして声を上げる姫路。肌は新雪のように白く、背中まで届く柔らかそうな髪は、優しげな彼女の性格を表しているようだ。

保護欲をかきたてるような可憐な容姿（俺はそうは思わないが）は、男だけのFクラスで異彩を放っている。

姫路は成績を常に上位1桁以内に常に名前を残す程成績が良かつたはず。

なんでFクラスにいるんだ？

俺みたいに名前を書き忘れたのか？

俺と似たような疑問を持ったのか自己紹介を既に終えた男子生徒が1人高々と右手を上げ姫路に質問する。

「はいっ！質問です！ なんでここにいるんですか？」

質問の内容が失礼な気もするが俺も気になつていてことだ。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

その言葉を聞き、クラスメイトは『ああ、なるほど』と頷いた。姫路はきっと熱のせいで途中で退席したんだろうな。

『試験途中での退席は無得点扱いとなる。その結果としてFクラスに振り分けられてしまった』ってワケだ。

そんな姫路の言い分を聞き、クラスの中ではちらほらと言い訳の声が上がる。

『そう言えば、俺も熱（の問題）がでたせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

……『いづら本当にバカだ。

そんな中、逃げるよう明久の後ろの空いている卓袱台に着いた姫

路。

「き、緊張しましたあ……」

「あのさ、姫」

「姫路」

明久が姫路に声をかけようとしたその上にかぶせるように、俺の後ろで姫路の隣の坂本が声をかける。

「は、はいっ。何ですか？　えーっと……」

「坂本だ。坂本　雄一。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします」

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

「よ、吉井君！？」

明久が口を挟むと、姫路が明久の顔を見て目を丸くする。そこで俺は明久のフォローするため口を開く。

「「姫路、明久がブサイクですまん」」

あ、坂本とかぶつた。

「雄一、空。それフォローになつてないから！？」

「吉井君は全然ブサイクじゃないですよ！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし……その、むしろ……」

「そう言われると、確かに見てくれば悪くない顔をしているかもしれないな。

俺の知人にも明久に興味を持つている奴がいたような気もするし

「あつ、それ俺も聞いたことがあるな」

「え？ それは誰」

「そ、それって誰ですかっ！？」

「「確か、久保」「」

「「久保！」「」

俺と坂本の溜めに律儀に聞き返す明久と姫路。

「「利光だつたかな」「」

久保 利光（性別）

それを聞き姫路はホツと安堵する。

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

「お前のことを想ってくれているやつがいるんだ大事にしろよ」「それはシャレになんないよ！」「

あ、なんかマジっぽいし少しネタバラしでもするか。

「明久安心しろ。半分冗談だ」

「え？ 残り半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

盛大にスルーをする坂本。

決してギャグなんかじゃねえからな！

「あ、はい。もうすっかり平氣です。えーっと……空君いいですか？」

「あ？ どうした？ 自己紹介か？」

それならまだしてねえからその時でいいだろ？」

「あ、 それならそうですね」

「ねえ雄二、 空！ 残りの半分は！？」

「明久、 大声出すな。 うるさいぞ」

「お前は引っ張りすぎなんだよ」

しつこい男は嫌われんぞ？ 誰にかは言わねえけど。

「はいはい。 静かにして下さい。 自己紹介再開しますよ」

そう言ってオッサンが教卓パンパンと叩く。

「了解。 僕は　」

ガラグシャツ

俺が席を立ち名前を言おうとした瞬間教卓が崩れ、 オッサンが替えを用意しに行くため自己紹介を中断させられる。

明久がその光景を見た後、 一瞬姫路の方を見て俺と坂本を呼ぶ。

「… 空、 雄二ちょっとといっ？」

「どした？」

「ん？ なんだ？」

「ここじゃ話しかけていいから、 廊下で」「別に構わんが」

明久が真顔で言うので俺も坂本も素直に従い、 立ち上がり廊下に

出る。

「んで、話つて?」

「この教室についてなんだけど、かなり酷いよね?」

「そうだな」

「Aクラスの設備凄かつたよね?」

「ああ。凄かつたな。あんな教室は他に見たことがない」「そうだよな。Fクラスにちょっと分けてもらいたいな」

「そこで僕からの提案。折角2年生になつたんだし、『試召戦争』やつてみない?」

「戦争、だと?」

「『試召戦争』か面白そつじやん」

「それをね、Aクラス相手に」

「……何が目的だ」

「坂本。お前分かつて聞くのはどうかと思つぞ?」

「へ? 空どうこう? ど? ?」

「お前が体の弱い姫路の為にまともな設備をプレゼントしたい、つていうのが坂本も分かつてゐることだよ」

「ど、どうしてそれを! ?」

「明久はわかりやすいし、しかもタイミングもタイミングだったからな。すぐ気づく。」

……それに坂本もお前に言われるまでもなく、試召戦争をやつつと思つてんじやねえの?」

「ああ」

「え? どうして? 雄一だつて全然勉強してないよね?」

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明をしてみたくてな。」

それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし おつと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

坂本に促され教室に戻る。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願ひします」

「えー、俺の名前は宇童 空。特技は合氣道、キックボクシングなど。一年間よろしく」

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」「了解」

オッサンに呼ばれ坂本が席を立ち、教壇に歩み寄る。

「Fクラス代表の坂本 雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも好き
なように呼んでくれ。
さて、皆に一つ聞きたい」

間の取り方がうまいせいか、全員の視線はすぐに坂本に向かられる。
その様子を確認した後、坂本は視線を教室内の各所に向ける。

カビ臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

つられて全員が坂本の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい
が

不満はないか？

『『『大ありじやあつ！－』』』

2年F組生徒が叫ぶ。

「だろう？俺だってこの現状に大いに不満だ。だが不満なら他のクラスから奪えればいい」

そして坂本が告げた。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思つ

バカと俺と宣戦布告（前書き）

編集しました

バカと俺と宣戦布告

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとつては現実味の乏しい提案にしか思えなかつた。

この学園は現在、世間で話題を呼んでいる新技術『試験召喚システム』の試験採用校である。

これは学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高める為に提案された先進的な試み。

その『試験召喚システム』により自身のテストの点に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出し、クラス単位で戦うことを『試験召喚戦争』と呼ぶ。

その戦争で重要なのがテストの点数。

だがAクラス1人に対しFクラス3から5人で相手をして勝てるかどうか分からぬ程の実力差がある。

誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだつた。だが、圧倒的な戦力差を知りながらも、坂本は宣言する。

「Aクラスに必ず勝てる。いや、俺が勝たしてみせる！
このクラスには試験召喚戦で勝つことのできる要素が揃っているからな！」

そんな坂本の言葉を受け、クラスの連中がざわめく。

「それを今から説明してやる。

おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い

「…………（ブンブン）」

必死になつて顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太。姫路が顔を赤くしながらスカートの裾を押さえ遠ざかると、康太は顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩き出した。

「土屋 康太。

こいつがあの有名な、寡黙なる性識者だ^{ムツツリーニ}」

「…………（ブンブン）」

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……？』

『だが見る。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

ムツツリーニと聞いて男子生徒がざわめく。

『ムツツリーニ』とは男子生徒には畏怖と敬畏を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられ、たとえどんな状況であれつと自分の下心を隠し続けるムツツリの中位称号。

下位称号はムツツリであることがまだ漏れの『釣^{ルアー}』、上位称号はムツツリであることを何人にも認識されない最強のムツツリ『神の大罪^{ハイ}』。

「姫路のことは説明する必要もないだろ？。皆だってその力はよく知つてゐるはずだ」

「えつ？わ、私ですか？？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している。

それに宇童もいる。

知らないやつも《暴風族》^{ストームライダー}って言えば分かるだろ?「ん?俺か?てか、そんな名前で呼ばれてたの初めて知ったぞ!?

『宇童つて確かに学年首席の霧島と張り合つてたつてやつだよな?』
『あいつ、そんなにすごいのか!?それなら姫路さんもいるしAクラスにも引けをとらないな』

『しかも《暴風族》つて召喚獣の扱いが上手いって言つので噂になつてなかつたか?』

『ああ、あれだろ。召喚獣の操作練習の時に教師を倒したつてやつ』

姫路と俺の名前を聞いてクラスがざわめく。

俺つて噂になるようなことしてたんだな。自覚ねえけど。

「木下 秀吉だつている」

『おお……!』

『ああ。アイツ確か、木下 優子の……』

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかつたか?』

『それじゃあ、実力はAクラスレベルが三人もいるつことだよな!』

やれそуд、そんな雰囲気が教室内に満ちていた。

「それに、吉井 明久だつている」

シンツ

上がっていた士気が一気に下がる。
ちょっとだけだが明久が気の毒だ。

「ちょっと雄一一。どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさー。」

『誰だよ、吉井 明久って』

『聞いたことないぞ』

「そうか。知らないようなら教えてやる。ここつの肩書きは《觀察
処分者》だ」

『……それって、バカの代名詞じゃなかつたっけ?』

「ち、違うよー! ちょっとお茶田なー6歳につけられる愛称で

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄一一」

「明久。ホントのことだからしゃあねえだろ?」

「空まで……」

「そう落ち込むなって」

そういうながらポンポンと背中を叩いてやる。

「あ、あの。それってどういうものなんですか?」

頂点に近い場所にいた姫路にはこの単語に馴染みがないよつだ。
俺はコイツらと連んでたから知ってるが。

「具体的には教師の雑用係だな。」

そのため、こここの召喚獣は物に触れるが、召喚獣の負担の何割かがファイードバックされるようになつていて

『それなら吉井はおいそれと召喚できなによつてことだよな?』

「それについては、気にするな。どうせ、いてもいなくとも同じような雑魚だ。

兎に角だ。俺たちの力の証明としと、まずはロクラスを征服してみよつと思つ。

皆、この境遇に大いに不満だらう?』

『当然だ!!』

明久が坂本に反論しようとしたがタイミングを逃したようで、突き出した手が所在なさげに宙を漂つ。

「ならば全員筆を執れ!出陣の準備だ!

俺たちに必要なのは卓袱台ではない! Aクラスのシステムテスクだ!

!』

『『『おおーーーーー』』』

「……それじゃあ、明久にはロクラスへの宣戦布告の死者になつてもうつ。無事大役を果たせ!」

「……下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭つよね?それに『ししゃ』のところに違和感が……」

「大丈夫だ。それに気のせいだ。

騙されたと思って行つてみる

「本当に?』

「もちろんだ。俺を誰だと思っている。

俺は友人を騙すような真似はしない

「わかつたよ。それなら使者は僕がやるよ

そう言つて明久はDクラスに向かつて歩き始めた。
いつも騙し騙されしてんのにすんなり受けやがつた。
やつぱバカだな。

「騙されたあつー！」

しばらくして明久が教室に転がり込んで来た。
騒がしいヤツだ。

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよー。やつぱり使者への暴行は予想通りだつたん
じやないか！」

「明久、坂本を責めるのはどうかと思つぞ？
お前が簡単に乗せられたのが悪い」

「…………」

「そんなことより、今からミーティングを行つぞ」

そう言つと秀吉や康太、それに島田が近づいてきた。

「明久、宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に開戦予定と告げて來たけど」

「んじや、先に飯か？」

「明久。今日くらいはまともな物食えよ？」

「そう思つならパンでも奢つてくれると嬉しいんだけど」

「バカ言つなよ。俺が食つワケでもねえのに金なんて出せ　いや、

今から言つ英文を訳せられたら奢つてやる」

「ほ、本当！？」

「ああ。

んじやいくぞ。『I might as well throw my money away as lend it to you.』

わかるか？』

「え、えっと……書いてくれると嬉しいかも」

「しゃあねえな」

≈I might as well throw my money away as lend it to you.』

「アイ ミット アズ エル タロウ マイ モネ アワイ アズ レンド イット ト グー。」

ふむふむ。私は太郎から「サイズのミットを貰い、それとあなたは私のモネの絵画は淡い赤色です。

これであつてるよね？」

「……いや、全然違え」

読み方から違えよ。

「じゃあ答えは何なの？」

「……『あなたに金を貸すくらいなら捨てた方がいい』」

明久をいじるために最近授業で出てきたこの英文にしたんだが難しそ過ぎたらしい。

「…………ちつ、惜しかったか」

かすつてもねえよ。

「……残念だつたな」

「く……つ！…………本当に…………惜しかった…………」

パンに未練たらたらだな。

「あ、あの。吉井君つてお昼食べない人なんですか？」

「……あ、いや、一応食べてるよ。塩とか砂糖とか……」

なぜか明久の言葉に霸気がない。

パンが食べれなかつたことに相当ショックを受けていゝやつだ。

「あの、吉井君。塩と砂糖つて食べるとは言こませんよ…………」
「舐める、が表現としては正解じやうつな」

明久に向けられる皆の目が妙に優しい。

そこで島田が何かを決心したのか一度頷き口を開く。

「ア、アキ。ウチの弁当分けてあげよつか？」「く……？そんなこ

としてもらうのは悪いよ…………」

「俺にはたかるクセによく言つな。

それには好意はありがたく受け取つておけ」

てかいい加減その霸気のない声を止める。

こつちまで気が滅入つてくる。

「空がセツ言つなら……。」

美波……、ありがとう……」

「べ、別に吉井のためにしたワケじやないんだからねー!」

おー、リアルシンデレ初めて見た。

「明久、これからは飯代ちゃんと残しておけよ」

「う……わかつたよ……。」

でも今月ご飯代にまわすお金もつないよ……」

「はあ? まだ四月始まつたばつかだぞつ! ? 何に使ってんだけよ! ?」

そう説教(?)をしていると明久へ救いの手が。

「あ、あの。良かつたら私がお弁当作つてきましょつか?」

「え? ……ほ、本当にいいの! ?」

僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよー!」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かつたのう明久。手作り弁当じやぞ?」

「うん!」

秀吉のからかう台詞をものともしない明久。やつと声に霸気が戻つてきて一安心。

吉井に『だけ』につくつてくるなんて「
ふーん。瑞希つて随分優しいんだね。
その島田の耳元で俺は言つ。

「おい、明久に食わしてやりたいんなら島田も作ってきてやつたらどうだ？」

「い、いや。ウチは別にいいわよ」

「この機会に明久の好感度あげとけて」

「し、しょうがないわねつ。

アキ！ウチも弁当作つてきてあげるわよ」

「み、美波まで本当！？」

それじゃあ。美波、姫路さん、お願ひします」

そう言つて明久はペ「コトと頭を下げる。

「さて、話がかなり逸れたが、試召戦争に戻ろ！」
「雄」。一つ気になつていたんだけど、ビリしてロクラスからなの
？」

「確かにのう。段階を踏んでいくならEクラスじやろ？」「
出るならAクラスじやろ？」

「明久に秀吉。この面子で行きやあEクラスなんぞ瞬殺だろ？
ちょうどいい機会だし自分の周りにいる面子を言つてみろ」「
えーと……美少女二人に美少年が一人、後馬鹿が一人とムツ
リが一人だね」

「誰が美少女だと！？」

「明久が俺をそんな目で見ていたとは知らなかつた。悪い」

「ええつ！？雄」と空が美少女に反応するの！？」

「…………（フツ）」

「ムツツリーに對して美少年つて言つたワケじゃないからね！？
「ならワシのことか！」

やつと男として見てくれるよつになつたのかの。嬉しいの！」

「秀吉までボケたら、僕だけじゃツツコミ切れない！」

「明久！今の言葉は聞き捨てならんぞつーワシは男じや！」

「どうどう。秀吉、落ち着け。

俺はお前が男だって信じてる」

「…………空よ…………」

なんか知らねえけど感動している秀吉。

「それで、なんでDクラスからなの?」

「Dクラス戦は打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだからだ。それに派手にやつて今後の景気づけにするのにはどうぞ強めだしな」

「その言い方だとDクラスに負けることはない」と「だよね?」

「ああ。負けるわけないさ。

お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。

いいか、お前ら。ウチのクラスは

最強だ

根拠がねえ言葉だつてのになぜかその氣になつてくる。
「イツのカリスマ性はすげえな。

「ふん、いいじゃねえか。そういうの」

「そうね。面白そうじゃない!」

「やうじゅな。アクロスの連中を止めきつ落としてやるかの」

「……（グッ）」

「が、頑張ります」

「それじゃ、作戦を説明しよう」

「

バカと俺と宣戦布告（後書き）

作戦会議をしているのは『授業中または休み時間』のつもりであつて昼休みではありません。

昼ご飯のことが話題に上がったため昼休みと考えてしまふかもしませんが『授業中または休み時間』です。

バカと俺とロクラス（前書き）

編集しました

バカと俺とロクラス

空き教室

シャカカカカカッ

「あー……暇だ」

そう咳きながらも俺の持つシャーペンは分身が見えるほど高速で動いている。

【教えて宇童君ー】

Q・空がシャーペンを持っている理由は？

A・振り分け試験のときに名前を書き忘れるという愚行を犯したために補充テストを受けているから。

Q・時間的に今日中に全科目は不可能なんじゃ？

A・無理言つて20分で1科目という急ピッチ。休み時間を潰せば全科目できる。（解説：1日7時間授業で授業時間は60分という後付け設定）

Q・20分で1科目とか不可能、できてもまともな点数採れないのでは？

A・両手でそれぞれ違う問題を解いてる。

Q・頭では一つの問題だけしか処理できないのでは?

A・10問まで可能。

Q・田は2つしかなこの辺りせりて認識してくるの?

A・問題解きながら次々見てる。(解説・問Aを解きながら問B、C、Dと田を通していく)

Q・そんなことしたら『がぐちやぐちや』になるのでは?

A・慣れた。

Q・何点採れそうですか?

A・400は超えるだろ。

Q・それはどの科目が?

A・もちろん全科目。

【教えて宇童君ー終了】

あ、一、午前中に計画的にあるべきだったな。
全然楽しくねえ。

ま、腕輪とれたと思つてしまつたか。腕輪ねえと俺の召喚獣弱え
からな。

……お、そうだ。俺の召喚獣の説明をしておいつ。

姿はデフォルメした俺で頭に白いニット帽をかぶり、『小鳥丸』
のハンブレムのはいつた黒いジャケットの中に白いパーカーを着込
んでいる。

武器は足に履いているA・Tと呼ばれるインラインスケートのよ
うなもの。
エア・トレック

(解説・ぶっちゃけエア・ギアのカズの格好)

ピンポンパンポーン

ん?放送か

『連絡致します。船越先生、船越先生。

吉井 明久が体育館裏で待っています。

生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

船越先生(45歳 独身)

婚期を逃し、最近ついに生徒たちに単位を盾に交際を迫るようになつたらしい。

明久の野郎そこまでして勝ちにこだわるとは……。

……お前のことは忘れない。安らかに眠れ。

キリスト教徒ではないが胸の前で十字を切って『Amen』と呟いておく。

補充テストが終わり教室へ戻ると明久と坂本の2人が話していた。

Fクラス教室

「やれる、僕なら殺れる……。」

「殺るなっての」

いきなり過ぎて話が見えて『ねえ上に』『話していた』って表現は間違ってる気がするな。

「ちなみに、だが。あの放送を指示したのは俺だ」「シャアアアアアッ！」

明久は鋭く踏み込みコンパクトに包丁（おそらく家庭科室からパクつてきたもの）を突き出す。

その狙いは避けにくく致命傷になりやすい肝臓。

さらに右手でなにかの詰まつた靴下を坂本の頭上に振り落とそうとしている。

靴下の伸び具合からいつてそれなりに重いものだらう。殺す気満々だな。

元々は放送を流したヤツにするつもりだつたんだろうが黒幕がいることがわかり、その黒幕である坂本を殺そうとしたつてところだな。最近の若者は血の氣が多くて困るな。

「あ、船越先生」

「ちいっ！…」

坂本がそう言つと明久は飛びかかるのをやめ掃除用具入れに逃げ込んで行く。

「おい、坂本。何やつてんだ？」
「ん？ 空戻つたか。
早かつたな」
「ああ、急ピッチでやつてきたからな

「やうか。

さて、馬鹿は放つておいて、そろそろ決着つけるか」

「やうじやな。あらまうらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合じやうひ」

「…………（口ク「ク）」

「おっしゃーDクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おつひー..』

渡り廊下

渡り廊下に出たのはいいんだが……帰宅途中の生徒があざけてビーツがDクラスか分かんねえ。

そう思いつつ頑張ってDクラスの生徒と帰宅途中の生徒を見分けようとしていると召喚獣で戦っている明久を見つけた。

ん？あれ明久だな。

なんかやられそうだし援護でもするか。

そう思い明久のところへ駆け出すも姫路が先に着いたようで、姫路が敵を斬り伏せる。

今し方斬り伏せた相手が消えると同時に試召戦争が終わりを告げた。……結局何もできずに終わったな……。
無念なり……。

Dクラス代表 平賀 源一 討死

『うおおーーっ！』

その報せを聞いたFクラスの勝ち鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

『凄えよー！本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで畠や卓袱台ともおさらばだな！』

『ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな』

『坂本 雄一サマサマだな！』

『坂本万歳！』

『姫路さん愛しています！』

代表である坂本を褒め称える声がいたるところから聞こえてくる。一部姫路にラブコールを送っているが……。

そして坂本がいる方を見ると、がっくりと頃垂れていのDクラス生徒の奥でFクラスの連中に囲まれている姿があった。

坂本は頬をポリポリと搔きながら明後日の方向を見ており照れることが見て取れる。

坂本が照れたところを見たのは今回が初めてかもしんねえ。ま、だからどうした？って話だがな。

『坂本！握手してくれ！』

『俺も！』

『俺も頼む！』

にしても、もう英雄扱いか。

よっぽどあの教室が嫌だつたんだな。

力ビ臭いのが嫌なら換氣すりやいいだけだつてのに。

ぶじょうもの
無精者ばっかだな。

そつ考えていると坂本のところへDクラス代表の平賀が。

「俺たちDクラスの負けだ。ルールに則つてクラスを明け渡そう」

「いや、その必要はない」

「え？ 雄一なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ。

「俺たちの目標はあくまでもAクラスだということを忘れたのか？」

「忘れてないけど、それならAクラスを標的にすればいいじゃないか」

「なぜそうしなかったのか少しは自分で考えてみる。

とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

「もちろん、条件がある」

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。そんなに大したことじゃない。

俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。
それだけだ」

そう言つて坂本が指したのはDクラスの窓の外に設置されているH

アコンの室外機。

この室外機は、少々貧しい普通の高校レベルの設備でしかないDクラスの物じゃねえ。エアコンついてねえしな。

じゃあどこの物か？それは

「Bクラスの室外機か」

「そう、平賀の言つた通りBクラスの物。
スペースの関係でここに間借りしてんだと。」

「設備を壊すんだから当然教師にある程度睨まれる可能性もあると
は思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」
「それはこちらとしては願つてもいない提案だが、なぜそんなことを？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんですね」

「……そうか。ではこちらはありがたくその提案を呑ませて貰おう」「
タイミングについては後日詳しく話す。

今日はもう行つていいぞ」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願つてこるよ」

その後ざると平賀が去つて行つた。

「さて、皆一・今日はもう解散だ！」苦労だったー。
「んじゅ秀吉歸るか
「やうじゅのやうじゅの。」

「うへ、なあ。何故雄一はロクラスの設備を受け取らなかつたんじ
やねん。」

「せつしや、セチベーションを維持するためだろ。」
今が酷いからちょっと上のロクラスでもすぐ見えて、満足して
しまひしつも出でべる可能性があるしな

「なるほどね」

その後他處もない話をしつゝと家についた。

俺の家は秀吉の家の向かい廻りでひつい頃から付き合つた。

「えじや、また明日」

「つむ、また翌日」

ふう……今日一日、いろいろなことがありすぎて疲れたな。早く飯食
つて寝るか。

こつして俺は新年度一日目を終えた。

バカと俺と昼休み（前書き）

編集しました

バカと俺と昼休み

宇童家

ローンボンボンボンボンボンボンボンボン

「へー……へー……ん……？」

インター ホンが田 覚まし 替わりに 鳴り響いて いる。
鳴らしてんのは木下 姉弟だろ うな。

もつと 言つなら 秀吉の姉の 優子（確定）。

…… 毎度のことながら 連打するの は止めて 欲しい。
いつか ぜつてえ 壊れる。

俺はのそ とべっ から起き上がり 玄関まで のろのろと歩いていく。
朝っぱらからこの重労動（べっ から玄関までの徒歩）は 堪えるな
……。

「……秀吉、優子おはよう。

んで、いい加減連打すんの止める。睡眠妨害だ

「おはよひじやの。

姉上がすまぬの」

「空おはよつ。

秀吉。それじゃあ私が悪いみたいじゃない

…… 実際悪いよ。

「……優子。」「渡しとく」

「鍵……？」

「ああ、俺んちの合戻り鍵。」

直接起こして来てくれるといつがたい」

「え？……あ、うん…」

優子は頬を赤く染めて頷く。
……相変わらず可愛いな。

「頼むぞ？」

「んじゃ、用意していくから待っててくれ」

そう告げると再びのろのろと動き出し、顔を洗つてから自分の部屋まで行つて着替えを済ませる。

顔洗つたらやっと皿覚めた。

『お。弁当で壊したから残さず食べるんだよ』

玄関に行き外に出ようとすると不意に背後から声がかかる。

「ひー？……あ、ばあちゃんか。
いつ来たんだ？」

バツと振り向くとそこにはばあちゃんがいた。
昨日の夜はいなかつたのにいつの間に。

『今朝早くだよ。

ばあちゃんはしばらく旅行に行くから、孫の顔を見てから行いつと思つてね』

「へえ。

あ、お土産頼んだ

『わかったよ。

それよりも空。

今じ飯食べずに学校に行こうとしただろ？

そいつは駄目だよ。朝食とらないと元氣出ないんだから。

サンドイッチ作っておいたから行きながら食べなさい』

ほれと言つてタッパーにサンドイッチがぎつしつ詰まつたものを渡してくれる。

「あ、さんきゅ

『飯もしつかり3食自分で作るんだよ。

それに夜更かしはしない。

それから

『了解。了解。子どもじやねえんだしわかってるつ

『そつかい？ならいつてくるんだよ』

「うー

そう返事をすると俺は家を出ていく。

そこそこばあちゃんはインターほんのこと何も言わなかつたな。

「秀吉、優子。待つたか？」

「それほど、待つてないわよ。

……ねえ、秀吉からFクラスって聞いたんだけど、何があったの？

「あー……それはな、テストで名前書くのを忘れちまって

「それでFクラスになつた、と？」

今年は空と一緒にクラスになれると思ったのに残念だなあ……

優子がわざとひじくへ歯ぐく。

「あー……悪い」

「ホントにそづ思つてゐるのかしら？」

「ああ」

「それじゃあ、罰として週末にショッピングモールに行きましょ？」「ああ、いいぞ。

んで、それは『2人』で、か？

「も、ももももちろんよつ！」

「優子。顔赤くなつてんぞ？」

「か、からかわないでよつ！」「ははつ、悪い悪い！」

「……ワシ、空気じやのう（ボソ）」

俺が優子とじやれあつていると秀吉が隣で何かを呟いた気がした。

今日は昨日の戦争で点数を消費した連中の補充らしへ、俺は1点も消費していないので一人自罰。
そうじうじしていると4時間目が終わり、今は昼休み。

「よし、昼飯食いに行こう！」

今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすつかな

「坂本。お前食いすぎの上にバランス悪い。

野菜食え」

「は？ ちゃんと野菜食つてるだろ。

炒飯とかカレーに入ったニンジンとかグリンピースとかいろいろ

「あんだけじゃ少ないに決まつてんだろ」

口内炎できちまつ。

あー、恐ろし。

「雄一。そんなに食べるんなら一つくらい分けてくれると嬉しいんだけど」

「あ、そうだな。その手があった。

坂本分けてやれ」

「は？ 嫌に決まってるだろ」

「雄一のバカ！ ドケチつ！ イ？ ポつ！

「俺はイ？ ポじやねえ！」

「お前ら食前に変なこと大声で言つてんじゃねえよ。

それに明久。坂本の野郎は気にしてるかもしんねえだろ？ あまり言つてやんな

「あ、雄一イ？ ポだつたんだね。『ごめん』

「だから俺はイ？ ポじやねえつて言つてんだろーーー！」

「ゴイツ、rajii？ ポイ？ ポ連呼してん何が楽しいんだ？」

そうやってわーわー騒いでいるところに島田がやつてきた。

「アキ。ウチはアキの分の弁当作つてきたわよ」

「…………本當？」

明久は坂本と言つ合ひのを止め島田の方に向く。
そこへやひて姫路も。

「あ、あの。私も作つて来ました。

それと余裕があつたので皆さん分までつくりて來たので一緒にどうですか？」

「む、俺たちの分まで作つてくれたのか。すまないな」

「…………女子の手料理、興味がある」

「ほう、楽しみじゃの」

「あー……俺は自分の弁当があるから今回はいいわ」

「空よ、そんなこと言わずに食べればよかる」

「やうしてえけど久しづぶりにばあちゃんが弁当を作つてくれたし、残すと怒られちまつ」

それなりに量が多いし頑張つて食べねえとな。

「ああ、なるほど」

空の祖父母は怒るとおそろしいから」

それならば仕方がない」

「悪いな、姫路」

「いえ、大丈夫です。また今度食べてください」

「ああ、そうさせてもらう」

「それでは、せつかくの」馳走じやし、屋上でも行くかの」

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ。俺は飲み物を買つてくる。

きちんと俺の分をとつとおけよ

「了解じゃ」

「んじゃ、屋上に行くか」

坂本に飲み物を任せ残りのメンバーで屋上へ。

屋上

姫路が持つてきたシートに座り、現在俺は黙々と弁当を食べている。その横では明久が島田の弁当を食べていた。

島田の弁当はなかなか手が込んでそうだ。

「美波、おいしいよ！」

「そ、そう？ ありがとうね」

島田が顔赤くして答える。

「美波ちゃんだけずるいです。私も食べてください」

そう言い、蓋をとつて重箱を明久の方へ寄せると、動きの素早い康太がエビフライをつまみ取った。

「…………（パク）」

口に入れ飲み込んだ瞬間、康太が顔面から倒れ、小刻みに震えだす。俺たちは啞然としてそれを見るだけしかできない。

即効性の毒でも効果が現れるにはもつと時間がかかるだろうが毒以

外に考えられねえ。

「…………姫路。康太に毒でも盛つたか？」

「今にも死にそうになんだが」

「そ、そんなことしてませんよー。」

「じゃあなんでだ？」

「言つちや悪いが壊滅的な不味さなのか？」

「作る時に味見したので味に問題ないはずですよ」「なら食べ合わせか？」

それにしてもこんな死にそうにはなんねえよな。

「もしやムツツリーーが食べたのがたまたま失敗だったのではないのかのう？」

「これほど多く作ったのじゃし」

失敗しただけでこんなことになるかもつと別の物があんただろ？

「じ、じゃあ、姫路さんもりつね？」

明久は覚悟を決めたのか、唐揚げを摘んで口に運ぶ。

「…………うんー普通においしいよ。

やつぱりムツツリーーが食べたのがたまたま失敗だったんだよー。」

「やつかの。ならワシも食べるかのう」

そつ言い秀吉が卵焼きに手を伸ばそつとした丁度そのときに坂本が帰つて來たので、秀吉が動きを止める。

「おう、待たせたな！へー、」いつや皿をつじやないか。どれどれ？」

坂本は床に倒れている康太に気付かず、秀吉が狙っていた卵焼きを素手でつかみ口に放り込む。

「ん？ ちょっと酸っぱゴパツ！？」

坂本が口から有り得ない音を出してジューースの缶を床にぶちまけて倒れた。

身体も小刻みに震えている。

秀吉、顔が青くなつてんぞ？

それはそうと坂本が倒れる前に言つた『酸っぱい』って単語が気になるな。

『甘い』とか『辛い』ならわかるが『酸っぱい』……。

「姫路。卵焼き作るのに酢でも使つたか？」

「いえ、酢は使つてしませんよ」

酢以外は使つたつてことだよな？

「じゃあ何使つたんだ？」

「薄めた塩酸と水酸化ナトリウム水溶液を」

「……なんでそれ使つたんだよ」

「塩が切れてたので自分で作るつかなと思いまして」

……確かに中和すりや安全だが危険すぎる。

「そういう時は横着せずに塩を買いに行け。
こんなことで人殺しになりたくねえだろ？」

「はい……」

「ま、あいつらなら死にはしねえと思つたがそれから氣をつけろよ
「わかりました！」

そう姫路と話し合つていると坂本と明久が田で語り合つていた。

（貴様毒を盛つたな！？）

（なつ、違うよ！

姫路さんの失敗にたまたまあたつただけだよ！

成功してるのはちゃんと美味しいんだよ？）

（本当だな？）

（うん！）

俺と姫路の会話を聞いていないためか未だに失敗だと思ってる模様。

そして明久の言葉を信じ坂本のセカンドトライ。

今度は先程明久も食べた唐揚げ。

「おー？ うまゴパッ」

今『うまい』と言いかけたのに何があった！？

「姫路！ 唐揚げにも使つたのか！？」

「唐揚げには使つてないですよ！？」

「……じゃあマジで失敗したやつか？」

「う…… そうみたいですね……」

失敗がここまでヒドいとはな。

「ま、これからうまくなりやいいんじゃねえの？」

「が、頑張ります！」

スリル満点の昼食を終え、復活した奴らも含めお茶をする。

明久・秀吉は2回、ムツツリーは3回、坂本は6回姫路の失敗 + にあたつた。

「そういえば坂本、次の目標なんだけど」

「ん？ 試合戦争のか？」

次の相手はBクラスだ

「ねえ、雄一どうしてBクラスなの？ Aクラスが目標でしょ？」

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てない。

だがクラス単位で勝てないなら、一騎打ちでも勝てない、なんてことはない」

「でも一騎打ちにどうやって持ち込むの？」

「そのためにBクラスを使いつんだよ」

「そう上手くことが運ぶかのう？」

それに、そもそもAクラスと一騎打ちで勝てるじやろうか？

こちらに姫路がいることは既に知れ渡っている」とじやるうし。対策は練られておるじやろう

「そのへんに関しては考えがある。

それに宇童のやつが何も活躍していないからな。宇童のことはそう知られていなかろう。

とにかくBクラスやるだ。明久、行つていい

「嫌だ！ また殴られるに決まつてー！」

「明久。そのことなら安心しろ。

Bクラスは美少年好きが多いらしい」

「それが本当なら僕みたいな365度どこから見ても美少年は大丈夫だよね！」

「ああ、大丈夫だ。自信を持つて行ってこい！」

そう言うと明久はBクラスへ意気揚々と向かっていった。

明久が行った後

「……5度多かったな」

「そうじやのう。実質5度じやな」

そんな会話があつたことを明久が知る由もない。

「……言い訳を聞こうか?」

「「予想通りだ」」

「雄」「いー空あつ！」

バカと俺と晴れ舞台（前書き）

編集しました

バ力と俺と晴れ舞台

Fクラス教室

「午後はBクラスとの試合戦争だが、殺る気は充分か？」

今回は敵を教室に押し込むことの重要性はなるべく田中は勝ちたさうればなおよじつてといひだ。

攻して敵を蹴散らせ。

キーンローリンカーネーション

昼休み終了のベルが鳴り響く。

やつと……やつと俺の晴れ舞台だ！

「坂本、行つていいか？」

「ああ、行つてこい！」

了解！

坂本の言葉を聞き終えると同時に俺は一人ダツとBクラスへ駆け出

クラスメイトを置き去りにしてきちまつたがその内来るだろ。

「おっ、いるいる」

廊下をかけているとBクラス生徒を見つけた。
先手必勝！

『Fクラス宇童 空。 そのBクラスの3人に英語勝負を申し込む
』
『Fクラスがなめやがつて。野中 長尾だ。受けて立つ』
『金田一 裕子よ。受けて立つわ』
『里井 真由子です。お願ひします』

『試験召喚!』

喚声に応えて魔法陣が展開し、召喚獣が顔をだす。
敵の召喚獣はそれぞれ槍、蛇腹剣、双剣を構える。対して俺の召喚
獣（以後、ミニ 僕）はポケットに手を突っ込んだまま直立してい
る。

『Bクラス 野中 長尾	数学	183点
金田一 裕子	数学	159点
里井 真由子	数学	162点
VS		
『Fクラス 宇童 空	数学	498点』

『なつ！？姫路以外にあんな化け物がなんでFクラスにいるんだよ

! ? ↘

しかも、腕輪持ちよ！？

卷之二

「お前ら俺に巻き込まれないよつに離れとけよ。

それと2人1組になつて敵を倒せ

ある程度偏か云々に付る

少々遅れてやつてきた俺の部隊の連中にそつ指示を出し俺は田の前の敵に集中す。

景気付けにいつちょ派手なのをぶち込むか。

「『紫電の道』ライジング・ロード無限の空・無限の紫館」

ニヤリと笑い腕輪の起動キーを宣言する。

直後、召喚獣の『覆い』ているATから無数のワイヤーがのび、それぞれが鎗を作り雷を纏う。

「やつはあいつだよ」がだが、一ノ瀬が弱るのだ。

לען ען ען ען גש

風切り音と共に敵の3体へ鎗が迫る。

『な!? いきなりかよっ! あくしょおおおーーつ! ?』

『くつ、避けきれない一つ！』

『ハチの日』

野中の召喚獣は体中を貫かれ爆散し原型保っていない。

金田一のは右半身がえぐれているが頭は無事だつたようでもまだ僅かに点数が残っている。

そして里井のは俺の攻撃を必死に避けようとしたんだろうが、結果避け損ねたのか下半身がない。

金田一も里井も風前の灯火だ。

それに対しミニ 僕は攻撃は受けでおらずピンピンしている
が腕輪の使用により点数を200点も消費している。
まだまだ扱い馴れてねえな。
腕輪使って倒しきれねえのはダメダメだ。
ま、腕輪の精度を上げりやいいことだがな。
さてと、いつまでも生かしとくのは可哀想だしケリつけてやるか。

『――俺が生き残った2人に肉薄し、蹴りを放つとすぐに0点になり、3人まとめて鉄人により補習室につれていかかる。

『の、野中、金田一、里井が戦死したぞ！』
『なつ！そんな馬鹿な！？』
『今接触したばかりだぞ！？速すぎるつ』
『一体誰がつ！姫路瑞希かつ？』
『いや、姫路はまだ来ていない！』
『宇童とか言うヤツだ！』
『……宇童……だと……！？』
『霧島と張り合つよつなやつが何故Fクラスにいるつー？』
『……は？はあああつ！？』
『そんなヤツに勝てるワケないだろ！…』

Bクラスの残り7人に驚愕の表情が浮かぶ。

「お前ら！三人討ち取つたぞ！」

お前、ひがんはねれよー

『大日本圖書出版社』

『 』 『 』 『 』

敵の士気は下がり、逆に味方の士気はあがる。

「お、遅れました…」

そこへ息を切らしながら姫路の前線部隊が到着する。
特攻部隊つつても前線部隊とあんま変わんねえな、と思わなくも
ない。

『長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さん
に数学勝負を申し込みます!』

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

『試験召喚！』

どうやら姫路の方も戦い始めたようだ。
敵の2体は剣と槍を構え、姫路の召喚獣は大剣を構え腕輪をしている。

『Fクラス 姫路 瑞希

数学 412点

VS

Bクラス 岩下 律子

数学 189点

菊入 真由美

数学 151点

『腕輪もつてゐるなんて聞いてないわよー!』

「じゃ、いきますね」

姫路が小さな手を握り込む。

その動きにあわせて姫路の召喚獣が左腕を敵の方に向けた。

『ちよつとまつてよー!?』

『律子!とにかく避けないと!』

大げさなくらい横に跳ぶ敵の召喚獣。

カツ

その直後、姫路の召喚獣の腕輪が光を発し、逃げ遅れた敵の一体が炎に包まれる。

『きやああーっ!』

『り、律子!』

『い、ごめんなさい。これも勝負ですので!』

その後で姫路の召喚獣は相手を武器だと一刀両断する。おー、腕輪扱い易そうでいいな。

『い、岩下と菊入が戦死したぞ！佐野に鈴木もだつ…』

『ちつ！援軍はまだか！』

「おーし！お前らがんばれ！」

Bクラス相手に押してんぞっ！

このまんまBクラスの奴らを教室に押し込むぞ！」

『『『おおーーーーーーーー』』』

そうしてBクラスを徐々に教室に押し込んでいく。

押し込むまでの間にBクラスの戦死者は20人以上、対してFクラスは3人、奇跡的に戦死者は少ない。

そんな圧倒的な進行具合にBクラスは焦る。

そこへこの状況を好機と感じFクラス本陣の奴らが出てきた。

『Fクラスが総攻撃をしかけて来るぞっ！』

『くつ！俺らBクラスがFクラスに負けてたまるかっ！』

そんな安っぽいプライドなんぞ潰してやるよ。
んじゃ、いつちょやつたるか。

と意気込んだ丁度そのとき、Bクラス代表の根本 恒一が視界に入つた。

そのBクラス代表は手に封筒を持つてニヤニヤしている。

そして、それを見た姫路が動きを止めてうつむいてしまつた。

もしかして姫路のか？

姫路の様子からすると大事なモノっぽいな。

……ラブレターとかか？おそらくA君宛てだろ？な。
ふむふむ、なら取り返してやらねえとな。

「姫路、あれお前のか？」

「う……そ、そうです……」

「じゃあ、俺らで取り返してやるよ。」

な、明久。根本の野郎ぶつ潰すぞ

ちょうど近くに来た明久に話を振る。

明久の表情から怒っていることが感じ取れる。
久しぶりに「イツがマジなとこ見たな。

「うん！」

姫路さん。辛いのなら休んでた方がいいよ？」

極力怒りに燃えていることを表に出さないよう優しい声音でそう告げる。

「吉井君……」

「さあ、空。行こうか？」

「ああ。援護してやる」

Bクラス教室

- 『Bクラス田中 亮。Fクラス吉井 明久に物理勝負を申し込む』
- 『Fクラス吉井 明久。受けて立つ』
- 『明久。援護する』
- 『な！？宇童相手に一人では無理だ。田中、俺ら援護するぞ』

『すまない。広瀬、越前』

『試験召喚!』

敵の3体の召喚獣はそれぞれ斧、鎌、大剣を持っている。
動きは遅そうだが、攻撃の威力は高そうだ。

『Bクラス	田中	亮	
物理		163点	
	広瀬	幸司	
物理		198点	
	越前	亮輔	
物理		155点	
VS			
『Fクラス	吉井	明久	
物理		69点	
	宇童	空	
物理		589点	』

『くつ！やはり宇童は強敵だな』

『だが吉井の方は雑魚だ』

『雑魚からつぶすぞ』

敵は明久を集中的に狙うらしい。

だが、そうはさせねえ。

『『重力の道無限の空 - 無限の軌跡』』
『グラビティ・ロードンフィーティ・アトモスファイアティ・ローカス

ミニ 僕は腕輪を発動し、足元に斥力を発生させ斧を持った召喚獣に接近する。

速すぎるためか相手は反応できないようで、そのまま背後にまわり足に重力球を発生させて蹴りをいれる。すると、相手の上半身が消し飛ぶ。

『クソッ！』

「まず1匹。んで5秒くらいか？」

実はこの腕輪は発動中に毎秒10点ずつ消費されてしまうから素早くきめねえといけねえんだ。

ま、次いくか。

続いてミー！俺は鎧を持った召喚獣に迫る。

点数がわっきのより高いためミー！俺の動きに反応したが、避けきれずに腕が消し飛ぶ。

そして無理に避けたために相手は体制を崩しこけ、その隙を衝いてそいつの頭を重力球で消し潰す。

「2匹目」と

最後に明久の方に向かうと明久の召喚獣が大剣を持った召喚獣の点数をチビチビ削っていた。

一向に終わりそうにないので後ろから重力球を一発。

「3匹目。んで終了」と

全部倒しきるのにトータルで12秒程。

『くつ！…俺たち3人がかりで手も足もでないとはっ！』

3人がかりつつてもバラバラだつたし負けるワケねえ。

「さあ、根本を潰しにいくぞ」

「うん！」

根本に遭遇するまでに10人程補習室送りにしたため、だいぶ教室がすいてきた。

我ながら反則じみた強さだな。

「さあ、根本覚悟しろよー」

Fクラス宇童が

『Bクラス山本が受けます！試獣召喚！』

「チツ、近衛部隊か！邪魔くせえんだよー！」

「なら、Fクラス吉井が

『Bクラス伊藤が受けます！試獣召喚！』

「J班にも近衛が！」

「は、ははっ！驚かせやがって！」

取り繕うように俺らをわらう根本。

だが、そのわらいも長くは続かない。エアコンが停止したため、涼を求めるために開け放たれた窓から突如侵入してくる2つの人影。

1つは保健体育担当の体育教師、そしてもう1つは康太のもの。

「…………Fクラス、土屋 康太。

…………Bクラス根本 恭一に保健体育勝負を申し込む

俺らが近衛部隊を引き付けたため、丸裸となつた根本 恭一に逃げ場はない。

「くつ、くそおーーつ！！

『試獣召喚』

『Fクラス 土屋 康太

保健体育 441点

VS

Bクラス 根本 恭二

保健体育 203点』

黒い忍装束を纏った康太の召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

今ここに、Bクラス戦は集結した。

バカと俺と戦後処理

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？本来な設備を明け渡してもらい、お前らに素敵な卓袱台をプレゼントするところだが特別に免除してやらんでもない」

そんな坂本の発言に、Fクラスの奴らがざわざわと騒ぎ始める。

「落ち着け。前にも言ったが、俺たちの目標はAクラスだ。ここが『ゴールじゃない』。ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるわ」と思つ

その言葉でFクラスの奴らはどこか納得したような表情になつた。

「……条件はなんだ

「条件はお前だよ、負け組代表さん。正直去年から田障りだつたんだよな。

そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。

Bクラス代表がコレを着てAクラスに行つて、試召戦争の準備ができていくと宣言してくれれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするなよ。あくまで戦争の意志と準備があるだけ伝えろ」

坂本が女子の制服を持つて言つ。

どこから持つて来たかは聞かないでおこう。人の趣味はそれぞれだしな。

「ば、バカなこと言つぐふつ！」

「Bクラス全員で必ず実行をせよー。」

Bクラス生徒が根本の鳩尾を殴る。

……変わり身早いな。

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」「了解っ」

そつ言ひてぐつたりと倒れている根本から制服を剥ぐ。

「うーん……。女子の制服ビーツやるのか分からぬや。ねえ、頼んでもいい?」

「ええ、いいわよ」

「悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」

「それは無理。土台が腐ってるか」

酷い言われようだな。まあ、否定はしねえが。

「明久、封筒あつたか?」

「うん」

「じゃあ、姫路にわたしどけよ?」

んじや、俺は帰るな。秀吉、帰ろつぜ」

「うむ、明久また明日じや」

「空、秀吉。また明日」

教室に戻り荷物を取つて、階段を降りようとするとBクラスの方から根本の声が聞こえてきた。

『「ー、この服、ヤケにスカートが短いぞ！
さ、坂本め！よくも俺にこんなことを

『無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間がないんだぞー。』

『あ、聞いてないぞ！』

『そりや、言つてないからな』

「……やつておるの？』

「あんな奴撮つて何になるんだよ？

まあ俺らにね関係ねえし、ほつといて帰るが』

バカと俺とそりゃま卓袱台（前書き）

編集しました。

優子ＶＳ空戦が増強されています。

バカと俺とさらば卓袱台

Fクラス教室

Bクラス戦が終わってから2日後の朝。

いよいよAクラス戦を残すのみとなつた俺たちは、もうじきお別れになる予定のこの教室で最後の作戦の説明を受けていた。

「周りの連中に不可能だとと言われていたにも関わらず、俺

残すはAクラスのみだ！」

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじやないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おもてなし』

『そ
う
だ
一
つ
！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

テンショノ高えな。

「そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

『誰と誰が一騎討ちをするんだ?』

『宇童と霧島か?』

「いや。やるのは俺と翔子だ」

「イツ血迷ったか?

いくら坂本が頭がいいってもそれは最下層のFクラスの中だけだぞ?

そんな俺の考えと同じヤツがいたのか坂本に抗議の声を上げる

「馬鹿の雄一が勝てるわけなああつ!?」

が坂本が投擲したカッターによりすぐに黙らされる。
どうせならもつと粘れよ。

「次は耳だ。

……まあ、明久の言つとおり翔子は強い。

まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない。
だが、まともにやりあえ、だ。

現にDクラスにもBクラスにも勝つていて。今回だつて同じだ。
俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。
俺たちの勝ちは揺るがない。

俺を信じて任せてくれ。

過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる

『おおお———っ!—!』

「さて、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ。

科目は日本史。レベルは小学生程度、方式100点満点の上限あり。

召喚獣勝負ではなく純粹な点数勝負とする

ふむ。FクラスがAクラスに勝負を挑むのならそれが妥当だらうな。だが

「俺はそれで勝てるとは思わねえ。

お前はまともに勉強してないだらうし、それに俺らが小学生のこりと今とでは改変されたところもあるだらう。

例えば『聖徳太子』の写真は『聖徳太子と伝えられている人物』の写真つてのに変わつてるらしいぞ？

そんな感じでお前が知らないことが出題される可能性がねえワケじやねえ。

てか確実に1問はある

「ワシも同意見じや。

それに同点じやつたら延長戦じや るいひし、レベルも上げられるじやろうつな」

「おいおい、あまり俺を舐めるな？そこまで運に頼り切つたやり方を作戦などと言つものか

「？それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知つていてるとか？」

「いや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだらう」

「雄一。あまりもつたいぶるでない。

そろそろタネを明かしてもいいじゃ るいひつ..」

「ああ、すまない。つい前置きが長くなつた。

俺がこのやり方を探つた理由は一つ。

ある問題がでれば、アイツは確実に間違えると知つてているからだ。

その問題は『大化の革新』。その年号を問う問題がでれば俺の勝ち。確実にアイツは間違える。アイツは一度教えたことは忘れないから

な

その自信はどこからくるんだ?
嫌な予感しかしねえな……。

「Jの戦いで俺は勝つ!

そうしたら俺たちの机は

『システムデスクだつ!』

Aクラス教室

今回は代表である坂本を筆頭に俺、明久、康太、秀吉の5人で宣戦布告に来ている。

明久に任せてへマしでかしたら堪たまつたもんじゃねえからな。
それでは俺が先陣切つてAクラスに入れとのこと。
他の奴らは廊下で待機中。

んで、できれば俺一人で交渉しろだと。

坂本の野郎、無茶言つてくれるな。

「よ、優子」

「あれ? 空どうしたの?」

「あー……俺らFクラスはAクラスに試合戦争を申し込む。

こいつの代表とそつちの代表の一騎討ちって形でな

『『『ー! 』』』

おー、驚いてんな。

「何が狙いなの？」

「狙い？あー……『Fクラスの勝利』

てかシステム“テスク”？

「うーん、面倒な試合戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけど、だからと言つてわざわざリスクを犯す必要も無いと思わない？」

「それを俺に聞くか？

ま、 賢明だな。

とこりでBクラスとやりあつ氣はあんのか？」

「Bクラスつて……、昨日来ていた『あの』……」

「ああ。アレが代表やつてるクラス。

幸い宣戦布告はまだされてねえみたいだが、どうなんのかな？」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから3ヶ月の準備期間を取らない限り試合戦争はできないはずよね？」

「実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなつてんだぜ？」

規約にはなんの問題もねえ。

BクラスだけじゃなくてDクラスもな」

俺は無関心だったから『和平交渉にて終結』つてことをさつき坂本に教えてもらつまで知らなかつた。

んで、一応こそこまでは坂本の予想通りの流れ。

アイツつてこいつこいつとに向いてるよな。どじま先を見てんだろうな？」

「……それつて脅迫？」

「人聞き悪いこと言つなよ。

ただのお願いだ」

「うーん……そうね。

何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんて有り得ないからその提案受けるわ」

うし、交渉終り

「でも、じつはからも提案」

今まで優子としか話していなかつたが今になつて横から第三者の声が入つてきた。

そちらを向くと短髪のボーアイッシュな女子生徒が。

坂本！緊急事態発生だ！

まさかのAクラスからの提案が出てきたぞ！？

だが、内心そんなことを考えているということを表に出さないのが俺クオリティー。

「代表同士の一騎討ちじゃなくて、そうだね、お互に5人ずつ選んで一騎討ち5回で3勝した方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「…………」

考えろー…どうやつたら勝てる？

もし受けた場合誰ならAクラスに勝てる？

坂本：×

明久：×

秀吉：×

康太：保健体育なら？

島田：×

姫路：おそらく？

俺：絶対？

お、3勝できんじゃね？

「その条件呑んでもいいぞ」

「ホント？嬉しいな」

「だが、勝負内容はこっちで決めてもいいだろ？
そんくらいのハンデがねえとイーブンじやねえ」

そうしねえと康太が使いもんになんねえ。

「優子。どうしよ？」

「え？ うーん……」

急に振つてやんなよ。

「……宇童」

「あ？ どうした霧島？」

「……宇童の提案を受けてもいい。」

……けど、その代わり条件がある

坂本あつ！ 更に条件付け足されそうなんだが！？

「条件つてなんだ？」

「……負けた方は何でも一つ言つ」と聞く

「それは誰に対しても？」

「……Fクラスに対して」

「…………」

やべえ……。マジやべえ……。

何する気だ？

いや、ネガティブに考えんなポジティブに考える。
逆に言えばこっちが向こうになんができるってことだ。
なら、うまいことこなせば優子とクラス同じになれるんじゃね？
よしやあっ、俄然やる気出てきたつー！

「その条件も呑んでやる」

「雄二に伝えておいて」

「了解」

「窓。勝負内容の5つの内2つは1つずりで決めをせてくれないかし
ら」

残り3つは窓のところが決めていいから

今まで考えていた優子からの妥協案。

「ああ、いいぞ」

ぶつけやけ保健体育さえなんとかなれば勝てるだろってだけだから
な一つだけでも問題ねえ……ハズ。

「勝負はいつ？」

「やつだな。10時からでいいか？」

「わかった」

「んじや交渉成立だ。

また後でな

「ええ」

優子に手を振つてAクラスから出ると明久が話しかけてきた。

「空ー、どうこいつもりー！」

「どうじうつて何がだ？」

「霧島さんの出した条件のことだよ」

交渉のこと聞こえてたっぽいな。

「それがどうかしたか？」

「『どうかしたか？』じゃないよ！

姫路さんの『承を得てからじゃないとあんな約束したら駄目じゃないか！』

もしかして「イイツ霧島が同性愛者だと思つてんのか？
んなことあり得ねえっての。

「心配すんな。

姫路に迷惑かかんねえから。

それに、勝ちやいい話だろ？

勝負する前から弱気になつてんじゃねえよ

「そ、そうだね！

姫路さんの貞操と人生観のために絶対に勝たないと…」

1人燃える明久。

やる気が出るとはいいことだ。

「空。よくやつた

「おー、さんきゅ」

「それじゃあクラスのヤツらに報告するから一日帰るぞ」

「了解

Aクラス教室

「では、両名共準備はいいですか？」

Aクラスの担任かつ学年主任の羊羹（高橋 洋子）が立会人を務める。

「ああ

「……問題ない」

「それでは1人目の方、どうぞ」

「私から行くわ」

Aクラスからは優子が出るようだ。

「空。行つてこい

「了解。

優子。好きな科目選んでいいぞ

「え？ いいの？ 負けても知らないわよ？」

「大丈夫だ。負ける気はさらさらねえから

「それは私もよ。」

それじゃあ、高橋先生。生物でお願いします

『試験召喚ーー。』

喚声に応じ魔法陣から軍服を着、手にはレイピアを持った優子の召喚獣（以後ミニ優子）が現れる。

『Aクラス	木下	優子
生物	427点	V S
『Fクラス	宇童	空
生物	467点	

「腕輪あんのか。手強いな」

「空もね。
ホーネット

『毒蜂』！

そう叫び腕輪を発動させながら鋭い突きを放つミニ優子。

それをミニ 僕は半歩左に移動することで避け、その伸びきった腕の、軍服の裾を右手で掴み脇に左肘を入れて投げ飛ばす。

『おおーーっ！？』

まるで熟練者がするような滑らかな動きだったためか周りから感嘆の声があがる。

よせやい。照れるじゃねえか。

にしても、ただ投げ飛ばしただけだしあんま点数減んねえな。

「ひ……やっぽり操作が上手ね。

よくあんなことができるわね

「それほどでも

柄にもなく謙遜してみる。

「でも、負けないわよっ!」

「おう、どうからでもかかって来い!」

話している間にミニ優子は体勢を立て直し再び/// 僕に迫り連続で突きを放つてくるが

「数撃ちや当たるってワケじゃねえんだぜ?」

その全てを、弾き、住なし、かわ躲すミニ 僕。

ふむ。なかなかスリルがあつて面白い。
ま、優子からしたら当たりそうで当たんねえからストレス溜まりそうだが。

「ひ……ちょこまかと……」

案の定イライラが爆発し突きの速度が上がる。その分、精度は下がつたが。

速度が上がつても、冷静になんねえと俺には勝てねえよ?
それに大振りで隙だらけだ。

ミニ優子の連撃の合間を縫つて懷に潜り込み蹴り飛ばすミニ 僕。

そして追撃するため後を追うがミニ優子は素早く体勢を立て直し///
二 僕を迎撃つため身構える。

「突きしかできねえ武器でカウンターを狙つのまじつかなんだ?」「串刺しにするだけよ。」

おー、怖。

ガキヤツ

つこにーーー俺とーーー優子が接触。

ーーー優子のレイピアに対しーーー俺はA・Tで迎え撃つ。

カンツ

『『剣の道無限の空 - 無限の剣聖』』
ロード・クラディオヌスフィニティ・アトモスフィアティ・フレイズ

レイピアを弾き腕輪を発動するとA・Tの踵部分から太腿の方へ湾曲した剣が一本ずつ生える。

「優子。なかなか強かつたがコレで終わりだ」

俺がそう告げると優子はなにやら不適な笑みを浮かべる。

「そうね。コレで終わりのよつ、ねつー
「なにを……つー?」

ーーー俺が足を振り抜くよりも先にレイピアを振り下ろす。

ザシユツ

そんな音と共にーーー俺の右肩から左脇腹にかけて大きな裂傷が走

つた。

それによつ//ニ 僕はバランスを崩し//ニ優子を蹴り（斬り）損ねる。

「く……つー?」

なんでレイピアで『斬る』動作ができるんだよー??

「いい具合に引っかかつてくれたから助かつたわ」

嬉々として表情でそう告げる優子。

「どうこういじだ?」

「レイピアは突きだけの武器じゃないのよ空?」

「なん……だと……!?」

「突きしかできないのは『フルーレ』っていう武器。レイピアと似てるから間違えたのも無理もないでしょ」うなび。
ま、これで私の勝ちは揺るがないわ」

「ハッ、こんなもん『屁でもねえ』

実際屁以上で非常に困る。

「強がるものいけど私が腕輪持ちなの忘れてるのかしら?」

そう言つて//ニ 僕を指差す優子。

ん?なんつおつー? 徒々に点数が減つていやがるー?
毒みたいなだな。なんつう厄介な能力なんだよ……。
確かにこれは負けちまうかもしんねえ。だが

「殺られる前に殺つちまえばいい!」

未だに――俺の目の前に立つ――優子に向かって足を振り抜く。

「つー？」

突然の出来事に驚いた優子はレイピアで防ぐのではなく、距離をとつて避けようとした、いや『してしまった』。

「優子。その避け方はハズレだ」

本来なら剣の範囲外の『その場所』に容赦なくそれ（剣）が振るわれる。

「つー？伸びたつー？」

「御名答。俺の蹴りは避けちゃいけねえ。防がねえとな。ま、形勢逆転だ。このまま終わらせんぞ」

――俺は腰を落としキュックュックとリズムよくステップを踏み、――優子の背後に回り込む。

「今度こそ終わりだ

そして――優子の首を刈り取る。

『Aクラス 木下 優子

生物

0点

V S

Fクラス 宇童 空
生物 21点』

「勝者Fクラス宇童 空」

羊羹よつかんの宣言にFクラスの連中が歓声をあげる。

「やっぱり空は強いわね」

「優子だって手強かつたぞ。」

操作も巧かつたし、優子があの時油断してなかつたら、もしかしたら負けてたのは俺だつたかもしだれねえしな」

「そう? ふふつ、ありがと!」

「あ、おう!」

優子の笑みにドキッとしたぜ。

「空、戻つてこい。次の試合がある」

「ん? あー、了解。」

「優子、また後でな」

「うん、そうね。」

そしてFクラスの方へ戻つて行く。

2試合目

Aクラス佐藤 美穂 VS Fクラス吉井 明久。

明久が実は左利きなんだ、発言をするも瞬殺されフィードバックにより痛がっている。

……何がしたかったんだろうな。

続いて3試合目。

「では、3人目の方どうぞ」

「…………（スクツ）」

「じゃ、ボクが行こうかな」

次は工藤と康太が戦うよつだ。

「教科は何にしますか？」

「…………保健体育」

「土屋君だけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

でも、ボクだけかなり得意なんだよ？……キミとは違つて、実技

で、ね」

「…………

お、康太がなんの反応も示さねえ。珍しいこともあるもんだな。

「そつちのキミ、吉井君だけ？

勉強苦手そうだし、保健体育教えてあげようか？

もちろん実技で

「フツ。望むとこ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「…………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」

「ちょっと可哀想だな。

「じゃあ、宇童君はどう?」

「受けて立とう(キリッ)」

「あ、愛子!~空は私とするからそんなの必要ないわよ!」

その言葉を聞き藤はひゅーと口笛を吹き、告げる。

「優子って大胆だね?」

「あー、優子。テンパつてると悪いけど今すんげえ爆弾発言したぞ」

「……え? あ? ……」

優子の顔が真っ赤に染まる。

それを聞きFクラスの奴らが殺氣立つ。

『宇童よ。』この戦争が終わってから覚えていろ!~

我ら異端審問会の名において、学園の風紀を乱す貴様を処刑する

処刑は確定かよ。

「ま、テメエらなんぞ返り討ちにしてやるがな」

俺はそう言つて親指を首の前で横に一閃。

それをし終え再び康太の方に意識を向ける。

「ムツツリーー君。今日のボクってノーブラなんだよ?」

「…………（ポタポタ）」

あ、やつと反応しだした。

「それにこの部屋暑いね」

工藤がそう言ってシャツの胸元をあけ、シャツの襟を持ち風を送りこむ。

あ、康太の鼻血が激しくなった。

「…………（ダバダバ）」

「それじゃあ始めようか？」

お手柔らかにね」

工藤が康太にお辞儀をする。

ノーブラでシャツの胸元開けてつからピンクの突起物が見えちまうワケで。

「…………（ブシャアアア）」

「康太つ！？」

『Aクラス 工藤 愛子

生命活動

A L I V E

V S

Fクラス 土屋 康太

生命活動

D E A D』

「え？……」

工藤が何が起きたか分からず啞然としているが、徐々に理解しだしたのか顔を赤くする。

元はエロいのかもしんねえけど実技派って言つのはフリだつたっぽい。

それはそうと2対1でもう後がねえ。

康太が勝つと思ってたのにまさかこんなことになるとは……。
さすがに予想外だ。

続いて4試合目はAクラス久保 利光 VS Fクラス姫路 瑞希。
私は死にましまーん、Fクラスの事がちゅきだからー、発言で総合科目で400点差オーバーで普通に勝利。

そしてついに最終試合。

Aクラス代表霧島 翔子 VS Fクラス代表坂本 雄一。

坂本の宣言通り、小学生レベルの100点満点日本史勝負のようだ。
霧島と坂本はテストを受けるため別の教室へ。

俺たちは坂本たちが受ける問題がディスプレイに映し出されるためそれに目を向ける。

『次の（ ）に正しい年号を記入しなさい

（ ）年 大化の革新
：
：
』

あ、出た。

「これで僕らの卓袱台が
『システムデスクに！』

」

『Aクラス
霧島
翔子
97忠』
Fクラス
坂本
雄二
53忠
VS

俺らの卓袱台がみかん箱になつた。

バカと俺との約束事（前書き）

編集しました

バカと俺との約束事

「3対2でAクラスの勝利です」

「……雄二」「私の勝ち」

「……殺せ」

「言われなくてもそういうふうなつもつだ。
バカ本、歯食い縛れ」

そう告げて拳を握る。

「空君、落ち着いてください!」

「こんなので落ち着いてられるかよ!」

なんだよ53点って!

お前が小学生の問題だつづつ舐めてなかつたら勝てたはずだぞ!」

「言い訳はしねえ……」

潔けりや許してもらえるとでも思つてんのかー??

「その言い分もムカつきマス
だ・か・ら……死ねえつ!」

側頭部に向け蹴りを放つ。

バコッ

「イタツ」

そう声をあげる坂本。

……意識を刈り取れるのはまだよしとしよう。

……だがつ、なんで頭が傾くだけで吹っ飛ばねえんだよ！

そんじょそこらの野郎だと病院送りだとこいつの『悪魔の右足（今命名）』を受けて『マイタツ』だと！

連邦（Fクラス）のMS（坂本）は化け物か！？

「……ところで、約束」

康太がその言葉に反応しカチヤカチヤと撮影の準備をしだす。

「わかつている。何でも言え」

「……それじゃ、雄一。」

私と付き合つて

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデータに行く
「ぐあつ！放せ！やつぱー」の約束はなかつたことに

坂本は霧島に首根っこを掴まれ、拉致られて行つた。

どこに嫌がる必要があるのかわからねえ。

「ねえ、空」

「ん？」

「私の条件呑んで」

「条件？あれはクラス単位で一つだろ？」

「そつだつたかしら？忘れちゃつたわ

そう言つてチロッと舌をだす優子。
す「く……可愛いです……」

「といつわけだから私の条件も呑んでね？」

「……ならお手柔らかに頼む」

何言わなんだ？

サンデバツクか？いや、でも優子そんな凶暴じやねえし。

「あ、あのね……」

もしかして昔みたいに着せ替え人形みたいにする気か！？
昔はちつこかつたから女物の服着てもなんともなかつたけど今着たら大変なことになんぞ！――

「や、今日から一緒に家に帰る？」

「…………悪い。もう一度言つてくれ」

なんか今結構普通な」とが聞こえたよつな？

「だ、だから――……や、今日から一緒に帰る？」

聞き間違いじゃなかつたつぽい。

「そんな」とここのか？じやあ、いへりでも

付を立つてやるよ、と腰を下としたといひで明久に声を被せられぬ。

『総員、投擲用意！

異端者宇童 空に正義の鉄槌をつ！』

『『『おおーっ！』』』

「は？お前ら何やつてんだ、よつ！

優子に当たつたらどうしてくれんだ！」

話している途中にカッターがとんでも来たので脚で蹴り払い審問会の奴らに迫り次々と蹴り倒して行く。
そして誰もいなくな ゴホンッ 数分後には審問会の奴らは床に伏していた。

「優子。怪我ねえか？」

「空が守ってくれたから大丈夫よ」

あー……、その言葉なんかいい。
1人じーん、と感傷に耽てていると俺の耳に野太い声がかかる。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

「鉄人。何か用か？」

「宇童、西村先生と呼べ。

貴様ら喜べ、お前らは戦争に負けたおかげで担任が俺に変わるそうだ。

これから1年死に物狂いで勉強できるぞ」

『『『なにいっ！？』』』

「お前らFクラスはよくやつた。

だが、いくら『学力が全てではない』と言つても、人生を渡つていく上では強力な武器だ。

ないがしろにしていいものではない。

とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を2時間設けてやる。ついでに『だけ』は存分に遊ぶといい

鉄人はニヤニヤと嫌な笑顔でそう告げる。

「あのれ鉄人め！僕から自由を奪うのがそんなに嬉しいか！
こうなつたら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持つて貴様を待
つ！」

「斬新な告白だな、オイ。

じゃあ優子。帰るか？」

「ええ、そうね」

優子の口元が綻びる。

戦争には負けちまつたが優子の笑顔が見れるんなら別にいいかもな。

設定（前書き）

オリ主 + 腕輪

設定

名前：宇童 空うどうそら

性別：男

身長：178センチ

体重：72キロ

容姿：母親似で西欧人風の顔つき。碧眼で少々たれ目、地毛が金髪。細身だが締まっているため体重重め。

利き腕：右

特技：合気道（祖母直伝）、キックボクシング（祖父直伝）など

部活：工学部

補足：父親は日本人、母親はイギリス人、姉が1人おり現在大学生でイギリスに留学中。

国語・古典・大地の道『無限の空・無限の地層』

腕輪：自分の半径一メートル以内にいる地面に触れている召喚獣（敵見方問わず）の動きを封じる、自分も発動中は移動不可

数学：紫電の道『無限の空・無限の紫鎗』

腕輪：無数のワイヤーが鎗を作り雷を纏わせて相手を貫く、発動時に200点消費

英語：轢藍の道『無限の空・無限の轢』

腕輪：カウンター時に自動で発動、相手の攻撃に合わせてATで攻撃することで相手のダメージに自身の本来の攻撃力を上乗せしてダメージを与える、タイミングを間違えれば腕輪は発動しない、相手の攻撃力が大き過ぎると弾き返しきれずに多少ダメージを負つてしまふ、高度な操作技術が必須

化学：炎の道『無限の空・無限の煉獄』

腕輪：「時」（ATによる高速の拳打）を点数を消費して発動、一発につきマイナス10点、最低五発打つため最低でも50点消費する、最大10発

物理：重力の道『無限の空・無限の軌跡』

腕輪：自分の足もと限定で点数を消費（使用時は10点／秒）して引力と斥力、重力球を発生、擬似的な瞬間移動を可能とする

生物：剣の道『無限の空・無限の剣聖』

腕輪：ATの踵部分から太腿の方へ湾曲する剣を生やす。200点消費。発動中は折れても自動修復

日本史：荆棘の道『無限の空・無限の荆鎖』

腕輪：ATのホイールが荆のようになりリーチの大幅up、威力は変わらず

世界史・血痕の道『無限の空・無限の牢獄』

腕輪・50～100点消費で『牙』を放つ、広範囲殲滅、消費した点数により『牙』の範囲変化、50点で召喚獣5体分100点で10体分

現代社会・泡翠の道『無限の空・無限の泡爆』

腕輪・自身を中心に泡の膜を形成、それに触れたものに泡が広がり全体を覆うと爆発し相手を消し去る、10点／秒消費

保健体育・腐海の道『無限の空・無限の悪夢』

腕輪：一秒間相手を追尾する「テフオルメされた豚の召喚
サイズは二つ

小、召喚獣の頭ほど最大五匹、一匹につき消費10点、相手に接触すると小爆発、爆発をうけた場合自身にもダメージ

大、召喚獣ほど最大二匹、一匹につき消費50点、相手に接触すると五秒間拘束、拘束中相手は腕輪の使用可

バーサーカーモード、召喚獣に角が生え暴走状態になる、敵味方関係なく無差別攻撃、任意でon/off可能、点数消費10点／秒

総合科目・翼の道『無限の空・無限の風』

腕輪・ぬのの面を身にまわす在りて風をうねりか

閑話・俺と優子と約束の週末

side 宇童

Aクラスと試獣戦争をした週の週末。俺は優子と市内のショッピングモールに来ていた。

ショッピングモールは規模が大きく西館に映画館やゲームセンター、飲食店、東館に洋服屋や靴屋、本屋などがある。そして今、俺たちは西館にいる。

「優子。映画見に行くか？」

「ええ、行きましょ。

何見るのか決めてるの？」

「もちろん。

俺のオススメだ」

そつとて映画館へ向かう。

「やっぱ休日つて混んでんな」

「そうね。家族連れとかカップルが多いし。

……ねえ。私たちつて周りから見たら付き合つてると見えるのかしら？」

「んー、見えるんじゃねえか？

優子はそう見えるのが嫌か？」

「そ、そんなワケないじゃない！」

「そ、うか、嬉しいこと聞けたな。
んじやチケット買つぞ」

s i d e 須川

異端審問会のメンバーである俺こと須川 亮は週末の日課として異端者がいか見回りをしていた。

今日は1ヶ月前にできたというショッピングモールに来ている。¹ 1ヶ月前にできたからと言つて侮ることなかれ。ここはすでに魔の巣^{デーツ}と化し、多數の異端者を捕縛した。妬まし ゲフングフン 由々しき事態である。

そんなこんなで見回りをしていると映画館に宇童 空が木下 優子と楽しげに入つて行くではないか！？本来ならすぐに捕縛しに行くが今は相手が悪すぎる。

俺はトランシーバーを使いショッピングモール内にいる他の審問会メンバーに告げる。

「ひづら、須川。応答願う」

『 こちら、工藤。何があつた？』

「A級異端者宇童 空を見つけた。増援を頼みたい。場所は西館映画館前」

『了解した。メンバー全員でそちらに向かう』

「了解」

20分後

「須川。A級異端者はどこだ？」

「今は映画館の中だ。出来次第捕縛し審問会を開く」

『了解しました！』

side out

side 宇童

「見応えあつて面白かったな！」

「そうね！また見に来ましょー！」

「ああ、いいぞ。

んじゃ次どに行く？買い物か？それともゲームセン？」

「ちよつて西館にいるんだしゲームセンターに行きましょー！」
「了解。

……ん？なあ、優子。

俺、あそここの集団に見覚えあるんだが気のせいいか？」

「え？うーん……気のせいじゃない？」

「そうか。なら行

『宇童が出て来たぞー！捕らえろー！』

『おおーっ！』

「……気のせいじゃなこつぽーな。優子ー逃げるぞー！」

俺は優子の手を握り適当に逃げ回つたゲームセンターへと向かった。

「優子。プリ撮ろうぜ？」

「え？でも、逃げてる途中でしょ？」

「プリ機の中に入れば上半身見えなくなるし分かんねえだろ？」

「そんな簡単にいくかしら？」

「大丈夫だつて。統率力なかつたし、そこまで頭まわんねえと思つ」

「そう？」

「なら撮りましょ」

優子と一緒にプリ機の中に入る。

「400円入れてつと、……設定よく分かんねえから任せた」

「わかつたわ」

優子が画面をタッチして設定を進めていく。
手慣れてんな。

「……できたわよ」

「さんきゅ。

サイドチェストおお！」

「筋肉ないのに何やつてるのよー？」

「いや、俺は細身だがねえワケじやねえからな。
それに、ボーズをとつてこそのプリクラだろ？
「わざわざ似合わない格好しなくてもいいんじゃない?
「……ごもつともです」

そんなこんなで撮り終えラクガキをし、印刷されてできあがった物を優子が手に取る。

「空。私可愛く写ってるかしら？」

「ああ、可愛いぞ」

「ホントー!?」

「ああ、マジだ。『本気』と書いて『マジ』と読むへりこマジだ」

「ふふっ、ありがとう」

そう言つてニシココと笑う。

……その笑顔が一番可愛いです。

「まだ、さつきの奴らは来そうになえし他のゲームもしねえか？」

「ええ、いいわよ。

……あつ。あれにしましょ」

優子が周りを見渡しヒロキヤツチャーを指差して言へ。

「いいぞ。何狙うんだ？」

「黒ネロ。

空が取つてね？」

「優子はしねえの？」

「私は下手だから取つてくれるト嬉しいなあ……ト

「了解。任せとけっ！」

数多のヒロキヤツチャーを攻略してきた『落とし神』と呼ばれた俺の技をその目に焼き付けろつ……！

実際の『落とし神』とは全く意味が違います

「ほら、注文通り黒猫。それとブタとサル」

そう言しながら取った3匹をざらりざらせる。

「一回で3つも取るなんてスゴいわね」

「まあ慣れてるからな。

……お、あれやつていいか？」

「……パンチングマシーン？別にいいわよ。でも空じゃ大した記録はでないんじゃない？」
「いやいや、あんま俺をナメちゃいけねえよ」

そう言って俺は100円を入れてパンチングマシーンの前に立つ。

「勝利のーーーガゼルッ！ーーーパンチッーー！」

そう叫びながらパンチを放つ。

パンチ
パンチ

《498K》

「！？スゴいわね！？筋肉あるように見えないのーーー」
「だからあんまナメちゃいけねえって言つたら？
それでは、もう一発やらしてくんねえか？」

「ここのよ

再度100円を入れてパンチングマシーンの前に立つ。

田指すは500円以上だがパンチじゃそれは難しそうなので今度は蹴り。

腕の3倍の筋肉が足にはあるって聞いたことがあるからたぶん500円超えは簡単だらう。

「フッ……」

バゴッシュンシゴロゴロ
ルペラジビーッ・ビーッ・

《999K》
《error》

「あ、やつべ」

「空ー? 跳び蹴りはダメでしょーー!」

「そんなことよつ、早くここから離れるぞー。やつすがた

まさか機械が吹っ飛ぶとは思わなかつた……。

反省はしたが後悔はしねえ。

「もひ。なにやつてゐのよー!」

「ははつ、悪い悪い。

お、ひょうづいこ時間だしこのまま飯食べに行くか?

「……話をそらされた気がするけどいいわよ。

それで何食べるの?」

「あー、そうだな……マクナードでどうだ?」

「いいわよ。それじゃあ食べに行きましょ」

side out

side 須川

空たちがプリ機の中へ逃げ込んだ少し後。

くつ、宇童め。逃げ足が速いな。

一体どこに逃げたんだ？

俺はトランシーバーを出し連絡をとる。

「宇童は見つかったか？」

『まだ、見つかっていません。何か心当たりはありませんか？異端者が好き好んで行きそうな場所に』

『異端者が好き好んで行く場所……まったくもつて検討つかないな』

『今までにも捕らえて来たのに本当に分からんんですか？』

『分からないと言つているだろ！

今回のよつなケースは稀なんだ！

第一級審問官だからといってなんでもできるわけではないんだよー…

訝しむような声音で問われ、つい声を荒げてしまつ。

『すいません…』

『……いや、俺も悪かった。何か思いついたら連絡する』

10分後

異端者の行きそうな場所。

……！…そりいえは異端者なら誰もが好んで行く場所があるじゃないか！

「こちら、須川。宇童が潜伏しているであらう場所の日星がついた

『こちら、工藤。

それはどこだ？』

「おそらくゲームセンターだらう。

プリクラを撮っていると思われる

『！？……なるほど。確かに異端者ならそこに行く可能性は高いな。

数人連れて向かう

『了解した。

……くくっ。さあ、宇童。存分にもがくがいい

工藤がついた頃には空たちはもつ昼食をとつており、須川が自信満々に宣言したことになりえることになるのは少し後の話。

s i d e o u t

s i d e 宇童

「それじゃ、買い物に行くか？」

「ええ。

アクセサリーを買いに行きましたよ

「

「その店分かるか？」

「ううん。ここは初めてだし分からないわ」「じゃあ探しながら行くか」

そうして歩く」と一-five 分

「優子。あれじゃね？」

「そうね。早く入りましょ！」

「うおつ！？」

優子にグイッと引つ張られ店に入る。
シルバーアクセサリーの店のようだ。店内を見ていると女性従業員
が声をかけてきた。

「いらっしゃいませ。どのようなモノをお探しですか？」

「あー……優子。この人に聞いたら欲しい物が分かるんじゃないかな？」

「え？ あ、うん。分かったわ」

優子はアクセサリーを見るのに熱中していたらしく従業員が来たの
に気づかなかつたようだ。

優子が従業員さんと選んでいる間、俺は店の中にあるベンチに座つ
て待つていた。

俺はアクセサリーとかつけたことねえからこいつには全然分かん
ねえ。

しばらくすると優子が買い終えたのか戻つて來た。

「いいのあったか？」

「うん。欲しいもの買えたし今日せっかくで帰らない?」

「まだ、2時だけじこのか?」

「ええ」

「そつか。んじゃ、帰るか」

帰り道

「はい。これあげるわ。今日せっかくで帰られた分のお礼」

そう言つて渡してくれたのはチーンと指輪が通されたもの。

「おー。やんきゅ。

んで、これってビーハンの?」

「首にかけるのよ。つけてあげようつか?」

「ああ。頼む」

本来なら俺が優子につけてあげるべきなんだろうが勝手が分からねえ。

「で、優子はどうなの買つたんだ?」

「え、えつと……今、空が首にかけてるのと回り……」

少々言ことぶむ優子。

「おおーお揃いかつ！」

「そりこいつのつていいよな。」

「どうじて？」

「だって俺と優子が向き合つてゐみたいじゃねえか」

俺がそりこいつと優子がビクツึとす。

「優子ビキついた？」

「あ、え、えっと……その……私は……いいの……？」

「ん? 何がだ?」

「その……私と付き合つても……」

「もうひさー」

「あれ? コレってある種の告白だよな? こんなグダグダはいただけねえ。まあとにかく。

「ちゅう」と待つてくれ

俺はそりこいつで深呼吸を数回して、優子に向き直る。

「優子。俺は優子のことが好きだ。
だから

俺と付き合つてくれねえか？」

「…………」

俺の言葉に優子は俯き沈黙する。

「…………」

そして2人揃つて沈黙。

。 。 。

ずっとと続くかと思われたその沈黙は優子が口を開くことで破られる。

「…………」

「…………」

小さな声だがはつきりと俺の耳にその言葉が届く。
その言葉を聞き俺の心に軽口を叩くくらいの余裕ができる。

「畏まつていつもの優子らしくねえぞ？」

「…………だつて今までこんなことなかつたのよ？」

「告白されることはよくあつたじやねえか」

「それとこれとは全然違つわよー

だつて……今までと違つて……」

「…………今までと違つて……」

優子の声が尻すぼみになる。

「優子どうした？」

「…………好きな人…………なんだし（ボソッ）」

「ん？悪い、聞こえねえ」

「な、なんでもないわ！」

絶対なんか言つたよな？

この一木なんの木氣になる木——ってことで

「気になる」

「これはダメよー」

おう、結構マジな「様子で。

「悪い…………」

「あ、空が悪いわけじゃないのよ?」

「あ？ そうなのか？」

急に大声出したから俺が変なことしたのかと

「心配しなくても大丈夫よ。

さ、家に帰りましょ

「ああ、そうだな」

「空。私の家に寄つてく?」

「お?いいのか?」

んじゃ遠慮なく

「さあ、入つて」

優子に促され中に入る。

「秀吉とかいねえのか?」

「秀吉は吉井君のところに遊びに行つてゐし、お母さんとお父さんは2人でドライブに行つてるわ」

「そうか。んじゃ、今は2人つきりか」

年頃の男女が2人つきりつてのはなかなか危険なシチュエーションだな。

「そ、そうね。

そ、空は先に私の部屋に行つてて。私は飲み物持つてあとから行くから

「優子にだけ働かせるのは悪いから俺も手伝つ

「そう?じゃあお願ひ

そう言いながら優子が冷蔵庫の中から麦茶の入つたペットボトルを取り出しあ盆の上に置く。

そして俺はコップを2つ取り出して麦茶の横に置くとお盆を持ち、階段を上がり優子の部屋に行く。優子は俺の後ろについて来る。

「……優子。これどこに置けばいいんだ?」

「どこつて机の上に」

「机の上どころか床にもスペース空いてねえんだが

「え？あつーちょっと部屋から出てて…すぐ戻付けるのかい」そう言
われ俺は部屋から追い出される。

5分後

「あ、入って」

「おー。さつそく今日取ったぬいぐるみ飾ってんだな」

優子の部屋に入ると今日とったぬいぐるみがすでにベッドの枕元に置かれていた。

「うん。空が取ってくれたからね。それよりも立ってないで座った
俺はそれに従つて座ると優子が肩に頭を預けてきた。

「うーん。」

そうして優子は自分が座っているベッドを指して言つ。

「優子。疲れたのか？」

「え？あ、そんなんじゃないわよ。

……ただ……こうしてみたいだけ

そうして穏やかな時が過ぎていき、1時間程して優子が俺に向き直
つて言つ。

「ねえ。キスしよっ。」

そう言って優子は目を閉じる。
いきなり過ぎやしませんか？

そんなことを考えてみると俺の中の悪魔が囁いた。

『やつこりとこなつもクソもねえよ。

とつと漢を見せろよ! ぶちゅつと一発ヤッちまえ。

その後は優子を食っちまえー向こいつもそれを待つてんだろ?』

悪魔の言葉通りに行動しようと今度は天使が囁いた。

『こきなりぶちゅはーただけないな。最初は軽く、続けるほどに深くがいいと思うね。

雰囲気がよくなればそのままヤッちまえことと思ひナビ、『マムつけた方がいいと思つよ』

……ひじりしの悪魔も天使も言つてること変わんねえじゃねえか。
まあいい、据え膳食わぬはなんとやら、だ。

いつちよ決めてやる。

俺は優子の肩を掴み、徐々に顔を近づけていく。そしてついに優子と唇が触れ合へ。

その唇はまさにマシユマロのよう

1000点だ――――――

……はつ！？いかん！某ムツシリモニアゲの舌^{ヒザシ}が出てしまった。
一瞬でもトリップさせるとは、おそるべしマロ^ル。脣^{リップ}。
俺はそのまま優子の口内に舌を侵入させ犯す。優子も負けじと俺の
舌に舌を絡ませる。

こいつはやべえ。理性が吹っ飛びそうだ。
といつわけで一旦顔を離す。

「優子……」

「……空^{アツ}」

優子は顔を上気させ、猫なご声で俺を呼ぶ。

そんなのを聞いて我慢できるはずもなく俺はもう一度キスをし、

今度は服の上から胸を揉みしだくと優子は艶っぽい声で囁きだす。

ちつ、服が邪魔で胸の感触がわからねえ。

そう思い服を脱がそつとした瞬間エンジン音と玄関の開く音がして、
ふと我に返る。

「あ――優子。今日まで終わっていい

「……そうみたいね。

空、キスしてくれてありがとう。嬉しいわ

そう言われたのでまた優子にキスをする。
ここには癖になりそうだ。

「不意打ちは卑怯よ？」

「嫌がつてないしいいかな、と思つてな

「否定はしないわ。

空。今日の夕食はどうするの？

「ばあちゃんが旅行に行つて誰もいねえから1人寂しく食べることになるな」

「じゃあ、ウチで食べていかない？」

「お? いいのか?」

「もちろんよー。お母さんと言つてくるわ

「さんあむ

そうして夜は木下家で過ごすことになり、ついでに泊まることとなつた。

秀吉の部屋に布団を敷いて寝たが、朝起きると優子が潜りこんでおり、優子を抱いて（抱き枕的意味）一度寝した。

次に起きた時には昼前で優子がこちらをじつ、と見ていたのでキスをしてやると照れて布団から出ていく。やうじてやつと起きると遅めの朝食を探り、バイトに行く。

バイトから返るとまた木下家で夕食を探ることになり、食べた後は家に帰つて風呂に入つて寝た。

約束の週末は俺にとつて充実したものであった。 side out

s i d e 忘却の須川

空たちが帰った後、それを知らずに根気よく探すも見つかるワケもなく。空一人を捕まえることに熱中し過ぎたために異端者を多数捕らえ損ねたとかどうとか。ぶっちゃけもうどうでもいい。

s i d e o u t

バカと俺と秘密兵器（前書き）

2巻開始

バカと俺と秘密兵器

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、変わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

俺らの通う文月学園では、新学期最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

だが俺の所属しているFクラスでは全く準備が進んでいない。そもそもまだ出し物が決まっていなかつたりする。

今も本来なら準備をする時間だがバカ共は野球をしにグラウンドに出ていいっている。

そんなわけで、教室にいる時間がもったいたいため、俺は今部室に来ており『清涼祭』でお披露目する『あるもの』を創っている。

『あるもの』とは、ズバリA・T。別名『自由への道具』^{A・トレック} A・Tとは超小型強力モーターをホイールに組み込んで、高性能のサスペンションとエアクッションシステムで武装した自走シユーズのこと。

ホイールのかわりにちりこい玉を使つてゐるのもあるが俺はホイールの方が好きだ。

できたら玉靈^{レガリア}も創つてみてえな。

玉靈^{レガリア}つてのは特別なホイールのことだ。例えば…そつだな『牙の玉靈』^{リア}なんかだと衝撃波が撃ちやすくなる。

生身の人間が衝撃波なんか出せるワケない、って思つてるかもしんねえけどこれが出来るんだよ。ビックリだろー?

静止状態から瞬時にトップスピードに達する加速と、トップスピードを瞬時に静止状態に戻すフル・ブレーキング能力、所謂『0・1

〇〇・〇(ゼロ・マックス・ゼロ)』と言われる過酷な運動と、それに耐えきれる柔らかく強靭な太腿があれば撃ちまうんだ。

俺は『〇・一〇〇・〇(ゼロ・マックス・ゼロ)』の運動に耐えられる太腿はもう持つてんだよ。あとはA・Tの完成と『牙の玉璽』^{レガリア}次第で人間兵器になれちまう。

俺はこれに口マンを感じるんだがどう思つ?

それで進行状況だが、ほぼ完成している。今は調律中だ。
『調律』^{チューニング}つてのはA・Tを使用者の生体リズムにあわせることによって扱い易くすることだ。

これが結構難しいんだよ。考え方をしながらしちまうと狂うからひたすら無心でしねえといけねえんだ。

何も考えないつてのは簡単そうで難しいよな?

そうやって調律をしていると急に部室のドアが開く音がした。音に反応してしまってちょっと狂う。

うがーっ!! 一体誰だよ!!

そう思いバツとドアの方に振り返るとそこには秀吉がいた。

「空よ。クラスの出し物決ましたから呼びに来たぞい」「ん?あー、了解。

それとこの時期部室に入るのは静かにな

「うむ。わかつたぞい。

それはそつと何を創つておるのじや?」

「『清涼祭』の時にお披露目するからその時まで秘密だ

俺はそう言つて口の前に人差し指を立てた。

「なら『清涼祭』楽しみにしておるわ」

「ああ、またま飛び立つ。」クツクツとしゃべる。

「それは楽しみじゃのう。」

「了解」

Fクラス教室

「帰つたぞ」

「あ、空。おかげり

「出し物何に決まつたんた?」

「えーとね、中華喫茶『ロビアン』になーたる」

中华喫茶なのにヨーロピアンか。

変わてんな

「へえー。喫茶店か。これまたベタだな。

中華喫茶にて言ひ合はしたか? オヤイナドレアでも着るのか?

「うー、最近出でるやつだ。

「ううう……。空だけじゃ！ワシを男扱いしてくれるのは」

「アーヴィングの歴史小説」

分からないつて顔をしてる。

この中の中で秀吉は女子にて認めらし

やべえ、こいつ。早く何とかしねえと久保利光と同じ方へ走り出

しゃうだ。

「それはそつと空はホールと厨房どっちにするの?」

「ん?俺は寄せ『だけ』するよ」

「2択なのに……」

「寄せしとく方がたくさん客が来ると思つんだが?」

「つ……分かったよ。空は寄せね」

「ああ。そう言つことだから俺は部屋に戻るな。
秀吉、何かあつたら呼んでくれ」

「了解じゃ」

時は流れ放課後

「うしつ。やつと調律^{チュー-ニ-ング}できたつ!
んじや次は玉靈創^{レガリア}るか

どの玉靈^{レガリア}にすつかな?

ん……『牙の玉靈^{レガリア}』もいいけど『炎の玉靈^{レガリア}』も捨て難い……。
よし!『炎の玉靈^{レガリア}』にしよう。『牙の玉靈^{レガリア}』だと衝撃波が見え
ねえから、観てる方は面白くねえだろつし。

『炎の玉靈^{レガリア}』はホイールを高速回転することによってできる摩擦熱
で蜃氣楼や上昇気流を作り出す。走り方次第では炎を出すこともで
きる。
『炎の玉靈^{レガリア}』を使わずに普通のホイールでも炎を出したり蜃氣楼を
作り出したり、いろいろできるがホイールの消耗が激しい。

「設計図作らねえといけねえな……。今日はもう遅いし家に帰つてからでいいか。

んじゃ、優子を迎えに行くか

そう呟いて俺はAクラスに向かっていく。

Aクラス教室

「優子。帰んぞ!……て、優子いねえな?

なあ、そこの君!

「あ、はい。なんですか?」

「優子どこ行つたか知んね?」

「木下さんですか?」

確かに体育館の方に行つてたと思ひますよ?」

「お、そうか。さんきゅ」

礼を言つて優子の荷物を持ち体育館へ駆け出す。

体育館にて

『先生!覗きです!変態です!』

むつー？ 優子の悲鳴。誰だ覗きやがったクソ野郎は！

そう思い悲鳴の聞こえた方へ駆けて行くと坂本と明久がこちらに走ってきた。

おい。まさかこいつらなんじゃねえの？

ふざけやがって！－このクソ共死に曝せ！－－！

俺は荷物を置いてバカ2人に突撃する。

俺はまず坂本に飛び蹴りを放つ。俺がゲーセンでerror(999kgoバー)を叩き出したあの飛び蹴りを、だ。

それは見事坂本の鳩尾に入り、坂本は元来た道に逆戻り。 気は失つてはいないが相当なダメージを受けたようで動けないでいる。

Aクラスとの試合戦争の時も思つたが、気を失つてねえとか化け物だな。 生命力が半端ねえ。

そんな床に伏したままの坂本が俺を睨みつけ目で語つてきた。

(空。覚えてろよ)

(逆恨みすんな、この覗き魔)

(覗いてねえよ－－)

(優子の悲鳴がちゃんと聞こえたぞ。『覗きです！』っていう悲鳴が)

(それは冤罪だ！)

(言い訳は聞きたかねえ)

俺はそう吐き捨てて（？）明久に向かつ。

明久には後ろから腰に腕を回しジャーマンスープレッキス。

「え？ 空！ それはがつ…………」

明久が俺のジャーマンスープレックスに制止の声を上げるが無視してキメる。

そして頭から落ちたためにすぐに気を失った。

ふと思つたのだが合氣道もキックボクシングも使つたことがねえ気がする。

じいちゃん、ばあちゃん悪い。

いつか、いつの日か必ず使う。

「鉄人。 こいつらの始末頼んだ」

そう言つてバカ2人を追いかけていた鉄人に身柄を引き渡す。

「宇童、助かつた。

だが、鉄人と呼ぶなど何度言つたら分かるんだ！」

「あー、悪い悪い」

「まったく。 今回は許してやるが次はないと思え」

「了解」

鉄人が補習室に去つた後、制服姿の優子が更衣室から出てきた。悲鳴あげてた割に意外と図太いな。

「あ、空。

ねえ、今失礼なこと考えてない？」

「考えてねえよ。

それより帰ろうと思つんだが優子も帰ろつぜ？」

俺は素知らぬフリをしてそう尋ねる。
これが世に言う地文読みか。すげえな。

「ええ。帰りましょ。でも荷物とつて来ないと
「優子の荷物持つて来てんぞ」

そう言つて優子に荷物を渡してやる。

「ありがとう。

それじゃ、帰りましょ」

バカと俺と走行練習（前書き）

編集しました。

走行練習を詳しくしました。

バカと俺と走行練習

翌日

教室に入るとバカ2人が俺のことを恨めしそうに睨んできた。

「覗き魔共。俺を睨むな」

「てめえのせいで補習室送りになつたんだぞ！」

「そうだ！謝れ！！」

「なんで謝んねえといけねえんだよ。自業自得だらうが。
にしてもこれが霧島に知られたら坂本はどうなつちまうんだらうな
？」

「く……つー翔子には絶対言つなんよ」

「昨日のことを水に流すんなら考へてやるから安心しろ」「ともない」

「……分かつた。水に流そつ」

「じゃあ、言わないでいてやるよ。

明久のことは、島田と姫路に言つといへやるから安心しろ

「なー？そんなこと言つたら僕が酷い目に遭つちやつじやないか！
！？」

「それが嫌なら水に流せ」

「く……つー？腹に背はかえられない。……水に流すよ」

「『背に腹はかえられぬ』だからな。腹に背じやねえから

「そうとも言つよね。

それはそうと、もしかしたら姫路さんが転校しちゃうかもしれない

んだよ！」「

「へえー、そうか。で？」

「で？って。何も思わないの！？」

「転校する理由が分かんねえのに対策なんざたてられるワケねえだろ?」

「あ、そうか。えーっとね、理由は『Fクラスの環境』らしいんだ」

「汚ねえってことか?」

「うん」

「じゃあ、喫茶店の売上を設備改善にまわせばいいんじゃねえの?」

「そりなんだけど……」

「まだなんかあんのか?」

「うん。まわりの人気がみんなバカばかりだから勉強しても伸びないんじゃないか?って言うのも理由らしいんだ。それで試験大会に出て、Fクラスでもちゃんと伸びてるってところを両親に見せて、Fクラスを見直してもらひつもりなんだって」

「あー、なるほど。
でも、それだけじゃ親はOKはくれねえだろ?」

「え? なんで?」

「やっぱライバルがいた方が伸びるからな。
それがクラスにいないんじゃ、いつか伸びなくなる日がくるしれない、って心配されちまうかもしんねえ」

その結果転校、と。

親は相当教育熱心っぽいな。

「そつか……」

「ま、そういうことなら俺も試験大会に出て、Fクラスにこんなやつがいるんだぞ、ってアピールすりやいい話だ」

「それはいい考えだね!!」

「だろ?」

「んじゃ、エントリーしていくな。

ついでだし坂本と明久もエントリーしどぐぞ?」

会話に入つていなかつた坂本も巻き込んでおく。

旅は道連れ世は情けつていうしな。

存分に俺を助ける。助け合にじやなくて助ける。

「へ……？あ、ちょっと待つてー！」

「おー！なに勝手にエントリーしようとしてやがるーー。」

「嫌なら俺を捕まえることだな」

俺はそつ^{さすがに}つて学園長室へエントリーしに行く。

学園長室

坂本たちに捕ま^{つか}らずにここまでたどり着いた。

「邪魔すんぞ」

「失礼なガキだねえ。入るときはノックしてから入りな

「あー、悪い悪い」

中に入ると学園長が教頭と話をしており、学園長からお叱りの言葉が。

ま、反省してねえけど。

そんな俺を睨みながら教頭が言つ。

「やれやれ。取り込み中だといつて、とんだ来客ですね。

これでは話を続けることもできません。

……まさか、貴女の差し金ですか？」

「馬鹿を言わないでおくれ。

どうしてこのアタシがそんなセロイ手を使わなきゃいけないのさ。
負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

「さつきから言っているように隠し事なんて無いね。

アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるならこの場はもう二度と
にしておきましょ」

そう告げると、教頭は部屋の隅にある植木鉢に一瞬視線を送り、踵きびすを返して学園長室を出て行つた。

植木鉢に何かあるらしい。

気になるけど触らねえのが俺クオリティー。

「んで、アンタは何の用だい？」

「試合大会のエントリーに来た。

エントリーすんのはFクラス宇童 空と坂本 雄一、吉井 明久の
3人」

「2人1組のペアでの出場だよ。

1人あぶれるけどどうするんだい？」

「あー……んじゃ、吉井、坂本ペアと俺1人、つてのはダメか？」

「……ふむ、それでいいさね……。

あとでその2人にここに来るよ伝えな

「了解。

んじゃ、邪魔したな」

やつ言ひて部屋から出ぬといひよつゞ坂本と明久がやつてきた。

「やつと見つけたぞ」

「おー、遅かつたな。バツチリエントリーしてやつたぞ」「何い！」

「何でことしてくれるのさー？」

「別にいいじゃねえか。姫路のためだろ？」

あ、学園長が来いつて言ひてたぞ。
じゃ、俺は教室に戻るな……の前に。

坂本、部屋の隅にある植木鉢あさつとけよ
「は？..どつこい」とだ？」

「あそれば分かる」

やつ言ひながらひらひらと手を振つて俺は教室へ去つていつた。

放課後

昨日家に帰つて『炎の玉籠レガリア』の設計図を書いてみた。

あんま難くなかったからすぐ書けた。
んで、今はパーツを組み立て中。
2時間もすりやできそつだ。

2時間後

完成！！

ホイールの側面には九尾の狐がかかれしており、その尻尾は炎のよう
に揺らめいている。

THE『炎の玉靈レガリア』って感じだ。テンションあがるー！

できた記念に走行練習アコスがしてえから今日は優子と別々に帰るか。

【T o : 優子

Title :

Text : 今日は走つてから帰るから一緒に帰れねえ

送信つと。

メールを見ての通り俺はtitle書かない派。

ブーッブーッブーッ

あ、もう返信きた。

【From : 優子

Title : Re2

Text : 意味がよくわからないわ
もっと詳しく

【T o : 優子

Title : Re3

Text : 風になつてくる【

】From : 優子

Title : Re4

Text : 余計意味がわからないわ【

じゃあなんて送りゃいいんだ?

】To : 優子

Title : Re5

Text : スケートしていく【

……間違つちやいねえよな?

】From : 優子

Title : Re6

Text : それなら私も行つていい?【

】To : 優子

Title : Re7

Text : 驚かせてえからダメだ【

返信来なくなつた。

。

俺が今やっているのは『歩く（ウォーク）』。

『歩く（ウォーク）』とは初心者がまず最初にするガ一股歩きのことを。

ただガ二股でヨチヨチ歩くだけでいいんだが、これが何気に難しい。気を抜くと滑つて転けちまいそうになる。

道路

ある程度なれてきたため今度は走行練習。

河原は石が多くたため道路に移動してきた。

「あー、ドキドキすんな」

ちゃんと走れつといいけど。

俺は恐る恐る地面を蹴るが力が弱すぎるためかアシストモーターが反応せずのりのりとしか進まない。

「ふんっ！」

今度は思いっきり地面を蹴る。

するとその力にアシストモーターが反応しホイールが回転・加速しだす。

シャカー——ツツツ

「つまつー？」

速つ！？

いきなし車並のスピード出てんじゃねえか！？
コイツは怖え……。

ブー——ツツツ——！——！

そんなことを考えていると俺の前方からトラックが。

やべえ！？まだ死にたくないぞ俺は——！
どうすりゃ……いや、こうこう時こそ落ち着け俺。
まずは風を感じろ。風を

ザアアアアアアア————ツ

そして『風』を切り裂き『空』を駆れ——！——！

trick · Wind Wing
突如俺の姿が消え去る。

だがそれはトラックに弾き飛ばされたワケではなく、トラックの受けた気流に乗ったため。

「ふう……一時はどうなんのかと思つたけど無事で何より。
にしても今のどりやつたんだ？」

無意識でやつたからよくわからんねえ。

そんなこんなで一般道を走り回る。

走ってる最中に何度クラクションを鳴らされたことや。

そして1時間ほど走っているとついに白バイが出向いて来やがつた。

白バイは馬鹿みたい速くその上しつこさが半端じゃなかつた。

危つく補導されかけたがそのおかげで走るのにだいぶ慣れた。

んで、気づいたんだがここへんには『暴風族』はいねえらしい。

俺の一つ名じゃなくてA・T使い（ライダー）って意味の方な。

それにA・Tを取り扱つてる店がねえ。

ま、だから俺は自分でつくることになつたんだが。

ネットとかだと結構いろいろ『暴風族』ストリームライダー 同士の戦バトルとか技トリックがアップされて有名っぽうなんだけどな。

そして家に帰つた頃にはもう10時を回つていた。

5、6時間走つてたっぽい。その内の大半は白バイに追いかけられてたが。

『清涼祭』の始まる1週間前までほとんどそんな感じだったので優

子に怒られた上にしばらく口を利いてもらえなかつた。

そのため、『清涼祭』の始まる1週間前からまた一緒に帰るようになり、帰った後もこれまでの反動があつてか俺の家で過ごすようになった。

その一週間で大人の階段を駆け上がりつたのは俺と優子だけの秘密。いつぞやの大膽発言が本当になつたな、と1人感慨にふけていた。

バカと俺と清涼祭初日（前書き）

編集しました

バカと俺と清涼祭初日

『清涼祭』初日の朝

「おはよう。

お、いつも汚ねえのにだいぶよくなつてんな。このテーブルとか」

ガラガラと扉を開け Fクラス教室に入ると最近見慣れたみかん箱が姿を消し、変わりに立派なテーブルが置かれている。

「あ、それは木下君がみかん箱で作ってくれたんですよ。
どこからか綺麗なクロスを持ってきてこう手際よくテキパキと」

尊敬の目で秀吉を見る姫路。

いつものダンボールが劇的ビフォーアフター。

秀吉って器用だったんだな。

「ま、見かけはそれなりのものになつたが。
その分、クロスを捲るところ通りじゃ」

そう言つてクロスを捲ると見慣れた『みかん』の文字が多数。

「これを見られたら店の評判ガタ落ちね

島田の言つとおり、コレを見られたらイメージダウンは免れねえだろつた。

「きつと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだらうし、見たとしてもその人の胸の内にしまっておいてまらえるぞ」

「そうですね。

わざわざクロスを剥してアピールするような人は来ませんよ、きつと」

「ま、来ても俺が潰してやるよ。

最近おもしれえことやってつから

そいつ言ってA・Tの入ったバッグを指差す。

「空君。それなんなんですか？」

「あとで見せてやるから楽しみにしどけ」

「はーー！」

姫路の頭を撫でながら畳つと元氣よく返事をする。
姫路つて犬っぽいよな。後ろから尻尾振りながらついて来そうだ。
そう考えていると康太が陶器のティーセットと胡麻団子が5つ載つたお盆を持ってやって来た。

「…………飲茶も完璧」

「おー、美味そうだな」

「土屋、これウチらが食べちゃつていいの？」

「…………（ノクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

俺らは作りたての温かい胡麻団子を勢いよく頬張る。

「お、美味しいです！」

「ムツツリーー、美味しいよーー！」

「ふむふむ。表面はカリカリでありながら中はモチモチ。甘すぎず、

食感もよい 100点だ！」

「…………（ブイツ）」

俺が目をクワツ、と開け康太に言うとブイサインを返してきた。

「あの、空君。私も作ってみたので点数お願ひします」

「了解。

……ふむふむ。表面は「ゴリゴリ」でありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいが んゴパツ」

俺の口からありえない音が出た。そして目に映るのは俺の16年間の軌跡。

ああ、あの時の優子は非常によかっ……はつ！？」これは走馬灯か！

「空君、どうですか？」

「姫路。 100点だ！」

マイナス側にな。

「え！ホントですか！？じゃあ、皆さんの分も作ってきます！」

大事な部分を省いて言つてしまつたため、勘違いし毒団子を量産しようとしている。

てかやめろ！？俺以外に被害を増やそうとするんじゃねえ！？

「姫路。 そう言つのは大切な人に作つてやつた方がいい。

例えばA君とかにな？

だから今は作るな

「え？わ、分かりました！？」

同じクラスのA君を犠牲にして被害の拡大を防ぐ。

A君、健闘を祈る。

「んじゃ、俺は密寄せしてくれる」

ひらひらと手を振つて教室から出て行く。

密寄せをして時間を潰し、今は試験召喚大会1回戦。

『えー。それでは、試験召喚大会1回戦を始めます』

「一人とは余裕ですね?」

余裕とかじやなくて単に数があぶれただけだ。

「守童!この前の仮は返すわよ!」

「あー、勝手にしてくれ」

『では、召喚して下さい』

『試験召喚!』

喚声に応えてお馴染みの魔法陣が足元に展開されそれぞれの召喚獣が召喚される。

金田一の召喚獣（以後、ミー金）は蛇腹剣を、里井の召喚獣（ミー

里（さと）は双剣をそれぞれ構える。

『2・Bクラス	金田一 裕子	
数学	187点	
2・Bクラス	里井 真由美	
数学	199点	
	VS	

2・Fクラス	宇童 空	
数学	521点	
	VS	

「な、なんて点数なの！？」

く……つ！真由美、一気にいくわよ？」

「分かった！」

そう言つて二金、三里を操作して――俺（空の駆魔獣）に向かって駆けてくる。

そしてその勢いのまま2体とも――俺にそれぞれの武器を振り下ろす。

「おつと。お前ら、自分の武器のこともつと知つた方がいいんじゃねえの？」

特に金田一。お前の武器は近距離にむかねえ」

そつ言いながら――俺は余裕をもつて蛇腹剣で攻撃してきた――金側に避ける。

そして振り下ろし終えた蛇腹剣の腹を足で押さえつけ、二金に2、3発蹴りを高速で打ち込み（余談だが俺自身もA・Tを使うようになり操作技術が大幅提升了ため今のよつたな技ができるよつになつた）、よろけたところを思いつき蹴る。

「やあと!!」金は蛇腹剣を手放して吹っ飛んでいく。

「 もひつたつ。」

そつ叫びながら蹴り終えた後の硬直を狙い三里が双剣を振り下ろしていくが、三里 僕は前転してそれを危なげなく避けながら蛇腹剣を拾い。

「里井、甘すぎだ」

そして!!! 僕は低姿勢のまま振り向き、それと同時に蛇腹剣を左から右に横に一閃すると三里の上半身と下半身が斬り離され、続けて右腕を上げて振り下ろすと三里の頭が半分になり消え去る。

余裕じゃねえとか言つたけど前言撤回。『イツら相手だと余裕だ。

三里が倒されたその一瞬の出来事に雖然としている!!! 金に迫り、首に田掛けて蛇腹剣を振るうと反応する間もなく首と胴体がおさりばする。

「俺を倒してえんだつたらひとつ操作技術の腕を上げてからにしろ

そう言つてやると2人の表情が苦くなる。

……腕輪使つような場面はなかつたな。

『勝者、宇童 空』

とりあえず一勝。

何とはなしに教室に帰つてみると、さすがに野郎と坊主頭が気持ち悪い動きをして喫茶店に入ることに決まった。怪しそう満点だったため、そこでからが入る直前に制服の襟元を掴み隣の空き教室に引っ張り込む。

「おーーー何しやがるんだよーーー？」「それはこっちの用事だ。お前らこそ何しようとしてたんだ？ 気色悪い動きしやがって」「はあ？ お前に何の関係があるんだよーーー？」

「それって何かするつもりだった、と受け取つてもいいよな？」
「…………」

「沈黙もまた答えなり。認めたと判断するぞ。」
「んで何してたんだ？」

「お前に言つわけねえだろ？ ばーか」「…………はあ。高校生にもなつてそれはねえだろ？ なんだよ『ばーか』って。お前の方が馬鹿だろ？」

そう返してやると茹で蛸のようになんて顔が真っ赤になるモヒカン野郎と坊主頭。

「2年風情が調子にのるなよーーー！」

「団星か？ 情けねえな。

お前らの頭に詰まつてんのは脳みそじゃなくてスポンジだろ？ あ、スポンジに失礼か。ははっ、悪い悪い

「な、舐めるなあーーー！」

「気に食わねえんだから、かかつて来いよ。捻り潰してやる

そう言つて指をクイックイット動かすとモヒカンと坊主がアイコン

タクトや言葉等の合図を交わさずに俺の方へ駆け、両サイドからパンチを放つてくる。

ふむ。なかなか息が合ってんな。だが些か動きが単調すぎやしねえか？

俺は右から来る坊主のパンチを避け、その伸びきった腕に手を添えてモヒカンの方に投げ飛ばす。

「つー？」

ゴンッガシャンツ

モヒカンは坊主が飛んできたことに驚き咄嗟にしゃがんだよつで、坊主は受け止められることなく積み上げられて山のよくなつていて机や椅子の塊に突っ込んでいった。

起き上がらないことから氣絶していると分かる。
なんとも痛そうだ。

ふと『時』のことを思い出したので実践してみよつと思つ。

『時』とは、本来A・Tで加速した蹴りや平手で、動作の基点となる『動き出し』を止め、さらに顎の先端や後頭部、首筋の根元の神経節を撃ち、運動中枢の自由を完全に奪うこと。いつ。

相手は頭を打つた時と同じように目が霞み、炎のような陽炎が見える。

意識ははつきりしていても体は動かず灼けるような熱さを感じるた

めこれは『炎の道』^{トライック}の技の一つとして数えられる。

俺は腕を前に伸ばし、手のひらをモヒカンに向けるように人差し指と中指、親指を揃えて立て、それ以外を軽く握りむ。それを右の指が上に、左の指が下に向くようにして構え宣言する。

「　　時よ　ーー」

「死……つー？あがつー？…………」

体勢を立て直し再び殴りかかるうとしたモヒカンにそれよりも速く蹴りや平手を打ち込む。

うー、これは疲れるな。やっぱA・Tがあつた方が楽だ。

俺は腕をプラプラさせながらそう思つと1人教室を出ていった。

そして教室には机や椅子の山に埋もれた坊主頭と殴りかかるうとしたままの体勢で石像のよつに固まつていいモヒカンだけが残つていた。

「それでは、試験召喚大会2回戦を初めてください」

『試験召喚』

『2・Aクラス 新島 和也

英語

369点

2・Bクラス 小野 亮

英語

220点

VS

2・Fクラス 宇童 空

英語

409点

新島の召喚獣（以後ミニ島）は大剣、小野の召喚獣（以後ミニ小野）は表面にでっかい棘が4つついた大型の盾を構える。

「お前に攻撃させる気はねえから、そこんところじへ

『腕輪持ちだからってナメるなよー。』

『ぶつ潰してやる！』

『勝手に言つてろ。』

『紫電の道^{ライジング・ロード} - 無限の空無限の紫鎧^{インフィニティ・スカイ・スパイア・スパイル}』

腕輪を発動させるとミニー俺のA・Tの後輪から無数のワイヤーが伸び、雷を纏つた鎧を作成する。そして

「悪いがここから先は一方通行だ……！」

放つ。

『なつ！？ いきなしかよ！？

亮、頼んだ！』

『任せとけ！ あんな針金全部防いでやる！』

するとミニー小野がミニー島の前に出て、盾で鎧に真っ向からぶつかり防いでいるが

『2 - Aクラス 新島 和也

英語 369点

2 - Bクラス 小野 亮

英語 179点

VS

2 - Fクラス 宇童 空

英語 209点

ミニ小野の点数がどんどん減っていく。

『……つ！？亮！点数が凄い勢いで減つていつてるぞー。』

『クソつ！防いでるのになんでだ！？』

おー、パニクつてんな。

「親切な宇童君が一つ教えてやる。

ワイヤーは雷纏つてんだ、防ぐと感電すんぞ？」

ま、わかつたといひでどうもなんねえけどな。

俺はミニ 俺を操作し右側のA・Tから出でているワイヤーを
俺の右足に纏わせ敵2体に接近させる。

「盾諸共砕けろ」

そして、その足で盾を蹴るとそれに合わせてワイヤーが一斉に放たれ、盾と敵2体をまとめて貫きトドメとして膨大な熱量が全てを溶かす。

『く……ひー』

『一方的すぎる……。』

「当たり前だろ?」

一方通行だ、って言つたんだから

『勝者、守童』空

もつやうやうに飯時だし教室に帰つてみるか。

中華喫茶『ピーローパーク』

教室に入ると明久が島田と姫路に折檻されていた。

.....こもなしひ過ぎた。

.....どうこう経緯で俺がここまで行き着いたか俺の行動表をお見せしよ。

『2試合終了』

空き教室覗き

(モヒカン野郎と坊主頭が寝ていた。

いつまでもああしてゐつもつなんだらうな?)

中華喫茶『ピーローパーク』来店

今こい』

「もう一度言おう。

教室に入ると明久が島田と姫路に折檻されていた。

「坂本。これってどういった状態なんだ？」

「あ？あのチビッコが明久と結婚の約束したのにって言つたらこうなつた」

「明久。口リコンだつたんだな……。

「そういや、試召大会勝ち進んでるか？」

「ああ、もちろんだ。

空もその調子だと勝つているんだろう？」

「まあな。

それで、飯食うために帰つて来たんだが、そろそろ飯食いにいかねえ？」

「それもそうだな。行きたいところがあるのか？」

「おう！短いスカートを穿いた女の子がたくさんいる店だ

「なんだと！？それはすぐ向かわないとな！」

我がクラスの成功のために、（低いアングルから）綿密に調査しないとな！

明久！飯食いにいくぞ！」

そして俺、坂本、明久とそれに姫路、島田、チビッコの6人で飯を食べに行くこととなつた。

「こ」は俺の目的の場所、Aクラスの【メイド喫茶『』】主人様とお呼び…】なのだが

「空、『』はやめよ！」

この動物園から逃げ出した「」がだだをこねやがつて困っている。

「ここまで来て何言ってんだよ…」

それにだだこねて良いのは子どもだけだ！

お前みたいなヤツがやつても可愛げがねえ、逆に気持ち悪い…！」

「空の言つ通りだよ。早く中に入るよ…」

霧島さんも待つてるだろうし」

「ああ、そつか。ここって坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

坂本を咎める島田と姫路。

「おい、「」に加減入」

パシシャシャシャシャシャシャ

すぐ近くからす「」に勢いでシャッターを切る音が聞こえてくる。

「…………！（パシシャシャシャシャ）」「

「おい、康太」

「…………人違い」

「ど」からどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるので？」「

「…………敵情視察」

「ムツツリー二、ダメじゃないか。

盗撮とか、そんなことしたら撮られている女の子が可哀想だと

「…………1枚100円」

「2ダース貰おつ

可哀想だと思わないのかい？」

「アキ、普通に注文してるわよ」

「おい、康太。

優子の写真は全部俺に回せ、一枚たりとも他人に売るなよ？
売つたら血祭りだからな？」

俺はニッコリと笑いかけると康太は高速で頷く。

「…………一？（「ククク）

…………そろそろ当番だから戻る（スツ）」

「まつたく、ムツツリー二にも困ったもんだね（サツ）」

「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」

「やだなー。もちろん処分するに決まってるじゃないか

「じゃあ、今俺に渡せ。燃やしてやる」

「い、いや。あとで自分でやるよ」

「明久。一生虫歯を心配しなくていいよ！してやるつつか？」

「これをどうぞ！――」

康太のことだ、優子の写真は入ってないとと思うが念のためライター
で火をつけ燃やしておく。

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

「…………おかえりなさいませ、お嬢様にご主人様」

やつとのことでメイド喫茶に入ると霧島が出迎えてくれた。

「お姉さん、きれーー！」

「坂本。奥さんが出迎えてくれたぞ？」

よぐできた奥さんだな」

「……チツ」

「……おかえりなさいませ。

今夜は帰らせません、ダーリン」

「霧島さん、大胆です……！」

「……それではお席に」案内いたします」

そして6人掛けの席に案内される。

「すゞい数の客だな」

「……では、メニューをどうぞ」

霧島が立派な装丁のメニューを渡してくれる。
やっぱAクラスは格が違うな。

とんでもなく金がかかってそうだ。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で。葉月もそれでいい？」

「うん！」

「あ、私もそれがいいです」

「俺もそれを頼む」

チビッ「は島田の妹で葉月と言つらじい。あんま似てないな。

「僕は『水』で。付け合せに塩があると嬉しい」

「んじゃ、俺は

「……』注文を繰り返します。

……『ふわふわシフォンケーキ』を4つ、『水』を1つ、『メイドとの婚姻届』が1つ。以上でよろしいですか？

「全然」「よろしいです」

空つ！

「うへせえぞ。他のお密さんの邪魔になるだろ」

「……では食器を」用意致します

そう言って『ふわふわシフォンケーキ』を頼んだ人の前にはフォーケが、明久の前には塩が、坂本の前には実印と朱肉が用意された。

「なんだ!!」
美子は三回もかの実田がそ
と泣いて三回も机が

「
」

霧島が去つていく。

「坂本。うらやましこ」としてんな?」

「……なら、かわってやるぞ」

「いや、俺には相手がいるからいいわ」

「何い！？明久つ！今の言葉聞いたか！？」

「空に彼女いたの！？」

「空君。相手は誰なんですか！？」

「テンション高えぞ。」

相手は

ちょうど俺たちのテーブルの近くに優子が来たので腕を掴んで俺の方に引き寄せる。

「優子だ」

「さやつー？そ、空ー？こきなりビーフしたの？」

「ん？俺の彼女誰かって言つ話になつてな。

それにして似合つてんな。可愛いぞ」

「あ、ありがとー……」「

俺の言葉に顔を赤くして答える優子。

……やべえ、可愛いやがれ。

「優子。今日『も』一緒に帰るか？」

「ええ、もちろんー！」

「お前だけ幸せになりやがつて！

今日『も』、とか見せつけんじゃねえーー。」

見せつけるために黙つたんだからな。

「坂本君には代表がいるでしょ？」

「そうなんだけどよ。」ここへ、自分の気持ちになかなか素直になれなくてな。

男のシンデレラは気持ち悪いだけだつてことに気づいてねえ。

困つたやつだよ、まつたく……はあ……」

「なんでお前に呆れられなきゃならないんだよーー。」

お？シンデレラはノータッチ？
ま、いいや。

「だつてよお。見るに耐えられねえんだよ。

霧島のやつあんなにアピールして待つてんのにお前は逃げてばつか
じやねえか。

それが嫌ならはつさり嫌つて言つてやればいいだろー。」

「つ……」

「嫌じやねえんならどうあえず一回りしゃんと話しあってみるよ?」

「……分かったよ」

坂本はぶつきらばつに言ひ放つ。

以上、空君の人生相談コーナーでしたー。

「さ、食つぞ。優子も食べるか?はい、あーん

「あ、あーん」

膝の上に優子を乗せて食べ始める。

「……あれいいわね(ボソッ)

ア、アキ。ほら口開けなさい。食べさせてあげるわ

「吉井君。私も食べさせてあげます」

「葉月も食べさせるの~」

「そ、そんな一気に、もががつ!~?」

俺のテーブルでは、ほのぼのとした空気が漂っていた。俺に対する周りの男子の視線がいたかつたけど。

3回戦目の相手はモヒカンと坊主だったようだが不戦勝で終わった。

空き教室を覗くとモヒカンが止まつたままでそれを坊主が必死こいて動かそうとしていたが見なかつたことにして客寄せに戻る。客寄せのためにいろいろと校内を見て回つていると4人組のチンピラに絡まれたので、モヒカンと同じように『時』で動きを止めてやつた。

そして次の4回戦目からは一般公開される。

『それでは、4回戦を始めたいと思います。出場者は前へどつぞ』

審判の先生に促され前に出る。

『向こうは一人のようね』

『そうね。速攻でつぶしてやりましょ』

『そこのお2人さん。向こうは強いやつが言うもんだぜ?』

『な!?私たちが弱いって言つの!?』

『あんなやつ絶対倒しましょ!...』

別に弱いとは言つてねえけどな。

『試獣召喚!』

『3・Aクラス 佐藤 美穂

古典 378点

3・Aクラス 小浜 桂

古典 398点

2・Fクラス 宇童 空
古典 419点

「あー、こいつはヤベえ……」

『Fクラスでこの点数！？』

『美穂。彼、腕輪持ちよ。気をつけましょ』

佐藤の召喚獣（以後ミニ佐藤）は鞭、小浜の召喚獣（以後パクロス）は銃を一丁構えている。

今回俺の腕輪は足止めよつなので相手の武器を奪つて攻撃することにした。

『パンがなければケーキを食べればいいじゃない』改め『武器がなければ奪えばいいじゃない』作戦開始！！

ミニ 俺はパクロスの方に高速で駆け出す。パクロスはミニ 俺に銃口を向けて発砲するもミニ 俺はキレのある切り返しを繰り出しへんぐん近づいていく。

残り2メートル程になつたところでミニ佐藤による鞭攻撃。ミニ

俺は急に来たその攻撃を避けきれず脇腹部分が削りとられる。

そのままミニ佐藤はミニ 俺に追つて討ちをかけよつとするので急いで離れる。

もう一度銃を奪いに行くも同じように撃退される。

イヤらしい武器使いやがつて、と心中で悪態をつく。

『武器がなければ奪えばいいじゃない』作戦を破棄し、賭けにする。

だが、これが成功しなければこの勝負、勝てる見込みは0。

まずは思いつきり後ろに跳んで相手との距離を空ける。

そして目を瞑り集中。

俺とマニ 俺が一体になるイメージ。それを明確に。明確に。明確に。

「オオオ——、———

しだいに周りの音が聞こえなくなる。

目を開くと視線が低くなつていた。

成功のようだ。

『試験召喚システム』という科学とオカルトと偶然の産物。そのオカルト的要素に賭けた結果がこの召喚獣との一体化だ。

『シンクロ同化』^{シンクロ}とでも呼ぶか。^{トライック}これで負ける気がしねえ。

俺が今まで練習してきた技。

それを魅せてやるー！

バカと俺と暴風族（前書き）

編集しました。

『御披露目』に『空気砲』と『方向指示キー』なるものの御披露目をプラスしました。

バカと俺と暴風族

パンツ

破裂音がフィールドに鳴り響く。

だがそれはパクロスの発砲音ではなく、俺が発生させた音。

trick : After Burner

瞬間、俺の姿がかき消え、俺がいた場所には炎と、数瞬遅れて再びパンツと破裂音が鳴り響く。

この破裂音の正体は衝撃波。

この技は音を置き去りにした超高速移動。

その技を続けざまに連発し音速を超えた超高速移動で2体の召喚獣に近づいていく。

超高速移動のため銃によるエイムはおろか視認することも不可能だろ。そのまま背後にまわると

『時よ』――！

俺は心中で告げ、高速で蹴りや平手を放つ。速すぎたため腕が千切れかかっているが今は無視。

いつ動き出すか分からぬためすぐに間合いをとり、次の技を決める。

trick : Grand Fang Fire Bird

『牙』（三日月状の衝撃波）に炎をのせて放つ炎の牙。特大の炎の

牙は唸りを発して2体の召喚獣に喰らいつた、そして全てを燃やし尽くす。

本来『牙』を撃つための身体能力のない召喚獣で撃ったため右足は吹き飛んでいる。

俺は敵を倒したのを確認し、//一 俺と分離するよツイメージ。

元の俺の体に戻るとかよツビ勝利宣言がされていた。

『勝者、宇童 空一』

すると拍手と歓声があがる。

こうこうのも、なかなか気持ちのいいもんだな。

グラウンド

準決勝は相手が食中毒で棄権し不戦勝。まさか準決勝を棄権するやつがいるとは驚きだ。

決勝は明日あり、今から部活の出し物で各個人の作ったものの御披露だ。俺はもちろんA・Tを。

優子はもちろんのこと、坂本や明久、秀吉、康太などいつも一緒に

いるFクラスメンバーと霧島や工藤も見にきている。俺の順番が回ってくるまでは優子と一緒に見ることにした。

「私が作つたのはみんなも知つてゐる某青狸の空氣砲」と

じゃーん、と言つて女子生徒が見せるのはなんの変哲もない鉄製の筒。

『いやそれも手てがかりか？』

そして……あ、そこの赤髪君でいいや。その鉄板持つて

あゝこれが「

二二

せやんと構えとかなしと“ふう舟にされる”から気を一軒でね
それじゃあいくよ?

“トナソ”

『ドカン』という言葉がキーとなり圧縮された空気が吐き出され鐵板に接觸。

ギュルルルツバキヤツ

?

鉄板が貫通して腹に空氣の塊があたり回転しながら吹つ飛ぶ坂本。うへえ、リアル螺旋丸。食らいたくねえ……。

「……つ！？ 雄一！？」

皆田を丸くしてそれを見ていると霧島が我に返り坂本に駆け寄り介抱する。

『観客使うなって何回言えれば分かるんだお前は』
『あいたっ！…………うう、すいません……』

坂本をぶつ飛ばした張本人は顧問から頭を軽く叩かれている。
『ちゃんと謝つておくんだぞ』

『 せん 』

それじゃあ次の人に

俺が作つたのは“方向指示キー”

次は両手にグローブのようなモノをつけている男子生徒。

『これはベクトル操作のための機械。あらゆるモノのベクトルを自由に操れる。

例えは

男子生徒はペットボトルのキャップを開け、口を傾け左の手の平に中の水を流すとふわふわと浮いている。

『こんなことができる』

ପାତ୍ରବିନ୍ଦୁ

つ！？すげえ！どうなつてんだ！？

『他にもこんなのがとか

そう言つてあいている右手で浮いている水を掴むと水が槍のような形状に変化する。

『こんなのか』

さつき空氣砲で破れた鉄板を槍で一閃すると綺麗に真つ一つになる。

『』『』『』『』『』『』『』『』『』

ほー、ベクトル操作って便利だな。何でもできそうだ。

その後も御披露目は続いていく。

部屋のや二五は、僕の外見の変身ヘルトや小型超電磁砲などアーバーテクノロジーで危険なものばかり作っていた。そしてついに俺の番。

「俺が作つたのはコレ。A・Tと呼ばれているもの。見た目はただのインラインスケートだが性能は全然違つて」
エア・トレック

俺はそう言つてA・Tを履く。
エア・トレック
すでに『炎の玉璽』
レガリア
は装着済み。

「今からすゞい」とするから見ていてくれ

そう言つて校舎の壁際まで駆けて行きそのまま腰を捻りながらジャンプをすると、ホールドを壁につけ腕の回転力を軸に駆け上がる。

屋上まで駆け上ると皆言葉がでないようで口をパクパクしていた。感想を聞くため俺は横に寝そべるような体制になつて壁を、A・T・ア・トレックのホイールを擦りながら降り、みんなのところへ戻る。

「どうよ！？今の技」^{トレック}

「人間にあんなのができるんだね」

ベクトル操作ができれば簡単に登れそうだがな。
あ、でも見た感じだと範囲が手だけっぽいし難しいか？

「あれが空の創っていたものかのう。
足だけで壁を登るとはすういのう」

「お前、本当に人間か？」

いつの間にか起きていた坂本にそんなことを言われる。

「失礼なこと言つてんじゃねえよ。
んで、後一つとつておきのあるんだが見るか？」
「見る見るつ……絶対見る……」

俺が尋ねると優子が目をキラキラさせながら答える。
「つーー鼻血が出かけたぜ。恐るべし純度100パーーセントの笑顔。

「んじや、見てるよ」

trick・Ikaros Pteron

カツカツキュキュパツ

俺が舞うようにステップを踏むと足元からボンとこつ音と共に3対

6翼の炎の翼が噴き出る。

それは本物の翼のよつて羽ばたく。

『ほえ……』

『……綺麗ね……』

『……そうだな……』

周りから感嘆の声が聞こえてきて、少々照れくせ。

そんな中優子の元へ駆ける。

「優子。どうだつた？」

「すゞく綺麗だつたわ。

……それに格好良かつた

「そうか、ありがとう」

「空……」

「優子……」

俺と優子の顔が近づいていき唇が触れそつになつたといひで坂本が話しかけてきた。

「空。イチャつこい悪いが俺と明久はババアに呼ばれてるからもう行くな」

「分かつたが空氣読めこのハコリカ」

「んだとこの！…………この…………」

「思いつかねえんだつたら無理に言つ必要ねえだろ」

「…………このたれ目！」

「捻りだしてそれかよ！？」

別にたれ目つてほどたれ目じやねえし。それに気にしてねえ

「く……」

「そつと行け。

ま、見に来てくれてさんきゅ」

そう言つとやつと坂本と明久が学園長室に行つた。
2人が行つた後も、しばらく御披露目は続き5時程になつてようや
く終わり、『清涼祭』初日は幕を閉じた。

バカと俺と決勝戦（前書き）

編集しました

バカと俺と決勝戦

『清涼祭』二日目

俺は試験大会の会場への道を黙々と歩いている。

『宇童君。入場が始まりますので急いでください』

結構、ギリギリに来たためか係員の教師が急かすように手招きしている。

『さて皆様。長らくお待たせ致しました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

『出場選手の入場です！』

『さ、入場してください』

係員にポンと背中を叩かれる。

『2年Fクラス所属・坂本 雄一君と、同じくFクラス所属・吉井 明久君です！皆様拍手でお迎え下さい！』

『そして対する選手は同じく2年Fクラス・宇童 空君です！皆様、こちらも拍手でお迎え下さい！』

『なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝戦にすすんだのは両チームとも2年生の最下級であるFクラスの生徒です！

これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれません』

『それではルールを簡単に説明します。試験召喚システムとは

アナウンスでルール説明が入る。もう充分に知っていることなので、それを無視して坂本たちに目を向ける。

「お前ら、ここまで勝ち抜いて来たのか？なかなかやるな」

「空も優勝商品が目当てなの？」

「……優勝商品つてあつたのか？」

初耳なんだが……。

「え！？ 知らなかつたの！？」

トーナメント表の下の方に書いてたよ？」

「マジか……。

んで、優勝商品つてなんなんだ？」

「えーっと……白金の腕輪と如月ハイランドのプレオープンのペアチケット2枚」

「如月ハイランドのペアチケットだと！？」

明久！ 坂本！ 大人しくここで死ね！！

俺は優子と一緒に如月ハイランドに遊びに行くんだつ！！邪魔すんじゃねえ！！！」

「ふざけるな……」

俺は俺の自由のために絶対優勝しないといけないんだ！

如月ハイランドのチケットを燃やすまで俺は死ねん！！！」

「お前の都合なんざ聞いちやいねえ！とつととくたばれ！」

『……それでは試験召喚大会決勝戦始め！』

か？

坂本と言ひ合つている内に開始合図が同会から宣戦される。ちつ、言い争いはここまでか。

なら後は試合でケリをつけるのみ！

『試獣召喚！』

喚声と同時に魔法陣が展開され、召喚獣が姿を表す。

坂本の召喚獣（以後ミー本）はメリケンサック、明久の召喚獣（以後学ラン）は木刀を構える。

『2 - Fクラス 坂本 雄一	日本史	215点
2 - Fクラス 吉井 明久	日本史	166点
	VS	
2 - Fクラス 宇童 空	日本史	402点

「点数高えじやねえか。

なら、最初つから飛ばして行くぞ！」

『シンクロ
同化』！！

俺とミー 俺が一体化する。

ミー 俺の身体に馴染んできたためか、今回は周りの音が聞こえる。そして、俺と、相手のミー本と学ランは同時に駆け出す。

2人との距離が1メートル程になつたところで腕輪を発動させながら股関節を基点とした蹴りを放つ。

『『『 荆棘の道無限の空・無限の荊鎖』』』

『『『 ニル・ロード インフィニティ・アトモスフィアティ・チヨーン

腕輪によりA・Tの後輪が荆のような一本の鞭に変形する。完全な不意打ちにも関わらず二一本は鞭の下をくぐるよつて体勢を下げて避け、学ランは足を止め木刀で荆を逸らす。そして二一本は足を振り抜いたままの俺に勢いよくタックルし、俺をは吹き飛ばす。

「うー？ やつぱ決勝までのし上がつてただけのことはあるな。いつもバカだから油断してた。」

「それでも馴染んできたためか痛みを感じる。あんまり攻撃を喰らつてらんねえな。」

そう考へていると

「考え事とは関心できしないな」

「うー？」

いつの間にか俺に二一本が迫つておつ、俺の頬に右ストレートが刺さる。

「…………」のクソが……！

「あんまナメんなよ……。」

そう言つて荆を使った蹴りを二一本に放とつとする。

「相手は雄一だけじゃないんだよ？」

だが俺と二一本の間に学ランが割り込み俺の蹴りを打ち落とす。それにより体勢の崩れた俺の腹に向かつて学ランは木刀を横に雜ざ払う。ちょうど剣道の『胴』のような感じで。

ボッ

う……つ……かはつ……

ボゴッ

が……つ……

続けてミー一本に顔面を殴られる。

もちろん俺の体はさりに体勢を崩し後ろに倒れかける。

その体勢を直すかのように後ろから学ランが俺の頭を叩き上げに行く。

く……つ……やべえ……意識が……。

バコンッ

ファイードバック率100%のため体中に鈍い痛みが走り、俺の意識を刈り取ろうとする。

あ、これ負け

『そおおうああああああああつつつ……』

「つ……」

突如優子の叫びが聞こえ、俺の意識が覚醒し諦めかけた心が立ち直る。

『せりあでばかりじゃなくてええつつつ……! 反撃しなさあ

ああああこつこつこつ……
『……』

再び俺の顔面を狙つてきた!!一本のパンチをパシッと受け止める。

「さつきまで散々やつてくれやがったな」

キュルルルルルツ

ホイールが高速回転し砂を巻きあげ召喚者である坂本と明久から俺の様子を見えなくさせる。そしてフィールド中を駆け回り今度はフィールドに砂埃を充満させ、外から見える範囲を零にする。

これで見えねえよな?
んじや

すううううつ

俺は目を閉じ胸に手をあて、意識的に過呼吸を行い肺にかかる圧力を高める。

「すううううつ

感覚がリンクしているためか本体も一緒になつて過呼吸を行づ。
そして息を吐き出す。

はあ
「はあ

体内に溶けこんだ窒素は、ほんの少し息を吐き出すこと、所謂減圧により、気を失うほど激痛を伴いながら体中の各関節から気泡となつて現れる。

ビキビキッ

ツ――――――!?

「ツ――――――!?

だがその痛みと引き換えに、気泡状態の窒素がエアクッシュョンの役割を果たし関節の可動域を限界以上に拡げ、人間離れした動きを実現させる。

……今は召喚獣だが。

俺は閉じていた目を開くと、ちょうど砂埃が晴れる。

さあ、第2ラウンド開始だ！

さつきまでの俺と思うなよ――！

俺の半径2メートル程にミニ一本が入った時、本体の俺が言つ。

「　木々は腕をからめ天へと伸ばす。

群がる葉々は光を喰らい森の闇をいよいよ深くする。

狩人は気付かない。闇に潜む『森の番人』の双眸も獣たちの牙も……。

荆棘の道を進む者。されじゆくべく髑髏の使徒は森の中で眠りにつく。

ここは『眠りの森』スリーピング・フォレスト』

「どうということ?」

「お前らは今死の森に踏み込んだ、ってことだ」

「ふん、そんなものはハツタリだろ?」

明久、いぐやー..

「うんー..」

そう言つて///一本・学ランが武器を構えてかけてくる。

「あまり森の奥に入る」とは関心しねえな

trick·Thread a Thorny Road Ruin
Sphere

ギチギチギチッ

足元の荊を握り///一本を球状に取り囲む。

「な、なんだそれは！？」

「あー……腕輪の本当の力って感じだな。
ま、坂本はここで消えろ」

ギギギギギッ

俺の言葉に従つように球が回転しながら終つていき、///一本の体が
削られ消える。

それを見た明久の顔が青くなる。

大方フイードバックの想像でもしたんだりつ。
ま、俺は明久にも同じことするほど悪魔じやねえよ。

trick·Thorny Road Thorn Spins

俺は脚に捻りを加えながら鞭のようにならせ、更に回転をかけ荊

を加速させる。どんどん回転を加えることにより、ついに荊が音の壁を破り棘のように先の尖った円錐形の衝撃波をいくつも発生させ、それを学ランに向けて放つ。

見えない『棘』が体中にさわづ、学ランが消え去ると勝利宣言が聞こえてきた。

『勝者、2-Fクラス・宇童 空――皆様拍手をお願いします』

拍手と歓声の吹き荒れる中、俺は『同化』シンクロを解除し明久の方を見ると痛みでのた打ちまわっていた。

前言撤回。やっぱ俺、悪魔かもしんねえ。

坂本は真っ白に燃えぬきしている。

『それでは続いて授^ジ式です!――学園長、お願いします』

司会役の先生が学園長にマイクを渡す。

『ガキども。いい試合をありがとひさね。

さあ、優勝したアンタ。こっちに来な。商品渡すよ』

そう言われ壇上に行く。

『まずはこれ、如月ハイランドのペアチケットさね。アンタは1人だからね、もう1枚は知り合いにあげな。

そして、白金の腕輪。こっちは自分で召喚フィールドをはれるやつさね。もつ一つは召喚獣を分身させられるよ』

「あー、学園長。俺はチケットだけでいい。腕輪は使わねえ」

『シンクロ 同化』して変になつたら困るしな。

『そつかい？じゃあ後ろのガキ二人。』「ひに来な

「うう……なんですか？ババア長」

「……なんだババア？」

『アンタたちには一度、この学園の最高責任者が誰だか教えないといけないねえ。

まあ、今はそんなことよりこれを受け取りな

「これって優勝商品じゃないんですか？」

『アンタ、さつきの話聞いてなかつたのかい？

そこガキが使わないつて言つからアンタたちにまわつて来たんだよ』

「……お？空、サンキュー。

あと、もう一枚のチケット絶対に翔子に渡すなよ

「あー、考え方く」

『じゃあ、これで終わりさね。

そこガキ二人はすぐにその腕輪の『モンストレーション頼むよ』

その後、腕輪の『モンストレーション』があり、それが終わると教室に戻り一般公開が終わるまで喫茶店を手伝つた。

バカと俺と打ち上げ騒ぎ

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行つてください』

「お、終わった……」

「さすがに疲れたの?……」

「…………（口ク口ク）」「

「そういうえば姫路の父さんどうしたんだ?」「

「ん? お義父さんが気になるのか?」「

「俺には優子がいるから気になんねえよ」

「なんと! 姉上と付き合つておつたのか! ?」

『総員狙ええ――――――!』

「つるせえ! ! くたばつてう! !

108マシンガン! ! !

アタタタタターッ、と審問会の連中を蹴り伏せる。

あー、コロッケ懐かしいな。

T - ボーン何気に強かつた覚えがある。

「で、姫路の父さんは?」

「後夜祭の後で話をしに行くと言つておつたの? 結論はその時じ
やな

「そうか」

「あ、空。俺と明久はババアに呼ばれてるから片付け頼んだ。

ムツツリーと秀吉も来てくれ

「…………（口ク口ク）」「

「わかつたぞい」

そつとつて坂本たちは俺に片付けを押し付けて教室から出て行った。

しばらく片付けをしていると新校舎の方から爆発音が聞こえてきた。優子が心配になつたのでAクラスに行くも何も変わつた様子もなく、俺はFクラスに帰つていった。

後で知つたんだが坂本と明久がやつたらしい。教頭も関係していて、俺が学園長室であったときに植木鉢の方を確認するように見ていたため、たぶんそれが関係しているんだろう。

坂本は俺が言つた時に植木鉢を調べなかつたみたいだな。
俺が自分で調べときやよかつたと思わなくもない。

現在、公園にて打ち上げ中

打ち上げと言つのは名ばかりで、実際は異端審問会の連中に絡まれたので撃退しているだけ。

倒しても倒しても湧いてくるゴキブリ共。量産型GOKIと名づけよつ。一級（審問官）専用GOKIもあるとかどうとか。ぶつちやけマスクの濃淡が違うだけだが。

そつこうじていると坂本たちがやつて來た。何故か坂本と明久はボロボロだ。

「お前ら遅かつたな？」

「ちょっと鉄人に追いかけられちゃつて」

「くそつ、鉄人め。あの野郎は手加減をしらないのか」

「秀吉と康太も追いかけられたのか？そのわりには大丈夫そうだが？」

「ワシたちは大丈夫じゃぞ」

「…………雄一と明久の手伝いをしていた」

「何やつてたんだ？」

「…………企業秘密」

「そうか。

「んじやパーツ、とやるか。坂本、頼んだぞ」

「ん？ああ、わかつた。

「みんな、飲み物が行き渡つているか？」

『おお―――つ！』

いつの間にか量産型GOKIたちが復活しており、その手にオレンジジュースの入った紙コップを持つている。俺の手にもいつの間にか収まっていた。

康太がやつたのか？

「みんな！『清涼祭』じ苦勞あだつた！！

それでは乾杯！…』

『かんぱーーいつーーー…』

そう言つてジュースを呷ある。少し苦い氣きがするが気にしない。

「そういう島田。売上うりどのくれえなんだ？」

「そうね。凄すごいって程ていじやなかつたけど、たつた2日間の稼ぎとしては結構な額になつたんじやないかしら」

「じゃあ、畠とみかん箱は新調できそだな」

「空。みかん箱新調してどうするんだよ。卓袱台に買い替えるぞ」

「何気にみかん箱気に入ってるんだが?」

「じゃあ空だけみかん箱で勉強するか?」

「あー……卓袱台がいいわ」

そんな話をしていると姫路が遅れてやつてきた。

「あ、瑞希。どうだつた?」

「はいっ!お父さんもわかつてくれました!」

「よかつたな、明久」

「な、なんで僕に振るのさ!?」

「あー、気分だ。

で、どうなんだ?」

「そ、そりゃ嬉しいよ!—」

「だつてよ、姫路」

「吉井君……」

お?なんか目がトロンとしてる。

「ふにゅー……」

そう鳴いて(?)明久にしなだれかかる。

なんとなく2人つきりにしておいた方がいいような気がしたので俺は2人から離れていく。

この日を境に姫路の明久の呼び方が『吉井君』から『明久君』に変わったとか。

木の影で胡座あぐらをかいて飲み物を飲みながら明久と姫路の2人を見ていると、突如視界が暗くなる。

「だーれだ？」

「ん？ 優子何やつてんだ？」

そつ言つて声が聞こえてきた方に顔を向ける。

「Fクラスの人たちが見えたから空もこるかと思つてこいつちに来たのよ」

「Aクラスもこいら辺で打ち上げしてんのか？なら、霧島も連れて来たらどうだ？」

「代表ならもう來てるわよ」

優子が指差した方を見ると、霧島が坂本と一緒にジュースを飲んでいた。

「今日の坂本は逃げ出してねえな」

「昨日の昼食のときに空が言つたことを気にしてるんじゃない？」

「あー、なるほどな。

それはそつと優子も座ればどうだ？」

「そうね。お邪魔します」

優子が俺の胡座あぐらの上に乗ると、優子から女子特有のいい香りがする。

「俺の上に座るのかよー？」

「ダメだつた？」

上田遣いで俺を見てくる優子。それを断れるハズもなく。

「あー、駄目じゃねえよ。

優子。ジュース飲むか？「

ストックしていたジュースを渡すと優子はそれを一度見て、一気に飲む。
のどが渴いていたんだろう。

「…………」

「黙り込んでどうした？」

「……空。なんだか暑くないかしら？」

優子は急にそつと胸元のボタンを外し襟を持つて風を送りこむ。

「いや、言つぽど暑くねえと思つが。

てか、ブラ見えてんぞ」

「もつと見たい？」

優子はグツ、^{スーパー・セクシアル・サークル}シャツを前に引っ張り胸元が見えるようにする。
超・男目線により推定Cカップ。感触はモチモチだった。

「酔つてんのか？」

心なしか顔が赤い気がする。

「酔つてなんかないわよ！」

酔っ払いの常套句をありがとう。でもなんで酔つてんだ。ジュース
しか飲んでねえのに。

そう思って空き缶のラベルを見る。

『大人のオレンジジュース』

あー……これ酒だ。

どうじよ?このままじゃあれだし。優子を家に送つてやるか?

「優子。家に帰るか?」

「ヤダ。空と一緒にいたい」

「……家に帰つたら一緒にいてやるよ」

「じゃあ帰る。おんぶして」

「あー、はいはい」

優子が子供っぽくなつており、俺が優子の前にがしゃがむと乗つかつてくる。

オツが背中に当たつてんだ、とは言わねえ。役得。役得。

そしてAクラスの集まつてこるとこに行き優子の荷物をとると帰路に就く。

木下家前

「優子。着いたぞ」
「すうすうん……。」
……部屋まで送つて「

「了解。

お邪魔しまーす。優子を届けに来ましたー

「はいはーい。

……あら。そーちゃんじやない。ゆーちゃん寝てるじ。じやあゆーちゃんを部屋まで送つてあげてね?」

「うごひす

優子の母さんに優子の靴を脱がしてもらい階段を上がる。部屋で手をついて優子をベッドに寝かせ、布団をかけて出で行こうとすると手を掴まれる。

「一緒にいてくれるって言つた。私と一緒に寝て

そして優子にベッドの中で引き込まれ、俺が逃げ出さなければ腕でしっかりと抱きついてくる。

俺の手は優子の太腿に当たつており、俺の鼓動が速くなる。

「優子。手の位置がヤバい

「むふふ。」「ううう」と?

今度は一転してイタズラっぽくなり、太腿でガツチリと俺の手を挟む。

「そうこうことだからヤバい
「手を出してもいいんだぞ?」
「…………じゃあキスだけ

促されたので優子のマシュマロ口唇にキスをする。

「もつとちよーだいっ！…」

語尾にハートマークが付きそうな感じで口をとがらせて言ひ。なぜにこんなに甘えん坊になつたんだ？

そう思つもキスをする。今度は口内に舌を侵入させ優子の舌と絡ませながらのキス。俺が攻めると優子も負けじと攻め返す。顔を離すと優子の目がトロン、としていた。

結局キスだけではガマンできずに優子のカッピ（推定）を直に揉みながらキスをする。

山のてっぺんを弄ると優子の口から甘い声が漏れてくるので更にヒートアップし、一階に優子の親がいるにも関わらず《ピー》やら《ピー》が《ピー》で《ピー》とか《ピー》を《ピー》に《ピー》して。これで2回目だな。

若氣の至りと言つやつだらう。優子は嬉しそうにしていたので良かつたと言えば良かつたが悪かつたと言えば悪かつた。

途中から酔いが醒めて普通に楽しんでいたように思える。

その後は家に帰つてシャワーを浴び、飯を食べて早めに眠つた。

こつして『清涼祭』は幕を閉じた。

閑話・俺と優子と如月ハイランド

ある日の学校での会話

「空。そういうえば、如月ハイランドのチケットどうした？」

「あ？ あれは康太が『…………買つてやる』って言つてたから売つたぞ。

チケットの行方を知りてえんだつたら康太に聞けば？」

「ああ」

そう言つてやると坂本は康太のところへ行く。

「ムツツリーー。如月ハイランドのチケット、誰か買つたか？」

「…………（「ククク）。

「誰が買つたかは言えない」

「これだけは聞かせてくれ。

翔子じやないよな？」

「…………SK - ?」

「は？ どつこ？ 意味だ？ 化粧品のブランドか？」

「…………気になくていい」

「…………翔子が買ったようじやないしいいか。

手間かけさせたな」

「…………問題ない」

…………気のせいいか？そんな安直なワケねえよな。

とある休日

電車とバスで2時間ほどかけ、俺と優子は如月ハイランドの前にいた。

「やつとついたわね」

「遠かつたな。」

ま、今日は目一杯楽しむか！」

「そうね！」

早く入りましょ」

俺は優子と腕を組んで入場ゲートまで行く。プレオープンという限定的な期間である為か、特に待つこともなく係員の青年の前に進むことができた。

「いらっしゃいマセ！如月ハイランドへようこそ！」

アジア系っぽい顔立ちのその男は、若干訛りの混じった口調で俺たちに笑顔を振りまいた。

「本日はプレオープンなのデスが、チケットはお持ちですか？」

俺は財布からチケットを出して男に渡す。

「拝見しマース」

係員はそのチケットを受け取つて俺たちの顔を見ると笑顔のまま一瞬固まる。

「そのチケット使えないのか?」

「イエイエ、そんなコトはないデスよ?
デスが、ちょっとお待ちくだサーイ」

係員はポケットからケータイを取り出し、俺たちに背を向けてビニ
カに電話をし始める。

「どうかしたのかしら?」

「んー、分かんねえな。

俺何も変なことしてねえよな?」

「ええ。心配しなくて大丈夫よ」

優子と話していると係員が電話を終えたようでは話しかけてくる。

「でハ、マズ最初に記念写真を撮りますヨ?..」

「写真撮んの?」

「ハイ。サイコーにお似合いなお2人の愛のメモリーを残しマース」

「空とお似合いでって」

係員の言葉に優子が仄かに頬を赤らめている。
……可愛いな。

「お待たせしました。カメラです」

そこに帽子を目深にかぶったスタッフがカメラを片手に現れた。
この声聞き覚えあるぞ？

「お前、明久か？」
「人違いですっ！？」

明久はそう言つと走り去つていった。
あ、転けた。慌てすぎだ、あのバカ。

「吉井君、バイトでもしてるのかしら？」
「ここ時給良さそつだし、そつかもしんねえな」
「でハ、写真を撮りマース。何かポーズをとつてクダサイイ」

そう言われたため俺は優子を抱きかかる。俗に言つお姫様だつこ
だ。

「そ、空！？は、恥ずかしいよお」

優子は俺の胸に顔を埋める。

うへえ、何この子？可愛すぎるーー

「大丈夫。大丈夫。

ほら、笑つて？すぐ終わるから」

そう言つと優子は埋めていた顔をカメラの方に向けて頬を赤らめながらニーッコリと笑う。俺もカメラの方を向いて微笑むと、フラッシュが焚かれピピッという電子音が聞こえる。

「スグに印刷して来マスから、ソのまま待つテイテ下さい」
「わかつた……。

優子、よくできましたー

係員が去っていき、俺は優子をおろして頭を撫でると耳まで真っ赤になっていた。

「そんなに恥ずかしかったか？」

「……人に見られたのが恥ずかしかった」

抱きかかえる」と自体はあまり恥ずかしくなかつたらしい。

「印刷して来ましタ。はい、どうゾ。
サービスで加工も入れておきまシタワ」

係員が戻つて来て写真を渡してくれる。

「どれどれ……。

おー、綺麗に写ってんな

「ねえ、空。ここに『私達、結婚します』って書いてるわよ? (ポ
ツ)」

優子が写真の上部を指差し頬をさらに赤める。

「お、本当だな。いい記念になるわ、コレ」

2人で話していると係員が話しかけてきた。

「アイヤー、お一方。コレをパークの写真館に飾つても良いデスか

？」

「ん？写真館に、か？そいつさやめとこてくれ」

「私もやめておいて欲しいわ。恥ずかしいし……」

「そうデスカ？ワカリました。

それでハ、如月ハイランドを心行くまで楽しんで来て下セイ」

「んじや 優子。行くか？」

「ええ

やつぱり歩き出す。

しまじく優子と腕を組んで歩いてみると前方にジヒックスターが見えてきた。

「お~ジヒックスターある~だ~。」

「やつね。ちよびといいしゃれに乗りますよ~。」

そつぱりでジヒックスターに向かつ。

ここはジヒックスターは世界で3番目に速く、いろいろな方向を向こうたり、ぐるぐる回つたりするらしい。

「結構すいてんな」

「まだプレオープンだからじゃない？」

それに、並ばなくてすむんだしあまつ矢にしなくてここと思ひわぬ
？」

「そりだな。んじゃ乗るか

「そこ」の異端者……木下 優子から離れりつ……

ジェットコースターに乗つて楽しんだ後、別のアトラクションを探していると黒いネズミの着ぐるみ（ネズミーランドの住人にあらず）が俺を指差して叫んできた。

なんだコイツ？なんで優子のこと知つてんだ？……！？もしかしてストーカーか！？この糞ネズミ、死に曝せえ！！！

俺はネズミに駆け寄り、視認できないほどの速さで頭に向かつて蹴りを放つ。そんな蹴りをネズミは避けられるハズもなく、スーパー・ボールよろしく吹つ飛んでいく。

ただいまの記録：12バウンド

「空!? こきなり何してるの!？」

「害虫駆除」

「『害虫駆除』、じゃないでしょ！…あの中の人人がケガでもしたらどうするの!？」

『中の人』とか言つちゃあ子どもの夢壊しちまうぞ？

『オレ。今、木下 優子に心配されてる！…もう死んでもいい！…』

蹴り飛ばしたネズミからそんな声が聞こえてくる。

「中の人、元気そうだぞ?」

「今回ばかりだつたけどこつもないとは限らないでしょ……」

「まあ、そうだな」

「でしょ?ほら、謝つてきなさい?」

「了解」

優子が母親みたいだ。

俺はネズミのところまで歩き、表面上謝るフリをする。

「悪かったな」

「今のオレは最高に幸せだ!!」

今日はなんて良い日なんだか!?

……聞いちゃいねえ。

優子のところへ駆けて戻る。

「ちゃんと謝った?」

「一応。さ、次のところに行こうぜ」

そこへ大きなリボンをつけたキッズの着ぐるみがヒョコヒョコと近寄ってきた。

「セレの兄さんたち、フリーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ?」

フリーのオススメはねつ、向こうに見えるお化け屋敷だよつ

着ぐるみの手が噴水を挟んだ向こう側に見える建物を指し示す。

廃病院を改造したらじゅうぶんじゅうぶんに雰囲気を醸し出してくる。

あー、怖えー。

「雰囲気がやばいな」

「そうね。でも面白そうだし行ってみましょ」

「マジか！？」

「わう言えば空は昔からお化けとか苦手だったつけ？まだ怖いのか
しら？」

優子は挑発するような笑みを俺に向ける。

「べ、別に怖くねえよ。

む、行くぞ」

「声が震えちゃってるわよ？」

「や、そんなワケねえじゃねえかつ。気のせいだよ

「ふふっ、強がっちゃって。

たまにある、空のわうこいつとい好きよ？」

なんと書ひとでしょひー？

今の一言は、彼女に言われたい言葉ランキンギ（ぶく俺）ベスト5
ですよ！不意打ちつて言うのがポイント高いね。

そんなことを考えていくと、ついに田の前に俺を喰らわんとするモンスター（お化け屋敷）が口（入り口）を開けて構えている。

大丈夫だ。なんとかなる。逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃ
だめだ！！！

ATフィールド展開！！

そらはじぶんのからにとじこもった

やべえ、テン pari 具合がハンパない。

「優子、背中はあずけたつ！..！」

「何言つてゐるのよ。せ、入るわよ」

優子に腕をガツチリと組まれ、お化け屋敷に入っていく。

關西・俺といふ子と暴風の子び（漫畫也）

少々グロ増強。

閑話・俺と優子と暴風の叫び

お化け屋敷にて

薄暗く肌寒い感じが恐怖を一層引き立てる。さらに足音が大きく響くこの廊下も恐怖を倍増させる。

しつしつ。俺のライフはもう〇〇よ。

「空。これはさすがに怖いかも」

「俺が守つてやるから。だ、大丈夫だ」

「声が震えて全然格好つかないわよ」

「だって廃病院だぞ？ マジで病院はねえよ。普通の病院ですら怖えのに。」

足元の非常灯の色をもつと明るくして欲しいです！！」

「そんなことしたらお化け屋敷じゃなくなっちゃうじゃない！？」

「恐怖と安心を天秤に掛けたら安心の方が重くなるじゃねえか？」

「でもそれじゃあ、面白くなくなっちゃうでしょ？」

「面白さより恐怖の方が強えからなんとも言えねえ」

「幽霊とか出そきやあああああつ！……！？」

急に優子が叫び出し組んでいる腕に力が入る。力の入り方が尋常じやなく俺も悲鳴をあげる。

「腕があああつ！……？ ねじ切れるよつて痛いいいいつ！……！」

俺の新しい左腕は『機械鎧』かな？ 鋼の召喚術師、はじまるよ！

オートメイル

「うう……」

痛みのあまり意識を失っていたようだ。
床の冷たさが心地よい。

「起きた？」

頭上から声がかかり俺は立ちあがつて答える。

「ああ
「腕、大丈夫？」
「ちょっと感覚ねえかも
「ごめんね？びっくりしちゃつて」
「そこまで酷くねえから気にすんな」

そう言つて優子の頭を撫でる。
髪の毛サラサラだ。

「そういうや何に驚いてたんだ？」
「ひんやりしたモノがほっぺにペタッ、つて
「それコンニヤクなんじやねえの？」
「な、何にしても怖かつたんだからつーーー！」

優子はプイッ、と横に向く。

なにしても可愛いな。

なんか熱いものがこみ上げてきた、胸じゃなくて鼻に。

「え、進むぞ」

優子の手を握り、再び歩き始める。

『ザツザツ……ジー……ジー……』

「エ。なんか聞こえない?」

優子が空いている左手で俺の服をキュッ、と握つてくれる。

「ん? そつか?」
『ザツザツ……ひめのザツ……がこの……な……
が……かい……』

「……不気味だな、コレ

そばに置いてあるラジオから声が聞こえてくる。
やべえ、マジ怖え。俺、死ぬる。

『姫路の胸の方が好みだな
おつかいでーーー!』

「え? 何コレ? しかも俺の声。
……

『エ。どういふこと?』

優子が修羅になつてゐる。

「俺、こんな」と言つたことねえし。そもそも姫路のことなんとも思つてねえから

「じゃあ、それを今証明して

「何すりやいいんだ?」

問うと優子は自分の唇を指差す。

キスしろってことか?

俺は優子に軽くキスをする。

「気持ちがこもっていないからもう一回……」

優子に怒られた。どうしろと?

俺はもう一度キスをする。

今度は舌を優子の口内に侵入させ絡ませた。優子の口内を俺の舌が犯しまわり優子に反撃の隙を「ええない。

しばらくして顔を離すと長くしきたせいか優子が息切れをおこす。

「はあ……はあ……空。んつ……激しい……」

「あー……悪い」

「んつ、ふう……空の気持ちが、……んつ……本物だって、わかつたから、いいわよ……」

吐息工口し……

脳内会議

少佐：『処理落ちしかけているぞ！？何かいい方法はないか！？』

トム：『手つ取り早くMiss・木下を排除すればいいと思うであります！！』

少佐：『よし！その作戦でいこう！！』

サム：『少佐つ！』

少佐：『なんだ、サム！！口応えするか！！』

サム：『隊長！！自分はお持ち帰りがvery niceでーす！！

あとでゆっくりたっぷりぬつとり味わいマース！！』

少佐：『サム！お前は時々、急に頭がよくなるな！！

許可する！！

今は息を潜めて待て！』

トム：『イエッサー！！』

サム：『イエッサー！！』

脳内会議終了

「さ、進みましょ」

「ん？ああ」

その後は何か（怖すぎて後ろを振り向けなかつた）に追いかかれたり、突然高笑いが聞こえてきたとトラウマが……。だが、怖いことばかりではなく嬉しいこともあつた。途中驚いた優子に抱きつかれ柔らかいものを感じられたり、またまた驚いた優子に押し倒されムフフな状態になりかけたり。役得。役得。

「やつと出口か……」

「ホント怖かつたわ」

「お二人ともお疲れサマでシタ。

「デハ、豪華なランチを用意してありマスので、」
ちくちくして下さイ

係員の男に案内され、洒落たレストランへ案内される。

「口チララランチをお楽しみ下サイ」

「いらっしゃいませ。宇童 空様、木下 優子様。

それでは、いらっしゃいませ」

ボーアイが現れ、席に案内される。席につくとグラスにノンアルコールのシャンパンを注いでくる。

「お客様は未成年との事なので、」
ちからをい用意させて頂きまし

た

「ども」

「それでまじめむつとお過いこべださこ」

ボーアイがお辞儀をして離れていく。

「豪華だな」

「そうね。すいべ美味しそう」

「んじゃ食べるか

そつまつと食べ始めた。

そしてデザートを食べ終え席を立とつとしたその時、会場に大きくアナウンスの声が響き渡った。

『皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます!』

『なんと、本日ですが、この会場に結婚を前提としたお付き合いをしている高校生のカップルがいらっしゃるのです!』

ほー、『結婚を前提としたお付き合いをしている高校生のカップル』か。

高校生って俺たちくらいしか見当たんねえんだが?

『そこで、当如月グループとしてはそんなお2人を応援する為の催しを企画させて頂きました!

題して【如月ハイランドウェディング体験】〜!』

『これは弊社が提供する最高級のウェディングプランを体験して頂けるというものです!

もちろん、ご本人様の希望によつてはそのまま入籍と言つことでも問題ありません!』

『それでは、宇童 空サン&優子サン!準備があるノーテこちらに来て下さい』

「空ーー…やつてみましょーーー！」

そつ言われ、優子に引っ張られていく。

『皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎え下さい。』

園内全てに響き渡るのではないかと思える程の拍手が聞こえてきた。

「宇童 空サン、お願ひしまス」

「了解、つと」

トントン、と小さな階段を昇る。そのままステージに上ると、スポットライトの明かりに一瞬眩めまい量がした。

会場には数え切れないスポットライトにライブステージのような観客席、おまけにスマートの設備はあるかバルーンや花火まで用意してあるように見える。

『 続いて新婦の登場です』

BGMの音量が上がり、会場の電気が全て消え、スマートが足元に立ち込む。

『本イベントの主役、木下 優子さんです！』

アナウンスと同時に幾筋ものスポットライトが壇上的一点のみを照らし出す。暗軒から一転して輝き出す壇上で、思わず目を瞑つてしまふ。

まう。

そして、再び口を開けた時に飛び込んできた純白のドレスを纏った優子の姿に俺は一瞬言葉を失った。

ドレスは皺一つ浮かべることなく着こなされ、スカートの裾は床に擦らない限界の長さに設定されているようだ。

『…………綺麗』

静まり返った会場から溜息と共に漏れ出た、誰のものともわからぬい言詞。

優子がステージの中央まで歩いてくる。

「優子、だよな…………？」

「…………うん」

思わず確認してしまう俺。

「…………どう? 私、お嫁さんに見えるかしら?」

「ああ、大丈夫だ。すげえ似合つてる」

「空…………」

『ど、どうしたのでしょうか?』

花嫁が泣いているように見えますが…………?』

仕事を思い出したかのようにアナウンスが入り、優子の肩が微かに震えていたことに気づく。

「お、おこ。ビーッした……？」

「ずっと、夢だったから……」

涙混じりのかすれた声。

「夢？」

「……うん。空と2人で」「いやつて結婚式を挙げる」と……。私が空のお嫁さんになると……」

『どうやら嬢しきのようですね。花嫁は相当一途な方のようですね。それで、花婿はこの西湖にいる心えのじょつか?』

『どう応える』?みんなもん決まってんだろ。

「優子。俺も

「

『あーあ、つまんなーーーマジつまんない』のイベントおー。人のノロケなんてビーッでもいいからあ、早く演出とか見せてくれない?』

『だよなー。お前らのことなんてビーッでもいいっての。つてか、お嫁さんが夢です、つて。

オマエいくつだよ?なに?キャラ作り?ここはスタッフの脚本?バカみてえ。ぶっちゃけキモイんだよー。』

んだけど、テメハらー!

『ヤーのクソ共今なんつたあーー?』

俺は声のした方に視線を向け、声を張り上げ叫ぶ。

『誰がクソだと、コルア！』

『さやーつ。』

リコータ、かつじこーつ！』

「もつ一度言うわウンコクズ共！

今なんつった！」

『キメエ、つったんだよー！

なんか文句あつかー？』

『そうそう、マジキモイんだけど。あのオンナ、アタマおかしいん
じゃない？』

俺がクソ共と言ふ合ひでいい、そんな短い時間の間に

『は、花嫁さん？花嫁さんはどちらに行かれたのですかっ？』

アナウンスの声を聞き、俺は優子のいたところに目を向けると、壇上にブーケとヴェールを残して姿を消していた。

一応、ヴェールは拾つてズボンのポケットの中に折り畳んで入れておぐ。

「う、宇童さん！木下さんと一緒に捜して下せー！」

慌てたスタッフが俺に向ひ。だが

「悪いけどそれよりもやんねえといけねえことができた
「え？ちよ、ちよっと、宇童さん……！」

上着を脱ぎ捨て、スタッフに背を向けてクソ共のところへ顔を出す。

「おー、ウンコクズ共。覚悟はできんだろおな？」

『ああ？さつきのオンナのオトコか？
俺とやんのかテメエ？ぶつ殺すぞ！』

『俺とやんのかテメエ？ぶつ殺すぞ！』

クソ猿 が俺の襟を掴んでくる。

『リュータ、そんな頭悪そうなやつ殺つちやになよーー。』

「クソ猿 、強い言葉を使つな。弱く見えるぞ。

それと、クソ女猿！今からお前のオトコが俺に蹂躪されるとこを
しつかり目に焼き付けとけ！』

『空を駆る者』^{スター・ライダー}を怒らせるどどつなるか、しつかり胸に刻み込んで
おけーー！』

そう言つて俺は襟を掴んでいるクソ猿 の手を捻り上げ、痛みに怯
んだところに鳩尾を蹴りぬくと、クソ猿 は胃の中のものを撒き散
らし呻きながら床に沈む。

だがそれだけで俺の気が済むハズもなく力ずくで立たせ、フフフフ
しているところへ顔面に『勝利のガゼルパンチ（498kg）』。
上半身を仰け反らせ鼻血を出しながら後ろに倒れ込むが襟を持つて
再び立たせる。そして、すぐに頭を掴み床に叩きつける。
動かなくなつたクソ猿 の髪を掴み、顔を上げさせ言つ。

「なあ、知つてつか？耳つて引つ張つたらカンタンに千切れんらじ
いぜ？」

お前の耳は髪で隠れてて見えねえから有つても無くてもかわんねえ

「ああ、一つだ。やめ

あ?何た?て?

『アーリー・アーリー・アーリー』

『 も、 ち めでぐだ。 さーい。 』

二.....上.....第十九.....章

一
は？やめるわけねえだろ？」

そう言って左手でクソ猿の右耳の耳^{みみ}_{たぶ}朵を掴み、上に折り返すよう
に思いつきり引つ張ると右耳が千切れる。

クソ猿は耳のあつたところに手をあてて喚き叫ぶ。
耳からの血で床が紅く染まつていき、クソ女猿はすぐそばで腰を抜
かして泣いている。

「もう片方も同じようにしてやるよ。」

某ネコ型ロボットも耳を食われてああなつたんだ、お前も明日から『ドラえもん』って呼ばれるようになるぞ？人気者だな？」

「わがなに難い。」

『空を駆る者』は『魂を狩る者』へと姿を変え、テメエの魂を喰ら
スニークライダー ソウル・イーター

死神に見初められたヤツに日の光を拝むことなどできねえってことを教えてやるよ！

「さよなら人間。そしてこんにちはドラえもんっ！」

そつとつて残りの耳も強引に引きあわされる。
それにより喚き声が大きくなる。

……うるせえ。

「リッ

静かに喉を握り潰す。

『かひゅつー?』

「やつと静かになつたな。んじや次はその汚れたガラス玉だな。
綺麗に汚れを拭いてやるよ。かみやすり紙鑓で」

どこからともなく紙鑓かみやすりを取り出す。

頑固な汚れは根元から削り取らねえとな。

ザリッ

『———つっつ———』

「おい、暴れんなよ。汚れがどれねえだろ?
しゃあねえ、本当はしたくなかったが2度と動けねえ体にするか」

そつとつてのそつと立ち上るとクソ猿 からキッと睨まれる。

「おいおい、そう睨むなよ。

コレは俺のせいじゃねえ、全部お前自身のせいだぜ?

俺を恨むのはお門違いつてやつだ

そう言いながらクソ猿 の腰あたりに行き脚を振り上げ

「これから病院が友だちだ」

そして背骨に向かつて踵落とし。

バキイツ

『……………ツツツ……………』

「んじや汚れとつ再開だ」

ザリザリザリザリザリザリツ

削る間に何度も呻き声が聞こえたが全て無視。

「おー、さつさとまさ見違えるほど綺麗になつたぞ。綺麗な綺麗な紅色だ。

んじや、今日のところは「れぐら」でいいか。
また綺麗になりたかつたら俺のところに来ればいい。無料にしていてやる」

お前の命と交換でな、と付け足してやる。

俺はまだ馬鹿にしやがつたことを許してねえからな。
んじや優子探しに行くか。

でもその前にトイレにいかねえとな。手が汚れちまつたし洗わねえ
といけねえ。

服も元のに着替えねえと優子がびくつしちまつた。

「よつ。随分と待たせてくれたな」

「……」めん

如月ハイラングの中にあるグラントホテル前で待つことしばし。玄関から優子がトボトボと俯きがちに出てきた。

「んじや、帰るとするか」

「…………空」

「なんだ?」

「空は私の夢、笑わないの?」

「笑って欲しいのか?」

「そんなわけないじゃない……でも……」

「周りのことは気にすんな。

それに俺は絶対その夢を笑わない」

やつとて拾つてきたヴホールを優子の頭にかけてやる。

「……」れ、やつとくのヴホール……」

「俺は優子のことが好きなんだ?愛しているつも同じつやないくらいにな。

だからな、結婚なんてこつでもしてやるよ
「空、ありがと……」

そして夕田をバックヒロウづけをする。

「それじや、帰るわ」

そうして帰路につく。

その後家に帰ると、優子をゆっくりたっぷりぬつとりと味わった。

…………表現がキメエ！！

週明けの学校にて

「おい、明久」

「ん？ なに？」 「あの時会った後、一度もお前と会わなかつたんだが何してたんだ？」

「僕はね、雄一の方を手伝いに行つてたからね。他にも何人かパーク内にいたんだよ？」

「へえー、知らなかつた」

「明久」

「ん？ どうしたの雄一？」

「如月ハイランドでは随分と色々とやつてくれたな。そのお礼だ。今話題の恋愛映画のペアチケットだ。『気になる相手がいれば』一緒に行くといい」

坂本が強引に明久の手の中にチケットを握らせ、明久の席から離れる。

俺も離れど。

しばらくして明久の悲鳴が聞こえてきた。

今日も平和な1日だな。

闇話・俺と優子と暴風の呪び（後書き）

空が如月ハイランドの件で学校側からお咎めなしだったのは如月ハイランド側が大事にしたくなかったために秘密裏に処理した、ということ。

ヤンキーカップルに関しては口封じをして返した、ということ。

閑話・バカと俺とプール掃除（前書き）

少し変えました

閑話・バカと俺とプール掃除

ある週明けの教室

午前中の授業を終え、今は昼休み。俺が食堂で昼食を探つていると
明久が話しかけてきた。

最近はちゃんと昼食を探つているよう何よりだ。

「空。今週末にプール掃除しないといけないから手伝つて
「ん? 予定ないし別にいいぞ」

「理由は聞かないの?」

「おおかた鉄人に罰としてするよう言われたんだろう?

今回は何したんだ?」

「僕がいつも問題起きてるみたいに言わないでよ」

明久が少し怒った風に言つてるが事実だしな。

「問題起きてなかつたら今『こう『観察処分者』になんてなつてな
かつただろうが」

「うう……」

痛いところを衝かれ明久は顔をしかめる。

「で、何したんだ?」

「夜に学校に忍びこんでプールに入ろうとしたんだ」

「は? なんでだ?」

「ガス止められてて家のシャワー、今水しかでないから」

「食事代だけじゃなくてガス代の分も余裕つくれよ?」

それとプールも水だろ?」

「あ、盲点だつた……」

悔しそうに舌打ちしているが、お前はただのバカだ。

「で、何曜日にするんだ?」

「土曜日の朝10時に校門前で待ち合わせだから。水着とタオル忘れないでね」

「了解」

土曜日

文月学園校門前

「おはよー。絶好のプール日和だね」

「あー、おはよう明久。プール日和じゃなくて掃除日和だがな」

明久に挨拶をし、周りを見ると秀吉、姫路、島田姉妹、坂本夫婦、そして鬼気迫る表情でカメラの手入れをしている康太がいた。

「明久。こいつら全員で掃除すんのか?」

明らかに康太は掃除する感じじゃねえんだが?」

「『掃除をするのならプールを自由に使ってもいい』って鉄人に言われたから、掃除をする前にみんなで遊ぶつもりだよ」

「な!? そういう大事なことは先に言えよ!—!

優子誘えねえじゃねえか!—!」

俺は明久の胸座を掴み高速で前後に揺する。

「わわわっー?」

「『わわわっー?』じゃねえぞ、このアホンダ! ハーーー!」

『雄一ーーームツ シリーーーーー空がキレヒナリヒジヤから一緒に上め

てくれーー!』

『分かつた』

『……………』了解

少し離れたところにそんな声が聞こえた。

「やつと、落ち着いたかのう?」

「ああ、悪い。少し取り乱した」

下から坂本、明久、康太の順で重なつており、俺はその上に腰を下ろしている。

女子はすでに着替えに行っているようだ。

……優子の水着姿見たかったな。

「それで『少し』じゃとー?なら、本気でキレヒナリヒジヤ

! ! !

「たぶん!」一歩、更地になるな

「じょ、冗談じやよな?」

「ああ、冗談だ。」

本当は人一人跡形もなく消滅するだけだ

そう、それ『だけ』だ。

「それもそれで怖いんじゃが…………」

「今はそんなことより着替えに行こうぜ？」

「うむ。 そうじやの」

気絶している3人を残し更衣室に向かう。

20分後

「やつぱり女子はまだ着替え終わってねえな」

「そうみたいじやの」

俺と秀吉はプールの入り口の方を見て待っている。 気絶した3人は目が覚めていないのかまだ来ていない。

ここに秀吉の水着について説明しよう。 上は肌に張り付くようなショートタンクトップ、下は飾り気のない普通のパンツの上にショートパンツのようなズボンを一番上のボタンを外した状態で重ねている。 ぶつかっけ女物だ。

「……秀吉。 その水着つてツツコんでもいいのか？」
「ワシのどこにツツコムところがあるんじや？」

「『ヒー』つて全部」

「空よ。それは何が何でも酷いぞい」

「秀吉。お前の着てる水着は女物だからな？」

「な、何を馬鹿なことを言っておるのじゃ！？ワシは『トランクスタイプの水着が欲しい』と店員に言つたのじゃぞ！？」

「確かにトランクスタイルだが女物だ。

女子が来てから聞いてみろ」

「むう。わかつたぞい」

そりて10分後

女子陣が着替えてやつて來た。

霧島は白のビキニに水着用ミニスカート、姫路は薄ピンクのビキニにゅつたりとしたパレオ、島田はスポーツタイプのセパレート、妹の方はスクール水着、を着ている。

「……お待たせ」

「き、木下！アンタ、なんて格好してるのよ！？」

「木下君！なんで女の子の水着を着てるんですか！？」

「わつ。お姉ちゃん、とっても可愛いですっ」

三者三様の答え。

「な？お前のは女物だ」

「な、なんじやと！？」

「男物に普通、上があるワケねえだろ？そのときこ付よ」

そう言つてやると秀吉は床に手をつけショックで頃垂れる。うなだ

「……ねえ、雄一は？」

「坂本たちはまだ気絶してるか今着替えてるかのどっちかだな。気になるんなら更衣室に行ってみたらどうだ？」

「……やつする」

「冗談で言つてみたが本当にするよつだ。積極的だな。

「お前らはどうすんだ？遊ぶのか、更衣室行くのか」

「葉月はバカなお兄ちゃん呼びに行くですっ」

やつと要衣室へ霧島に続いていく。

「は、葉月！？」

「し、しようがないわね！－わ、私も行かなくちゃ！－」

最初から行く気満々だらうが。

「姫路はどうすんだ？」

「わ、私はいいです！」

「そうなのか？明久がいるんだぞ？」

「そ、その、こういうのは大人になってからの方がいいと思います

！－！」

「これは弄つたら面白そうだな。

「『『』』うこうの』ってどうこうの？」

「えー？そ、それは……その凸と凹がくつくつよいうな」とを……」

姫路が頬を赤く染め、もじもじしながら言つ。

「レ、小動物みたいで可愛いな！－てか、姫路つて何気にエロい。

更衣室つて聞いてそこまで発展するとは妄想力豊かだ。

「それなら俺と優子はもうしてんだぞ？」

「え？……ええええええええええええ！」

「驚き過ぎだぞ」

「あつ、はい。すみません……」

姫路の声が尻すぼみになる。

「ま、姫路の自由だし行つても行かなくともいいぞ」「い、行つてきます！！！」

そう言つて敬礼をすると更衣室へ駆け出す。

秀吉はまだ項垂うなだれたままで今の話は聞こえてないようだ。俺はみんなが集まるまでプールで漂つてることにした。

余談だが姫路が駆けているときに胸がブルンブルンしていた。眼福。
眼福。

「あれ？宇童君そこで何してるの？」

漂つているとプールサイドから声がかかり、そひりを向く。

「あ？工藤じやねえか。どうした？」

そこには坂本たちではなく、Aクラスの工藤が水着姿でいた。黒に白のドットの入ったビキニに黒い水着用ミニスカートを着ている。

「先に質問したから答えてくれると嬉しいかも」

「あー、悪い。今日はプール掃除しに来たんだよ」

「なるほどね。」

じゃあ次はボクが答えるね。ボクはね、部活で泳ぎに来たんだけど休みだつたみたいで。ここまで来ただし、ついでに泳いでから帰ろうかなって感じだよ。」

「水泳部なら競泳水着じゃねえのか?」

「たまにはこういう水着も着てみたいの。」

「ねえ、ボクの水着姿似合ってる?」 そう言つてその場でクルリ、と一回転する。

「ああ、似合つてんぞ」

「可愛い?」

「可愛いな」

「ホント!?」

「ああ」

「ふふつ、嬉しいな」

上機嫌になつて水の中に入り、俺の方へ近づいてくる工藤。

「宇童君。君はボクのことどう思つてるのかな?」

「『どう』とは?」

「好きとか嫌いとか」

「んー……好きだな」

「実はね、ボクも宇童君のこと好きなんだ」

「おー、そつか。さんきゅ」

「ボクはね、『本気』で宇童君のことが好きなの」

さつきまでの陽気な雰囲気が嘘のよう消え去り、眞面目な表情になる。

「……悪いな、俺にはもう彼女がいるから」

「優子でしょ？ 知ってるよ。」

ボクはそれを知った上で言つてゐる」

「……諦められねえのか？」

「ボクには宇童君しか考えられない」――」

「……なんで俺じゃないと駄目なんだ？ 俺と工藤は何か接点があつたつてわけじやねえだろ？」

「『接点』はちやんとあるよ！――」

2年最初の試合戦争の時とか『清涼祭』の時とか、それにボクは優子の友だちだからそういうのも全部、ボクからしたらみんな『接点』だよ！――」

工藤の眼元には涙が溜まつてゐる。

無茶苦茶な理論だが、そういうのは嫌いじゃねえ。

「……なんで俺を好きになつたんだ？」

「そんなのわかんないよ！――」

気づいたら好きだったんだよ！――

いつの間にか宇童君のこと工藤で追つひになつてて、いつか優子みたいに宇童君の隣でいれる、宇童君にとって特別な存在になりつて思つてたんだよ！――」

「その気持ちはすげえありがたい。けどな

「

その気持ちは受け取れない、と言つたといつて工藤に声を被せられる。

「『子童君』くらいの人ならボクと優子を同時に愛せるやつな男になつてよーー！」

ボクのわがままだつてわかつてゐるけどそんなんじや絶対諦められないと

いーーー！」

「…………

『ボクと優子を同時に愛せるやつな男になつてよーー』か……難しここと書つてくれんな。じつじようかね？

「…………ね願い、ボクのお願い聞いて…………？」

感情が高まりついに泣き出す工藤。

なんか俺が悪者みてえだな。実際悪かったかもしんねえけども。

「…………わかつた」

「…………え？」

「付き合おう、工藤、いや優子。

愛子が俺に書つたように二人同時に愛してやるよ」

そう書つてニーチ、と笑う。

さて、優子になんて言おうか？なんか無性に怖くなつてきた。
でも、男つてのはみんな女の涙に弱えから仕方ねえよな？

「ホ、ホント！？嘘じゃないよねーー？」

「ああ、本当だ」

「あつがと、空君ーーー！」

やつぱり俺に抱きついてくる。

いつの間にか呼び名が『空君』に変わってるな。にしても柔らかい
な。

何が柔らかいか、って？それを聞くのは野暮つてもんだぜ？
だが敢えて言おひ、愛子の オツである、と。

「空君。今えっちら」と考へてるでしょ？」

「顔にでてたか？」

「ううん」

やつらつて顔を横に振る。

「でもね、空君のこと好きだから何考へてるのか大体わかるの」

世に語り地文読みつて以心伝心みたいなことだつたのか？

「嬉しこ」と言つてくれるな

愛子の頭を撫でる。略して愛撫。

「その略し方ではないと思つ

「ははつ、悪い。

そうだ、プールの水で涙の跡、流しつけ

俺は手に水をつけ田元を拭つてやる。そこへ坂本たちがやつて来て

「金髪のお兄ちゃんが知らないお姉ちゃんどうもーしてゐます」

「なんだとー？」

「空。死ねー！」

愛子の頬に手を当つてたから間違われたのか？

島田妹が爆弾を投下し、坂本と明久が俺に飛びかかってくるが、俺は入り口から離れたところにいるため距離的に不可能。回つてくれればいいのにな。やっぱバカだな。

普通にプールに落ち、そこから俺のところまで「*じい*」速さで泳いで来る。

だが、俺のところには絶対にたどり着けない。なぜなら

「愛子。息吸つて俺に掘まつてろよ。」

一度深く息を吸い込み、水中に潜る。そして、坂本と明久に向き直る。

風の『面』を相手に叩きつけるように……それを水で。

手で^{じゅ}えた水の『面』を押し出す。

すると、俺の周りの水が渦巻き、そこから複数の渦がプール内を縦横無尽に駆け巡る。もちろん坂本と明久を巻き込んで。

その間、俺はしっかりと愛子を抱いて（性的な意味ではない）おく。流されたら大変だからな。

そしてしばらく渦が治まり水中から顔を出すと、坂本と明久がプ力浮かんでいた。それを確認し終え愛子の方を見る。

「愛子。大じぶつ！？」

「空君。どうしきやつ！？」

とある理由で俺は愛子を抱き寄せる。

「おい、愛子。水着どうした?」

「へ? 水着? きやあああああ! ?」

愛子は自分の格好に気づき、耳まで真っ赤にして自分の体を抱きしめて隠す。

突然の大声は頭がクニクニにする

「宇童！アンタ、何したのー！」

備なぐもやつねふ

ね
?

「わ、わかつたわ。すぐ見つけて来るからー！」

『古今圖書集成』卷之二十一

『血の噴水なんて葉月初めて見たですっ』

結麗（ホツ）

死の海の旅

くつ！？康太に見られちまつた。後で殴つて記憶消しておかねえと
！！

「子童……見つけたわよ……」

「そこれか……」

「優子、着てくれ」

やつぱり優子に着てもいい。

「ねえ、空袖。紐結んでくれない?」

「ん? ああ、わかった」

優子がそう言って背を向けるので紐を結んでやる。
肌キレイだ。

「できただぞ」

「あつがとつ。

あ、ねえ。やつぱりボクの胸見た?」

「あー……見た……」

田を泳がせて答える俺。

「やつぱり君えつちだよね?」

優子とやつぱりもじでトしゃつたのかな?」

「『やつぱり』つてのが気になるが……優子とやつぱりしたな

「あちやー、優子に先に進まれちゃつてるね」

「あんまり気にしなくていいだろ?」

「そつ…

でも先に進まれちゃつてるから、ボクは優子に負けてやつぱり進つち
やうんだ。

だからね、ボクも先に進みたいんだ?」

あれ? これ、『ヤ・ら・な・い・か?』ってこいつお誘い?

「だからひやつたから同じになるワケじゃねえんだぞ？」

「さ、さすがにそんなこと考えてないよ……」

ただ……キスして欲しいなって

「……わかった」

そう言つと俺を見上げ、目を閉じる。そして俺は愛子にキスをする。やはりマシコマロ唇か！？この感触クセになるんだが？

「空君。もう一度お願ひしたいな」

愛子はそう言つと俺の顔を自分の方へ引き寄せキスをする。キスをしていると俺の口内に愛子の舌が侵入してくるがそれを押し返し、逆に愛子の中を犯す。愛子は舌遣いがうまくよく俺の舌に絡みついてくる。

唾液が俺と愛子の中を行き来し、キスし終わると銀の糸が引いていた。

「はあ……はあ……空君つて激しいんだね？」

「苦しかったか？悪い」

「はあ……んつ、……大丈夫だよ。

ボクね、今、すごくベドキドキしてるんだ」

そう言つて愛子は俺の手をとり自分の胸にそれをつける。

やべえ！？マジやべえ！？

キス +『こんなこと』したら soy sono がお目覚めになつまつ

！？

心を落ち着ける、悪即ぜ　じゃなかつた……色即是空空即是色天

上天下唯我独尊……

ふう、落ち着いた。

「ああ、すげえバクバクしてんな
「でしょ？」

それには、今日はファーストキスだったんだからしつかり味わつ
てくれた？」

「ああ、おいしくいただいた」

……俺、何言つてんだ？変態じやねえか。

「ふふつ、面白い答え方だね。

ボク、空君とキスしちゃったんだ。えへへへ　」

上機嫌な愛子。

そういうえば集中していく気がつかなかつたが、周りがなんだか慌た
だしい。俺らのことには気づいてなさそうだ。
何が原因かと思い周りを見渡すと、さっきまで普カブカ浮いていた
2人とプールサイドにいた者たちが必死に血を流しすぎた康太に延
命措置を施していた。

ほどなくして手配していた救急隊員が駆けつけ事なきを得た。

その後はプールだけでなくプールサイドも掃除して帰つた。秀吉は
まだショックから立ち直れないようで放置している。プール掃除の
時に邪魔だったのは言つまでもない。

「空。 来たわよ。
話つて何かしりつ？」

玄関のドアが開けられ優子が入ってくる。
愛子のこと話をするために呼んだ。

「リビングで話すぞ」
「わかったわ」

そしてリビングへ向かう。

「あれ？ 愛子、 なんで空の家にいるの？」

リビングに入り発した第一声がコロ。

「優子、 ボクね。 空君と付き合つてになつたの
「え？ 空！ どうして！ とーー」
「そのままの意味だ」
「え？ どうしてー？ 私の何が不満なのーー私、 空と別れた
くないよお うひつ 」

優子が目に涙を浮かべ、 そのまま泣き出す。

そんな優子を抱き寄せた。

「優子。俺も優子と別れる気はねえよ」

「え？ でも……」「…

「今日、告られた時に『宇童君くらいの人ならボクと優子を同時に愛せるような男になつてよ！』って言われてな。

そういう選択もありかな、つて思つてな」「じ、じゃあ、私、空と別れなくていいの？」「…

「ああ。

だが優子が許可してくれるかが問題でな

「……なら前と同じ、いやそれ以上に愛してくれる？」「…

「ああ

「じゃあ、許してあげる」

そつと優子の方を向き

「愛子。本妻は私だからね！」「…

「いいよ。でも、ボクに盗られなによつ氣をつけてね？」「…

愛子が意地悪く返し、俺は呆れたよつと叫ぶ。

「ケンカ両成敗だからな。ケンカするなよ？」「…

「ええ！」「…

「うん！」「…

2人の元気な声がリビングに響き渡る。

バカと俺との無しの手紙（前書き）

3巻開始です。

バカと俺と名無しの手紙

新学期になり2ヶ月が経過し、日没の時刻にはつきりとした変化を感じ始める。

そんな中、俺は優子と愛子の3人で登校している。

今までは俺・優子・秀吉の3人で登校していたがプール掃除の日に、愛子の家が俺や優子の家から^{さほど}程離れていないことを知り、最近は愛子を含めた4人で登校している。

秀吉がいなのは演劇部の朝練らしい。
部活熱心で何よりだ。

優子と愛子の間柄も良好で、むしろ仲の良い好敵手といった感じだ。お互いを高めあっている。

何を高めあっているか、つて？

それはだな、どっちが俺をたのこふつー？

視認できないほど速い拳が俺の鳩尾に叩き込まれる。それも重みのある2発。

「空。あまり変なこと考えちゃダメよ?」

「そうだよ。

それに女の子の秘密をバラそうとするのはいけないよ?」

俺と腕を組んでいる2人が何事もなかつたかのようにそつ告げる。

「…………ああ、悪い」

俺は痛みに悶えていてすぐに言葉が出ない。

畠の中の物が出ちまいました。

「気分悪そうだけど大丈夫?」

少々顔色の悪くなつた俺を見て愛子が心配そうに尋ねてくるが、その原因是愛子たちだつてのを忘れてねえか?

「大丈夫じゃねえ……。すげえらい」

「氣い抜いたら吐きそうだ。」

「男の子なんだからシャキッとしなさいよ」

「無茶言つな。コレはマジでキツい。」

「……知らないようなら言つとくが鳩尾は人間の急所だからな?」

「そうなの?なら悪かつたわね」

「ボクもごめんね?」

少しは謝るのを渋ると思ったが意外と素直に謝る2人。

何故か、最近2人とも凶暴になつちましたんだよ。理由が思いつかねえ。

「理由はアレの時にいつも攻められてるからその反動よ」

『アレ』ついでカタカナなら4文字、アルファベットなら3文字のやつか?』

「うん、ソレで合ってるよ。

アレで攻められるのは嫌じゃないけど自分も攻めてみたいんだよ」

「それでコレか……。

流石に急所殴るのは止めて欲しいな

「考えておくわ」

「……頼むぞ」

「それにしてもボクは付き合って始めてからまだ1ヶ月用きてないのに空君とヤッチャヤッチャるし、空君つて手を出すの早いよね?」

「俺も自分でそう思つたけど愛子だつて『や・ら・な・い・か?』的

なオーラ振り撒いてたじやねえか

「それでもボクは悪くない」

キッパリと言いつ切る愛子。

手を出すのが早いのは認めるが『全部俺がした』みたいなことは認めねえ。てか認めたくなえ。

康太とは違ったムツツリーーーの称号がつけられるかもしれないねえ。

『第2のムツツリーーー(→e' . 実技)光臨!』みたいな感じで新聞部発行の新聞に載るかもしれない……。

「別にいいじゃない。有名になれるわよ?」

「よくねえよ。女子からの評判が地に落ちる」

「空君、その言い方たらしに聞こえる」

「……もつたらしでもなんでもいい」

開き直る(?)俺。

「あ、校門見えてきたよ」

「……お、本当だ。」

じゃあそろそろ襲撃されそうだな」

秀吉・優子と一緒に登校していた1年の冬頃から量産型GOKI共に襲撃されているが、愛子とも登校するようになつてから更に激しさが増している。そのため登校時はA・Tを履いて常に臨戦態勢。^{エア・トレック}昔はA・Tがなかつたため少々大変だった。

「いつも大変ね？」

「向こうが全然懲りないからな。

先に学校行つてろよ？」

「ええ」

「うん、わかつた」

「諸君。ここはどこだ？」

『最期の審判を下す法廷だ!』

「異端者には?」

『死の鉄槌を!』

「男とは?」

『愛を捨て、哀に生きるもの!』

「宜しい。これより SSSS級異端者宇童 空の処刑を執行する!」

「！」

優子と愛子が学校に駆けて行くとどこからともなく量産型GOKI Sが湧いてくる。

リアルGOKIを連想させるような素早い動きが気持ち悪い。

それと、いつの間にかA級からSSS級にはね上がっている。俺が何したってんだよ。まったく……。

「ヒヒヒヒ終わらせるべ」

trick · Infernal Bloody Baron

俺を球状に囲むよつ『牙』を無数に放ち留める。

そして中を『炎』で素早く熱すると空氣が膨張し、球が弾け、『牙』と熱の両方が量産型GOKI_sを襲撃。本来なら相手を切り裂き、傷を炎する技だが、今回はそのままではせず、氣絶する程度にセーブしている。

死人が出たりしたら困るからな。

俺は量産型GOKI_sが氣絶したのを確認すると、復活しないうちには校門をくぐり学校に入つていた。

Fクラス教室

教室に入ると入り口付近で秀吉と、荷物を持ったままの明久が話していた。

「明久、秀吉、おはよ。」

「おはよひじやせの」

「おはよ」

「明久、今日は早いじゃねえか」

「明日からの強化合宿が楽しみでや。早く起きあけやつたんだ」

「あ?強化合宿つて明日からなのか?」

「うん、そうだよ。知らなかつたの?」

マジか……。

「……全然用意してねえ」

「昨日、『わいすべ合宿じゅのひ』と話しながら学校に来たじゃう
うに」

「アレは演劇部の」とかと思つたんだよ」

「姉上も工藤も普通に話しておつたじゃ わいすべへ

……あ、やうじえばそつだな。何での時氣付かなかつたんだ……。

「帰つたら急いで用意しねえと……」

「がんばるのじやぞ。

それにして学力強化が田舎とは言え、眞で泊まりがけじや。胸が
躍るの」

「やだなあ。胸が躍るつゝ言つぼぢ大きくないくせに」

「いや、ワシの胸は大きくなつては困るのじやが……」

しかめつ面をする秀吉。

「明久。秀吉が困つてんだる。あんま弄つてやるな。

それと、荷物をロッカーに入れてから話をうぜりいつまでも持つて
んのはしんどいし」

「あ、うん。そうするよ」

そう言つてロッカーに荷物を入れ、秀吉のもとへ戻つとしたとき
に、明久の方からなにかに驚いている雰囲気が伝わる。

「どうかしたか?」

「What's up'sora? Everything go
es so well . . .」

「秀吉！明久が変になつたから直すの手伝ってくれ！」

「や、僕は全然変じやないよ！？」

「お前が英語を口を衝いて出せるワケねえだろ？秀吉も書つてやつてくれ」

寄つてきた秀吉に話を振る。

「わうじゃな。明久が英語を話すこと自体が有り得ぬ」とじやから
の「う」

「その言い方はあんまりだよ！？」

「現実を見る。

で、どうしたんだ？」

「と、とくに大したことじやないから気にしなくていいよ。
僕はちょっとトイレに行つてくるから」

そのまま教室を飛び出していく。

「マジドウしたんだ」

「なんじやつたのかのう」

明久が出ていってしばらくした後、明久の『最悪じやあ——つ
！』と叫びが聞こえてきた。

「明久。 一体何があつたんじや？」

教室に戻つてきて机に突つ伏している明久を見て秀吉が声をかける。

「べ、別になんでもないよ」

「ウソばっかり。さつき妙な叫び声が聞こえたし、何か隠してるでしょ？」

「あ、美波。おはよ」

質問を無視して挨拶をする明久。

「おはようアキ。

それで、何を隠しているのかしら？」

まさか、ラブレターを貰つたなんて言わないわよね？」

チヤキチヤキチヤキ

島田のある一言を聞きクラスの奴らがカッターを構える。

「美波、言葉に気をつけるんだ。ラブレターという単語に反応して皆が僕に向かつてカッターを構えている」

「皆、落ち着いて。アキがラブレターなんて貰えるわけないでしょう？隠しているのは別の物に決まっているわ」

「ふふん！ そのまさかさ！ 今朝僕の靴箱に」

「明久、死にたく無かつたら言動に気をつけた方がいいぞ？」

明久が言い切る前に忠告する。

「 齧迫状が入つていたんだ」

島田がキレそうだ。
事故つてんぞ？

「へえ、齧迫状なんだ。面白い『冗談ね。
それで本当はなんなの？』
「だから齧迫状なんだつて……！」

明久も意地になつたのか齧迫状だと言い張る。

「齧迫状なんつくるワん……？」

スウサッ

ふと、明久のズボンのポケットから封筒らしきものが顔を覗かせて
いるのを見つけ、俺はそれを明久に氣づかれないように入る。

「空。その封筒はなんなのじや？」
「たぶん、『レガ叫びの源』
「『源』と書ひまほじ元氣にはならんと思つのじやが？」

「やうは氣にすんな」

そう言つて封筒から紙を抜き出す。

「何が書いてんのかね」
「ドキドキするだぞ」

そして折り畳まれた紙を開くと、元の

『あなたの秘密を握ります』

『最悪だ（じや）ああ――ひ――』

俺と秀吉の叫び声が教室に響く。

「空、秀吉。急に泣いたのさへ、

「五月蠅いわよ。」

俺は脅迫状をサツ、と隠す。

「あ、悪い」

「すまんのつ。何でもないから続けてくれて構わぬぞい。」

まさか本当に脅迫状じゃとはのつ（ボソッ）
「続きを見るぞ（ボソッ）」

脅迫状にはまだ続きがあった。

『あなたの傍にいる異性にこれ以上近づかない』と

『あなたがこのままの状況でいることを公表します』

ふむふむ。島田と姫路のことだな。

『この忠告を聞き入れない場合、回封されている写真を公表します』
ん？ 写真？

ちょうど写真が入るようなサイズの封筒が同封されてくる。その中には3枚の写真が入っていた。

1枚目：メイド服姿の明久

「似合つてあるぞい」

「確かに。秀吉に負けてねえ」

「それはそれで複雑なのじやが」

2枚目：メイド服姿の明久（パンチラ ハティション）

「コスプレ趣味だったのかのう」「パンチラすんのにトランクスはねえだら」

「見るところはそこなのかのう……」

3枚目：ブラを持つて立ち须くす明久（着替え中メイド服着崩れバージョン）

「変態だな」

「女子になりたかったのかのう？」

「今からでも遅くない、アレをとる手術をしろ」

さて

「秀吉。コレビデウスル。」

「明久に返さぬのか？」

「それだと面白くねえじゃねえか」

「ふむ、確かにのう」

「あ、久保に渡すか」

「Aクラスの久保 利光かの？ 明久のことが好きな」

「ああ、そいつ。じゃあ、渡しに行こうぜ」

「うむ、わかつたぞい」

俺と秀吉は誰にも知られることなく教室から抜け出す。明久は島田と未だに話しており、周りの奴らもカッターを構えて明久の動きに意識を向けていた。

「邪魔するぞ」

Aクラス教室

「失礼するぞい」

Aクラスの教室に入ると優子と愛子が声をかけてきた。

「あら? 空に秀吉じやない」

「空君、会いたかったよ」

「ちょっと用があつてな。」

久保 利光いるか?」

教室に響くくらいの大きさで言ひ、

「僕だが何か用かい?」

「1、2、3の内どの数が好きだ?」

「急にどうしたんだい?」

「プレゼントのお知らせだ」

「ツ、と笑う俺。

「それってボクたちもやつていいのかな?」

「姉上たちには悪いのじやが今回はダメじや」

「秀吉。それはどうこうこと?」

「姉上たちが貰つても『ゴミ』になるだけじや」

明久の写真を「ゴミ」呼ばわり。

哀れ明久。

「ま、そういうことだ。優子と愛子はまた今度な。

で、久保。何番がいいんだ?」

「ふむ。1をお願いしよう

「一ぱいこつだな。

ほりよ。絶対になくなよ?」

メイド服姿の明久の写真を渡す。

「なー?」「はー!」

宇童君、感謝する。」のお礼は必ず返すよ

「いいってことよ。

んじゃ、俺らは教室に戻るな?」

「失礼したで!」

やつ面つじアの方へ向かつて歩いていく。

「あ、空君待つて

「ん?」

愛子の声に振り向くと

ちゅつ

一瞬俺の唇に愛子の唇が重なる。

周囲の女子がきやーきやー言つて興奮している。

男子（久保 利光除く）からは殺氣が出ている。

「…………」

脳内会議

エリア A【脳内支部A】

トム：『コアが完全に陥落（処理落ち）しました！！
生き残つた者が応援を求めています！！』

中将：『くつ！！』

総員、急いでコアの奪還（復旧）に向かえ！！』

総員：『イエッサー！！！』

エリア B【コア】

銃弾が飛び交うさなかとある物陰での会話

マイク：『なあ、ジョン。

俺、この戦い（復旧）が終わつたらジョンと結婚するんだ』

ジョン：『そうか！！なら、絶対生きて帰らないとな！！』

マイク：『ああ。ジョンも絶対生きて帰れよ』

ジョン：『おうう…』

2人の戦士は拳をぶつけ雄叫びをあげながら敵に向かつて駆けていく。

敵を倒してまわる中、マイクがスナイパーに狙撃され倒れる。
そんなマイクにジョンが慌てて駆け寄る。

ジョン：『マイクっ！？大丈夫か！！』
マイク：『じふつ、……ジョン、か……？見ての通り、……もつ、
俺は……うほつ、……無理、だ……ごほつ……』

ジョン：『マイク！？絶対生きて帰るんだろー！ジョンと結婚するんだろう？

諦めるなよ！？まだ助かる！？』

マイク：『ジョン……もういい、……お前も……いほつ、いほつ
わかってるだろ……？俺が……助からない、がほつ……つてことね

……。

今、すいぐ、眠いんだ……寝かせて、くれ……眠いよ、パトラッ、
シユ……（ガクツ）『

ジョン：『マイクウウウー！？』

- B A D E N D -

mission...マイクを守れ・ニアの奪還 失敗

脳内会議終了

「あ、愛子ー？何やつてるのよー！」「空を見たらついたくなっちゃつて。えへへ」

そう言つて愛子は笑つ。

「姉上ーー空の反応がないぞいーー！」

「大丈夫よ。すぐ治せるわ。」

運動中枢の小脳がなにかのショックを起しそうといつなるやつよ。

今回の場合は愛子の突然的なキスが原因でしょうね。

そう言って空の左胸辺りにストレートを一発。

「ゲホッゲホッ！！

は！？何が起こった！？」

ジョンがミッションを失敗したため記憶の飛んでいる⁶⁴。（解説）

「空。『ただいま』のキスよ」

『ただいまのキス』ってなんだよ！？

卷之三

脳内会議

エリアA【脳内支部A】

トム：『コアが再び陥落（処理落ち）しました！！生き残った者が応援を求めています！！』

中将：『くつ！』

総員、急いでコアの奪還（復田）に向かえ！――』
『総員・『イエッサー！――！』

エリア S【コア】

銃弾が飛び交うさなかとある物陰での会話

マイク：『なあ、ジョン。
俺、
』

ジョン：『そこから先は言つた。今は生きることだけを考えろ』

マイク：『ああ。ジョンも生きて帰れよ』

ジョン：『もちろんだ。』

2人の戦士は拳をぶつけ雄叫びをあげながら敵に向かって駆ける。

敵を倒してまわる中、マイクがスナイパーに狙撃されることなく、ついに今回の原因にたどり着く。

マイク：『ジョン！－！コイツはもしや－！』

ジョン：『ああ。コイツは魔獣【ボンノウ・キッス】。人の煩惱に巣くう厄介な魔獣だ』

マイク：『なんでこんなところにいるんだ！－！』

ジョン：『焦るな。

能力はそれほど高くはない。2人がかりなら殺れる』

マイク：『ああ！－！』

2人の戦士は激闘の末、ついに魔獣【ボンノウ・キッス】を倒すことに成功し、応援部隊とともに本部の奪還をも成し遂げる。その後

マイクはジョンと結婚し、ジョンも彼を待っていたキャシーと結婚した。

彼らの物語は子にも語り継がれていくだろう。

チャラララッチャ、チャツチャツチャ

- TRUE END -

mission・マイクを守れ・コアの奪還 成功
bonus・2人の結婚式

脳内会議終了

ボーナスいらね。

男子（久保 利光除く）からの殺氣を無視しながら愛子に言つ。

「大胆になつたな？」
「愛子にされちゃつたからね」
「ん？俺つて愛子にキスされたのか？」
「覚えてないの」

表情を暗ぐする愛子。

「悪い。覚えてねえ」
「じゃあ、もう一回」

そう言つて愛子は俺にキスをする。

……はー？危ねえ！！また脳内会議に飛びそうになつた！！

「……んじゃ帰るな？」

「うむ。失礼した。

姉上、ほどほどにの」

去り際に秀吉が優子をやんわりと注意し、やつとAクラスからFクラスへ戻つていく。

Fクラス教室

Fクラスに戻ると明久はボロ雑巾のよつに転がつていた。

「島田に信じられなかつたみたいじゃな」

「仕方ないっちゃん仕方ないだろ」

「まあのう。脅迫文が送られてくるなど滅多にあるものじゃないからのう」

「それも学校でな」

秀吉は島田に視線を向けて言つ。

「それにしても島田は不機嫌そつじゃな

「明久の写真でも渡して機嫌直させるか
む、また渡すのかのう」

「明久が起きてまたボロボロにされたよりかはいいと思つたが?」「そうじゃの。なら渡してくれるかい」

そう言って秀吉は封筒から適当に一枚抜き出して島田の方に向かつていった。

後一枚残つたな。残しとくか?

「いや、やっぱ誰かにやるひ。その方が面白やうだし。
誰にやろうか? 明久のことが好きなやつがいいよな。
あ、姫路にやるか。

そう思い姫路のといいく。

「姫路。俺からプレゼントだ」「
あ、宇童君。おはよう」「やれこまゆ。
プレゼントってなんですか?」「
「コレだよ。

絶対他のやつに見せるなよ。それとなくすな

残つた写真(ブラを持って立ちぬくす明久(着替え中メイド服着崩
れバージョン))を姫路に渡す。
秀吉はパンチラ ハーディシヨンを持っていったらしい。

「う、宇童君ーー?」、「コレはーー?」
「神様からの細やかな」^{やや}褒美だと思つてくれていいや

何に対する褒美かは分からねえけど。

「ありがとハジゼルコモアーー。」

「いいヒヒヒヒトヨ。」

俺は姫路に渡し終えると自分の席へ帰つていぐ。
さてここからが問題だな。脅迫状に[与]真はもつねえかいひよ[レ]ヒと
弄らねえとな。

そう考えていると秀吉が戻つてきた。

「[与]よ。渡して来たぞ。」

「どうだつた?」

「えりく上機嫌になつておつたわ。」

『『』、こんなの貰つても嬉しくともなんともないんだからねーーー。』』
と言つておつたしの[レ]

声真似上手いな。

「明久の寿命が延びて何より。」

それはさて置き、脅迫状改造しねえといけなくなつたな

「残り一枚はどうしたのじゃ?」

「姫路にやつた」

「なるほどのう。」

それじゃあ、どう[レ]字を消すかの?」

「『回封されている』を消すだけでいいか?」

俺はノートに書いてみる。

『『の忠告を聞き入れない場合、

〔与〕真を公表します』』

「やれじやと捻りがなこじやね。それになんの眞かわからんじやね」。

「ハコのせぢやせぢや?」秀吉が俺のノートに書き込む。

《 い れ を公表します》

「直す前とあんまり意味が変わってねえ」

漢字を弄るどじつなんだ?

忠	中・心	告	・合・同	聞	門・耳	場	日・易	封	寸	写	与	目・具	ハ	ハ・ハ(は)	ム
---	-----	---	------	---	-----	---	-----	---	---	---	---	-----	---	--------	---

読点までは全部残しといった方がいいよな……。しかもちやんと脅迫してねえとこけねえし……。

「むむむ、ハイソでどじつだ?」

《 い の忠告を聞き入れない場合、 田をム します》

蒸しタオルで田を覆うとか考えねえよな。

「おおつ……」「はは脅迫になつてもゐのう」

「だろ? さ、しつかり消して明久に戻してやんねえと」

文字を消し終わると氣絶している明久が起きないよつ脅迫状を戻してやる。

しばらくすると起き上がり脅迫状のことを康太に話しにいつていた。弄つといてなんだが犯人見つかるといいな。

明久が坂本を交えた3人で話しているとガラガラと教室の扉が開く音が聞こえ、大きな箱を抱えた鉄人が入ってきた。

「遅くなつてすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取つてしまつた。

HRを始めるから席についてくれ

そつ告げると自由にしていたクラスメイトが席につく。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのことは今配つてある強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。」

集合時間と場所のページはよく読んでおくことだ。クラスごとでそれぞれ違うからな

「

しおりをもじり、パラパラ捲つて中を見る。

帰つたらちゃんと用意しねえとな。明日が楽しみだ。

「 いいか、我々Fクラスは他のクラスと違つて

現地集合だからな

『案内すらしないのかよつー?』

まさか現地集合とは……。

Fクラスの扱いが雑すぎて涙が出てくる。

バカと俺と強化合宿

強化合宿1日目

車窓から流れる緑の多い風景を見ていると、いつも街から遠く離れた土地に来ていることが実感できる。電車に乗って、たったの1時間で随分と景色は様変わりして見えた。

「あと2時間くらいはこのままですね」

姫路が携帯電話を見て呟く。

「2時間か。眠くもないしなあ。

「雄二、何か面白いことない?」

「鏡がトイレにあつたぞ。存分に見てくるといい」

「それは僕の顔が面白いと言いたいのかな?」

「いや、違う。お前の顔は割と

笑えない

「笑えないほど何!? 笑えないほど酷い状態なの!?」

明久が喚く。

「明久、うるせえぞ。黙つて座つてろ」

「いや、でもこれは大事なことだよ!?」

「お前の顔が笑えないのは今に始まつたことじやねえだろうが。気
にすんな」

「にすんな」

- 1 -

「泣くな姫路の豊満な胸に顔でナニでも埋めてる」

そう言つてやると明久は姫路の胸に飛び込もうとするが

「アキ? 何しようとしたのかしら?」

島田に頭を掴まれ、霧島直伝アイアンクロール。

メキメキメキ、パキュツ

明久の頭からそんな音が響く

「おい、島田。今、明久の頭からヤバい音がしたぞ」「白目をむいておるよ！」見えるぞい？」

「ア、アキ!? 大変、介抱しなくちゃ！」

ら明久の隣へ席を移動し、膝枕をしてやる島田。

やねえナビ。

それはそうと、脅迫状の忠告のことを忘れてんのか？

「ま、俺には関係ねえしな。

あー、平和だ

そう呟くと俺は眠りに入る。

1時間後

「空。そろそろ飯食べるぞ」

坂本の声を聞き意識が覚醒する。

「ああ、了解」

俺が起きたといひで姫路の声が聞こえてくる。

「皆さん。実は私、お弁当作ってきたんです」

そつと言つて大きな弁当箱を鞄から取り出す。

「良かつたらどうですか？」

「悪いが俺も自分で作ってきたんだ」

「すまぬ。ワシも自分で用意してしまつての」

「…………調達済み」

「俺もだ。」

それは明久にやつてくれ

復活していた明久をロシアンルーレット弁当の餌食に。

『当たりは美味しいのじゃがハズレはすこぶる酷いの』とは秀吉の談。

「ごめん。実は僕もこうして惣菜パンを
「おつと、手が滑った（パシッ）」

「…………足が滑った（グシャツ）」

「ああっ！僕のパン！」

見事な連携に明久のパンは踏みつぶされる。

「坂本、食い物を粗末にするなよ？」

「ああ、大丈夫だ。コレは俺が責任を持つて処分する

「…………明久、弁当分けてもらえ」

「でも……」

「分けてくれるって言つてんだし一緒に食つたりしてじゃねえか

「…………男なら腹をくくれ

「ぐぐぐ」

泣きしている明久にとつて突破口となる救いの一言が島田から放たれる。俺たちにとつては迷惑極まりないが。

「アキ。良かつたらウチの弁当も食べてみる？」

「美波も分けてくれるのー？」

それならいつそのこと、みんなでお弁当を広げて少しずつ摘もうよ

！」

やはりこいつはつたか……どう回避するか

「わ、ワシヒムツツコーーーは向ひの席なので遠慮させて頂ひつか

の」

「…………一（口ク口ク）

「俺も遠慮させてもいい。

島田も姫路も明久と食べたいだろ？邪魔するのは悪い

「これでどうだ？

「え？ 空も一緒に食べ

」「

「それならしようがないわね」

「そうですね。それならしようがないです」

「えー？ 何がしちゃがないのー？」

明久つ、余計なことは聞くくな！！

「俺らはお邪魔のようだし秀吉の方で食つてくれよ。

坂本も行こうぜ」

「ああ。

感謝する（ボソッ）」

「困った時はお互い様だ（ボソッ）」

そつ言つて秀吉の方で昼食を採り、談笑していると田舎の駅に着く。
明久は一応無事のようだ。

合宿所 午後8：10

元々は旅館のこの合宿所は文月学園が買い取つて現在のよつに改装
したらしい。贅沢な学校だ。

今は割り当てられた部屋にいる。

部屋には畳が敷いてあり、トイレと風呂が備え付けである。俺は既に布団を敷いており、髪ゴムで前髪を縛りジャージを着てくつろぎモードで布団に寝転がっている。

この部屋は俺・秀吉・明久・坂本・康太の5人で使うのだが今は康太がない。

「なあ、康太どこいったんだ?
さつきまでいたと思つたんだが」

そう言つた瞬間、部屋の扉が開き康太が入つてくる。
噂をすればなんとやら、つてか。

「……………ただいま
「康太。何してたんだ?」
「……………情報収集」

なんの情報だ?

その情報に身に覚えがあるのか坂本が答える。

「昨日俺と明久が頼んだ例のヤツか。随分早いな」

明久は脅迫状のことか。坂本のはなんだ?

「……………昨日、犯人が使つたと思われる道具の痕跡を見つけた」「おおっ。さすがはムツツリー二だね」「……………手口や使用機器から、明久と雄一の件は同一人物の犯行

と断定できる」

「それで、その犯人は誰だったの？」

「…………（ブルブル）」

明久が尋ねると康太は申し訳なさそうに首を振る。

「…………『犯人は女生徒でお尻に火傷の痕がある』といつてしかわからなかつた」

「何を調べておるのじゃー？」

ついツツ「コム秀吉。

「秀吉、今は我慢しろ。話が進まねえ」

「すまぬ……」

「…………小型録音機。校内に網を張つた」

そう言いながら小さな機械を出す。

「…………昨日学校中に盗聴器を仕掛けた」

「…………康太。あの時の忠告忘れてんのか？」

「…………大丈夫。覚えている」

「嘘だつたらどうなるか分かつてるよな？」

「…………！（「クククク）」

思いつきり睨みつけると康太は高速で頷く。
それを無視して明久が尋ねる。

「ムツツリーー！。コレが情報なの？」

「…………（「クククク）」

落ち着いた康太が普通に頷いてスイッチを押すと内蔵されている音源からノイズ混じりの声が部屋に響く。

『 らひしゃい』

『……雄一のプロポーズを、もう一つお願い』

「坂本。お前、霧島にプロポーズしてたんだな。」

「違う！－試合大会の時に秀吉が俺の声を真似て言つたんだよ……」

「照れんなつて」

「嘘じやねえ……」

素直じやねえな。

俺が坂本と話している間にも再生は進んでいく。

『 明日からは強化合宿だから引き渡しは来週の月曜で』
『……わかった。我慢する』

「あ、危ねえ……。強化合宿があつて助かつた……」

「プロポーズがそんなに嫌なのか？」

……あ、自分で言いたいってことか。なるほどな

「違げえよ！－」

「…………それで、じつちが犯人特定のヒント」

康太が俺らのコントを無視して進める。

『 相変わらず凄い写真ですね。バレたら酷い目に遭うんじゃないんですか？』

『ここだけの話、前に一度母親にバレてね、文字通りお尻にお灸を据えられたよ。おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対しても酷いと思わないかい？』

「…………わかつたのはこれだけ」

「なるほどね。」

「どうやってその女子をみつけよつか?」

「秀吉に見て來てもらうか? そろそろ女子の入浴時間だしな」「なぜにワシが女子風呂に入ることが前提になつておるのじや?」「坂本。いくら秀吉でも風呂を覗かせるのを俺は許さねえし、それに秀吉は個室風呂に入ることになつてゐるから無理だぞ」

しおりの入浴時間のページを開いて見せる。

「くわいー。」

「…………万策つきた」

「どうじでワシだけ個室風呂なのじやー?..」

「どうやつて唸つていろと

『バーン!』

「全員手を後ろに組んで伏せなさい。」

凄い勢いで俺らの部屋の扉が開け放たれ、女子がぞろぞろと中に入つてくる。秀吉以外は窓から外へ脱出を試みる。

「な、なに? とじやー?..」

「木下はこつちへーそつちのバカ4人は抵抗をやめなさい。」

先頭に立つ島田が、咄嗟にこの場から脱出したよとした俺らの機先を制した。

「なぜお主らは咄嗟の行動で窓に迎えるのじゃ……？」

体の構造が違うんだよ。

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

それと島田に『バカ』なんて言われたかねえ……」「宇童も『バカ』じやなかつたらFクラスにいないでしちゃうが……」

『バカ』の部分を強調して言い放つた島田の後ろからCクラス代表の小山が高圧的に叫び。

「よくもまあ、そんなにシラが切れるものね。あなたたちが犯人だつてことくらいすぐにわかるというのに」

「犯人？ 犯人つてなんのことさ？」

「コレのことよ」

明久の問いかに小山が答え、俺らの前に何かを突き出す。

「ムツツリーー。アレが何か分かるか？」

「…………CCDカメラと小型集音マイク」

「女子風呂の脱衣所に設置されてたの」

「コレで愛子や優子を撮らうとしたのか。ふむふむ。なるほど。

「コレがお前らのなら俺はいいでお前らを消さなきゃなんねえ。覚悟はできてんな？」

俺から殺氣が滲み出て、女子が小さく悲鳴をあげる。

「ほ、僕たちはそんなことしてなによ……」

「空も一緒にいたから分かるだろ？俺らが脱衣所にカメラを取り付ける暇なんかなかつたって

「……まあ、確かに。

じゃあ、他の男子か？いや、この学校だと女子もありえるな（ボソツ）

顎に手を当てて考えている俺の呟きを聞いた島田が反論する。

「ち、ちょっと待ちなさいよ……

女子がするわけないじゃない！？」

「その自信はどこからくるんだ？

お前を『お姉さま』つづつてストーキングしているやつは男より女が好きだろ。ならそいつがやつたのかもしんねえだろ？」

島田をストーキングしているのはロクラスの清水（ ）とかこうやつ。

「つー？否定できないわね

「もしかすると本当にそのストーカーかもな？

今いるんなら聞いて見ればいい

「……美晴。どうなの？」

「お姉さまー？み、美晴がそんなことをすると黙つてこるのでですか

？」

「思つてるから聞いてんだろうが

「黙りなさい！……この豚野郎！！」

女子一行の中からストーカーの声が聞こえる。
言葉遣い悪いな。

「愛しのお姉さまから疑われちまつて哀れだねえ？」
「黙りなさいと美晴言つてるんです！…」
「何をそんなに焦つてんの？ストーカーちゃん？
もしかして本当のこと言つちましたか？
いやー、悪いね。お兄さん気がつかなかつたよ」

俺があちゅぐるよつて言つとストーカーのいる辺りから黒い霧もやがで
る。

「ロロスロロスロロスロロスロロス」
「沸点低いぞ？」
「ダマレヒヒヒヒ…！…！」

俺の一言が引き金になつたのか、ストーカーが飛びかかつてくる。
手を突き出し俺の喉を潰しにくるが俺は受け流す。ストーカーはバ
ランスを崩し、そのまま床に激突しそうなので落ちる前に襟を掴んでやる。

「うげつ…？」

変な声出たけど無視だ、無視。

「喉粗うとかえげつないこと女の子がすんなよ」
「げほつ、げほつ、このつ…！豚野郎…！離しなさい…！」

黒い霧もやが消え片言じやなくなつたストーカー。

俺をポカポカ叩いてくるが全然痛くねえ。

「豚豚言つな、ストーカー」

「なら、そつちもストーカーなんて呼ばないでください……」

「じゃあスネークって呼んでやるよ。いつもスニーキングミッショ
ンやつてるしな」

「いつもしてるワケじやありません……」

「でもやつてんだろ?」

「つ……」

言葉に詰まるスネーク。

「でだ、お前が犯人か?」

「…………」

「沈黙もまた答えなり。認めたと判断する。
それと、カメラはコレだけか?」

スネークにそう尋ねると島田が意味が分からぬといつた感じで俺
に聞いてくる。

「宇童、それどういうことよ!?」

「こつちは囮かもしんねえってことだよ」

「なんでそんなことが分かるのよ!…」

「やつぱりあなたたちがしたんじやないかしら?」

なんか知らんが振り出しに逆戻り。

「いやいや、スネークがやつたつて言つてんじやねえか」

「清水さんは何も言つてないわよ。あなたが勝手に決めつけてるだ
けじやない」

「もしかして美晴に自分たちのしたことを探り付けようとしている！？」

女子一行から『サイマー』だなんだの聞こえる。
『サイマー』なのはスネークだからな。俺らに盗撮したの擦り付け
よつとしてやがる。

「いやいや、もしさうならもう一つカメラがあるかもしないことを
教えると思うか？」

「む、それもそうね……」

「島田さん、騙されはダメよ。

きっと第3、第4のカメラが実はまだあるのよ。第2のカメラを見
つけさせることで私たちに安心感を与えて、そちらに向かないよ
うにするための罠よ」「な瞿く

ど』の魔王だよ、そのカメラ。

スネークがほくそ笑んでいやがる。うせえ。

「これ以上は時間の無駄よ。既、やつておしまい」

小山が指揮を出し、女子一行が素早い動きで捕まえにくる。

「……浮気は許さない」

「翔子待て！落ち着けやあああああつ……」

坂本は嫁に捕まりアイアンクロール。

「くつ……」

「アキ、逃がさないわよ？」

「明久君には失望しました」

明久は島田と姫路に。

「…………無念」

康太はその他大勢に、それぞれ石畳の上に座らされ拷問されている。えげつな。

俺はと言つと既に愛子と優子に捕まつてゐる。
ただいま愛子・優子の部屋で亀甲縛りで拉致られ中。
3階の俺の部屋から1階のこの部屋まで引きずられてきて体が痛え。
それにもしても、どこで亀甲縛りなんて覚えたんだ。

「ネットで覚えたのよ」

「Sに目覚めたのか!?俺はMじゃねえぞ!—」

「大丈夫だよ。ボクたちにしてもりうつもりだから」

「全然大丈夫じゃねえから!—」

やべえ、早くなんとかしねえと。

「それはそうと、本当に盗撮なんてしたの?」

「んなもんするワケねえだろ」

「でも土屋君つて怪しいよね?」

「その『怪しい』はどの『怪しい』だ?変態の方か?それとも疑惑の方か?」

「両方ともよ」

……康太、悪い。否定できねえ。

「でも今日は一緒に行動してたからな、カメラを設置できる暇はなかつたよつて思つた。それに約束があるから康太はこいつこいではしねえよ」

「約束?」

「『愛子と優子を盗撮したらどうなるかわかつてゐよな?』てな感じで」

「それって脅迫つて言つんじゃないの?」

「脅迫も約束も大して変わんねえだろ」

違うところは強制力の有無だな。

「……そつかもしれないわね。

ま、私たちの心配をしてくれてるつて言つのは嬉しいわよ

「当たり前の」とじやねえか

俺が言い終ると優子がキスをしてくる。

不意打ちにもいい加減なれた。

ご褒美ですね。わかります。

「でも、土屋君じゃないなら今回の犯人つて誰なんだうね?」

「さつかも言つたよつに俺はスネークが怪しいと思つんだが

スニーキングミッションしてみつけて言つてたしな。

「でも女の子だよ?」

「スネークは島田」〇〇eだ

「あ、そつか。でも、それが理由で撮りたくなるものなのかな?」

「あー……どうなんだ?」

優子に振つてみる。

「私に聞かれても困るわよーーー。」

「もうひとめです。

「ま、」のことは保留にしていいんじゃない?」

「あー、いと悪しがまだカメラがあるかもしんねえから紙をつけよう。」

「ええ

「じゃあ、そろそろ部屋に戻るから門解いてくんね?」

ずっと縛られたまま話してたから恥ずかしい。

「うん、わかった。

でも、今はまだ戻らない方がいいと悪しがい?」

愛子が慣れた手つきで解きながら囁つてくれる。

「何でだ?」

「たぶんまだ拷問とかやつしると悪しがい」

「今戻つたら巻き込まれるわよ?」

「マジか……」

じゃあ、何して時間つぶす?

「窑。時間つぶさんだったら、私たちはお風呂に入つてくつかうの間の留守番お願い」

「了解

「じゃあ、入つてくるわね

「行つてきまーす」

「おう。カメラ、あるかもしんねえから氣をつけるよ?」

「わかつたわ」

そつ言つと2人は部屋から出ていった。

留守番はいいけどなんもやることねえ……。

約40分後

「留守番」」苦労さま 「

「ただいま」

何もすることなくボーッとして過ぐしていると扉が開き2人が帰ってきた。

風呂上がりのためか2人共頬が仄かに赤く染まっている。

「空。顔がちょっと間抜けかも」

俺の状態を見て優子が言つ。

自分でも、間抜けそうな顔してんだろうな、とは思ったがやっぱそうだったらしい。

「2人共おかえり。

大丈夫だつたか?」

「空君の言つた通り、カメラがまだあつたから、取り外して先生に渡しといたよ」

「そつか、これで安心だな。

でも一応、毎回入る前にチェックしといた方がいいぞ」「ええ。わかつたわ」

「じゃあ、俺は部屋に戻るな。

なにか用があつたらメールしてくれ」

「わかったわ」

「また明日ね。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

そう言って部屋に戻っていく。

その後部屋に戻るも誰一人おらず、ちょうどD・E・Fクラスの入浴時間になっていたので、地下にある大浴場に入り、それを終えて部屋に戻つても誰もいなかつたため、枕投げをすることなく眠りについた。

バカと俺と参戦決意

強化合宿 2日目

今日は△クラスとの合同学習。

学習内容は基本的に自由で質問があれ周囲や教師に聞く、言わば自習だ。そのため机の並びも生徒同士が向かい合いつつな形になっている。

「……雄一。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

「霧島、気にせず座つてやれ。今のは坂本なりのカミングアウトだ」「どこをどうとつたらそうなるんだ！？」

照れやがって。

霧島が膝に座るとクラスの奴らが投げた靴が絶妙なコントロールで坂本だけに当たる。

見事だ。

それ（霧島が坂本の膝に座るといひまで）を見た俺の左右にいる愛子と優子が俺の膝を物欲しそうに見ている。

「座るか？」と言おうとして口を開いたその時、明久が声をかけてくる。

「ねえ、空。なんで自習なのかな？こんなといひまで来て自習なんて勿体無いような気がするんだけど」

「確かに。折角だし遊びたいよな」

うんうん。その気持ちわかるぞ。

「いや、そうじゃなくて。なんで授業やらないのかな?つて
「こいつ、本当に明久か?（明久。お前熱でもあんのか?）」
「本音と建前が逆になつてるよー?」

「あ、悪い。

本当は『明久。お前熱でもあんのか?』だ
「それとさつきのつて大して変わらないよねー?」

うつせえーー!

そのツツツミは無視だ、無視。

「で、『なんで授業しないか』だよな?まず聞いとくがお前はAクラスと同じ授業を受けて理解できるのか?」

「むづ、失礼な。僕にとってはFクラスもAクラスも大差はないよ
「あー、そつか。お前どっちも理解できねえもんな」

俺が笑つて言うと霧島が続けて明久に説明する。
坂本はもう靴を投げられていいようだ。

「……この合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから

「翔子、それだけじゃ明久にはわからんだろ。

つまり、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういうメンタル面の強化が目的だから、授業はをして問題ではないということだ
「なるほど」

やつぱ坂本と霧島はお似合いだよな。息合つてゐし。

「それと木下姉。空の膝に座りたいんだつたら座ればどうだ?」

わつかの仕返しのつもりか坂本が優子に俺の膝に座るよう促す。妙に勝ち誇った顔がうぜえ。

「優子、座るか?愛子もいじぞ」「じゃあ、お邪魔します」「え?ホント!?ありがとつ」

2人が座るとFクラスのやつらが今度は俺に向けてシャーペンを投げてくる。

それを見て俺は拍手をするように構える。

『翼の道』^{ワイング・ロード}、それは空気を『面』で捉え、床と手の隙間の空気の『面』、そして空気と空気の隙間の『面』を『認識』し『制御』することが絶対条件。

空気と空気の密度の隙間……『風と風の隙間』、言わば境界線にほんの少し手を添えてやると風はいつも容易くその流れをかえ、俺の手足へと姿を変える。

今しそうとしているのは、手と手の間の空気を押し合わせることによって自身の周囲に空気の壁を発生せしむことだ。

パンツ

俺が構えた状態から手を叩くと風の膜が俺を覆つよつて展開されシヤーペンの侵攻を防ぐ。

その光景を見て膝の上に座る2人から感嘆の声が聞こえる。

俺はそれを聞きながら坂本を見て鼻で笑う。

(何かやつたか?)

(くそつ！－！覚えてろよ！－！)

坂本が苦虫を噛み潰したような顔になる。

「ねえ、空。なんで実技の人も座つての？」

俺の人間離れした技を無視して、明久が嫉妬に燃えた目で俺を見て言つ。

「ボクは『実技の人』なんかじゃないからね」

「しきょうがねえだろ？最初の自己紹介の時に保健体育の実技が得意だ、つて言つてたからそっちの方がインプットされてんだろ。

しかも『やらない？』みたいなことも言つてたし」

「でも、もうボクは空君のものだからそんなことしないからね？」

……火に爆薬ぶち込みやがった。

「空。貴様一股か！？」

明久、叫ぶな！！

『やっぱり宇童君つて二股だつたんだね』

『教室で木下さんと工藤さんとキスしてたものね』

『もう、いろいろしちゃつてるんじょ？』

『出したり入れたりくらいはしてると思うよ？』

『何を？』

『ナニを』

……ハズれちゃいねえけど……

『でも、もしかしたら宇童君が犯人かもね。女の子に興味津々そういうから』

『それなら、きっとAクラスの私たちから毒牙にかけていくつもりよ』

『カメラで撮つたのを脅迫に使われて無理やり犯されるわ』

『サイテーね』

『ううつ…………初めてなのに……』

『でも宇童君カツコイイし襲われてもいいかも』

……話が飛躍しすぎだろ。

それと最後の娘、my sonの餌食にしてくれよう。

『なに!?木下の姉に加えやはり工藤まで誑かしていやがったか! たぶら』

『しかもハーレムをつくる気だとー。』

誰もそんなこと言つてねえ!!

『諸君。ijiはどいだ?』

『『『最期の審判を下す法廷だ!』』』

『異端者には?』

『『『死の鉄槌を!』』』

『男とは?』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの!』』』

『宜しい。これより トイザスター災害級異端者宇童 空の処刑を執行する!』

除く)が黒いマスクを被りだし、量産型GOKIへと姿を変え、手にはカツターを。

異端審問会つて規模がデカいんだな。ここにいるだけで100人近くいやがる。
はあ、面倒だ。

「2人共、一旦膝からおつてくれ。害虫駆除しねえといけなくなつた」

「がんばってね」

「また後で座らせてね?」

「了解」

そう言つて2人が膝からおつると俺は立ち上がり、GOKIsに向
き直る。

『 罪状を読みあげたまえ』

『 はつ。須川会長。』

えー、被告、宇童 空(以下、この者を甲とする)は我が文月学園
第2学年Fクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑い
がある。

甲の罪状は強制猥褻^{わいせつ}及び背信行為である。

甲がAクラスの女子生徒である木下 優子(以下、この者をゆうこ
りんとする)と同Aクラスの女子生徒である上藤 愛子(以下、こ
の者をAIBOとする)に対して強制的に猥褻行為を働いていたと
ころをAクラス教室で目撃。その時点では確保できず現在に至る。
今後、甲とゆうこりん・AIBOの関係に対して充分な調査を行つ
た後、甲に対してもべき対応を』

背信行為なんぞしてねえし。そもそもお前らみたいな怪しい団体に入つてねえ。

『御託はいい。結論だけを述べたまえ』

『キスをしていたので羨ましいあります！

もしかするとそれ以上もしている可能性もあるので妬ましいであります！』

『うむ。

実際にわかりやすい報告だ。

それではハツ裂きに』

先手必勝！！

言い切る前に技を放つ。

trick·pile ^{トリック}tornado

両手で風を操りコイル状にし、その風を蹴ることで量産型GOKI共に一直線に進む竜巻が発生する。

量産型GOKI共は整列していたためそれを諸に食らい、直撃を免れた量産型GOKI共も風圧で吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。ぐつたりしているが大丈夫だろう。

「空、お疲れ」

「瞬殺だったね」

「おう。いつも相手してるからな、さすがに慣れた。
2人とも膝に座るか？」

「ええ

「うん」

そう言つて座つた後、愛子が話しかけてきた。

「そつそう、空君。

ボク面白いもの持ってるんだよ」

愛子が取り出したのは小さな機械。

「なんだコレ?」

「コレはね、小型録音機だよ。
ちょっと見ててね」

小さな機械を力チ力チ弄ると、少し間を置いて内蔵されているスピーカーから声が聞こえてきた。

ピッ 『保健体育が得意だ』 『から』 『やらない?』

「俺の声じゃねえか!?
しかも音量でけえよ!..」

「ね、面白いでしょ?」

「いやいや、こんなん人に、特に女子に聞かれたら

『あんなこと言つてるし宇童君が絶対カメラの犯人だよ』

『お盛んね』

『実技によつぽど自信があるんでしちうね』 『すごいテク持つてる
のかな?興味あるね』

れつきと同じ最後の娘、my sonの餌食にしてあげよう。

「ひつひつふうに女子に聞かれたら俺の評価だだ下がりだからな?
ほんの一部除いて。てか、最後の娘除いて」

お盛んな雄犬のレッテル貼られた。『お盛んな雄犬』と書いて『フ
エンリル』と読もう。

……無駄にかつこいい。

「ボクたちは空君のことが好きだから大丈夫だよ」

「そうよ。心配しなくていいわよ」

「そうか。ありがとな」

ちょっとといい雰囲気になつていい俺を含む3人に、割り込むよつて坂本から声が発せられる。

「工藤。今のは録音した会話を合成したのか?」

「うん。そうだよ」

愛子の返事を聞き、坂本は少し考え込んでから言ひ。

「……工藤。体に火傷の痕あるか?」

「おい、坂本。あのこと（録音されたプロポーズ）で愛子を疑つてんのか?」

「念のためだ。」

工藤、火傷の痕あるか?

「火傷の痕はないよ」

「本当にないのか? 尻にあつたりしないのか?」

「……雄二。浮気は許さない」

「今の言葉のどこに浮気の要素があつたんだよ! ! !」

「今のは『愛子の尻が見たい』って言外に言つてんだろ」

火傷ないのか? 特に尻に見て確認しなくては、てな感じで。無理やり感が否めねえけど。

それより奥さんの目の前で浮気とは……。

「なー? そんなことぐああああああああつ――――――」

坂本は霧島にアイアンクローラーをされるが明久のよひに軋んで陥没していな。

頭になに仕込んでんだ？

「霧島。坂本はお尻フヨチらしいし、頭撫でるのはそれくらいにして、霧島のが好みかどうか聞いてみたらどうだ？」

俺の言葉にピクッと反応する霧島。

「…………うん、そうする」

そう言つて絶した坂本を連れて学習室から出て行つた。
……なんで出て行つたんだ？

ピッ 『愛子の尻が見たい』

「愛子おおおー！？」

不意打ち過ぎるだろ！？

しかも合成してねえ分ダメージがでけえ…………。

優子は呆れてねえで愛子止めてくれ！－

『公衆の面前でよくあんなこと言えるわね』

『宇童君つてお尻フェチなんだ』

『破廉恥です』

『いつもイヤラシに視線をお尻に感じると思つたら宇童だったのね』

今の声は島田だよな。

「島田。テメヒの尻になんぞに興味はねえ。

それとその視線は絶対スネークのだ

『また美晴に擦り付けようと/orする！』

『サイテー』

『昨日どこに逃げたか知らないけど先生に受け渡した方がよくない？』

『そうね。先生呼んでくるわ』

……面倒なことになつたな。

「愛子。悪ふざけがすぎるわよ。

それに今はタイミングが悪いでしょ？空が犯人にされちゃうじゃな

い

「……ごめんなさい」

咎めるように言つた優子に愛子はしおぼくれる。

「ま、俺は犯人じゃねえし話せばわかるだろ。あ、でもその機械没収な。

優子、管理頼んだ」

小型録音機を回収し優子に渡しておく。

「ええ、わかつたわ」

そうやって話しているとさつき教師を呼びに言つた女子生徒が鉄人を連れて帰ってきた。

『西村先生。宇童君がカメラの件の犯人です』

犯人つて決めつけんな。

「宇童。向こうで話そうか」

「了解。」

2人とも行つてくるな」

そう言つて優子と愛子の2人を膝から下ろし鉄人のところへ向かう。

「本当にお前が犯人なのか？」

「ちげえよ。あいつらが勝手にそう思いこんでるだけだ」

「本当にそうなのか？」

「しつけえぞ。鉄人」

「……宇童、お前口が悪くなつたな。

まあ、今はいい。カメラのことは犯人じやないと信じよつ

そこでひと息ついて鉄人はまた話出す。

「実はな、昨日お前の部屋の奴らが覗きを働くこうとしていた。
返り討ちにしてやつたがな」

「は？ それマジか？」

鉄人は俺の反応を怪訝そうに見る。

「宇童、お前知らなかつたのか？」

てつきりお前が疑われた腹^{はら}癒せに企てたのだと思つたんだが
「そんなに器はちっちゃくねえよ！！」

「そうか。それはすまなかつた。

あいつらはおそらく今夜も覗きにくる。それに便乗して宇童もくる
と言つのなら、俺はここでお前を行動不能にするつもりだ

「ハツ、鉄人にそんなことできんのかよ？」

ま、便乗することはねえ。俺は鉄人側につくよ。

あのバカ共をブツ潰してえからな

優子と愛子が覗かれよつとして黙つてられつかよ。

「そうか。なら今夜から頼むぞ」

「了解」

追記、坂本は夕食まで帰つて来なかつた。

バカと俺と負けず嫌い

女子大浴場前

「西村先生。流石に今日は彼らも現れないのでは？」

「畠中あれほど指導をした」とです。

右方先生 徒然を倒してはいけません

的な生徒になつているはずですか？」
「ふせん

二
一

「ふ、『付録』とは私のことでしょうか？」

付箋の「メカニミ」がピクピクしている。

「正解。布施先生だから付箋。 布先でも可」

布先。お!? 布奉先でもハハか先!!

「付箋、呂布奉先でもいいぞ。強そうだし。

好きな方選んでくれ

「宇童君！先生には敬意を抱いたい！」

— 1 —

『おおおおおつ！障害は排除だーっ！』
『邪魔するヤツは誰であれブチ殺せーっ！』
『サーーチ&デエース！』

……やっぱり数が増えてんな。

「に、西村先生！大変です！」

変態が編隊を組んでやってきました！」

「まさか、懲りるどころか数を増やしていくとは。

これだからあの連中は……！」

付箋の渾身のギヤグをスルーとは、付箋が可哀想だな。

「あのバカ共、Fクラスのウンコクズ共を仲間に引き入れやがった
か。
ま、1匹残らず潰してやるよ……」

俺は自分の頬を叩いて気合いを入れる。

「布施先生、警備部隊全員に連絡を！一人として通しては行けませ
ん！」

私は定位置につきます！」

「は、はいっ！」

「宇童も定位置につけ！」

「一発デカいのを撃つてからな」

「勝手な行動をするな！」

「すぐ終わるからいいだろ？」

試獣召喚！！

「宇童。まだ召喚フィールドは展開して

」

俺の喚声に応えて魔法陣が展開され、白いニット帽をかぶり小鳥丸のエンブレムの描かれたジャケットの中に白のパーカーを着込んだ俺の召喚獣が姿を現す。

「ハツ、召喚フィールドがなんだつて？」

目を見開いている鉄人を見て俺は笑う。

「どうこうことだ！何故召喚できている！？」「俺とコイツは一心同体だ。召喚フィールドなんぞチンケなもんに縛られるワケねえだろ。

んじやいくぞ」

『シンクロ
同化』

ミー 僕と同化したため視線が低くなる。

本体は大浴場へ続く廊下の中央で腕を組んで威風堂々と立っている。前髪を結んでいるので格好がつかないが。

「ウンコクズ共、こつから先は通行止めだ。お引き取り願おつ

『な！？宇童だと！？』

『構うな！障害は排除するのみ！…』

『おおおおお…！…』

やつぱ下がんねえよな。

「なら、『血痕の道無限の空無限の牢獄』『ラッパ・ローランフィーティ・ダムスフネ・ジョイル

持ち点409点から200点を消費して『牙』を放つ。
『シンクロ 同化』の影響か消費点数が200点に固定され、『牙』の範囲が

自在に変化するよつになつた。今回は廊下いっぱいまで広げる。

『 アイツ、何をぐああああああつつ！？』

『 は？がああああああつつ！？』

『 牙』は衝撃波のため視認できず、ウンコクズ共を風払いながら突き進んでいく。

そして廊下の突き当たりの壁にぶつかると大きな傷痕を残す。
物理干渉できるといいな、くらいで撃つたのに本当に物理干渉できるとは……。

「 宇童！壁に傷をつけるな！」

「 それと今なにをした！？」

「 何つて腕輪を使つただけだ」

「 何故物理干渉ができるんだ？」

「 物理干渉はできたらいいな、ってな感じでやつたらできた」

「 ……お前は規格外なようだな」

「 自分でもそう思うよ。

ま、だいぶ数は減つたらしいんじゃねえの？」

「 そうだな」

『 試獣召喚！』

鉄人と話していると変態の編隊から喚声が聞こえてくる。

生き残つてるのは明久・坂本・康太・秀吉の4人だけのよつだ。

召喚フィールドが展開されていないためバカ4人の召喚獣は召喚さ

れない。

「なんで召喚されなーのヤー?」

「…………不可解」

「干渉でもなセハツジヤ の…………」

《説明しそう!…

干渉とは、2つ以上の召喚フィールドが極端に近い位置で展開されるとお互いに干渉し消滅することである》

3人がウンウン唸つていると坂本が口を開く。

「もしかしてフィールドが展開されてないんじゃないのか?」

「そんなこと有り得ないでしょー?」

「現に空はフィールドなしで召喚している」

「もしさつじやとしても、何故物理干渉ができるのジヤ?」

「それはフィールドなしで召喚できるのに関係してるんだろう」

「…………それよりも白金の腕輪

「ああ、やられっぱなしジヤ嫌だからな。反撃するヤー!

『起動』
〔アウェイクン〕

—

坂本が起動キーを唱えると点数を消費して召喚フィールドが展開される。

白金の腕輪により展開されるフィールドの科目は「ウンダム」。今回は康太の得意科目の保健体育のよつだ。
コレはマズいな。気抜いたら負けちまつ

「…………俺が出る。先に行け。

…………試獣召喚」

康太の喚声に応じ魔法陣が展開され、黒の忍装束を着た召喚獣（以後、陸奥璃威児）が召喚される。

「鉄人！そいつらの相手頼んだ！」

本体の俺の横を駆け抜けしていく明久と秀吉の相手をするよつ鉄人に言つ。

あいつらの相手をしてる暇はねえ。坂本は教師の召喚フィールドとの干渉を恐れてか康太の少し後ろにおり、そこからことの成り行きを見守つている。

『Fクラス	土屋	康太
保健体育	622点	
VS		
『Fクラス	宇童	空
保健体育	482点	

俺の使用科目はフィールド内にいる場合、その科目に影響されるようだ。
それにしても点数高すぎるだろーー！

『『腐海の道無限の空無限の悪夢』』
スマートア・インファニティ・システムズ・ラスト

バーサーカーモードがどう本体の俺に影響を及ぼすかわからぬいため、同化を解除して腕輪の起動キーを唱える。突如ミニ（俺（決して俺ではない）から汗（？）が噴き出し床に水溜まりならぬ汗溜まりを作り、それが蒸発してミニ（俺の周りに汗の霧が漂う。汗溜まりは常時作成中。

……すっげえ汚え上に見てくのが悪い。

そんなことを考えながら陸奥璃威児へ駆ける――俺。

「…………『加速』」

「『オニギリ5つ』！」

陸奥璃威児が腕輪を発動したのと同時に――俺も腕輪の2段階目を発動する。

俺の保健体育の腕輪は2段階の起動があり、2段階目は3つに分かれている。

その1つが今告げた『オニギリ』で点数を消費して発動する、召喚獣の頭ほどの大さのデフォルメミニ豚爆弾を汗の霧や汗溜まりからの召喚。今回はソレを5匹。

発動キーがコレなのはエア・ギアの8巻を読めばわかるかも（解説）

その5匹の豚の内、俺の正面に出現した2匹が突然爆発する。

ミー　俺を斬りにきた陸奥璃威児に接触したようだ。

陸奥璃威児の腕輪の能力は『trick : After Burner』ばかりの高速移動。コレがテレポートなんかだったら豚と俺の間に出てこられて今まで死んでたな。

爆発により動きの止まつた陸奥璃威児へ残りの3匹の豚が向かう。さつきの爆発をくらつたため警戒してか腕輪を使い、元いた場所へ戻る。

その間に豚共は出現して2秒たつたため消えていく。

『Fクラス　土屋　康太

保健体育　522点

V S

Fクラス　宇童　空

とうあえず100点。

このままいけば勝てそうだな、と思っていた時期が俺にもありました。

「…………加速、加速、加速。

…………「ンニン、分身の術」

俺を錯乱させるため腕輪を連発し、ミー 俺を囲むように分身を作り出す。

いやいやなにその腕輪？点数消費なしでそこまでできるとか便利すぎるだろ！

「…………手裏剣影分身の術」

そう言つて陸奥璃威児が手裏剣ではなくクナイを投げてくる。分身することなく1本だけだが。

それを難なく避けるがすぐに別の方向からスピードの上がったクナイが飛んでくる。また避けるがすぐに別の方向から。

それを繰り返しているとクナイが分身しているように見えるではないか！？感動モノだ。

ふざけるのはここまでにして、流石に避けきれなくなつたためミー 豚を召喚し、盾にしようとするがそれらを貫通してミー 俺に迫つてくる。爆発によつてスピードが一気に速くなるオマケつきで、頬が浅く切れた。浅はかだったと後悔も反省もしている。

「『「ヒーヒー黒豚2匹』』！」

今発動したのは2段階田の能力の2つ目。ミー豚とは違い拘束用で

召喚獣ほどの大きさの黒いデフォルメ豚。

起動キーがコレなのもエア・ギアを読めばわかるかも（解説）

ミニ豚のようにすぐに殺されることはなくはある程度までは消えないで残る。さらに、ミニ豚は相手を追尾できる2秒間だけしか存在できないが、黒豚は5秒間相手を追尾した後、拘束できなければ破壊されるまでその場に留まる。

三二 倘は黒駒の隙に隙れながら阿奥環廻りの方へ駆けるが向こうもそれに合わせて移動する。

全然近づかねえ。

しかも黒豚が出番なしで終わつた。陸奥璃威児と腕輪の相性悪すぎるな。俺の点数だけ減つていつてるし……。

卷之三

「『バーサーカーモード』…」俺のかぶつていのニシト帽を突き破つて角が生える。

『Fクラス 土屋 康太
保健体育 522点

UNKNOWN

保健体育 283 点

あ、クラスのとこが消えた。

才才才才才才才才！！！！！

——俺が叫ぶと霧が——俺の背中に翼を作れる。汗溜まりから
は黒い大剣や禍々しい西洋甲冑ができ装備される。

……汗からできるんだな。なんか嫌だ。カツコイイのに汚え。

ミニ 僕は翼を羽ばたかせて高速で陸奥璃威児に向かうが腕輪の能力がスピードに特化しているだけあって、陸奥璃威児の方が素早い。何度かクナイと剣により火花が散るがだんだんミニ 僕に傷が増えていき、ついに

「…………終わりだ」

クナイと剣で鍔迫り合いをしていたが陸奥璃威児が力を弱めた瞬間、ミニ 僕が体勢を崩し、その隙を狙つて陸奥璃威児が首にクナイを突き立てるといい 僕は消え去った。

「くつ！」

「ムツツリーーーよくやつた！」

「…………興醒めだ。

先に進むぞ」

坂本と一緒に俺の横を通り過ぎるときにはいつ言へ。

「なん……だと……？」

「康太あああつー！」

「オツ、レツ、をツーー！俺ツ様ツをオツーー！ナメツテんじやねエエエエエエーーーーーーーー！」

「…………（ピタッ）。

負け犬の遠吠えか？見苦しいぞ。

出直してこい」

……『負け犬』だと？

「ナメツてんじやねえぞ！！

次はぜつてえぶつ潰してやる！！

首洗つて待つていやがれ！！！！

「…………（フツ）」

あんのクソ、鼻で笑いやがった！！

許すまじ！！マジ潰す！！

その後、俺は補習を受けさせられ、俺の部屋で寝るのが嫌だったので荷物を持って、優子の部屋で寝た。ルームメイトが霧島や愛子だけだったので何も言わなかつた。

バカと俺と最終決戦（前書き）

編集しました

バカと俺と最終決戦

強化合宿 3日目

「んつ…………ふあああ」

目が覚め、大きくあくびをする。
俺は手探りで、枕元に置いてあるケータイをとり、ディスプレイを見ると、突然の光が目に染みる。

「痛つ…………ー?」

しばらくして痛みが引くと改めてディスプレイを見る。

『3・48』

早え、もつかい寝よ。

もう一度眠りにつくため寝返りを打つと

「ジン

頭に何かがある。

『何か』が気になつたためソレに手を伸ばす。

ふにふに

柔らかい。手か?……いや足だな。
優子は寝相悪くねえし愛子の足だらう。
しゃあねえ、布団に戻してやるか。

そう想い、薄暗い中俺の立派さと立ち上がる。

「……見えずれえ」

自然と眉間にシワが寄る。
足元を確認しながら愛子近づくと服が捲れ上がったまま寝ているのがわかった。

「腹出してと風邪ひくぞっ」

そう咳いて捲れ上がっているだまだましたTシャツの裾を掴んで腹を隠してやり、愛子をお姫様だっこをする。

「すぴー　すぴー」
「ふつ、幸せそうに寝てんな」
「すぴー　んんっ、そら　くん　？」
「あ、悪い。起こしちまたか？」
「だいじょぶ。こいつはねよ？」

寝ぼけてんのか舌足らずな話し方になつてんな。

「はこはこ」と生返事をし、愛子を布団に寝かせ、すぐ横の布団に戻ろうとするが、愛子に呪をつかまれ布団に倒れ込んでしまう俺。

「ひまつーっ」

「大きい声が出ちました！！

「こつしょひねるのー。」

だだつ子のみづひて俺の背中に乗つてへる。

「ひらむべー。」

「漬茶言つな。乗られたままだとできねえよ」

「む、」

だだつ子は懇うとじ背中から転がり降りる。

「つえむべー。」

「はーはー。」

……よいじょいと

「ふとんかぶるのだめ！」

「寝るんだから布団かぶるだろ！が

「むつこもん！」

その間うとうとうと俺の布団に入つてきて、俺の上に向かってひらみつ乗つてへる。だだつ子。当たつてゐてか潰れてるぞ？

「じつてゐ」

「この状態で寝るのか？」

「ぐつすりねむるとおもつ。」

「俺はぐつすり眠れねえー。」

煩惱を断つのに必死だ。

「別にしてもいいんだよ。」

こんな感じに

そう言つてキスをしてくる。

おい、話し方が流暢になつてんだ。それ今までのはフリか?

「正解

それで空君。カタくなつてるよ?」

「何がだ?」

「それを女の子に言わせるの? まだ、言ひおかなければ。
ナニがカタくなつてるよ?」

「カタくなつてんじゃねえ。カタくしてんだよ」

……何言つてんの俺?

「じゃあやつちやつた方がいいよね?」

「ここじゃできねえだろ?」

「大丈夫大丈夫 声出さないよつに我慢するから」

「ぜつてえ声出るから」

「ちつちやい」とは気にしない

ちつちやくねえ……ワケじやねえか?

「それじゃ『ム着けてあげる』」

どこからか出した近藤さん（全国の近藤さん「メンー」）を布団で隠
れている覚醒した myself を見すに着ける。
何やつてんだ! ? てかなぜつけれん! ?

「愛の力だよ

それじゃ

「

「 ら。起き　い
「 空へ　だよ?」

誰かが俺の体を揺すりながら声をかけてくる。

「 な。起きなセー
「 もう朝だよ?」
「 んつ…………ふああああ。
…………おはよ。、やじ、おやすみ……
「 もう朝なんだから起きるのよー。」

優子と愛子の2人に挨拶をした後、布団に深く潜り込む。

そつ言つて優子が俺の布団を剥ぐが俺は起きることなく体を丸め、ダンゴロムシのようになる。眠い。寝かしてくれ……。

「 空君、なんだか可愛いね。
けどダメだよ。もう起きる時間なんだから。
朝ご飯食べに行くよ?」

愛子が俺に馬乗りになり跳ねながら叫ぶ。
うう……頭に響く……。

「…………押し入れに入りたい」

「何バカなこと言つてるのよ。

そ、早く起きなさい。置いていくわよ~」

……置いていかれるのは嫌だな。

「起きる」

そつ西つてのそつと起き上がると

「わわわっ！？」

馬乗りになつていた愛子が転がり落ちる。

「あー……悪い」

「大丈夫だよ。それじゃ『飯食べに行こ』」「了解」

……ん？なんかおかしくね？

昨日でか今日愛子とやつてたような……。夢か？

「夢じやないよ」

「途中から記憶がねえんだが？」

「ボクはあるよ。が、気にしないで食べにいこ」

そつ西われ強引に食堂へ引っ張られていく。

朝食を採り終え今は学習室でFクラスのやつらとは離れて保健体育を猛勉強中。

「どうしてそんなに保健体育勉強してるの?..」

「土屋君超えちゃうわよ?..」

「それでもいい。昨日のリベンジのためだ」

「『昨日の』ってFクラスが覗きにきたってやつのことかじり?..」

「ああ、ソレだ。康太に負けちまってな」

「ん? どういうこと? 空君も覗きにきたんじゃないの?..」

「俺は覗きを阻止する側だったよ」

「それで土屋君と勝負することになつて負けちゃつたのか……。
でも相手が土屋君だし、しょうがないんじゃないんじやないの?..」

「それでも勝たねえといけねえんだ」

あんなにナメられたままだと気がすまねえ。

思い出したらムカムカしてきた。

ぜつてえぶつ潰す!!

「そうなんだ。じゃあ、ボクも手伝つてあげるよ。保健体育得意だし」

「私はそれほど得意じゃないから手伝えないけど、今夜から参加するわ」

「あ、ボクもボクも!..」

「お? マジか!? それなら心強いな」

「他の何人かにも声をかけておくわね?..」

「ああ、頼む」

さてと勉強再開すつか。

20：00

優子が『何人が集めておく』と言っていたがほとんどの女子が参加することとなつた。
交友関係がどうなつたらこつも短時間でそんなに多く集まるか不思議だ。

んで集まつた女子の中に諸悪の根源のスネークがいたんだが……早く捕まんねえかな?と思わなくもない。
今は仲間だし多めにみとくか。

それで俺が女子にすんなり受け入れられたかといふとそうじやねえ。昨夜Fクラスの連中が覗きを働くこうとしていたため、俺もその一員なんじやないの?みたいな感じで最初は大半の女子が俺のことを訝しんでいた。

だが、鉄人など教師陣の説明によりそういうのはなくなり、その説明を受け、俺をカメラの件で犯人扱いした女子たちが謝りにきてく

れた。

スネークとは大違いでみんないい娘だな。

そして、現在大食堂でテーブルを囲い作戦会議中。

「空。本当にここにいれば彼らはやつて来るのかしら？」

「間違いねえよ」

「なんでそういう切れの悪いやー？」

Aクラスの……名前なんだつけ？

さつき自己紹介したのに忘れた。

「御門さんよ」

確かにそんな名前だったな。

サングラスを頭にかけておりにやーにやー言ひているネコ娘。

「しおり見たら分かると思うが女子大浴場に行くには男子側の部屋から食堂の前の廊下を通るか、A・Bクラスの女子部屋付近の階段からじやねえと行けねえんだよ」

「なるほどにやー」

「それならここ前の廊下って結構な数のヤツらが来るよな？」

確かに神上とか言つけつた的な名前のAクラスの女子生徒。言葉遣いが男子っぽいのが特徴的。

「ああ、そうだな」

「こんなに人数少なくて大丈夫なのか？」

神上の言つ通りここにいる人数は教師を含めたつたの10人。

「大丈夫だろ？ここにいるのはAクラスの娘だけだし」「Aクラスだからって強いとは限らんのよな。

それに物理干渉できるのが先生しかおらんのよ。横を素通りされるのがオチよな」

盾宮（だつたと思う。髪がうねってるのが特徴的）が反論を述べ、その意見に同調する娘が1人。

名前は亞愛。あくあなんか変わった娘。

説明がアバウトだがなんて言つたらいいのかわからんねえから許してくれ。

「そうである。我には1人で大人數を相手にはできぬし、物理干渉もできぬ」

「亞愛ならやれそうな気がするんだが？」

うまく言えねえけど身に纏つてるオーラが……その……グオオオオ
オオオオって感じだから滅茶苦茶強そつ。

「それは言い過ぎであるよ」

ハツハツハツ、と亞相手は豪快に笑う。

「ま、素通りはさせねえよ。俺が食い止めるからな」

そこいら辺のヤツらは大した脅威にならねえし、もし康太が出てきても保健体育以外だとFクラスレベルだから心配いらない。全員、『シクロ化』したらすぐ倒せるレベルだ。

ま、康太を潰すときは保健体育で真っ向からいくがな。

「うじん君。相手の規模がどれくらいか予想つく?」

「おい、うじんじゃねえ宇童だ」

「分かってるよお、うじん君?」

「せってえ分かってねえ。

さつき自己紹介したときからうとうじん呼ばわりしてくれるこの娘の名前は甘夏。

おもづくやミカンだ。

「ミカン。規模は前回よりさらにデカくなつてると感づ。ロードべらいは取り込んでんじゃねえか?」

「『ミカン』かあ。おいしそうなあだ名、あつがとお

皮肉が効かねえ。

「空君。それなら相手は100人くらいだよね?」

単純に相手が食堂前の廊下と階段に分かれて攻めて来てもこの人数で50人は相手しないといけないよ?

いくらなんでも無理じゃない?」

「それに関しては『とつておき』があるから大丈夫だ。だいたいのヤツらは俺一人で相手できる」

「それは召喚獣どうしでの戦いであります?」

「いや、人に対しても有効だ」

「それってどういうことかしら?」

「空気の壁でも使うの?」

「昨日のこと言つてんだろ?」

「気が向いたらアレも使ってみるか。

「アレとは違えよ。もつと意外なことだ」

「……まさか……物理干渉できるのか?」

「正解!頭を撫でてあげよう」

正解した神上の頭をよしよしと撫でてやるが不機嫌そつだ。

「おー、子ども扱いするな

「悪い悪い。

で、話戻すぞ。俺の召喚獣は物理干渉できる。セリヒフィールドなしの召喚も可能

「いやーー?そいつは本当なのか?」
「マジだ。

試獣召喚

俺の喚声に応じ魔法陣が展開され、白いニシト帽をかぶり小鳥丸のエンブレムの描かれたジャケットの中に白のパークーを着込んだ俺の召喚獣がテーブルの上に姿を現す。

「いやーー?」

「ぬつーー?」

「ー?す?」
「ねえ」

ミカンの声は間延びしていくあまり驚いているよつこ聞こえねえな。

「でも触れんのよな」

盾富が!!! 僕に触れinとするがスカスカと手がすり抜けてくる。

「ああ、それはだな」

『^{シンクロ}同化』

『^{シンクロ}同化』がさらに馴染んできたのか召喚獣視点と本体視点の2つが一度に見えるようになつてゐる。

便利だが酔いそうだ。

視点の切り替えできねえのかな？

そう思い本体の視点に集中してみると――俺の体から本体の体に戻ることができた。

――俺は『^{シンクロ}同化』なしのときと同じように操作でき、さらに物理干渉もできるようだ。

問題 解決。

「コレでどうだ？」

「おおっ！？」

「触れるぞ！？」

「だっこできそうだね」

そう言つて――俺をだっこをする愛子。

ふおおっ！――後頭部に オツの柔らかい感触が！

フィードバックは切れてないっぽい。

…… オツがよかとです。明久にも教えてやる。

「宇童君。ちょっとといいかい？」

そこへ今まで空氣だつた日本史教師（ ）が俺を呼ぶのでそちらへ行く。

みんな知つてるだろ、的な空氣を出していて自己紹介しなかつたか

「名前知らないねえ。」

「なんだ？」

「君は自分の召喚獣を改造したのかい？」

「そういうやつは『改造か？』とかは尋ねてこなかつたな。雰囲氣で
考へても答へはでねえしどうでもいいや。」

「改造なんざしてねえよ」

「なら何故そんなことができるんだい？」

「それは俺も分かんねえよ。やつたらできた」

「……合宿が終わつたら調べさせて貰つけどいいかい？」

「どうせ断つても調べるんだろうが」

「まあね。学校へ戻つたら学園長室に行くんだよ？」

「了解」

日本史教師と話し終え、皆のところへ戻ると、あくへあ亞愛が俺に話かけてきた。

「それで、勝てる見込みはどうほどあるか？」

「そんなの100%に決まつてんだる」

「……それは信じていののか？」

「ああ、泥船に乗つた氣でいる……」

「空。それスゴく心配」

「…………今のはし。

神上もつかいわせの振りやつてくれ」

そつ言ひつと、神上はため息を吐きながらわせの言葉を繰り返す。

「…………それは信じていいのか？」

「ああ、方舟に乗った氣でいろ！――！」

シンツ

一瞬時が止まり、そして動きだす。

「…………宇童つて実はアホなのかにやー？」

「空君。方舟じやなくて大船だよ」

ミー　俺を抱いたままの愛子が苦笑しながら教えてくれる。

やべえ、すんげえ恥ずかしい。

優子抱いて落ち着こ。

俺がそう思つてみると隣に座っていた優子が膝の上に乗つて俺を抱きしめてくれる。

はふう……落ち着くぜ。

でもこの体勢いろいろとマズい。

『見せつけてくれるのよな』

『くつ！ オレにも彼氏の1人や2人すぐに
できないよお？』

『甘夏！ テメエのふざけた幻想ぶち壊すつ！』

『らぶらぶだにゃー』

『愛子も入らぬのか？』

『いつてき』

『…………！ –（ピクシ）・ヤシハガヘル』

足音はまだ聞こえてないがもうすぐ来るらしい。

黒野つて女子ver.の康太みたいたな。

「優子、さんきゅ。もう大丈夫だ」

「わかつたわ」

「先生はフィールド張つてくれ。

みんなは用意を。

あと、愛子は俺の召喚獣降ろす

「むう、しょうがないね」

渋々ニニ俺を降ろす愛子。

今まであつた オツの感触が名残惜しい……。

『『荆棘の道無限の空無限の荆鎖』』
〔アーロード・インファイト・システムズ・フュア・チエーン
ニア・トレイク〕

早速腕輪を発動し、ニニ俺のA・Tの後輪が荆の鞭になる。

「もひ、腕輪を発動するのかにゃー？」

「ああ、やりたいことがあるからな」

そう言い終えると本体からニニ俺に視点を移し替えた。

手を握つたり開いたりして体の調子を確認すると、僕は意識的に過呼吸を行う。

深く深く、小さく強くノックして、『扉』を一つずつ開くよつに体の隅々まで、奥の奥まで空気を導き入れていく。自分自身が空気になる感覚。

空気は僕。

空気の柔らかさは僕の柔らかさ。

空気の流れは僕の流れ。

たとえて言えばそれは水深20mの世界。

肺にかかる巨大な圧力はいわば高水圧下での空気ボンベ。気圧が高まると空気は急速に体内に溶けていく。……それは実に地上の3倍以上。

大量の酸素は脳や筋肉を活性化し関節を柔らかくする。

しかし、ここで最も重要なのは、普段人体に全くの無害かつ大気の70%を占める『窒素』…！

僕は過呼吸をやめ、息を吐き出す。

コレにより限界まで体内に吸収された窒素はほんの少しの減圧で一気に結合。

体中、特に体の隙間、所謂関節に窒素の泡が発生する。ソレは想像を絶する激痛。

だが、その天然のエア・クッションをはさんだ関節群はその限界可動域をやすやすと超え、『人』の動きすら超える…！
ま、今は召喚獣だけれども。

「これで戦闘準備完了。」

みんなも召喚獣を出して臨戦態勢。

『んじや、行くぞ』

聞いたことのない声が聞こえる。

……俺の口から出た気がするが僕のせいかな?

「……………？」、召喚獣がしゃべった！？

寡黙な黒野が田を見開いて驚いている。他のみんなも田を見開いている。

僕のせいじゃなかつたっぽい。

『どうなってんだ、コレ？』

「辽ちが聞きたいわよ！」

『どうじつ。落ち着け、優子』

「馬扱いはひどこと思つよお

『あ、悪い』

「この子、姫君みたいだね

「やうだな。

宇童が思つてゐることをロイジが言つてゐるのはありえないのか

？

「どりなのかにゃー？」

『まあ、そんなとこだな。

それは後にして、今は迎え撃ちに行くぞ』

「つむ！剣の鍛にしてくれよー！」

「ああ、アイツらの幻想ぶち壊す！」

「この道を選んだことを公開させてあげるわ

「適当に行ぐ」サト「一

「私も」

「2人ともがんばるよ」サト「一

「……………血がたぎる」

「腕輪の餌食にしてやるのよな」

「若い子にばかり任せられませんからね」

……なんぞこの最終決戦前約ノリ?

バカと俺と言語問題（前書き）

禁書読んで思いついた

バカと俺との言語問題

引き続き s.i.d.e // i-i 僕

食堂前廊下

俺たちは食堂の正面の廊下中央に陣取る。

ジドリドリドリドリドリ

『Hロリストたちが来たぞ?』

「Hロリストってなによ……」

俺の言葉に優子が呆れた感じで返す。

『Hロ + テロリスト = Hロリスト』

「ぐ、だらないこと言つてないで『氵を引き締めなさい』

『了解。』

んじや、先制攻撃するな』

そう言つてみんなより前に出る。

「まだ、離れてるぞ?」

「…………当たるの?」

『当たるわ。ま、見てろつて』

ジヤララッジヤララッ

俺は体を荆のよつにしなやかに、鞭のよつにねじり上げ、回転を加速させていく。

ジャツジャツシャツシャツシャツ

速く！
もつと速く！…！

キュッ、パツパツパツ

荆の突起が空気を弾く。

《ヒツ……んのヒ………》

痛みが俺を襲うがそれを耐えつつ速度を上げる。
どいもでも速く！…！…

パパパパパツ

ついに荆は音の『壁』を破りソニック・ブームを生み出す。

《クソがつ！…死につ……曝せええつ…！…！…》

荆の突起全てから発せられる『ソレ』は風を切り裂く荆の『棘』となつてあつとあらゆる敵を撃墜する。

『がつ！…？』
『いきつ！…？』
『あがつ！…？』
『ぐはつ！…？』
『…？』

8人ほどのHロリストに『棘』が突き刺さりなにが起つたのかわからぬまま、痛みで氣絶していく。

『はあ……はあ……。クソえれえ……』

「宇童。お前すごいな。

今の衝撃波か?」

『ふう……。ああ、正解。

よく見ただけでわかつたな』

「まあなつ」

上機嫌で笑みを浮かべる神上。

『ちつ……宇童がいやがるぞ……』

『あのチート野郎がなんでここにいるんだよ……』

『俺たちクジ運悪過ぎだろ……』

『昨日の一の舞はごめんだぞ……』

昨日漬したウンコクズ共が懲りずにまた覗きにきたらしい。

『おい!……なんで宇童が物理干渉できるんだよ……』

『そんなこと聞かされてないぞ……』

『それにアッシュに適うやつははいの中にはないぞ……』

「パニックになつてゐるようだな」

「そうだにやー」

「絶好の機会だよねえ?」

「でも物理干渉できんのよな」

「そうなのよね。ちょっとと不便ね」

「空君と先生にやつてもらうしかないね」

「…………先生お願ひ」

「宇童も続けて頼む」

「わかりました」

《了解》

上から亞愛、御門、ミカソ、盾宮、優子、愛子、黒野、神上、日本史教師、俺。

日本史教師……卑怯者ってあだ名にするか。別に卑怯じゃねえけども。

卑怯者の召喚獣（以後、ミニ卑怯）は体に鎧を手には刀を装備している。

二刀流とはカツコイイな。

ミニ卑怯と俺はパニックに陥っているエロリスト共に駆けていく。

「これでも剣道を嗜んでいてね。剣の腕にはなかなか自信があるんだよ」

そういつて峰打ちでバッタバッタと倒していく。

やっぱ操作上手いな。もう5人も気絶させてるし。

にしても剣道のこと関係なくね？召喚獣の操作と勝手が違うだろ。

『くつ！？試験召喚！…』

『ちつ！？試験召喚！』

『試験召喚！』

持ち直したエロリスト共が召喚獣を召喚するが

「やつと我らの出番である！」

「テメエらの幻想ぶち壊す！」

「腕輪の効果を味わうのよな」

「愛子！ やるわよ！」

「うん！」

まず最初に攻撃を仕掛けたのは亞愛の召喚獣（以後、アツクア）。敵の密集しているところへ駆けていき、そのまま手に持つアスカロントと呼ばれるアツクアの身の丈を優に越えるほどの大剣を振り抜く。それにより一気に6体の召喚獣が屠られる。

攻撃範囲が広すぎる。剣の範疇を超えてんだろう！？

アツクアに続いて神上の召喚獣（以後、上条）が拳を握つて敵に肉薄する。

武器のメリケンサックで召喚獣の頭を殴ると矢数に差がありすぎるためか、召喚獣の頭が消し飛ぶ。

……えげつない。

そして、腕輪持ちの盾宮の召喚獣（以後、建宮）はフランベルジュと呼ばれる剣を手にもち、赤く大きな十字の入った服を着ている。

「『聖人』！？」

盾宮が起動キーを唱えるが腕輪が淡く光るだけで建宮にはなんの変化もない。

不発か？、と思つた瞬間建宮の姿がかき消え次に姿を現したときには周りにいた6体の召喚獣が細切れになつていた。

康太の『加速』に斬撃の『増殖』を追加した感じか？
敵にまわしたくなえな。面倒そつだ。

ミニ優子と愛子の召喚獣（以後、ミニ愛子）のペアは、武器がレイピアで小回りのきくミニ優子が敵を翻弄し、斧が武器のミニ愛子がミニ優子に翻弄され隙だらけになつた敵を斬り伏せて、1体1体確實に仕留めている。

意外と堅実だな。愛子は猪みたいに突っ走ると思ったのに。

「空君！それは失礼だよ！」

『……悪い』

「明日も相手してくれたら許してあげる」

またやる気か！？……ま、いつか。

《了解》

最後に黒野の召喚獣（以後、ミニ黒野）は遠距離戦用にスナイパーライフル、近距離戦用にコンバットナイフを2本を持っており、今はライフルを構え狙いを定めている。

「..... Have a nice trip. (よい旅を) (一)

「(シ)」

黒野が微笑みながらそう呟くと同時に黒野は引き金を引く。

パシュッ

撃ち出された弾は的確に敵の頭を撃ち抜く。
リロード不要のため続けて狙いを定め引き金を引く。また頭を撃ち抜く。その次も。そのまた次も全て頭だけを打ち抜く。どうやって狙いを定めているのか不思議だ。
もしかして『同化』^{シンクロ}できるのか?有り得ねえ話じゃねえな。

御門とミカンは戦闘に参加せず応援している。

「みんながんばるにゃー」
「頑張つたら私の好感度が上がるよお」
「マックスまでたまつたらイベント発生にゃー」
「あーんなことやーんなもができるよお」

……俺は口づき体型に興味はねえ。逆にその応援は羨ましい。

そんなこんなで殲滅終了。戦死したエロリスト共は鉄人に連れていかれた。

んじや『シンクロ 同化』解除。
本体へ視点が戻る。

side out

side 本体

「みんなお疲れ。

……あ、なあ。思つたんだが今風呂に入つてゐる女子つているのか?」

「気になるのかにゃー?」

「あ?うん。そうだな」

「やっぱり宇童君も男の子なのよな

「健全で良いではないか」

「オレは裸見られたくねえ」

「……なんか勘違いしてんだろ?」

「そんなことないよお」

「…………（口ク口ク）」

なんで息ピッタリなんすか?

「別に覗きに行くとかじやねえんだぞ?」

「Let's 宇童語に訳してみよ!」やーーー!」

『イエーイー!』

なんか始まつた。愛子と優子も混じつてゐる。

『ルールは簡単、今言った宇童君の言葉を訳すだけにやー』

「そのまんまの意味なんだが……」

『それでは始めるにやー。まずは

「はいはー！－ボクからー！」

『亞愛からにやー』

愛子の主張を無視して亞愛を任命する御門。

「うむ、わかつた。

『べ、別に覗きに行きたいワケじやねえんだからなつーーー』だ

シントレジやねえ。

『足番だにやー』

『亞愛、空君のことわかつてないね。空君ならいいだよー』

『別に覗きに行くとかじやねえんだぞ？ただ……やりに行くだけなんだ』

『はい、愛子アウト』

そんなに狼じやねえ。

『残念ながら宇童君から初アウト宣言が出てしましましたにやー』

『いい線いつてたと思つたんだけどな』

心底残念そうに立すみ愛子。
いい線もクソもねえよ。

『…………（スクツ）』

黒野が手を擧げる。

『じゃあ次は黒やんにゃー』

「…………今までのようない揃りのないモノじゃない。
…………私の本気みせてあげる。

…………『処女狩りじやい！』

「黒野アウトオオオオオオオオ！」

黒野がそんなこと言うなんて想定外だ。

『本日2人目のアウトがでました。なかなか審査員の宇童君は厳しいですね』

「そうだね。いつもはあんなに優しいのに」

方向性が違うからな。

「キケンなのがダメなようよな。
なら、コレはどうよ？

『俺はオンナに興味はねえ。あるのは幼女だけだ！…』

「口リコンじやねえから」

「いいこと聞いたよお。ならコレだねえ。

『俺はちちちやな男の子に』

「ショタコンでもねえから」

「『俺は俺の娘』」

「それも違えから。

3人まとめてアウトな

「幼女が好きで何が悪いのよな！

あの未成熟なぼでー。まさに神秘！」

「そりだよお！！ショタコンをバカにするなあ！！

あの愛くるしい笑顔お……萌えるう！…」

「マジでやべえ。この異様なテンション、頭叩いたら治るか？」

「宇童。是非ともコレを着てくれ！絶対似合つ！」

「神上がそう言つて、クロスロリ服を渡してくれる。

お前だけはまともだと思つてたのに。」

「神上が自分で着たらいいじゃねえか」「ダメだ！宇童に着てもらわないと…」

俺が目を見て言つと意志の籠もつた眼差しで見返して言つ。……なんか断れねえ。

「……気が向いたらな？」

「ありがとうな！」

カメラの用意しねえとつ…！」

カメラを取りに部屋の方へ走つていった。

誰も今着るとは言つてねえよ。

……はあ。すんげえ疲れた。

『さらにも3人もアウトをもらつてしまい計5人がアウトですにゃー。残すところあと1人ですにゃー』

「コレつて当てもいいんでしょう？」

「ああ、いいぞ。てか、いい加減当してくれねえとグレれる

「じゃあ当てるわね。」

『別に覗きに行くワケじゃねえからな？ただ入つてる娘がいねえんだつたら守る意味なくね？』よね？「正解！…

と、いうワケでどうなんだ？「わからないわね。もしかしたら入つてるかもしれないし」「入つてないかもしない、か。どっちかなら守つた方がいいな」

そこへケータイをズボンのポケットに仕舞いながら卑怯者が俺たちに告げる。

「皆さん。今回の件の首謀者たちが取り押さえられたようなので解散していいですよ？」

「お？マジか。

康太にリベンジできなかつたのは残念だな……」

「空君。優子。部屋に戻ろ？」

「わかつたわ

「了解。さつきの変なゲームも終わりな？」

「今回の勝者は優子でしたにゃーっ！…」

無理やり締めくくる御門。

「んじや、お先に失礼する
「宇童君。そつちは女子部屋の方なのよな？」
「俺、今優子のところに泊まつてつから
「え！？木下のところに泊まつてるのか！？
「なんでえ？」
「きっと彼女と一緒にいたいのであるつ
「あわよくば3人で乱れたりするにゃー……」

「…………す」「へ、いい（ポツ）」

妄想力豊かだな。

「ま、そんなとこだ」

本当はもつとガキっぽい理由だが。別に言つ必要もねえだろ。

「それじゃ、また明日」

俺は手を振つて去つていいく。

バカと俺と睡眠不足

強化合宿4日目
000

「へー……へー……」

体を酷使する『荆棘の道』^{ヒート・ロード}を使ったフィードバックでぐっすりと眠つていい俺のこと。宇童 空。

そんな俺にもそもそも近づいてくる影が一つ。
その影は俺の布団に侵入し、仰向けに寝ている俺にのしかかって弾んだ声で告げる。

「モーライクン、起きてー？」

「へー……へー……」

「起つ、起つ、起つ！」

「へー……ん？」

再びそいつ言ひながら今度は俺の上に寝そべったまま跳ねる。

目が覚めるが頭が覚醒しきつておらず、今の状況が飲み込めない俺。

「…………子？」

「正解

や、相手してよ？」

「なんの？」

「えつちの」

……昨日の今日でマジでするとま……。
性欲持て余してんな。

「ボクは狼なんだよ？がおー」

『がおー』のところに萌ゆる俺。

「狼は狼でも子狼だろ？わんこと変わらねえ」「そんなことないもん。ボクは立派なハンターだよ」「強がんなつて」

そう言つて頭をポンポンと軽く叩く。

「そんなこと言つて昨日ボクに食べられたクセに……」

愛子はベー、と舌を出す。

「あれはたまたまだる」

「たまたまがどうか今から試してみたらこうよ」

そう言つてもそもそも布団の中へ潜り込んでいき my son のあたりで止まる

「ひー？」

my son の頭に噛みつかれた。

くつー！ my sonの防御が紙装甲と知つての狼藉か！…
てか脱がすな！

「そのお願いは聞けないよ？
てことだから逝つちやえつ」

かふつ、はむつ、はふつ

「……無念……なり」

その後、my sonは一方的に躊躇されてお逝きなれる。
ぐつー！屈辱だー！

『荆棘の道』のフィードバックさえなければ自由に動けたのこつー！

「言訳は聞きたくないよ？」

愛子は嬉々とした表情で告げる。

「……たとえmy sonが死のうとも第2、第3のmy son
が現れきつと愛子を倒すだろつ」「じゃあそのたびに食べてあげるよ
「来るなら来い！ my sonは不滅だー！」
「ふふつ、強がつていられるのも今の内だよーすげに倒しちゃうん
だから」

やつぱいながらmy sonは近藤さん（全国の近藤ひよコメンー）
をつせる愛子。

「my sonは今日、魔王へと進化するのだ！」

「魔王は勇者に倒されるのがお約束だよ！」

突如、魔王もといmy sonが締め付けられる。

「ぐう……」

my sonが……！

「あれ？ 窓、棚、もう、苦しき、どうだよ？」

「まだ……まだ……！」

my sonを締め付けたり緩めたりと一息に逝かせず、じわじわと苦じめる愛子。

くっ！ my sonの紙装甲ではやっぱ無理だつ……！

グハッ、と吐血して再びお逝くなるmy son。

「あれれ？ 空君もう終わり？」

ボクはまだまだこれからだよ？」

やつやつと話していくと

「……空……騒がしこわよ……？」

優子が起きてしまったらしく。寝ぼけっていて俺と愛子が向やつてゐるかわかつてないっぽい。

「あ、優子起きあやつた
「悪い」

手を頭に当たあちやー、てな感じで愛子が言つ。

「……………。

愛子だけズルいわよ！私もするわ！」

しばらくボーッとしていると急に優子が大声をあげ、襲つてくる。

……あれ？ 優子ってこんなキャラ

アーニーッ！？

俺の記憶はここで途切れた。

食堂

ただいま食事中。

愛子と優子に生氣を絞りとられ少々やつれた俺は朝食のサンドイッチをチビチビと食べている。

俺の両サイドには俺とは逆にツヤツヤした肌に生氣のあふれた愛子と優子が。

「げつそつしてあるよな

「どうしたんだ？」

テーブルを挟んで向かい側に座っている盾宮と神上が心配そうに見

てくる。

「……2人に生氣吸い取られた」

そつ言つて愛子と優子を指差す。

「もしかして本当にやったのかにゃー？代表によく気がつかれなかつたにゃー」

「わああ！？すごいねえ！！合宿するんだあ」

「…………見たかった（ガクツ）」「

御門・甘夏・黒野のテンションが高くなる。

……相手にしてらんねえ。

でも、あんだけ騒いでた（？）のに霧島起きなかつたよな。

「代表はボクが空君の布団に潜り込んだときにはいなかつたよ」

……へえ。

「宇童よ。今日は部屋で休んでいる方がよからひ」

「ああ、そうするよ」

亞愛は一番の常識人かもな。
あー、眠い。

俺がサンドイッチを食べながら、うとうとしていると背後から興奮した声がかかる。

『宇童。 じつち来い！』

誰か知らねえが呼ばれたので行ってみる。

「どうした？」

『これ、見てみるよー。』

そう書いて見せてくるのは2枚の写真だった。

1枚目：浴衣姿の姫路と秀吉のツーショット

「……秀吉似合つてんな」

『いや、姫路さんもだろー。谷間見えてんだろー。』

「あー、そうだな」

『デカけりやいいつてもんでもねえだろ。』

『もつと他の反応ないのかよー。』

『……寝不足でそんなハイテンションにはできねえ』

大声は頭に響く。

『そんな疲れもコレ見たら吹き飛ぶだろー。』

「それはあり得ねえ」

『は？まさかお前男に興味が』

「変な誤解すんな。俺は普通に女子が好きだ。
ただデカすぎるるのは別に好きじゃねえってだけだ」

『そういうことか』

「ああ」

2枚目・浴衣姿の霧島とハーフパンツ姿の島田

『流石の宇童もコレなら元氣出るだろー』

「出ねえよ」

『は? なんでだよ! ハーフパンツの娘はともかく霧島さんはパーフエクトだろ!』

島田ナメられてんぞ。

「お前知らねえようなら言つておくが霧島には旦那がいるんだぞ?」

『は? ハアアアアアアアアアアアア! ! ! ?』

「つるせえ」

『誰だよそいつ!』

俺の肩を持つてぐわんぐわんと揺する。

「揺らすな。気分悪くなる」

『あ、悪い。で、誰なんだ?』

「そいつの名前は」

『そいつの名前は?』

「坂本 雄一だ」

『坂本 雄一だ』

.....「ロス! ブッコロス! コロスコロスコロスコロスコロス

なんか狂った。

ま、いいや。

その後サンドイッチを食べて、昼まで寝た。愛子と優子は普通に寝かしてくれた。

俺の調子を見てやりすぎたと思つて反省しているらしい。

起きてからは保健体育の勉強に励んだ。

バカと俺とシンクロ率

20：00

俺がいるのは女子大浴場前廊下。

この階にいるのは保健体育の大島　武（以後、武）、鉄人、昨日作戦を共にした卑怯者除く8人のみ。

昨日の8人はそれぞれを得意科目の教師のところに分けようとしたが全員一緒にいいとのこと。

学年主任の高橋　洋子や霧島などは1階の階段付近に、その他も各階の階段付近に散らばっている。

もつすべエロリスト共が侵攻してくる「うだうだうがぶつちやけると今回阻止する気はねえ。

女子生徒が一人として入つてねえからな。全員阻止するのに回つてる。

ま、風呂に入つている女子がいるように見せるため、全体の4分の1くらいは自分の部屋で待機しているが。

「誰もこないね？」

「工藤、焦るなよ」

そわそわしている愛子に神上が一言。それに続いて亞愛が告げる。

「そうである。

『急いで事務仕損する』と言つよつじんと構えて待つておく方がよからう」

「……うん、わかった」

やっぱ愛子は特攻の方がいいっぽいな。

「なあ、この中で何かの教科が400点超えた娘いるか？」

俺は毎度のことながら全科目400点オーバー。

「私は世界史が超えたのである」

「オレは化学」

「…………数学」

「古典が超えたにやー」

「残念ながら今回は超えなかつたのよな」

「私も超えなかつたわ」

「私はあ、現代社会が超えたよお」

「ボク初めて保健体育が400点代に乗つたよー！
空君と勉強したおかげだね」

上から順に亞愛、神上、黒野、御門、盾高、優子、ミカン、愛子が
言つ。

ほとんど全員が腕輪持ち。

……戦力が集中しそうだろ。

「お、そうか。愛子おめでと」
「えへへ」

頭を撫でてやると照れたように笑みを浮かべる。

「おそらく、坂本・明久・康太・秀吉の主犯格バカ4人が真っ先に
ここを目指してやってくる」

「その4人を倒せばいいのであるな」

「いや、倒すのは3人だけでいい」「それはどういうことかにやー？」

「主犯格の1人の康太は俺がこの手で潰すからな」

これは譲れねえ、と言葉を付け足す。

「因縁の対決みたいなあ？」

「ま、そんなとこだな。」

あー、愛子は俺について貢うぞ

「え? ボク?」

「ああ、そうだ。もし俺が康太を潰しきれなかつたときは愛子が潰してくれ」

「うん! わかった!」

元気よく返事をする愛子。

「Fクラスのヤツらが3人か」

「…………… 樂勝」

「あのバカ共をナメてかかると痛い目みるぞ?」

……『バカ共』って言つてる時点で俺もアイツらをナメてたのか。
それで負けたんだな。ふむふむ。

「腕輪持ちはいないのである?」

「腕輪を持つてねえからつて弱いワケじやねえよ?」

「その言い方だとお、その3人が強いみたいだよお?」

「実際強えよ。」

坂本と明久はコンビを組ましたら腕輪なしで戦うと絶対勝てねえ。
どんなに点数とってもな」

「そんなに強いのかにやー?」

「ああ、文化祭のときに実証済みだ。
ま、油断しなけりや問題ねえよ」

そう、最初っから徹底的に潰しにかかれば問題ねえ。
もう、油断はしねえよ。

ガガガガツキンツキンツ
ドゴツ、ババババババツ

1階の方が騒がしくなってきた。
早え、もう来やがったのか。降りてくるのも時間の問題だな。
ま、潰してやるだけだがなー！

「試験召喚！！」

『Fクラス 宇童 空』
保健体育 871点

二十九

「字童…じりやつたらそんな点数がとれるんだよ…?」「アホにゃ…!アホがいるにゃー…!」

アホアホ言うな！

「………… キングオブスロ KE BE」

保健体育ができるからってスケベじやねえから。

「ははは…… 「レはあり得んのよな…………？」

「ボクの倍はあるよ！？」

「お花畠が見えるう！」

「やっぱ空つて規格外ね…………」

「つむ……」

なんかみんな苦い顔をしている。
ミカンに至つてはラリつてゐる。

ま、ほつと。』

『^{シンクロ}同化』――

視点は――俺へ。

s.i.d e――俺

『腐海の道無限の空無限の悪夢』
スマラード インフィニティ・オーメモスコア・ラスト

俺は腕輪を発動すると汗が吹き出る…… のではなく液体が体表面に
召喚され続ける。

俺は『^{シンクロ}同化』中、本来ないはずの召喚獣の匂いを感じることがで
きるため汗だと思っていた液体はそれ特有の臭いがないために別の
何かだという結論に至った。

康太と戦つたときは『同化』^{シンクロ}を解除していったためわからなかつたが。

それよりもこの謎の液体は何故かいつものように霧状にならない。
どうやつたらなるんだ？霧になれえ、とかでいいのか？

ジユワッ

蒸発したような音とともに液溜まりから霧ができる。
マジでできるとは……。

蒸発したような音がでたのはアレだな。霧つていうのは空氣中に浮いた極小の水滴だし、一度液が気化して水蒸気（？）になり、それが俺を覆つたところで自動的に露点に達し、霧みたいになつたんだろつ。

思つただけで状態変化するとはすんげえ便利。
これなら普通に固体にもなるんじやね？

『固体化』

ピキピキピキとこう音と共に俺の足下の液溜まりからシララのよつな形の氷柱（？）が生えてくる。

おおっ！…やつぱできた！…

…でも『バーサーカーモード』みたいに剣とかじやねえな。

剣を想像して再度『固体化』してみるができるのはシリカのみ。
ふむふむ。アレは『バーサーカーモード』限定か。

あ、言い忘れていたが今回は『同化』^{シンクロ}したまま『バーサーカーモー

ド』を発動するつもりだ。

本来、『バーサーカーモード』は発動すると暴走状態になつて制御不能になつちまうが、無理やりにでも制御しねえと康太には勝てねえ。それに本体にどう影響を『えるかわからねえけど康太に勝つためには『同化』したまましてもしゃあねえ。

『バーサーカーモード』でスピードを底上げしつつ、精密なコントロールがねえとまた殺られちまつ。

「あれ？ 空君は？」

「さつきまでいたわよね？」

「うむ。どこに行つたのであるつか？」

「トイレにでも行つたんじやないかなにやー？」

「こんなときに行くかなあ？ それに召喚獣置いてそこまで離れられるのや？」

1人考え込んでいるとみんなの話し声が耳に入る。
あ？ なに言つて……は？

俺は本体のいる方に目を向けるもそこには何もない。

『……どうなつてんだコレ？』

「自分でもわかつてないようよな」

盾富の言葉の通り、今の状況を理解できていない俺。

……もしかして、マジで『同化』したのか？

最近、一体感が増してきていたと思つたが急に「止まついく」とせ……。

まだ、味覚だけはわからなかつたハズだぞ？ もしかして……。

『……愛子飴とか持つてるか?』

「え? あ、うん」

『ソレくれ』

愛子に向けて手を突き出す。

「もうひとつあるの?」

『俺が食つ』

「召喚獣が食つのか? 無理だろ?」

『無理だつたら吐き出せばいい。て、ワケだから飴くれ』

もう一度、愛子に向けて手を突き出すと飴を手のひらに置いてくれる。袋をのけた状態で。

気が利いてるな。

ぱくつ、もぐもぐ

……あ、甘い!!

「飴が甘いのは当たり前なんじゃないかしら?」

「……ん? 召喚獣って味覚感じるのか?」

「……そもそもここに宇童がおらんのになぜ普通に会話ができるのよな?」

「五感がリンクしているとかあ?」

「そんなことあるのかにゃー?」

御門の間に答える者が一人。

「…………五感のリンクは有り得る」

『やつぱ黒野……』

「…………（「ク「ク」）」

やつぱ『^{シンクロ}同化』ができるのか……。

「…………どこの？」

「…………私の狙撃、召喚獣にしては正確すぎると思わない？」

「うむ。確かに」

「それが五感とリンクしているため、と書いたのかしら？」

「…………（「ク「ク」）」

「こいつからできるようになつたのか？」

「…………わからない。気がついたらできるようになつてた」

ふむ、自然にできるようになる」ともあるんだな。
俺は気になる」とを聞いてみる。

『黒野、進行具合はどうのくらいなんだ？』

「…………進行具合？」

ん？わからねえのか？

なら……

『リンクした五感はなんだ？』

「…………視覚」

『それだけか？』

「…………？（「ク「ク」）」

いまいち分かつていねえっぽい。

だんだん進行していくもんじゅねえのか？なら、俺のはなんだ？

「突然黙り込んでどうしたのであるか？」

『……あ、いや。なんでもねえよ』

「悩んでるんだつたら相談にのるわよ?」

「ボクも」

『2人共さんきゅ』

「ウチらも相談にのるのよな」

優子や愛子以外もみんな助けてくれるっぽい。

『みんなさんきゅ』

「それじゃそろそろ定位置につくかにやー?」

「ああ、そうするか」

『あ、誰か俺のとこに大島先生呼んできてくれ』

「わかつたあ。

「じゃあねえ」

みんなが散らばっていく。

『……この液体のこと、誰も触れなかつたのは優しさかな?』

液溜まりの中心に突つ立つてこむ俺のその姿は虚空に消えていった。

バカと俺と狂戦士

s.i.d e // — 僕

『よお、お前らよく来たな』

俺は階段を降りてきた主犯格の4人の坂本・明久・康太・秀吉に告げる。

液溜まりは俺の半径1メートルより外には見えない壁に阻まれたように出れないらしく溜まり続けている。現在膝くらいまで浸かっている。

「召喚獣がしゃべってる！？」

『明久。その件はもう経験したからいらねえ』

そう言ってやるとなにか言いつぶるが無視。謎の液体のことにシシ「//」をいれないのは優しさか？

「空はどこにいるんだ？」

『お前の田の前にいるだろ?』

「コレは召喚獣だろ」

『……お前らの見えないところから操つてる』

信じねえから嘘ついてやつた。

『俺は康太以外に興味ねえから先に行つていいぞ?』

「…………お前らは先に行け。」

「ムツツリーー、相手は3人だぞ?」

『安心しろ。俺と康太の一騎討ちだ。武（大島先生）と愛子は手を

ださねえから》

「イツらがくる前に武にてることを防ぐてあるから手はださねえ。ま、俺が負けたら戦うと思つが。

「…………先に行け」
「…………わかつたぞい。あとで必ずくるのじやだ」
「…………ああ。
…………試験召喚」

黒の忍装束を身に纏つた陸奥璃威児が魔法陣から姿を現す。

『Fクラス　土屋　康太
保健体育　774点

VS

Fクラス　宇童　空
保健体育　871点』

「…………ー?」

「ムッシリーの点数もそうだけビ空の点数も教師を超えてるよー。」

「じつやつたらいの短期間で400点以上も上がるんだよーー。」

さつき話してるときから俺の頭上に浮かんでたんだが気づかなかつたのか？

「コレは援護にいった方がいいじゃろーー！」

「そりはいかないよ。もし土屋君の援護にいくんならボクと大島先

生が相手をするよ?」

俺と主犯格の残り3人の間に愛子と武が割り込む。
武がさつきからもなんも言わねえ。

「くつ！ ムツツリーーー絶対勝てよー！」

『理想郷』はもう目の前なんだから負けないでね！！

[二] せきに

康太が答えると3人は曲がり角を曲がり大浴場の方へ向かつていつた。

それを見届けて俺は告げる

『お夕食おいやせ!!』

卷之三

起動キーに反応し、俺の頭から一ソト帽を突き破つて2本の角が生える。

ビリッシュ

俺の咆哮に大気が震える。
上の階にも響いているだろう。

『バーサーカーモード』の影響で意識が混濁する。

『グルツ！』

俺の唸りに反応し、膝まである液溜まりから禍々しい翼とアックアのアスカラロンほどの大さの無骨な灰色の巨剣が2振り召喚される。今日は甲冑はない。

前回と武具が変わっているが俺はそれを認識できない。

それを見て康太が亥く。

「……………変わつたのは格好だけか。興醒めだ。速攻で終わらす。
『加速』『加速』『加速』。影分身の術」

前回と同じように陸奥璃威児が分身して俺を取り囲む。

「..... 黒き閃光」

瞬間、すべての陸奥璃威児の姿がかき消える。

ザンツシュバババツ

俺は防御する暇もなく体中を刻まれる。

痛みに叫ぶ俺。
だが

つ！？ぐああああああああああああああつ！！

決して小さくはないダメージを負つたが痛みのおかげで俺の意識が

浮上する。

そのためか翼と巨剣が霧散する。

クソがつ！！康太の野郎切り刻むとかえげつない」とやがつて
！！滅茶苦茶痛えじやねえか！！

「…………『加速』

「…………「コレで終わりだ」

武器のない丸裸の状態の俺にトドメを刺そうと攻撃を仕掛けてくる
康太。

なつー？クソがつ、ツララでもなんでもいいから生えてこいつ！！

半ばヤケクソになつてそう念じる俺に応えるように、液溜まりから
無数のツララと武器が生えてくる。

「……………？」

キキキンッ、ザクッ

生え始めの最初の数本は往々なしていたが急増する武器に捌ききれなくなり陸奥璃威児の左腕に小刀が刺さる。それと同時に分身も消える。

「…………くつ！！」

康太は苦悶の表情を浮かべ、陸奥璃威児を急いで俺から離れさせる。それに対し俺は安堵の表情を浮かべる。

ふう……できてよかつた。
てか剣ができるようになつてゐる。『バーサーカーモード』にしかでき

ねえつていう予想は当たつたっぽい。

想像すれば翼とか武器とかできんのか？

そして俺は想像する。

想像するのは白銀の翼。フクロウのように羽音を隠し、ツバメのように疾い翼。

そして武具。……武具はこの便利液体を氣化させてその時々に武器にすりやいいや。

んじや、生えろ！

バサツ

『おおつ！？生えた！？』

想像通りに白銀の翼が生え、液体は氣化したためか液溜まりが無くなっている。

『んじや、おとなしくくたばれ康太！？』

俺は無音で羽ばたき姿を消す、と言つても高速で天井スレスレまで飛んだだけだが。

「……………！」に行つた！？

急に動きが変わったため俺を見失い困惑して隙をつくる康太。

その隙をついて俺は陸奥璃威児に向かつて滑空しながら無数の剣を召喚。

そして陸奥璃威児に接触間近で一斉に放つとズガガガガガツと墓標

のように床に突き刺さるが

「…………くつ……」

串刺しにしたと思ったが間一髪『加速』を発動して剣の雨から逃れたらしい。

……『加速』は厄介だな。まずは動きを封じるか。
なら

『『鍵の墓標』』

陸奥璃威児の頭上に漂わせていた便利液体（気体ｖｅｒ）から剣の雨を降らす。

「…………つ！？『加速』つ！？」

捌ききれないと判断し陸奥璃威児は腕輪を発動し雨の隙間を縫つて範囲外に出ようとする。

だが、その隙間は俺が陸奥璃威児を誘導させるために作り出したもの。『剣牢』

雨の範囲外から抜け出したことに対し安堵し氣のゆるんだとこりに剣が陸奥璃威児を格子状に取り囲む。

「…………くつ……」

『その中からの脱出は康太の腕輪じゃ無理だぜ？』

「…………誰がそんなことを決めた！？『加速』『加速』『加速』
つ！？」

ガガガガガガガガガツ

高速で剣を斬りつけるが少々削れるだけ。
だから康太の腕輪じや無理だつーのに。ま、楽に逝かせてやるよ。

『黒髭危機一髪』

無数の剣が『剣牢』に刃を向けて召喚される。俺の手にも1振りの漆黒の大剣が。

そして『剣牢』に漆黒の大剣を向けて告げる。

『終極』

ズガガガガガガッ

無数の剣が『剣牢』に突き刺さっていく。

『『覇』！』

そう言つて大剣を下向きに握り直し思いつきり床に突き刺すとそこから剣の雪崩が発生し陸奥璃威児を飲み込む。

ゴアアアアアアアアアアアアツ

唸りを上げ1つの生き物のように陸奥璃威児を蹂躪したあと無数の剣は虚空へと消えていく。

『Fクラス 土屋 康太
保健体育 0点

V S

保健体育

「おおっ…? やべえっ…!」『バーサーカーモード』解除おおおっ…!!

廊下を埋め尽くしていた剣や俺から生えていた翼は霧散し、角も消え去る。『Fクラス 宇童 空

保健体育 5点

ギツリギツセヒ——フ!!!!

マジ危ねえ……。寿命が10年くらい縮んだ。
折角勝ったのにカツコつかねえな。

『俺の勝ちだな。ま、覗きにこきたいんだつたらいいぞ?』

「…………何を企んでいる?」

『なんも企んでねえよ。別に愛子も優子も入ってねえし阻止する理由がねえ』

「…………恩に着る(ペコ)」

そういうと康太は駆けていく。武は止めないよつだ。

アタアタアタアタアタ

『障害は排除するのみっ…』

『邪魔者はブチ殺せーつ!』
『アガルタ』
『理想的は田の前だーつ!』
『おおおおーつー』

エロリスト共が上の階の女子や教師を倒してやつて來た。

……相手にしたくなえ。植木鉢の陰に隠れとこ。

廊下の角にある植木鉢の陰に隠れエロリスト共が過ぎ去るまで息を潜めようとするが

「ゴロゴロ、ゴロゴロ」

ん？なんだこの音？

エロリスト共の方から聞こえてきたため目を向けると剣が突き刺さったときにできた溝に引っかかって転けている。

……………『マイ』。

そう思つていると愛子や優子、それに神上たちがやつてきて話しかけてきた。

「土屋君相手によく勝てたわね」
「そりだにやー。すごかつたにやー」
「アスカロンに似ていた剣があつたであるな」
「あの剣を召喚するやつは反則だろ？」
「普通串刺しよな」
「土屋君みたいにい、避けられないよねえ」
「天使みたいで綺麗だつたよ」
「……………驚愕」

……………愛子はわかるけど他のみんなも見てたのか？

「ええ、 さうよ。

土屋君対空の勝負なのよ？見ないのは損だわ

「金持つてもいいからだつたわ」
《お、それはわんわな》

なんか照れるな。

「 そ う 言 え ば 空 君 戻 つ て こ な い ね ? 」

「なにしてゐるのかにや॥？」

「何をやるか？」

《ま、ちょっと見ててくれ》

「同化」
シノウ
解除。

沈默。

「何やってるの?」

ミカンの問いかけは俺の耳には入ってこない。

『あれ? 二レはなんかの間違したよな? そうであつてくれ! ! !』
『シンクロ 同化』解除おおおつ! !

再び沈黙。

! ! ! !

「…………！？）（ビクシ）」

「い、一体どうしたのであるか！？」

俺は叫ぶ。

？？？』

『……なんで戻れんのじゃああああああああああああああああ！－！－！－？

バカと俺と狂戦士（後書き）

オリキヤラスは機会があればまた出します

バカと俺と人体鍊成

s.i.d e/// - 僕

しばらくパニックに陥つて落ち着いた後。

「どういふことなのよな?」

『『同化』』が『』

『『同化』』つてなんなの?『』

……優子に被せられた。

「…………たぶん、五感のリンクのことだと思つ」

黒野、そのことであつてゐぞ。

「それで『同化』がどうしたんだ?『』

『……解除できねえ』

「でも身体には影響はないのであるう?』

『それは黒野みたいに症状が軽い場合だ』

「その言い方だと宇童のは重いのかにやー?』

「さつき進行具合がどうこう聞いていたことが関係していそつよな

?』

盾宮鋭いな。

『ああ。俺のケースが特殊なんだと思うが、俺は『同化』を使う度にリンクする感覚が増えてんだよ』

「………… 視覚以外も全て？」

『ああ、今は五感全てがリンクしてる。もちろん痛覚もな』
「それってえ、ダメージが全部自分に返つてくれるってことだよね
え？』

『そうだな』

「それなら人体に影響『えまくじりじゃねえか』

「『同化』が解除できなのは全部リンクしちゃったから？」

『たぶんな。

いやあ、まさかマジで『同化』するとほ驚きだな』

ははは、と笑つて黙つ俺。

「じゃあ今日の前にこる召喚獣は子童そのものなのかなー？」

『そういうことだ。ははっ、やべえ』

「笑つていられる状況じゃないでしょーーー！」

優子による一撃。

「、怖え。

「空、それって深刻なことよ？

もしそれが〇点になつたら本当に死ぬかもしれないのよ？」

あー、確かにそうかもな。

「空、死んじゃヤダよーーー！」

愛子が皿に涙を浮かべて黙つた。

『まだ死ぬって決まったワケじゃねえだり？それに試獣戦争をしな
けりやいい話だ』

「それはそつだが元の体に戻れなかつたらどうするんだ?」
『戻らない、なんて言つ選択肢はねえよ。ぜつてえ戻る。

ま、とりあえず学校に戻つたら学園長にみてもうつ』

その後のことは考えてねえけどどうすつかな?

……あ、そういうや視点を変えたらどうなるんだ?

俺は本体があるものと思い、それに視点を移し替えるとするができない。

学園長にみてもうつのが一番手つ取り早そうだな。ふむふむ。
そつ考えていると

『『『割にあわねえーつつ……』』』

エロリスト共の叫び声が聞こえた。

大浴場まで突破したつぽい。

鉄人が負けたのがちょっと驚きだ。

何かに向かつて努力するつてことはカツコイいことだと俺は思つ。現にエロリスト共は大浴場まで自力で突破したしな。
ま、エロリスト共が汗水流して手に入れたものはピチピチモチモチの女子の裸じやなくて賞味期限切れのババア（学園長）の裸だがな。全部知つて通した俺つてなんてワルなんだ。自分のしたことに鳥肌がたつぜ。

合宿明け

『『処分通知

全男子生徒

総勢150名

上記の者たち全員を一週間の停学処分とする

文月学園学園長 藤堂カラル。

……おいババア。なんで俺まで停学なんだよ』

強化合宿も終わり停学処分をくらつた初日、俺は『シンクロ同化』の件も兼ねて学園長室に来ていた。

「ほお……コイツは驚きだねえ。

言葉を話す召喚獣かい

『話そらすなババア。

俺は覗きに参加してねえし。そもそも阻止してただろうが』

「口の悪いガキさね。

そんなことは分かってるよ。ただアンタがちやんとしなかったことを大島先生から聞いてるさね。

それに合宿所の地下をボロボロにしたんだ。それくらいで済ましてやつたことを感謝するさね

『ちつ、まあいい。

それよりも俺の『コレ』は治るか?』

『今のところなんとも言えないさね。前例がないから下手に対処す

れば悪化しかねないよ

そう簡単に解決しないとは思つたが口に出して言わるとなんかくる物があるな。

「今は様子見の段階さね」

ずっとこのままってのはな……。

『なんか仮説とかたててねえの?』

「私が思うに『ソレ』が解除できないのは、本体が『ソレ』に適応するように作り替えられているからさね」

『なんでそう思つんだ?』

「マジでそんなら願つたり叶つたりなんだが。」

にしても研究者としてその意見はどうなんだ?普通あり得ねえだろ。

「どうじつワケかアンタの本体は影も形もなくなつてる。最初は質量を無視して召喚獣の方に吸い込まれたのかと思つたけど切り刻まれたときに血はでなかつたと聞いているさね。

なら有り得るのは分子レベルにあるいは遺伝子レベルに分解されて『ソレ』用に再構築されている途中さね

『話がぶつ飛びすぎじゃね?』
人体鍊成とか洒落しゃれになんねえよ。めちゃめちゃオカルト寄りじやねえか。

『話がぶつ飛びすぎじゃね?』

それに研究者がそんなオカルト寄りの考へでいいのか?』

「召喚獣っていうのは科学とオカルトと偶然でできたモノだつてこ

とを忘れてるのかい？

それに、世界には科学だけじゃどうにもならないことがある。アンタがしている『ソレ』も科学だけじゃ理解できなこりゃね」
『あー、まあそうだな』

「まあ、理由なんてアンタにはぶつ飛んでるくらいがちよハビーこれ
ね。

意外と今から本体が出てくるかもしれないさね」

バチツバチチチチチツ

ババアがそう言つた瞬間、急に空間が放電し出す。

「本当に本体が出てくるんじゃないのかい？」

そうだと嬉しいな。

ブオンツ

不意に耳元で低い音がきこえる。

ん？なんの音だ？そう思い周りを見ていると視界の隅に俺の肩が映り、そしてそれがブレた。

ブオソツブオソツ

『うおっ！なんか知んねえけどやべえ！俺の体がブレてまくってる

!

「ほお、恒田こわね」

ババアが笑いながら言つ。

『他人事だと思いやがつて！』

「他人事さね。

本体に戻れなかつたら骨でも拾つてやるさね。ありがたく思いな

『この調子でいつたら骨なんか残らねえだろーー！』

「うるさいさね。早く逝つた逝つた」

『このクソババア！！覚え ブツンッ』

言い切る前に俺の体が消え去つた。

s i d e o u t

バカと俺と仮想空間（前書き）

今回から数回エア・ギアと絡みます。

セリフ

「…日本語

『…英語

今まで説明のためにエア・ギアのキャラなどで説明していたところ
がありますが、空が知っているのではなく、作者が説明のために使
つてはいるだけです。

バカと俺と仮想空間

s.i.d.e本体

「…………うつ…………。

……知らない床だ」

久しぶりに愛しの *m yōbo* でーに帰還を果たした俺こと宇童 空は見慣れないの床に仰向けに倒れこんでいた。

「よつこいしょつと」

そう言つて起き上がり体の調子を確かめる。

A・T履いてることに気づいたが別段気にすることでもねえだろつ。

「キコキパキパキ

「あー…………。なんか帰つてきたって感じがすんな。
んじやババ……ア……？」

俺はババアに文句を言おつと振り返るとそこにある光景に言葉を失う。

「…………なん……だ……コレ……？」

俺は見上げながらそう呟く。

そこにあるのは巨大な機械。

その機械のモチーフはおそらく女性と龍。
その機械の前方には女性の顔が象つてありそのまま下には龍の顎、あごと

胴体部分には骨が剥き出しの龍のあばら、その側面には龍の翼がイメージして創られている。

機械つて言うより像つて

よ。

周りを一度見てみるとさつやまでいた学園長室ではなく、教会のよ
うな建物の中にいた。

もつ - 一度聞いたら忘れない。

「なんだコレ、何の意味だ？」

「ホンホンホン」

! ?

突如、軽くトラウマになり気味の音が俺とは反対側の翼のそばから
聴こえ、体がビクッとする。

その音が気になり臣大な機械

そこにいたのは男女あわせて8人。タキシードを着ている男意外は全員俺と歳が近そうだ。

『そりで隠れている君、出てきたらいいだわ』

不意にタキシードの男が俺が隠れている方に向いて言う。

つ！？バレてやがる。

素直に出て行つた方がいいよな？もし危なかつたらA・Tで逃げればいいし。エア・トランク

「一の宿二の宿三の宿四の宿五の宿六の宿七の宿八の宿九の宿十の宿十一の宿十二の宿十三の宿十四の宿十五の宿十六の宿十七の宿十八の宿十九の宿二十の宿」

両手を上に挙げて『降参』のポーズを取りながら翼の陰から出でる
人組みに歩みよる。

左目に眼帯をした、青い髪の田つきの鋭い小柄な少年（？）以外は
俺が出来たことに多少驚いている。
眼帯君も俺のことわかつてたのか？

「誰だテメエ？」

小柄な少年（？）に敵意向きだしの声で問われる。

「あー、俺は宇童 空」

「……『宇童』だと……？」

お前、宇童アキラの親戚か？」

「宇童アキラ？違えよ」

俺と同じ『宇童』って名前か。
会つてみてえな、おもしろそうだし。

「で、眼帯君の名前はなんなんだ？」

「……俺はアギト。そしてこいつが

「

少々警戒しながら言い、そして眼帯を左から右に移動させる。

「僕は亞紀人あきとだよ」

急に声が丸くなる。

「……二重人格？」

「正確には三重だよ」

「へえ。すげえな」

人格の切り替えができるってのがすげえ。

「悪い人じやなさそうだし、みんなも自己紹介しようよ?」

亞紀人がそう言つと警戒して離れていた他の奴らが寄つてきた。

「じゃあ、まづは僕から。

僕は御仏 一茶。みんなからは仏茶って呼ばれてるよ

コーヒー色の肌にヘッドホンをハゲた(?)頭につけた巨漢。

「俺は美鞍 葛馬。カズつて呼んでくれ。

よろしくな

「おひ

頭に白い二ツト帽をかぶり、蒼い灰色の目に金髪、おそらく白人と
のダブル。

俺と同じだな。親近感湧く。

次は黒髪で鳥の巣頭(天パではない)の男。

「俺様の名は南 樹。

この『小鳥丸』のリーダーでここにいるやつら全てが我が下僕

「ちょっとまてえつ!..

「あア? しょーがねーな。

オニギリにはパシリのポストをくれてやる
「テメつ、ちがつてんじやねーかつ!..」

オーギリ頭の男はまんま『オーギリ』ってあだ名らしき。オーギリと樹^{いつき}があーだこーだと言い争つてゐるが次の自己紹介が始まる。

「アタシは安達^{あだち} 絵美理^{えみり}。

アイツの下僕じやないからね！！」

「了解」

愛子とは違つた種類の元気な娘。

特徴は髪が肩まであることと『力』のこと。背じやくて胸がな。

続いて黒髪長髪の眞面目^{まじめ}そうで地味目^{ぢめいめ}な娘。

「私は東雲東中学^{しののめひがしあづか}3年5組24番、中山^{なかやま} 弥生^{やよい}です。よろしくお願^{ねが}いします」

中山はそう言ってお辞儀をする。

礼儀正しいな。にしても

「中学生？」

仏茶^{ぶつぢゃ}は中学生に見えねえよ。安達も然り。

「そうだわ。彼らは皆中学生だわ

一番最初に俺に気づいたタキシードの男が教えてくれるけど

「オッサン誰？」

名前知らねえ。

それとオッサンってほゞじやねえけど、この中じゃ断然年食つてる。

「…………私はファル口。旧『眠りの森』の『牙の王』だわさ」
おおひ、オッサンについてなにも言つてこねえ。大人の対応だな。

「『眠りの森』つてなんだ?」

『牙の王』についてはなんとなくわかる。

『王』と呼ばれるつてことは『道』（簡単に言えば人それぞれの技術の特徴のこと）を極めたつてことだ。
ならファル口は『王』と呼ばれるだけの強さがあるつてことだな。
……戦つてみてえ。

俺の中の何かが『戦え！喰らえ！殺せ！』と訴えてくる。

「『眠りの森』^{スリーピングフォレスト}は特AクラスのA・Tチームだわ。」

チーム創つてねえから『特Aクラス』とか言われてもわかんね。

「へえ。そうなんだ。（棒読み）」「…………口ホンツ。」

なんかしかめつ面だ。

「もういいだわ。

皆、特に『嵐の王』……そして『牙の王』聞くだわ

ファル口意外に2人も『王』がいんのか！？

「君達は以前……『塔』の中に招待されたことがあつただわ?」

『塔』ってなんだ?言い方からして普通の塔じゃねえよな。

「実はあの時のキリクは……今日の私と同じことをしようとしてただわ。

君達をこの『スカイリンク空間』で『テスト』しようとな
「……ちょっとまで……」。

……といふことはあの『塔』からでもこのバーチャル空間に接続できるつてことか?」

いつの間にか眼帯の位置が変わり『亞紀人』から『アギト』になつてゐる。

『塔』のことを知つてゐることはアギトが『H』の1人か。

もう一人は誰だ?
それとバーチャル空間つてことはコレは現実リアルじやねえのか。
すげえな。

「あの『塔』どいつもか世界中どこからでも可能だわ」

カツンッカツンッ

不意に背後から足音が響く。

『H』の『スカイリンク』は全てのライダー……全てのA・Tア・トレックが繋がつて構築されている世界なのだからね

その声の主は親切にも口の説明をしてくれる。……ただし英語で。

『よければその先は私に説明させてくれないか?』

俺が振り向いて声の主を見ると

『チエンジだ！』

そこにいたのは次期大統領のジョン＝オハマと+。

次期大統領の外見はまんまオバ？だ。

いえすういーきやん。

+ の1人はボンキュッポンの巻貝ヘアの女性ともう1人は次期大統領と同じ黒人の女性。黒人女性の方はテレビで見たことある気がする。

確かA・Tを使った世界陸上のチャンピオンだったような。

「ああ――――？」

んだ？このやたら歯の白Hー外人は！ひつこんでろツ――」

おおつ！？樹すげえな。

お偉いさんに面と向かってそんなこと言えるとは。

でも大統領のこと知ってる仏茶とカズに取り押さえられてる。

『君達の戦^{バトル}は一部始終見せてもらつたよ。

君達は鉄の勇気と実力を兼ね備えたナイスファイターだ。

素晴らしい戦士たち（グッドファイター）と素晴らしい試合には素晴らしい^{グッドワード}褒美^{ゲッドゲーム}が必要だ』

……まるつきり部外者な俺がいますが……？

『君達は《テスト》に合格し《全てを知る権利》が『えられた』

そして次期大統領は巨大な機械もとい像を指差して言つ。

『この像の中に君達が《空の玉璽》と呼んでいるものが眠つていて。もつと正確に言えばこの巨大ネットワーク《Skyline》こそが《空の玉璽》^{レガリア}の一端なのだよ……』

周りから息をのむ音が聞こえる。

……《空の玉璽》ってなんだ？聞いたことねえ。

1人置いてきぼりをくらつてすんげえ寂しいと宇童は宇童は報告してみる。

……余計虚しくなるだけだな。

バカと俺と侵入者（前書き）

あと1、2話続きます

バカと俺と侵入者

『 といつわけで 長い調査の結果 』

……話長え。クソ長え。

『私は現大統領のモツシュが進めてきた《空の玉璽計画》ともいうべきものの存在をつきとめたのだ！非常に厳しい戦いになるだろッ！！敵は強大だ！！しかし！！この地球で生きる全ての人々のために今！！我々は立ち上がらねばならない！！』

『 YES!! WE CAN!! 』

ドーンと効果音が出そうな感じで締めくくるが如何せん長すぎむ。

『小鳥丸』の面々はアギト以外全員寝てんぞ。

『 !? ハ the 爆睡ッ！？』

「オ、オイッ！起きるだわ……！」

と、とても重要な話してんだわッ……』

樹を起^{いつき}じやうとするファルコ。

「あー……。んん……？」

AKB48はどことなくAK47に似てる……、までは聞いた

「んな話ハナツからしてねえだわッ……」

思つゝそ聞いてねえじゃねえか。

「ひやつひやつひやつひやつ！

まあよくてこんなとこじやねえか?『トイシ』はよシ

「んん……あなたの話はつまり……なんといつか……とても政治的な話?……だよね。

エネルギー問題とか……次世代の世界の主導権を誰が握るのか?……といふことみたいだけど……」

「悪いけど……ソレ、俺らにやあんま関係ねえ話っぽいんで」

『……What?

君らだつて……『空の玉璽』^{レガリア}が欲しくて戦つてるんじゃないのか?』

「ふあおッ。」
「ふふに……ほんなほわせないふあ……（別にそんな欲しくないなあ

）

「あの……私達、特に『空の玉璽』^{レガリア}の正体とかは興味なくて……」

「俺らはただ……『イツ』が俺らを飛ばしてくれるから。

俺達を自分の翼だと俺達を必要だと言つてるから戦つてるだけなん
で」

カズは樹を見ながら少しひ告げる。
……なんか羨ましいな。

俺も気が向いたらA・Tチームでも創るか。

「…………はあ……。

申し訳ありません。……非礼の数々……私からお詫びを……

『……いや……』

巻貝が頭を下げるよつとあるがそれを制する次期大統領。

ちゅうじゆの時

「……ん？」

「……！」

「アギトにファルコビーン……は？」

あまりに突然すぎて俺は自分の目を疑つちまつ。

それはなぜか？アギトとファルコの腹から刃物突き出てつかう。

……マジ意味わからねえ。何事？

キュウウウウウウウウウウウウウウ

『警アラート告！』

『警アラート告！』

『レバ8（レッドシグナル）』

『強制ダウンロード

プログラムが介入中

防壁プログラム中和

『警アラート告！』

突如警告音が鳴り響き光が渦巻く。
なんか出てきそうな予感がするな。

「先走りもほどばしりすぎやで、ガウェイン」

その渦の中から、先程アギトとファルコをA・Tから生えた刃物で
突き刺した、顔と二の腕にタトゥーのある男に声がかかる。
その男は刃から滴る血をピッと払いながら応える。

『アンタらが……ノロマなんだヨ。……』

『なんだよ、もうーー！

僕の分も残しとけって言つただろオーー？

せつかくあのオル力を倒した《牙の王》つて奴を見にきたのにナア

……』

光の渦が消え去り、ガウェインに続き4人の侵入者が現れた。

今言葉を発したのはソバカスメガネの白人。

その後ろにも3人の侵入者が佇んでいる。

たぶん真ん中の腕を組んだ糸目男はここにいる全員の中で一番強え。不気味な空氣を纏つていやがる。

「カツ。

モリガン！マーリン！」

糸目男が小さく笑い、そばに控えていた2人の女性に命令を下す。

ヒュッ

モリガンと呼ばれたのは全身真っ白な女性。

対し全身真っ黒な女性はマーリン。

彼女らに加えソバカスメガネは軽やかに疾走する。

「カズツー！！」

「オオツ」

「パイルトルネード！！」

「『時よ』ーー！」

樹は風をコイル状に操りカズの『時』を乗せて蹴りだすことにより

迫り来る3人の侵入者を迎え撃つ。

樹は『風』、んで力ズは『炎』、と。

こつも『道』がはつきりしてるチームつてのは珍しいんじゃねえか？

ドパッ

「がはッ！？」

「！？」

……は？力業で2人の技破りやがった！？
なら

「喰らうとけッ！！」

trick : Grand Fang Fire Bird

ゴオオオオオ

俺は『炎』の『牙』を放つ。
さつきの樹とカズの技トリックよりは威力は高えぞ？

『Wow!! やるねえ』

あンのメガネ避けてんじやねえぞ！！
それに俺を見下しやがって……！！

クソ野郎が！ぶつ殺してやるつ！！

trick : Ta Eschata Brade Fang Wi

ヒュッゴアアアアアアアアア

風を操つて突風を生み出し、それに無数の『牙』を乗せ、威力を倍増させる。

そこらの奴らじや絶対打ち破れない幅100m高さ50mの『牙』の『巨大な』『壁』。

その『壁』はバキバキと床を抉りながら進んでいく。

『ただ大きいだけじゃない?』

そう言つて『壁』の範囲外に逃れよつとするが

「俺の『道』は『牙』だけじゃねえんだよ!..」

『壁』は意思があるかのように3人の逃げ道を塞ぎ回転しながら閉じ込める。

ま、実際俺つていう意思があるがな。

『なッ!..?』

ソバカスメガネの表情が引きつり、顔の隠れているモリガンとマーリンの2人からも驚いている雰囲気が伝わる。

「残念だつたなウンコクズ共!..!

俺を敵に回したのが運の尽きだ!..!」

風を操ることにより『壁』は回転速度を上げながら3人に急速に迫る。

「挽き肉にでもなつてろー！」

『 く つ ！ ！

そ、そうだッ こんな時にそあのセリフをオオーーッ！！

二三九

『ぐああああああああああーーーーーー

『壁』が紅く染まりながら、中からそんな悲鳴が聞こえる。ナメたこと直つてたから回転速度落として苦しめる」とした。

ゴアアアアアア――、――

「うへえ。グロいな」

波が消え去るとそこには四肢の千切れたゾバカス鱈入りメガネに上半身と下半身がおさらばして内臓がはみだしているマーリン、そして四肢は健全だがほとんどの肉が削ぎおとされ骨が見え隠れしているモリガン。

マーリンもモリガンも オツがなくなつて壁になつてんな。
特にモリガン。Gくらいあつたのに今じやAだ。

『がはつ』

かひゅー かひゅー

ג'נ'ר'

しぶといな『イツル。

「俺つて赤の他人に手加減するほど優しくはねえんだ。それも敵についてワケで、死ね」

冷たく言い放ち、まだ息のある3人に球状に囲むよう切れ味の鋭い『牙』を放ち留める。

「　　『無限の牢獄』^{インフィニティ・ジヨイル}

閉じる……『牙』」

キュウウウウウウウウウッザンッ

ボトッボトッという音と共に床に落ちる肉塊。
それを見ても顔色一つ変えないガウェインと次期大統領に迫つている糸目。

この3人のことを仲間とは思つてなさそうだな。
殺しといってなんだが気に食わねえヤツらだ。

「……今のアギト君の……」

ふと中山の呟きが耳に入る。

どうやらアギトはこの『無限の空』^{インフィニティ・アトモスフィア}を使えるらしい。
ならアギトがファルコの言つていた『牙の王』で確定だな。

『無限の空』^{インフィニティ・アトモスフィア}。

それは簡単に言うと玉靈の能力のこと。

俺の場合、独自で開発した『炎狼の玉靈』^{レガリア}（『炎』『牙』『棘』『

風『インフィニティ・アトモスフィア』の4種類の融合(合)で複数の『無限の空』を発動することができる。

戦^{バトル}に集中して氣づかなかつたが周りが騒がしいな。

俺は次期大統領を守るため糸田野郎の方へ駆けながら周りの話に耳を傾ける。

「2人（樹とカズ）がやられたのにあんな軽々と倒したよッ！…」
「一体なにもンなんだッ？」
「カズツッ！リード持つてたよなッ！…」
宇童のレベル計れッ！…」
「ああッ！…」

樹の言葉を受けカズがリードと呼ばれるA・T使い（ライダー）の戦^{バトル}レベルを計る機械を俺に向ける。

そのアプリを受けターゲットで簡単にダウンロードできるらしいけど俺はしてねえから自分のレベルを知らねえ。

「ピッヂ

「……は？」

「カズツ、いくらなんだ！…」

「……B a t t l e L e v e l ……」、「249」

おおっ！！なかなか高いな。

初めて数ヶ月（いや、2ヶ月くらいか？）だってのによくここまで

あがつたな。

ハツ、成長速度に自分でもビックリだ。

「何イツ！？俺らとあんま年かわんねエのにーー！」

「宇童君、君はなに者なんだい？」

仏茶が警戒心バリバリで尋ねてくる。

「あー……俺か……？」

なんて答えよう？

ただの高校生？ただの迷子？それともただのA・T使い（ライダー）？

うーん……。『ただの』っていうのは合わねえか。

そうだな、なら

考えが纏まり俺は口を開く。

「俺は『炎狼』宇童 空。
『道』は『獣の道』。」

そして

『煉獄の王』

「アアアアツ

突如、俺の背後に炎を纏つた巨大な銀の狼が姿を現し、駆けている俺に追従する。

この狼の正体は『影技』。

『影技』は『王』の素質のある者にのみ現れる…… ようなによう
な。

「安達つ！…大統領と一緒に伏せりつ！…」

trick : Leviathan

安達と次期大統領が伏せるのを確認せずに糸田野郎にバリ濃いめの『牙』を放つが

「ふんつ！…」

パンツ

糸田野郎は手を合わせて空氣を破裂させて『牙』をかき消す。

は……！？マジかよ！？濃いめに撃つたつてのこつ！…

風系のライダーだからってそんなことできるもんじゃねえぞ！…

「ハエによつはないんや。消えとけ」

そう面倒くわそうに叫ぶると、床を碎き、その破片に風の『面』をぶつけ弾丸のように飛ばしてくる。

ヒュンヒュンヒュン

「クソつたれがつ！…」

対して俺は、風の『面』を『時』で撃ち出し、弾丸と化した破片を撃墜する。

「ああ…… よおやるの……。ワイの技を防ぎやるとば。^{トrick}
ま、ほんなん防げれへんでワイの相手しよ嘗つんならただのクズや
けどな」

……そのスカした顔ぶん殴りてえ。

「スカしてんじやねえぞ、」の糸田つーー。」

trick: After Burner

ボンツボボツ

俺は元いた場所に『炎』と衝撃波を残して消え去り超高速で糸田に迫る。

trick: Grand Fang Fire Bird

そして背後に周り零距離で『炎』の『牙』を放ち糸目を灼く。

モーニング娘。'11

「『無限の牢獄』インフィニティ・ジャail」
牙「閉じろおおつーーー！」

キュウウウウウウウウウツザンツ

「がはあつ……！」

「……コレがつ……お前の……真の……『力』つ……か……！」

そつ言つて糸目は倒れこむ。

……なんか呆氣なくねえか？

念には念を。

trick : Fenrir Eschata

人1人分の厚みのある俺の最強で最凶の『牙』を糸目に放つ。この『牙』は切るつて言つよりは粉々にすり潰すのに向いてる。

ベロンッギヤギヤギヤギヤツ

床『だけ』が抉り削^{えぐ}られる。

「つおッ！？……危ないやつちやな。

オイ……もう楽な死に方はできへんぞワレ

「それはこいつちのセリ……！？」

なんだコレー？体が動かねえ！！

声もでねえ！！

「……ガウエインッ。大統領殺つとけッ」

『……遊んでる内に逃げられた』

「はア？なに言つてんね……ん……？」

糸目は次期大統領がいた方に目を向けるとそこには誰もいない。

いつの間にか樹たちもいなくなつてゐる。

……あれ？俺ヤバくね？

「はア……。まつたくいらん仕事増やしあつて。
……アレ、自分のこと『煉獄の王』とか言によつたけどぬい『炎』
やつたわッ。
力カツ、アレで本氣^{シングロ}^{シングル}なら死んどけッ」

やつ^{シングル}とやつ^{シングル}をと同じように俺に破片を飛ばしてくれる。

クソがつ！死んでたまるかよつ！

一か八かつ！！

『試獣召喚』つ！！

俺の前に見慣れた魔法陣が展開され俺の召喚獣が出てくれる。

『Fクラス 宇童 空
日本史 427点』

よつしゃあつ！出できたつ！

「ぶはつ。そないな人形だして何する氣やねん。

お人形遊びでもするんか？その年でキモいやつちやのう。力力力力
カツ」

なんどでもいいやがれつ！！

『^{シンクロ}同化』つ！！

本体が消えミニ 俺に視点がかわる。

それと同時に俺がいたところを破片が通過した。

s i d e o u t

バカと俺と絶対絶命

s.i.d e l l i 俺

ヒュンヒュンヒュンッ

俺の頭上を破片が過ぎ去る。

怖え……もう少しで死ぬところだった……。

「ど！」に逃げよつたんや、あのハエはッ！…」

糸目が本体に氣をとられている間に俺は戦う準備をする。
それは『荆棘の道』（ハヤ・ロード）を100%扱うための意識的に行う過呼吸。

深く深く、小さく強くknockして、『扉』を一つずつ開くよう
に体の隅々まで、奥の奥まで空氣を導き入れていく。

俺は過呼吸をやめ、ブハアと息を吐き出す。

コレにより限界まで体内に吸収された窒素はほんの少しの減圧で一
気に結命。

体中、特に体の隙間、所謂関節に窒素の泡が発生する。

ピキッパリッ

激痛。

だが、その天然のエア・クッションをはさんだ関節群はその限界可
動域をやすやすと超え、『人』の動きすら超える！！

さじ、こつからが俺の『本氣』だ！！

『『荆棘の道』・無限の空無限の荆鎮』』

咳くよつに血うとA・Tの後輪がジャラッと荆の鞭に変化する。その音に気づき糸田は俺の方に目を向ける。

「ん？ カツ、人形が勝手に動いとるわ」

『人形じゃねえよ。人間だよ！』

「……お前、さつ ものハエか？」

『ハエハエ言つてんじゃねえよ糸田えつ！』

そう叫びながら糸田に迫り蹴りを放つ。「なんや？ なんも考えんと突っ込むたあお前あほちやうか？」

手をパンツと畳毛を空氣を破裂させるが

『ナメるなよ』

毒のつまつた棘の生えた、『風』を切り裂く荆の鞭。それが『荆棘の道』。

ギュルルッバチンッ

俺の荊が空氣を破り初めて糸田に傷を負わす。と言つても頬から血が一筋流れただけだがな。

『もう一度言ひ……。

ナメるなよ』

「口だけこつちよ前やな。

ならワイヤも『本気』だしたるわ」

パキッシュペッシュペッシュ

……は？俺夢でも見てんのか？

アイツの足から指の剣といつか絆が生えてるやつが見えるんだが…

…。

「ふはッ！なんやそのアホ面はッ！…
ワイを笑い死なせる氣かッ！！」

《つ……ーー》

ひとまずあの足をなんとかしなえと。

「ワイヤの呪を解いてひきぬけには無理やけにやめとした方がええ
で」

ピンポイントで当てきやがった。
だが

《誰がそんなこと決めたつ！

やつてみねえとわかんねえだろつ！…》

「誰が決めたとかそんなことちやうねん。
ワイがコレだして負けたことなんて

ないねん」

ガシュウ

速つ！？！

俺の体が右肩から左脇腹にかけて大きく斬られる。

「ま、コレ出さんでも負けた!」などないけどな。
ほな、さいなら『煉獄の王』！」

俺に目掛けザンッと足を振りおろす。

つ！？『**同化**』シンクロ解じ

グシャツ

side out

バカと俺と絶対絶命（後書き）

エア・ギアとの絡みは一旦終了

バカと俺との白い部屋

s.i.d.e 本体

何だかふわふわ漂っているような感じで心地よい。
そんな中閉じていた目を開くとそこには雪ぐ……ゴホンッ……真っ白
な空間だった。

まだ『スカイリンク』とか叫び空間の中か……?
……あ、そういやあの後どうなったんだ?
俺死んでないっぽいし。

『それについては俺が答えてやるぜ』

最近聞き慣れたミニー 僕の声が足元から聞こえてくる。
『シンクロ 同化』してねえのになんでしゃべれんだ?

『それは秘密』

俺によじ登りながら人差し指を口の前で立てて叫び—— 僕

仕草が人間みたいだな……。
……てか会話が成り立ってる気がするんだが?
口に出てたか?

『兄貴はなんもしゃべってねえよ。ただ俺が兄貴の心を読めるだけ』

「勝手に心読むな、プライバシーの侵害で訴えるぞ?」

それと『兄貴』ってどういうことだ?』

『そのまんまの意味だぜ。』

『俺たちは兄弟も同然なんだぜ、兄貴^{ブランザ}?』

「そう言ひてどうや顔をしてくる。

『『わかるだろ?』みたいな顔されてもわからんねえよ』

『要するにだな、秘密を共有するのも兄弟のたしなみつてことだ』

『意味わからんねえ』

『はあ……いちいち文句ばっかだな』

……「イツ……！

『しゃあねえ、ちやんと教えてやるよ。

兄弟つて言つのは、俺と「イツ」は一心同体だ、だのなんだのと兄貴が言つてたから』

……あー、合宿のときか。

俺が自分で時いた種つてことか。

『わうこうひつた』

「……話変わるが、なんで俺つて無事なんだ?』

『えーっとな、あの時確かに踏み潰されたんだが、兄貴は解除した後で俺だけグシャツと』

「マジかっ!! 死ななくてよかつた……』

生きてるひつて素晴らしいー!!

『おい、俺の心配しろよー!!』

「生きてんだからいいじやねえか』

『まあ、兄貴が死なねえ限り俺は死なねえけど心配されてえんだけ

なんかガキっぽいな。

《そりやそうだ。

俺、生まれてからまだ1年しか経つてねえガキンチョだぞ？1歳児だぞ？赤ちゃんだぞ？

世話をしの口う

世話を……子育て……か。…………優子と子育て…………愛子と子育て……

……なんかいいかもしんねえ。

「しゃあねえな。家に帰るぞ」

《うん！……わかつたパパっ！！》

「ぶふっ……お前何言つてんだ！？」

《こいつには形から入る方がいいだろ？》

「それにしても不意打ち過ぎるだろ！？」

《細けえこと気にする男は嫌われるぞ？》

「ぐうっ……！」

1歳児にこんなことを言われるとほ……。

《ねえ、パパ。僕に名前つけてよ》

ぐう、ぐうしても『パパ』のといふことを心じぢまつ。

《いい加減なれろ》

そんなこと言われるほどひかへ呼ばれてねえよ。

「……名前だよな。何にするかな?」

闇絆満
アンパンマン

悪との絆が強くなりすぎて愛と勇氣の友達がいなくなりそうだな。
ドラえもん

怒羅衛門
アングルモン

怒りっぽくなりそうだな。

守刃瑠都
シユバルツ

普通にカッコよくね?

『却下だからな。もっと普通にしてみよ』

ワガママだな……。ま、1歳児だししゃあねえか。

普通。

瑠璃
ルリ

可愛い子になりそうだ。

琥珀
ヒバ

気の強い子になりそうだ。

雅
ミヤビ

上品な子になりそうだ。

なんか女の子みたいな名前ばっかだな。

『パパ、僕『琥珀』がいい!』

「……OK。流石にもう慣れた。大丈夫だ」

……コレは予行練習みたいなもんだ。そう考えろ俺。

『何ブツブツ言つてんだ? 気持ち悪いぞ』

「コラ、琥珀。パパにそんなこと言つちやいけねえだろ?」

『はーいっ!』

「んじや、家に帰るか。

琥珀、こつから出る方法知つてるか?』

『起きるー、つて念じたら出られると思つよ。

ココはパパの精神世界みたいなものだし』

「へえ。俺の中つて何もねえんだな……。
んじや起きるか』

そう言つて目を瞑ると何かに引っ張られる感覚を覚え、次の瞬間に
はさつとまでのふわふわした感覚はなく重力を感じるようになった。

バカと俺と白い部屋（後書き）

あと一、二話で3巻終了のつもりです。

バカと俺と天使の力

In the 病院のベッド

AM 2:27

「……知らない天井だ」

精神世界から帰ってきて田に入ったのは見慣れない天井。
どこだココ？

それに誰かに手を握られてる感触がする。

俺は首だけを動かし、自分の手のあるところに田を向けると、そこには優子と愛子が俺の手を握って眠っていた。
2人の頬にはうつすらと涙の跡が残っているように思える。

「……心配させたっぽいな」

俺がそう呟くと突如、魔法陣が展開され俺の腹の上に琥珀が降り立つ。

『ママを泣かすのはどうかと思つよ?』

「ふふっ！？ゴホッ、ゴホッ！？」

急に何言つてんだよ！

『僕はママを心配しただけだよ?』

「……その『ママ』つてのはなんだ?」

『そのままの意味だけ?』

「……そつか。

……てか今日1日すぐえ濃かつたな

あー……初めて人殺したな。逆に殺されもしたし。
ははつ、なかなか有意義だつた。

『パパってなんか壊れてるよね?』

「その俺と普通に話してて琥珀もなかなか壊れてんじゃね?」

『パパと一心同体だから仕方ないよ』

「そういうもんか?」

『そういうものだよ。』

それとパパにとつては1日でも現実では5日経つてるよ

「は? それどういうことだ?」

『答えてしんぜよう!』

急に話し方が素に戻りどこからかヒゲメガネを取り出しかける琥珀。
ダテメガネでいいじゃねえか。

『学園長室で消えた時、俺と兄貴が分離したんだが、そのときに兄
貴は魂と意識の2つに別れて、意識の方は俺に魂は『スカイリンク』
にとんでいった。

その魂と意識をまた1つにするために約2日間、俺は『スカイリンク』
内を探し回った。

そして3日目に入るくらいで魂見つけ、それと兄貴の意識を1つに
したらそのまま糸目一族に襲撃されてお陀仏。……かと思いきや、
またまた『スカイリンク』に放り出された今度は分離せずに気絶だ
けした兄貴の魂を2日間くらい捜して現実世界の再構築された本体
に押し込んで、それから精神世界でだべつて今に至る

「……あー、さんきゅ」

琥珀がいなかつたらヤバかつたな。
マジで死んでたかもしんねえ。

『いいつてことよ。
んじゅもう遅いし寝よひば?』

「ああ

そうして俺は眠りについた。

AM9:02

「…………ん、…………ふあああっ」

「空ーーー!」

「空君ーーー!」

「むぐっーーー?」

目が覚めると優子と愛子に抱きつかれた。

頭に抱きついてきた愛子の胸で呼吸を止められ、さらに胸の圧迫により意識が遠のきかかる。
柔らかさの前に苦しむが……。

「あ、愛子つーーー空がつーーー」

俺の手が痙攣してきたのを見て優子が叫ぶ。

「へ？あつ、空君ごめんつ……！」

「はあ……はあ……つ、……だ、大丈夫だ。

ふう……2人共心配かけたな、悪い」

「もう『シンクロ同化』は使わないでね？」

「……できる限りそうする」

「空君……ぜえつつつつつみたいに、使っちゃダメつ……」

「……はい……」

渋々承諾。

いつも温和な愛子が鬼の形相で迫つてくるんだぜ？

コレは下手なこといつたらやべえだろ。

「あ、2人に見せたいもの（？）というか人（？）がいるんだ」「どっちなの？」

「俺もよくわからんねえ。たぶん人。

ま、見りゃわかる。

琥珀、出てこい」

《はいなー》

そう言つて魔法陣から琥珀が俺の膝に出てくる。

あるえ？なんかデカくなつてね？しかも人間味が増してゐる。

40cmくらいだった身長が60cmくらいになつて、髪がサラサラで肌がツヤツヤになつてゐる。

この数時間で何があつた？

「空君……『シンクロ同化』はダメつて今言つたばかりでしょつ……」

召喚獣が話してるから『シンクロ同化』したと思つたんだろう。

「いや『シンクロ』してねえよ」

『そうだよー。僕とパパの人格は別だよー』

話し方一つに統一しろ。

「『パパ』！？空、どうじうこと…。」

「誰かの子どもってワケじゃねえからな」

「じゃあどうじうことよ？」

ジト目で見てくる優子。

「……琥珀、説明頼んだ」

『はいなー。』

パパと同化＆分化の繰り返し。

同化の時のパパの意識の残りカスが蓄積。

自我の芽生え。

みたいな感じなのー』

「マジか！？」

初耳だ。

「空君も知らなかつたの？」

『それはね、僕の自我が芽生えたのが最近だからだよー。』

それに教えてなかつたしー』

「そういう大事なことは教えるよ。

自分で、秘密は共有するもんだ、つて言つてたじやねえか

『知らなーい』

ベーツと舌を出す琥珀。
悪ガキに育ちそうだな。

「はあ……。まあ、いい。
でだ、琥珀を育てなきやならなくなつたから一緒に世話をしてくれる
と嬉しいんだが」「
「そんなことならお安いご用よ。
でも召喚獣のお世話つて何すればいいの?」
「メンテナンスとかはできないよ?」
「そう言われてみたらそうだな。何すりやいいんだ?」
『僕は半分は人間だから普通の子どもと同じようにしてくれたらい
いよー』

……『半分は人間』……?

『パパの体を再構築する時にパパの体の半分を僕の体を構築するの
に使つたんだ』。
だから僕も成長するんだよー』

テヘッと笑う琥珀。

……可愛いかろうが今のは見逃せねえ。

「コラ、人の体で何してんだよ。てか俺の残り半分はなんなんだよ
!!」
『優しさかなー?』
「バフ? リンじゅねえか!!」

バ? アリンの半分は優しさで出来てるらしいっていうのをだいぶ昔
に聞いた。

『ママー、パパが怖いよー』

琥珀はそう言って優子に抱きつく。それを見て愛子は肩を落としている。

マジで俺の体のもう半分はなんなんだよー！

「パパ、子どものしたことよ？許してあげなさい」

優子が『ママ』と呼ばれ、うつとうとした表情のまま俺をなだめる。優子が懐柔されちゃった。

しかも『パパ』って呼ばれた。

「いやでもよ、心配になるじゃねえか」

「そうね……琥珀、パパに教えてあげて？」

『ヤダ』

優子の腕の中にいる琥珀は即答し顔をブイッと背ける。

「今日の晩ご飯は琥珀の好きなオムライスにしてあげるからパパに教えてあげて？」

……琥珀ってオムライス好きなのか？

『うん、わかったー！

えっとね、パパの残り半分は

』

。

溜めたままちらちら俺の方を見てくる琥珀。

溜めとかいらねえから。

！！ああ、なるほど。

「残り半分は？」

そつ言つてやると琥珀の表情が一気に明るくなる。

『『天使の力』だよー』

「ふむ、^{テレズマ}てれずま……つてなんだ？」

『『天使の力』^{テレズマ}つて言うのは字の通り天使の力だよー』

……天使の力、か……なんかスケールでけえ。

「そんな物が存在するのか？」

それに俺つて半分天使？

『『天使の力』^{テレズマ}は存在するよー。神の子つて言われたキリストも使つてたらしいし。

それと天使についてはどうかなー？』

「違えのか？」

『たぶん。『天使の力』を持つてるからつて天使つてワケじやないんだよー』

「そうなのか……じゃあ俺はなんだ？」

『人間でいいと思うよー』

なんだその『笑えばいいと思うよ』的な返事は……。

「琥珀君。空君がもしその天使の力をなくしたらどうなるの？
もしかして……死んじゃうの？」

愛子が泣きそうな表情で尋ねると琥珀は呑気な口調で答える。

『その心配はないよー。

もし『天使の力』^{テレグマ}がなくなつても自動的に『同化』^{シンクロ}して、また溜まるようになつてるからー』

「その言い方だと俺つて電池じゃね？」

それと『天使の力』^{テレグマ}の供給路が琥珀の中にしかねえつてことだよな？』

『そう喻えてもいいねー。

まあ、使わなければ『天使の力』^{テレグマ}は消費されないし大丈夫だと思うよー。

それと供給路のことだけどその通りだよー。パパにも供給路つけようとしたんだけど容量オーバーだつたのー』

「琥珀は俺よりちつこいのになんて供給路があるんだ？」

『それは基盤が違うからだよー。パパは基盤が人間だから魔改造しないと供給路がつけれないし、魔改造すると本当に天使になっちゃいそうだからやめたのー』

「なるほどな。

……あ、もしなんか問題があつて『同化』^{シンクロ}できなかつたらどうなるんだ？』

『そうなつたら体型が子どもになるよー』

「……？どういうことだ？」

『『同化』^{シンクロ}できない場合は残りの体で元の体をつくるようになつてるんだけど、もともとの体積が少ないから子どもになるのー』

「へえ、俺の体つて不思議だな」

ふと思つたが琥珀つてハイスペックだな。

人間を天使にできるっぽいし。人の体吸収するし。

……人の体を吸収するのつてハイスペックか？

そう考へていると優子が琥珀に尋ねる。

「ねえ琥珀。パパと『同化』して何も影響ないの？」

『問題ないよー。僕とパパはほとんど同じ体だから『同化』してもいつも通り過ぐれるのー』

……そこや俺の召喚獣ってどうなるんだ？

琥珀は制御から外れちまつたっぽいし。

「学園長に相談してみたら解決してくれるボクは思うけど」「あの薄情者のババアに相談するのか……『氣』が進まねえな……」「でも召喚獣がないと試合戦争できないわよ?」
『召喚獣なら僕がいるよー?』

琥珀がそのままいくが

「子供にも戦争なんぞさせんワケねえだら」「でも今までしてきたじゃんかー」「アレとコレとは別物だ」「子供もが戦争とか危ない」としちゃダメだよ?」
『うー……わかったー』

俺以外のことによく聞くんだな……。
ちょっと悲しい。

「えじや、ひとりあえず俺はババアのところに行こうといくのな」

そう言つてベッドからペタッペタッと音をたてて降り、自分の足で

立つ。

「空君！ 病み上がりなんだから安静にしどかないと倒れちゃうよー。」

「それは大丈夫そうだ。
なんか体が軽い」

軽くジャンプをしながら愛子に答える。
今なら風になれそうだ。

……走りてえ……。

ガガガガギキキギパキッピキッ

突如、聞こえてくる機械音。

「え？ なんの音？」

「そ、空君、その足どうしたの？」

「足がどうしたん……あ、A・Tじゃねえか。いつの間に……」

足元を見るとそこには A・T があつた。
心優しい誰かがいつの間にか俺に A・T を履かせてくれたらしい。
ありがたや。ありがたや。

『思いの具現化かー。スゴいねー』

琥珀が優子の腕の中から布団に飛び乗り、俺の足元をみて言つ。

「何それ？」

「『天使の力』^{テレスマ}の能力みたいなものなのー」

「へえ。『天使の力』^{テレスマ}って便利だな」

「でも、ソレが壊れちゃうと『天使の力』^{テレスマ}が消費されちゃうからね

1

「マジか……。氣をつけねえと。
んじゃババアのところに行つてくるな

あでゅー、と言つて窓から外に飛び出す俺。

『空! 15歳よ!』

卷三

病院内から2人の悲鳴が

『……と、飛び降り自殺だつ……』

外からも悲鳴が聞こえる。

それに自殺なんざするかよ。

「ふんっ！！」

ドッパツ

地面に触れる瞬間に足で空気の『面』を吊りつける。それにより俺の体は空を舞う。

『…………飛んでる…………』

誰かの呴き。

その呴きが引き金になり波紋のように広がっていく。

『飛んでるつ……！』

『人が……飛んでンぞッ……！』

ドッジャアアアッ

着地。それと同時に独特的なステップを踏む。

キュッ、キュッパバババッ

trick : Ikaros Pteron

ボツ、ゴアツという音と共に3対6翼の『炎』の翼が足元から吹き出す。

派手すぎたか？ま、気持ちよかつたらしい。

「くうーつーなんか久しぶりって気がするな……」

俺は一人伸びをしながらそう叫ぶ。

『…………天使…………？』

『お迎えが来たようじゃな』

『つー？おばあちゃん！そんなこと言わないでつー！』

『長いこと生きたんじや。お迎えが来ても不思議なことじやないじやろ？』

『つー……おばあちゃん……』

『やつぱり私の病氣治らなかつたんだね……。もつと……生きたかつたな……』

『そんなことないわ……手術すれば治るから……絶対に治るから……』

!』

『お母さん、もういいの。……もう……いいの……』

『つう……命お……』

俺の技を見たためか悲観的になつてゐる者が多数。

……なんかネガティブ振り撒いてね?

魅せるための技がなぜにネガティブにさせる?

ゴオオオオオオオオオツ

『きやつ!』

突如、ネガティブに突風が襲つ。

その犯人はもちろん俺。

「テメエら!…下ばつか見てねえで『空』も見ろ!…
俯いてばつかで何が見つかる!…」

俺は天を指差して言ひや。

「テメエの心にやテメエの『翼』が生えてんだろ!…その『翼』で
羽ばたいてみろよ!…」

数人のネガティブが顔をあげる。

「こんな腐つた『檻』の中でそのまま腐つて死んでくのか?」

そんなこと俺は御免だね!!俺は俺の『翼』で『空』を飛ぶ!!
だからテメエらも『病気だ』『寿命だ』どしどせえこと氣にしてね
えで『空』を目指せ!!

死ぬなら好きなことやってから死ね!!
以上!!

なんか支離滅裂だが言いたいこと言つたし別にいいだろ。生きるか
死ぬかはそいつの自由だし。
んじゃババアのどこに行くか。

学園長室

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン」

ノックをせずバーンと学園長室の扉を開ける俺。

「開けるときはノックしな。

それで、何の用さね?」

「あー、俺の召喚獣新しくくれねえ?」

「それまたなんでさね?」

ババアが訝しがる。

「俺の召喚獣が制御できなくなつたから」
「そんな危険なモノをそこらへんにほつとくんじやないよ……」
「それについては大丈夫だ。優子と愛子が面倒見てるから」

「……どうことうことさね？」

「召喚獣に自我が芽生えた」

「はあ……。アンタなにしたのさね？」

最近呆れられる」とが多い気がする。

「特に何もしてねえよ」

「なら、アンタの召喚獣一回バラしていいかい？」

「オオッ

突如俺の背後に炎を纏つた銀色の狼の『影技』シャドウが現れ、肌をチリチリと灼くようなプレッシャーが放たれる。

「本気で言つてのか？」

「そんなわけないさね。

そんなことすれば酷い目にあつのはわかりきつていることだからね」

プレッシャーを物ともせず飘々（ひょつひょつ）と答えるババア。
……食えないやつだ。

「で、どうなんだ？」

「考えておくさね」

「了承しねえのは、また同じよつのことになつたら困るからか？」

「それもあるさね

「他に何があるんだ？」

「近いうちに『試験召喚システム』の設定を一新しようと思つていてねえ。

今新しい召喚獣を作つてまた後で設定し直すのは面倒だから避けた

「いとこひなね」

「あー……、なら一新してからでいいぞ」

「わかつたさね」

「んじゅ俺は帰るな」

そつまつてドアノブに手をかけようとしたといひでババアから声がかかる。

「ちよつと待ちな。アンタに一つ聞ことくナビ課題はせつたのかい？」

「課題……？」

なんかあつたか？

「停学処分と一緒に山ほど出てたばすたね」

「あー……なんかもらつた気がする。」

でもFクラスレベルだろ？すぐ終わるだい

「おそらくアンタのだけは特別製さね。」

先生方がアンタには解けれないよつな問題をつくるんだ、って躍起になつてたからね

……課題つて1803くらいの束だつたよな？それが全部クソ面倒な問題だと！あと1日半しか時間ねえんだぞ！

「ふざけんじやねえつ！」

「もし課題終わつてなかつたら補修時間プラス2時間りしこわね。せいぜい頑張るんだね」

その二ヤーヤした顔クソづぜえ。

「ババアー覚えてるよつー」

俺はそう捨て台詞を吐くと病院へ帰つていった。

病院へ行つたのはまだ安静にしていろのことじらじい。結構暴れたけど……。

追記。

飲まず食わずにやつたらなんとか終わつた。『天使の力』^{アレグマ}の影響か疲れることがなかつたのが唯一の救い。

俺の担当医が『精密検査を受ける』つて言つてきたが俺は遠くを見て『やらなきやいけねえことがあるんだ……』つて言つてやつたら『背負つてるモノがあるんだな』つて感動しながら帰つていつた。チヨロいな、と思つたり思わなかつたり。

さうして追記。

いつの間にか琥珀の身長が80cmに達していた。
ちつちつやい子つてこんなに成長早いのか？

バカと俺と天使の力（後書き）

3巻終了です。

原作のように区切ると変になりそうなのでここまで。

設定2（前書き）

空 + 琥珀のみ

設定2

名前：宇童 空

性別：男

身長：178センチ

体重：72キロ

容姿：母親似で西欧人風の顔つき。碧眼で少々たれ目、地毛が金髪（黒髪黒眼にならなかつたのはご都合主義）で少々長め。細身だが締まっているため体重重め。

利き腕：右

得意科目：数学、物理

特技：合気道（祖母直伝）、キックボクシング（祖父直伝）、A.Tなど

道：獣の道（自称）

王：煉獄の王（自称）

二つ名：A級異端者 SSS級異端者 災害級異端者 ???（次

巻にて）

暴風族・空を駆る者・魂を狩る者

鋼の召喚術師・お盛んな雄犬・キングオブS.U.K.E.B.E・炎狼

部活：工学部

補足：父親は日本人、母親はイギリス人、姉が1人おり現在大学生でイギリスに留学中。

半身が『天使の力』

現在、召喚獣なし

名前：琥珀

性別：（？）

身長：81cm

体重：16kg

容姿：金髪碧眼の中性的な顔。基本的に空似、目はなぜか優子似。
琥珀七不思議の一つ。

補足：約1歳。

半身が『天使の力』^{テレズマ}

着替え可能

召喚獣だったときの名残か一ツト帽を被つている

設定2（後書き）

二つ名で記入漏れがあれば教えて頂けると幸いです。

バカと俺と2人の悪魔（前書き）

4巻開始

バカと俺と2人の悪魔

停学明け

いつものように量産型GOKI'sをしばき倒し今は校門前。

「なあ、このまんまと絶対なんか言われるだろ?」

周りのヤツらにもチラチラ見られてるし」

琥珀を肩車したまま優子と愛子の2人に問う。そう、『琥珀』を肩車したまま。

家に1人でおいとくのはマズイだろ、ってことになつて連れてきた。

「きつと大丈夫よ。みんな可愛がつてくれるわ」

「そうだよ。琥珀君、可愛いし女子から人気でると思うよ」

『ファンクラブとかできちゃうかもー』

頬に手をあてて俺の頭の上でくねくねしながら言う琥珀。

……言葉のキヤツチボールが成り立つてねえ気がする。

「……学校で『パパ』とか『ママ』とか呼ぶなよ?」「私は別にいいわよ?」

「優子はよくても俺はダメだ。」

クラスのバカ共がぜつてえ襲つてくる

「 わつかしり?」

「ああ」

『木下とのナビもだとー?』の異端者め……』とか言って襲つてくるに違いない。

やつやつて愛子と話していくと愛子も琥珀と話していた。

「ねえ、琥珀君。ボクも『ママ』って呼ばれてみたいかも
『うーん……お姉ちゃんは『ママ』って言つより『お姉ちゃん』の方があつてゐからダメなのー』

「うつ……」

琥珀のその一言は思つた以上に愛子には堪えたりして。
現に愛子は地面に手をついて頃垂れている。

「うう……ダメージ大きいよ……」

「そんなこともあるだろ。ま、元氣だせ」

ポンポンと愛子の背中を叩きながらやつとやるとさういふ感じ明久の声が背後かかる。

『空あーーおはよーー』

まだ離れているためか叫ぶような形で挨拶をしてくる明久。

「愛子、立つた方がよくねえか?スカート短えんだし明久に見られ

ちまつ 「ひみ

「ひみ……わかつた」

そう言ひて愛子はふりと立ち上がる。
いつもなら『心配してくれるの?なら、ほーれほーれ』とか言つて
スカートをひらひらさせるのにそれがねえとはかなり落ち込んで
な。

「IJの異端者め……」

俺のところまで来た明久の第一声。

それなりに離れてたのに来んの早すぎだ。

「意味分かんねえこと言つんじゃねえ」

「しらばっくれるな……その子は木下さんとの子どもだろ……
そんなことできるなんて羨ま もとい妬ましへ……」

「ゴオオオツ

突如、俺の背後から狼の『影技』^{シャドウ}が現れ、肌をチリチリと灼くようなプレッシャーが明久に放たれる。

「おー、よく俺の前で『優子を襲いたい(空の脳内変換)』なんて

「…」

蟬人きよ 消し炭にしてやるが?」

「ひー!!? い、い革!! そ、そんな」アリひなこさん

優子のことを『そんなこと』だとおおおーーーー? (空の脳内変換)

「お前は俺を怒らせた！！

「意味が
」

東四方

A · T 殺法・宝玉碎き『Golden crusher』

ドスツ

何かが潰れると「ろじやないよ」とな音。
エア・トレック
ぶつちやけA・Tで加速された秘技もクソもねえただのキャンタマ
への蹴り。

下腹部に謎の痛みがああああああああああああああああ！？？？？」

明久の叫び声が響き渡る。

「フハハハハ！正義は必ず勝つ！」

小悪党っぽい高笑いをする俺。

「エリカと同じく空港が悪の城があるよ?」 「ふつちやけ悪魔よ

ね

優子と愛子が何か言つてゐるが気にしない。

『おーつー』『Golden Crusher』カツコーーー。』

「おおつーじの良さがわかるか！」

さすが俺の子だ！」

『パパイエーイ！』

「イヒーイー！』

パンツと琥珀とハイタツチ。

肩車をしているため少々変な形になるがそれは、あいきよう愛敬。

「うう……酷い目にあつたよ……。

……それじゃあ、その子どうしたの？空のじと『パパ』って呼んで
るけど」

早くも復活した明久が琥珀を見て俺に問ひ。『イツなんでこんなに復活すんのが早えんだよ。

「お前に『パパ』なんて呼ばれたかねえ！」

「好きで呼んだわけじゃないよー！」

……それでその子本当にどうしたの？』

「あー……、この子は親戚の子」

琥珀、呟きしてくれよ。

『琥珀なのー。よりしくねー』

「あ、僕の方こじよろじくね、琥珀ちゃん」

……前々から思つてたんだがコイツって男と女が見分けられねえの？

確かに琥珀は可愛らしいが纏っているオーラが男の子だと主張している。

「吉井君。琥珀は女の子じゃなくて男の子よ」

「ええっ！？こんなに可愛いのに！！」

「明久、お前に俺の子どもを会わせたくねえ」

変なことされそ่งだ。

「え！？空、子どもいるの！？」

「んなワケねえだろ！！未来の話に決まつてんだろーーー」

「必死になるといひが怪しいです」

「うおっ！？」

不意に背後から声が聞こえて驚く俺。

「あ、姫路さん。久しぶりだね」

どうやら俺の背後から声を発したのは姫路らしい。
霧島並に気配を消すのが上手いな。

「姫さん、おはようござります。

それと、明久君、空君。お久しぶりですっ。
元気でしたか？」

「うん。元気だつたよ」

「まあ……一応？」

すんなり答える明久に曖昧に答える俺。
俺はずっと病院のベッドの上だったしな。

「実は、その、明久君たちに謝らないといけないことがあるんです
「え? どうしたの急に?」

「なんかあつたか? 身に覚えがねえんだが」

「強化合宿の初日なんですけど 覗き魔扱いして」「めんなせこつ」

姫路が腰を折つて深々と頭を下げる。

「ほえ?……あ、いや、覗き魔扱いも何も、僕らは覗き魔そのもの
なんだけど……?」

「俺を含めんな」「う。一斤たりとも覗いちゃいねえから」

「あ、いえ。そりじゃなくて、一番最初は誤解だつたじゃないです
か。」

「あははっ。結局覗きをやつたのに謝られるなんて、なんか変な感

じだよ」

「別になんとも思つてねえから気にすんな。
それにしてスネーク捕まつたのか?」

「ええ、捕まつたわよ」

「カメラがない、って言つて発狂してたところを島田さんを見つか
つて、尋問したらすぐに吐いたんだって」

「やうか。犯人が捕まつてなによりだ」

ぶつちやけ言つて血業自得だし、なすりつけようとした相手が悪い
な。普通に選択ミスだろ。

そう考へていると姫路がもじもじしながら明久に尋ねる。

「あ、あの……明久君……」

「ん? なに?」

「そ、その……そこまでして、女の子の裸を見てみたいものなんで

すか……？』

「まあね』

軽くフツと笑つて答える。

『『まあね』じゃねえぞ明久ア！！
ブツ殺されてえのか！！』

その明久の対応に再び『オオツと狼の『影技』^{シャドウ}が現れ、肌をチリチ
リと灼くようなプレッシャーが明久に放たれる。

『優子と愛子の裸が見たい』（空の脳内変換）だと…ふざけたこ
と言つてんじやねえぞッ！！

「ひいっ！…い、今のは口が滑つ　じゃなくてっ、こ、心にもな

い言葉が咄嗟に僕の口から……』

「嘘だつたら消し炭にすんぞ…！」

「う、うん！」

首が吹つ飛びそなぐらい素早く頷く明久を見て姫路が言つ。

「ふふつ。良かつたです。

明久君がきちんと女の子に興味があるみたいで『

「うぐ……。

も、勿論興味津々だよ！特に……姫路さんにはね！』

「え？……えええつ…！」

明久の返しに一気に耳まで真つ赤になる姫路。

……イチャついてんじやねえ、てか見せつけてんじやねえよ。
自分がする分にはいいが人の見るのは嫌だ。

「あははっ。冗談だよ。姫路さんが僕をからかつかう仕返しを

「…………いいですよ（ボソッ）」

「…………はい？」

「だから、その…………覗いても、いいですよ…………」

それを見て俺は優子たちと田で語る。

（姫路つてこんなに大胆だつたか？）

（Fクラスの影響受けたんじゃない？）

（毒されたのか。もう手遅れだらうな）

心の最奥で手を合わせて南無南無と唱つていふと愛子から声（？）
がかかる。

（そんな重病人扱いは酷いと思つよ？）

（そりか？じやあなんて言えぱいいんだ？）

（別に言わなくていいと思つ）

……確かに。

「えええつー？何を言つてゐるの姫路さん！？大丈夫！？

「覗いてもいいですけど、その代わり

「そ、その代わり！？」

「わ、私を明久君のお嫁さんにして下さーいね？」

それを聞きわたわたと取り乱す明久。

『逆プロポーズ?』

「みんなが見てる前でするなんてスゴいね」「結婚式には呼べよ?恋のキューピッドの俺が祝福してやる」「空がやつたら大変なことになりやうよ?」「大丈夫だ。やる時はちゃんとやる男だと自負してる」

そんな俺たちの会話が聞こえたのか姫路は必死に否定していく。

「あ、そ、そういうわけで言つたわけじゃないです!た、ただ明久君をからかおうとしただけで……」

「本当にやうなの?」

「うつ……そ、そうですつー!」

「変に肘張らなくてもいいのよ?」

「うつ……」

「さつさと『好き』って言つて楽になつちまえよ。ウケケケケ」「《そうだよー。早くしないと溢られちゃうよー?ウキヤキヤキヤキヤ》

『アキツー!』

俺と琥珀の中の悪魔が顔を出したその時、遠くの方から威勢のいい声がした。

……琥珀のイメージが崩れきまつた。

「ん。久しぶりだね、美波」

「おー、久しぶりだな島田」

声のした方を向くと、元気に走つてくる島田の姿が見える。

「え？あれ？どうしたの？」

島田は妙に真剣な表情をしていて、それに感づ明久。

「美波ちゃん、どうしたんですか？」

その様子を見て姫路もキョトンとしている。

「アキ、田を騒りなやつー。」

「え？は、はいっ！」

お？グーパンか？それともパーか？

「……瑞希、ゴメンね……」

「え？なんですか美波ちゃん……？」

殴るのになぜ姫路に謝ったのかわからなかつたが、その理由はすぐ
にわかることとなつた。
俺の勘違いという形で。

『わああ、ちゅーしてるー』

そう、琥珀の言つ通り島田が明久にキスをしているのだ。

島田が謝っていたのは、たぶん『先にキスしちゃうけどゴメンね』
的なことだらう。

いつもの島田にあるまじき行為だな。
てかむやみやたらに『盗られちまつや』とか言つもんじゃねえな。
実際じつこの見ると眞まっすや。

「青春してるね」

「吉井君にも春が来たようね」

「青春うんぬんの前に修羅場だ。」

「飛び火して来ないうちに学校に行かねえか?」

「そうね」

「わかつた」

2人の了承を得て明久から素早く離れ学校へと向かった。

バカと俺と審問会

1F・廊下

学校に入り靴を履き替え現在各々のクラスに向かっている。新校舎と旧校舎という違いはあるが、AクラスもFクラスも同じ3階にあるので途中までは優子たちと一緒に歩く。

「琥珀。俺とFクラスに行くか？それとも優子たちと一緒にAクラスに行くか？」

『うーん……パパといふのー』

「学校で『パパ』つて……」

『呼ぶなよ』と言おうとしたが言葉を止める。
あー……、やつをねむつゝそ『パパ』つて呼んでたし、もう『パパ』
でいいか。

『どうしたのー？』

『いや、なんでもねえ。

それで本当にFクラスに行くのか？Aクラスの方が快適だぞ？』

『いいのー。パパといたいからいいのー』

俺の頭にガシッと抱きついて琥珀が言つ。

ぐおつ！？純度100%の言葉が俺を浄化するつ！…

「知つてたか？純粋な言葉つて時には凶器になるんだぜ」

誰に訴うづワケでもなく呴いたその言葉は虚空へ消えていった。

Fクラス教室

『諸君。 ここはどこだ?』

『 最期の審判を下す法廷だ!』

『 異端者には?』

『 死の鉄槌を!』

『 男とは?』

『 愛を捨て、 哀に生きるもの!』

『 宜しい。 これより 2・F異端審問会を開催する!』

ガラガラっと扉を開けるとそこはサバトの会場だった。

量産型GOKIIsの真ん中には手足を縛られた明久と坂本がいる。おそらく朝のキスの件で捕まつたんだろう。坂本がなんで縛られるか分からねえが例のごとく霧島になんかされたんだろうな。

『いつもよく飽きないねー』

「それだけがアイツらの生きがいだからな」

『つー? 『神に背きし者』^{アボステイ}の宇童が来たぞつー』

『捕りえろー』

『おおおーーつー』

新しい一つ名が増えたな。

さつき倒したばっかなのに復活するのが早すぎる。

名実共にリアルGOKIになってきてんな。しぶとい。

『毎日ボコしやがって！死ねえつ！』

『木下や工藤とイイコトしてんじやねえつ！』

『俺だつて宇童みたいにハーレムつくりたいんだよ！』

お前の願望なんざ聞いてねえ。

そもそもハーレムつて言つほどどの規模じやねえ。

「つむせえ、黙つてろ。

絶対不可侵領域『アイギス』！

『わつ！？』

量産型GOKI-Sが襲いかかってくるが、俺は肩車をして琥珀を前に突き出す。

これで攻撃できまい。

『くつ！－！確かに絶対不可侵領域だ』

『子どもを盾にするとは卑怯なり！』

『ハツ、お前らが女子供に弱いのはリサーチ済みだ。大人しくして

ろ』

『つー？』
…………後ろががら空きだ』

「つー？」

このしゃべり方は康太か！

襲つてくるやつはいないだろ？と高をくへつて余裕ブツとしていた
ら康太（確定）が襲つてくる。

そのため俺は素早く琥珀をおろし康太から距離をとろうとするが

『…………甘い』

「なつー!?」

『パパつー』

小さく琥珀の悲鳴があがる。

俺はいつの間にか張つてあつた縄に足を取られ体勢を崩してしまい、
そのまま縄で素早く手足を縛られる。

「クソが！解けねえじゃねえか！」

『…………観念しろ』

モゾモゾ動いて縄を解こうとするが解けない俺に康太は辛辣な言葉
を浴びせる。

そして俺を同じように縛られた坂本や明久のところまで引きずつてい
いく。

「え？あれ？どうこいつこと？」

俺が引きずられていくとちょうど明久が目覚めたようだ。
まだ覚醒しきつておらず状況が理解できていない様子。

「起きたか明久」

明久のすぐ近くに転がっている坂本が言う。

……なんかシユールだ。

「…………雄二」何やつてんの？それに空も

「…………お前の巻き添えだ」

「俺もお前の巻き添えつて」と云ふとへ

思々しげに吐き捨てる坂本に便乗する。
びんじよつ

「巻き添えつて？」

「お前のせいで』寝ている間に翔子にキスされた』って話がアイツ
らにバレたんだ。

とんだ迷惑だ畜生

おー、ラブランだな。

「俺は優子と愛子といイコトしたのがバレた」

なんでバレたんだろうな？……不思議だ。

「…………　はい？」

「アホ面晒してどうした？」

「皆大変だ！坂本 雄二・宇童 空両名共に異端者の疑いがある！
至急異端審問会の準備を始めるんだ！」

急に叫びだす明久。

「待て明久！お前、如月ハイランドの一件ではむしろキスさせよう
としていたか！？というか、お前こそ異端者だらうが！」「

「坂本の言つとおりだぞ。自分のこと棚の向ひにまつぱつてんじやねえよ」

「2人共見苦しいよ！そつやつて謂われもない疑いを僕にかけて自分自身を護るうつて魂胆だな！」

その手は食つもんか！」

「こ、このバカ野郎が……！」

信じられないのならアイツらの言つてこむことを聞いてみろー。」

「…………」

坂本の言葉を聞いて、明久は周りの声を聞くため耳を澄ます。

『 罪状を読み上げたまえ』

『 はつ。須川会長。』

えー、被告、吉井 明久（以下、この者を甲とする）は我が文月学園第2学年Fクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。

甲の罪状は強制猥褻及び背信行為である。本田未明、甲が同Fクラスの女子生徒である島田 美波（以下、この者をペッタンコとする）に対して強制的に猥褻行為を働いていたところを我らが同胞が確保。現在に至る。今後、甲とペッタンコの関係に対する充分な調査を行つた後、甲に然るべき対応を

『 御託はいい。結論だけを述べたまえ』

『 キスをしていたので羨ましいであります！』

『 つむ。實にわかりやすい報告だ』

「…………？」

なんのことかさっぱりといつた感じで首を傾げる明久。
あまりのショックに記憶が飛んでいるようだ。

教えてやつた方がいいよな？

「明久。お前は今朝、島田とキスしてたぞ。しかも俺や姫路のいる目の前で」

「ははっ。冗談はよしてよ空。だつて、あの美波が僕なんかにキスをするわけないじゃないか」

「あんま自分を卑下するなよ？」

「明久。確かにお前は容姿学力性格が最低だが、それらに目を瞑れば甲斐性と財力が皆無というだけじゃないか」

「この野郎！言つこと欠いて僕の取り得は肩たたきだけだと！？」

「その歳で肩たたき！？反論するにしても他に何か取り得はなかつたのか！？」

「雄二！バカにするにもほどがある！」

僕の肩たたきはマッサージ機に劣る！」

「劣るのかよ！？」

自信満々に告げる明久。

嘘でも『劣らない』って言えよ。

「明久。お前にはまだ他に立派な取り得がある。それも人に誇れるほどのモノが」

「なつ！？このバカにそんなモノがあるのか！？」

「空！是非とも教えて！」

「それは」

「「それは！？」

「女装が似合う」とだ

「「…………」「…………」

俺がそう言つとシーンと静まり返る。

なんと言つた俺がダメージ食らつてんの？

「……やつぱりそんなことだらうと思つたよ」

「似合つても秀吉には負けるだろ?」

「いや、本当に似合つてたぞ。秀吉並に『メイド服』が

「ぶふつ!~そ、空!~どうしてそのことを知つているのか!~?

空はそのときいなかつたはずだよ!~?」

写真見たから知つてる、とは言わずに俺は続ける。

「そう言えばちやつかりブリもしてたな

「……本格的な」

「空つ!~バラすなつ!~」のつ、死ねえ!~

俺に飛びかかる!~するが手足を縛られたままなのでモゾモゾと動くだけに止まる。

「それでよ、ずつと気になつてたんだがどこでメイド服なんて着たんだ?」

「そんなこと僕が言うわけないじやないか!~

「堅いこと言つてんじゃねえよ」

俺と明久が話していると坂本の呟きが聞こえてくる。

「……ん?メイド服……」

「坂本。なんか知つてんのか?」

「明久が最近バイトでメイド服着ていたな、つてのを思い出してな。確かに男子にしては胸がデカいとは思ったが」

「雄二!~貴様も黙れ!~

「明久、うつせえ。聞こえねえだろ。」

で、なんで着ることになったんだ？てかビコのバイト？「制服の数が合わなかつたから明久はメイド服になつた。

場所は『ラ・ペディス』って言つ駅前の喫茶店だ

『ラ・ペディス』つてのは美味しい上に値段が手頃で文月学園生徒御用達の店。

俺も優子や愛子と何回か行つたことがある。

「あー、あそこか。

まだバイトの募集してんのか？」

「それはわからないな。見に行つてみたらどうだ？」

「ああ、そうする」

そう言い終えると俺は周りに意識を向ける。

俺たちが話していた間にももちろん審問会も続いているわけで。

『…………裏切り者には、死を』

そう言つて静かな殺氣を放つてゐる康太が明久に『写真をつきつける。

「おー、明久。ばつちり証拠が残つてんぞ」

「如月ハイランドにでも飾つてもらえ。俺が翔子にアイアンクローケを食らつてゐる』写真より何倍もいい』

「…………」

しばじじつくうと『写真を吟味する明久。

「ふむ。僕とよく似た男の子が美波によく似た女の子とキスをして

いるね

「……『イツ何が何でも認めない氣だな』

「島田が聞いたら泣いちまうぞ？」

「ええつ！？これホント！？アレは夢じやなかつたの！？」

「夢だつたら今こつして縛られるようなことはないんだがな」

「そ、そつか、それでこんなことになつていいのか……」

島田とのキスを思い出したのか耳まで真っ赤になつていく。
そんな明久に坂本が尋ねる。

「明久。どうしてお前らはそんなことになつたんだ？」

「そんなの、僕が聞きたいよ」

「そのスポンジのような頭でよく考えてみる。

最近何か様子がおかしかつたとか、ビニカに思い当たるフシがある
んじやないか？」

「うーん……」

坂本の間に考え込んでいるが答えがでてこないようだ。

「質問を変えよ。お前が島田と最後に会つたのは？」

「えつと……強化合宿の最後の夜かな？」

最後の夜……『夜』？

「今、『夜』って言つたか？」

「うん。皆が寝静まつた後、美波がこつそつと僕のところに来たん
だよ」

「はあ……なんでそれをおかしいと思わねえんだよ

坂本も俺と同じように呆れ顔になつていてる。

「いや、だつて、僕を殺しに来たものだと……」

「……明久ってすんげえ鈍いよな。

「……それじゃ、夜に会つ前には何を話していた?」

「告白みたいなことを言つてた」

「……島田が明久にか?」

「いや、僕が美波に」

「そんなことがあつたのか……。

ふう

「…………」

坂本が大きく息を吐く。

あ、なんか嫌な予感が。

「くたばれ!」

メリイツ

案の定坂本が明久の顔面田掛けて靴裏をめり込ませる。

俺は転がつて緊急回避。

危ねえ、被弾するところだつた。

「……つー顔が……つー顔の骨が陥没したような感覚が……つ！」

「なにが『わからない』だ！思ひ当たるフシだらけじやねえかバカ野郎！」

のたうち回る明久を坂本がバカを見るような目で見ている。

「それでなんて言つたんだ？」

「……『雄一より好きだ』って」

「待て！お前の好きの比較基準は俺なのか！？」

坂本が心底嫌そうな顔をして『ロロロロ』と転がつて明久と距離をとるが量産型GOKUに蹴られまた俺らのところに戻つてくる。それを見ているとの審問会の主催者らしき人物が告げる。

『異端者、吉井 明久。』

汝は自らの罪を悔い改め、裁きを受け入れるか？』

「あのや、返事をする前に質問があるんだけど」

『聞いてやるつ』

『裁きつて、何をするの？』

『まず、魔法の種と七色に輝く不思議な液体を用意し、そして不思議な液体を吉井にかけ、後は魔法の種をそこに落とすだけだ』

『魔法の種つて何？』

『そうだな……、ヒントしか言えないがメラの使える種とだけ言っておこう』

メラの使える種？

『じゃあ不思議な液体は？』

『水を弾くという特徴がある』

『水を弾く……疎水性の液体か？
油とかそつだよな。』

『水責めでもなさそうだし何なのかな？
ま、危険そうじゃないしいかな？』

『ん？油……。そういうや光の反射でいろんな色にも見えるな。』

「僕、吉井 明久は島 」

なら、メラの使える種^ハ火の魔法の種^ハ火（の魔法の）種か……。ライターとかだろうな。

「明久。メラの使える種はたぶんライターとかの火種のことで、七色に輝く不思議な液体は油だ」

俺がそう教えてやると明久は言いかけていた言葉を無理やり修正する。

「 国根性です！

僕ほど教義に順ずる信徒はいません！
だから火炙りだけはご勘弁を！」

なんだよ島国根性つて。

『 どうか。それならば、自白を強要するまでだ』

「 言った！今いきなり『自白の強要』って言ったよー…？
この裁判は無効だ！だから火炙りも無効だ！」

そう叫ぶが聞き入れられるハズもなく

『 『 『 そうだ！自白を強要しろ！』』』
『 『 『 議事録を改竄^{かいさん}しろ！』』』

「ねえちょっとー、既ノリで言つてないー？」

普通じうこう時は白白の強要が事実だと認めちやいけないと思つんだけどー。」

『ええい、灯油とライターの用意はまだか！』

「もう隠す気ないよね！？」

それに白白をせる拷問もそれなの！？

どっちも処刑だよね！？」

『違うぞ吉井。罪を認めない場合は白白用と断罪用の2回があるから、1回分お得なんだ』

「騙されないぞ！そんな洗顔フォームの増量キャンペーンみたいな売り文句を言われても僕は騙されない！
雄一と空も何か反論しなよーこのままじや僕らは焼死体だよー。」

今まで空氣だつた俺と坂本に振る。

そう言われたら言つことは決まつてんだが。

俺が坂本の目を見ると坂本も俺の目を見返し、そして頷くと量産型GOKIに向かつて告げる。

「「てめえり……一やるならコイツだけをやれー。」「

「2人共……ありが 違うー。」

その台詞、よく考えると僕を売つて自分だけ助かるつとしているだけじゃないか！

自分で良ければいいのかこのゲス野郎！」

『男らしいじゃないか坂本に宇童。』

そこまで言つのなら、お望み通り吉井をやつてやる『ぬづいてーこのままだと被害者は僕だけといつー。』

明久が声の限り叫ぶが、盛り上がつた雰囲気は収まる気配を見せない。

『では、灯油の手配が遅れているようなので、ijiまとまざ吉井に《特別バンジージャンプ》をやらせてみよつと思つ』

「一応聞くけど、その特別バンジージャンプってどんなものなの?」

『そりだな……、多くを説明すると吉井に余計な不安を『えかねないから、ヒントしか言えないが』』

暗幕で闇をされた窓を見るように顔を背ける。

『パラシユートのないスカイダイビング、とだけ言つておいつか』

「余計な不安も何もヒントだけで丸わかりだよー。」

紐無し!/?紐無しのバンジージャンプをやらせる気ー!?

さすがにこれは可哀想だ。

「明久」

「え? 何、空?」

「コレ使え」

そう言つて渡すのは白い固体物。

「……何コレ?」

「空を飛べるお薬」

「なんでこんなもの持つてゐるのかー!?

「冗談だ。実はそれラムネだ」

てへ、舌を出して言つ俺。

「……空は何がしたいの?」

「…………マジトーンはやめる。俺のガラスのハートが砕け散る。
…………本当は軽くて丈夫なプラスチックだが。

「明久。ならコレを使え」

そう言つて今度は坂本が何かを手渡す。

「…………輪ゴムでどうしようと？」

「足に巻きつけるといい」

「…………あのね雄二。嬉しいけど、こんなもの1本じゃ僕の体重は支
えられないんだよ？」

「俺をナメるなよ。それだけなわけがないだろ」

「え？ そつなの？ 疑つて」

「もう1本用意してある」

自信満々にもう1本輪ゴムを取り出す坂本に絶句する明久。

「あのね雄一。本数の問題じゃないからね？」

明久が坂本にそう言つたと同時に朝のHRをしに鉄人がやつてきた。

「はあ…………停学明け早々、お前たちは何をやつているんだ……」

「あ、先生！ 助けて下さい！ 校内暴力です！ クラスマイトの虐めな
んです！」

『違います！ これは学内の風紀を護るために聖戦です！』

吉井は不純異性交遊の現行犯なんです！』

そんなバカ共の言葉を聞いて、思いつきり呆れ顔になりながら鉄人が告げる。

「あー……。なんでもいいが、お前たちは点数補充のテストは受けなくともいいのか？」

強化合宿のせいで男子は全員点数がないに等しいだろう?」

鉄人が言っているのは、試験を受けるための申請のこと。

普通の授業時間にテストを受けたい場合は、教師の準備があるため事前に申請が必要になる。

強化合宿では最終的にどの教科も入り乱れての死闘になつたらしく、ほぼ全員が全ての教科の点数を消費している。そのため、点数の補充をするべきなのだが

「「今はそれどこのじや ありません!」」

坂本と明久が言つ。

『前の試験からまだ3ヶ月過ぎていないのでFクラスから試験戦争を仕掛けることはできない上に、最低設備のため攻め込まれる心配もない。そんな当面は使いもしないようなテストの点数より、今からの行く末の方がよっぽど重要な問題だ』という理由で2人は言つたんだろう。

ま、コイツらのことだし別にどうでもいいが『備えあれば憂いなし』つて言葉を知らねえのか?

「やれやれ。お前らがそう言つなら構わんが……。

とりあえず連絡事項だ。先週から行われていた試験召喚システムのメンテナンスだが、予定が遅れている。

教師も動員して推進しているが、明日までは終わりそうもない。その間は試合戦争ができるので注意するよ！」

それと宇童は子どもを連れて職員室に来い。

以上だ「

言い終えると鉄人は教室を出て行く。

……まさかこんなに早く呼び出しを食らうとは。それなら誰か解いてくれねえかな？

そう思うが量産型GOKHESは全員明久の方に意識が向いており解いてくれそうにない。言ひても解いてくれるとは思わないが。

『僕が解^{ほど}いてあげるー』

そう考えていると琥珀が量産型GOKHESの間を縫つてやつて来てそう言つ。

いい子だ。家に帰つたら飴ちゃんをあげよう。

「結構ガツチリ縛られてるけど大丈夫そうか？」

『うん！』

元気よく答えるとビニからともなく白いナイフを取り出す。刃渡り50㌢ほどの凶悪なやつを。
頑張れば人を両断できそうだ。

『これでザッククリ切るから大丈夫なのー』

擬音が怪しそう。

「お、俺の身まで斬るなよ?」

『任せてー』

そう言つて二ゴシと笑つた後、俺に向かつてナイフを斜めに振り下ろす。繩ではなく俺に向かつて。

ザシュッ

……あ、ありのまま今起こつたことを話すぜ。

『俺は琥珀に頼んで繩を切つてもうおつとしたらいつの間にかまとめて俺まで斬られていた』

な、何を言つてゐるのかわからねえと思うが俺も何をされたのかわからなかつた……。

頭がどうにかなりそうだ……。

イタズラだとか反抗期だとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ……。

『パパー、別に痛くないでしょー?』

俺は自由になつた手で傷痕を押さえる。
ぐつ、痛くねえワケ……

「……あ、痛くねえ。てか傷がねえ。なんで?」

『コレつて『天使の力』^{テレスマ}からできるから同じ『天使の力』^{テレスマ}持つてる人には効かないのー』

「あー、なるほど。
てか、そしたら先にそう言つて欲しかつた

《「」めんなさい》

琥珀が素直に謝ると俺は琥珀の頭を撫でながら言つ。

「次から氣をつけような？」

《うん！》

「んじゃ職員室に行くか」

そつと琥珀を肩車して立ち上ると

『宇童が脱走を計つてゐるぞ！』

『何つ！どうやつて繩から抜け出した！』

『子どもがナイフで繩を切つたよ！』

『ちつ、ひつ捕らえろー。』

量産型GOKI-sに氣づかれる。

また、捕まつてたまるか！

そう思つてゐると扉がガラガラッと開いて誰かが入つてくるがそつちに氣を回す余裕はない。

「！」これは一体何事じや！？」

秀吉が来たらしい。

今朝は珍しく起きていなかつため、秀吉は置いて來た。

『木下。邪魔してくれるな。』

今我々は異端者である吉井 明久・坂本 雄一・宇童 空の3名の処刑を行うところなんだ』

審問会からただの私怨を晴らす会になつてゐる。

「そうじゃったのか。

しかし、雄一と空はわからんでもないが、明久は何をしたのじゃ？『よく聞いてくれた木下。

異端者・吉井 明久はよりによつて我らが聖域である文月学園敷地内で朝っぱらから島田 美波と接吻などといつ不埒な行為を』

ガラツ

量産型GOKIの口上の途中、耳まで真っ赤になつた顔を俯けて足早に自分の席に向かう女子生徒・島田 美波が現れた。

『　』
『　』
『　』
『　』
『　』

教室内が水をうつたよに静まり返る。

これは好機！

俺はスルツと量産型GOKI'sの間を抜けて廊下へと飛び出した。

バカと俺と審問会（後書き）

島国根性

他国との交渉が少ないため視野が狭く、閉鎖的でこせこせした性質。
(広辞苑より)

バカと俺と血の噴水

職員室

今は1時間目終わりの休み時間。

1時間目の始まる直前に行つたんだが『授業が終わつてからまた来い』って鉄人に言われて追い返された。折角量産型GOKI'sから抜け出してきたつてのに鉄人の野郎適當に返しやがつて。俺の努力を返せ。ま、それは置いといて。

「鉄人來たぞ」

『來たぞー』

俺の言葉を真似して琥珀が言つ。

「……宇童。今日呼び出した理由は分かつているよな?
「ああ、琥珀のことだろ?」

そう言つて俺は琥珀を指す。

「その通りだ。

それで、その子はどうしたんだ?」「どうした、つて親戚の子」「それにしてはお前に似すぎてないか?」「昔から世話してたからな」

「いや、内面のことではなく外見のことだ。

お前一族、つて言つのも変だが国際結婚してるのはお前のところだけなんだるつへ」

あー……そういうやそんなこと言つた記憶があるな。

「あー……最近国際結婚した人がいてな、その人の子だ」

「最近できたにしては大きすぎる」

「最近つて言つてもアレだぞ？去年だぞ」

「国際結婚うんぬんを聞いたのは去年の1・2月くらいだ。

それ以降に国際結婚して子どもができるとしても、最低1年は過ぎないと足腰はしつかりしてこない。

肩車なんて普通はできるはずがない

「……隠してたんだが実は俺の弟だ」

「それなら隠す必要はないだろ？？」

「……まあ……そうだな……」

「なぜ言いよどむ？

人に言えない理由があるんじゃないのか？」

「そんなもんはねえ」

「本当か？」

お前の子どもだつたりしないのか？」

「ち、違えよ！？」

《僕、パパの子どもじゅないの？》

琥珀が悲しそうに言ひ。『

くつ、そんなふうに言われたら

「違うなんて言えねえじゃねえか……」

無意識の中に呴いたことに気がつかない。

『もしもし』

鉄人はいつの間にか電話をかけており英語で話します。

『宇童 空の親御さんですか？私は彼の担任の西村と言います。彼のことで話したいことがあるのですが』

俺の親にかけたらしく。

英語で話しているところを見るとおしゃべりで母さんと話しているんだ
ね。母さんは日本語が話せないワケじゃねえんだがな。
にしても英語上手いな。

体育だけの筋肉じゃねえんだなとも思わなくもない。
てかなんで電話をかけたんだ？

『はい、分かりました。それではお待ちしております』

そう言うとパタンとケータイを閉じる。

「用は済んだし今日はとりあえず戻つていいぞ」

「あ？……ああ、わかった」

「それと琥珀君を今日一日保健室で面倒見てもうえばづだ？」

やつて琥珀を見るが

『やなの一…パパといふのー!』

朝と同じようにガシッと俺の頭にしがみつく。

知つてるか？純粹な言葉つて時には凶器に（ry

「そりゃ……。それなら仕方ない。

宇童、しつかりと面倒見るんだぞ？」

「もちろんだ！」

んじゃ教室に戻るな……の前に、朝に試験召喚システムをメンテナ
ンス中つて言つてたよな？」

「ああ、言つたな」

「ババアからは一新するつて聞いたんだが？」

「学園長のことばババアと呼ぶな。

……それで、今回はメンテナンスだけだ」

「そうか、わかつた。

んじや教室に戻るな」

ひらひらと手を振ると今度こそ職員室を出て行く。
次の休み時間にババアのここに行かねえとな。

Fクラス教室

「 だつて、ウチはアキと付き合つているんだから

シユカカカカツ（畳にカツターが刺さる音）

『 』 『 』 チツ 『 』 『 』

俺が教室に入ると明久に無数のカツターが投擲されたところだつた。

……見た感じでだが今の状況を説明しよう。

まず教室内にいるのは、窓側の俺の席付近で畳を返しカツターを防いだ体勢のままの明久と、そのすぐ隣に真っ赤になつた島田。そしてその周りに嫉妬の炎で燃え上がつたFクラスの奴ら+スネーク。俺が教室に入った時に聞こえてきた島田の一言が引き金になり明久にカツターを投擲したんだろう。

男の嫉妬は見苦しいだけだつてのにな。

てか、なぜスネークがここにいる？ 島田のキスの件がバレたのか？

「お、お姉さま……？ 付き合つているなんて、冗談、ですよね？」

打ちひしがれたようによろめくスネーク。

島田は静かに首を横に振つて答える。

「冗談なんかじゃないわ。ホントの話」

「そ、それじゃ、お姉さま。美晴の幻想だと思つた今朝のキスも、本当に……！」

「……うん。

だからね、美晴。

これからもウチの

「……が……から……（ボソッ）」

「『あくまでも』お友達として

「……が存在するから……（ボソッ）」

スネークが何かを呑みながらフルフルと震えだした

「美晴、聞いてる？」

「男なんかが存在するからお姉さまが惑わされるんですーっ！」

と思つたら突然スネークが叫ぶ。
そして弾かれたように動き出す。

「この豚野郎を始末します！

そして美晴が第2の吉井 明久としてお姉さまと結ばれるのです！」

そう言いながら明久に肉薄する。

「ちょ、ちょっと清水さん！？かなり錯乱してない！？
僕を始末したところで入れ替わることは難しいと思つけどーー？」

「心配は無用です！」

極力身体に傷をつけないように始末した後、剥いだ皮を被つて吉井
明久になります！

日本昔話のタヌキさんもそうしていましたし完璧です！」

原点は可愛いがやつてる」とがグロいな……。

「く……つー助けてムツツリーーー！」

清水さんを止められるのはムツツリーーーしかいない！」

スネークの言葉を聞き本気でマズいと思つたのか、スネークの素早い動きに対処できる康太に助けを求めるが

「…………消しゴムのカスで練り消しを作るのに忙しい」

そう言いながらねりねりと静かに手を動かしているが、目は明久に

向かつて飛び回るスネークのスカートを追つている。
さすが『ムツツリー』と呼ばれるだけのことはあるな。

「くそっ！万策尽き……つ…？空…？」

空助けて！」

明久はようやく俺に気づき助けを求める。
しゃあねえな。

「スネーク、そこまでにしておけ」

「うるさいです！」

男なんてこの世からいなくなってしまえばいいんですつ！」

プランA『Word』失敗。

全然聞く耳持つてくれねえ……。ま、最初から聞くとは思つちやい
ねえが。

んじや続いてプランB『Justice』。

「それは琥珀を見てもそう言えるのか？」

そつ言つて飛び回つているスネークを捕まえ琥珀を腕に抱かせる。
朝も言つたように琥珀は蠶膚目に見なくとも可愛らしい。

こんな可愛らしい男の子を見てスネークはどう反応する気だ？

「…………」
『…………』

スネークは落ち着きを取り戻し琥珀をじっと見つめながら口を開く。

「……この娘になんの関係があるのですか？」

ん？『この』のところに違和感が。

「スネーク。もしかして琥珀を女の子だと思つてるか？」
「ええ、そうですが？」

「……!? まさか豚野郎と同じ性別なのですか…？」

「ああ、琥珀は男の子だ。明久と同じにするのは癪だがな」
「な……つー? け、穢らわしいですつー離れなさい…」

そう言つてスネークは琥珀を『抱きしめる』。

《きゅうつ》

「おー、スネーク。言つてゐる」とやつてゐる「とが正反対だぞ」「し、しょうがないです！」
「じ、こんな可愛い子豚ちゃんがこの世にいるなんて…」

プランB『Jiro's love』はなかなか順調のようだ。

フツ、可愛いは正義！
てか豚豚言つのやめろ。

「スネーク。琥珀を豚呼ばわりすんな。ま、俺と琥珀以外は豚で間違つてねえから今まで通りそう呼び続ける」

俺がそいつと周りがブーリングをするが無視。

「……それでだ、琥珀を見てまだ全ての男がこの世からいなくなつちまえばいいなんて思つてんのか？」

「うつ……そ、それでも男が抹殺対象なのは変わりません…」

「ですが可愛い子には手を出しません。美晴はそんな子まで狩る

悪魔ではありますから

男を皆殺しにする」とよつはよくなつたが、子ビもでも可愛くなれば抹殺するつてことだよな?

ま、琥珀が無事だし赤の他人の子ビもを心配する必要はねえ。んじや次はなんて言おう。うーん……思いつかねえ。

なら適当でいいか。

「じゃあ、もし島田と女装の似合づ明久との子が生まれたらどう思つ? すんげえ可愛い子だと思うんだがスネークは興味ねえか?」

「そ、そうです! さ、興味なんてありません! …… といふわけじゃないです……。

……しかしーそんな理由でお姉さまと『』の豚野郎が付き合つていじじにはなりません!」

…… 適当ねえだ。

島田と明久の名前出すべきじゃなかつたな……。

「とにかくその豚野郎は消えるべきです!」

そして美晴はお姉さまと結婚して、生れてくる娘にお姉さまの『美波』から一文字ひとつ『美来』と名付けるのですー! 「待つんだ清水さんー。

息子が生まれたらどうするんだ!」

「男なんかが生まれるのなら『波平』で充分です! さあ、5秒あげます。神への祈りを済ませて下さい。

…… 1 …… 2 …… 「く……つー!」

明久が苦悶の表情になる。

……明久はどうでもいいとして子ビモニ『波平』はつけたくねえな。
将来頭が寂しくなりそうだし。

「 5

「ちょっと待つて清水さん！今一気に5秒に飛んだよー？」

「豚野郎つるさいです。ここのでは美晴がルールだといふことを忘れないで下さい。

それでは消えなさい！」

「そんな理不尽なー？」

そして明久の死刑執行間近といつとこりでスネークに話しかける者が1人。

《ねえねえ》

「はい、なんですか子豚ちゃん？」

琥珀の言葉にスネークはピタッと止まる。

《僕は琥珀なのー。だからお姉ちゃんも琥珀つて呼ぶのー》

「つ…………！」

何があつたのかわからないが明久を消すの中止し、抱いていた琥珀を素早く床におろして琥珀から距離をとる。

《お姉ちゃんビうしたのー？》

「く…………つーか、近寄らないで下さいー！」

《！？…………ひづく…………パパあー》

急に大声をだしたスネークに驚いたのか琥珀が泣き出し俺の元へ駆けてくる。

「あー、よしよし。もう大丈夫だぞ。
おい、スネーク。大人気ないぞ」

琥珀をだっこしてスネークに言つ。

「し、仕方ありません！
そんな純粋な子豚ちゃんに『お姉ちゃん』と言われては理性が崩壊しそうです！」

……知つてたか？可愛すぎるつてのは時には毒になるんだぜ

「琥珀。スネークは『お姉ちゃん』って呼ばれるのが恥ずかしいから大声出しちまつたんだってよ。

だから何度も呼んで馴らさしてあげねえといけねえっぽいぞ？」

「なつ！？美晴はそんなこと

『ひつく……お姉ちゃんホント……？』

「うつ……」

『ねえお姉ちゃん……ホント……？』

「ち、違……」

『うう……ひつく……』

「……本当です」

『ホント！？やたーつ！お姉ちゃん大好き！』

「くふつ……！？」

「おいスネーク！？大丈夫か！？」

突然スネークが吐血し、片膝を床について肩で息をしだす。

今度は純粋な言葉（「ゆの典型的な例だな。

「し、心配は無用です……」

『ホント大丈夫ー?』

「つ……!?(プシヤアツ)」

床におりした琥珀がスネークに駆け寄り声をかけると、今度は康太
よろしく鼻血が吹き出だす。
量も康太と負けず劣らず。

「…………お姉さま…………美晴は…………」」までの…………ようです…………」

「美晴つ！――?？」

「…………憎き豚野郎…………コレで終わりだと…………思わないで…………下さ…………」

い…………（ガクツ）」

そつ最後に言つて力尽きるスネーク。

……茶番だな。

「島田。俺はスネークを保健室に連れて行つてくるな。
琥珀行くぞ」

『はいなー』

そつ言つて琥珀を肩車してスネークをお姫様だっこをすると

『宇童！貴様、木下や工藤だけじゃ飽きたらズ清水にも手を出す気
か！』

『何ハーレム拡大しようとしてんだ！』

『…………妬ましいが撮影準備』

康太を除く全員（明久含む）が両手にカッターを持ち構える。

「はあ……お前らが妄想してゐようなどせぬよ。

ただ単に保健室に寝かせるだけだ」

『清水と寝るだと！？』

『子どもがこるとこいつの口ヤる気か！？』

『くつ……どこでも構わざやる、コレが宇童と俺らの差か……』

『俺らにはそんな真似はできない……つ！

負けを認めやるおえないか……つ！』

「自己完結してこむとこ悪いが、そんな犯罪まがいなことしねえつ

て言つたばっかじやねえか……

『じゃあ何をする氣だ！？』

「何もしねえつての……

『嘘をつくなつ！』

……」こつら相手にすんのクソ面倒くせえ。

そつ思ひ俺は返事をせず教室の扉の方へ歩いていく。

『宇童、貴様ビルへ行く氣だ！！』

「…………」

『おい、答えり！』

無視するとカシシヒト肩を掴まれ、俺は振り向かず口封される。

「……離せ。お前らの粗手してつと時間だけが過ぎちまつ

『答えたなら離す』

『離したら答える』

『いや、先に答える』

『いやこや、先に離せ』

『…………』

A・T殺法：宝玉碎き『Golden Crusher』ver.
後ろ蹴り)』

見られるのもお構いなしで『天使の力』^{テレグマ}でA・Tを作り出し俺の肩を掴んでいるヤツのキャンタマに向かって右足を蹴り上げる。

『ふつ、甘い！甘いぞ！甘すぎるぞ！和三盆より甘いいつ！－！その技は吉井に使っているところを一度見た！俺にその技はきかない－。』

そう叫びながら俺の肩から手を離し股間をカバーをするバカ1匹。甘いのはお前の方だ。

キュルルルルッ

「熱つ！？」

股間の守りにA・T^{ニア・トレック}が触れるとホイールが高速回転し、それにより発生する摩擦熱の熱さに驚いて咄嗟に股間から手を離すバカ1匹。その隙に右足をキャンタマに叩き込む。

ズスツ

『ふぬおおおおおおおおおおおおおお！－！－！？？？？

下腹部に謎の痛みがああああああああああああああ－！－！－！？？？？

「……明久と同じ反応してんじやねえよ」

そう言いながら『天使の力』^{テレグマ}を体内に戻すとちょうど教室の扉が開き鉄人が入ってくる。

「さあ、授業を始めるぞ。今日は遠藤先生は別件で外しているので俺がビシビシ ん？ 宇童。清水を抱きかかえてどうした？」

「別にどうもしてねえよ。

ただスネークが貧血で倒れたから保健室に連れて行こうとしてるだけだ

「そうか。すぐに帰つて来るんだぞ」

「了解」

そう返事をして教室から出て行つた。

バカと俺と血の噴水（後書き）

鉄人が真つ先に『お前の子どもだつたりしないのか?』と言つたのは『親戚の子じやないなら宇童の子なんじやないのか?』と考えたから。

空の弟だと信じなかつたのは空の反応が変だと思つたから。というワケです。

バカと俺と保健室（前書き）

ヽ(*・`・)ノノ「保健室と聞いてエロいと思った人は挙手！」
(.・・)(・・)(・・)

保健室

ガラガラ

「ヤブ。病人連れてきたぞ」

保健室に入つて早々、椅子に座つて本を読んでいる半黒髪の女性にそう投げかける。

彼女は養護教諭（所謂、保健室の先生）。

なぜ半黒髪と言つたのかといふと何を思つたのか彼女は髪の右半分を銀色に染めている。

ぶつちやけ白髪にしかみえねえ。

「宇童君。『ブラックジャック』と呼んでくれと言つているじゃないか

「あんたに『ブラックジャック』なんていう大層なあだ名はいらぬえ。ヤブ医者の『ヤブ』で十分だ。

そんなことよりマンガなんか読んでねえで仕事しろ、この給料泥棒」

実はこの養護教諭、大のマンガ好き。

前に一度仕事中に堂々とマンガを机の上に広げて読んでいたためにそれを生徒にチクられ鉄人の手により廃品回収に全部縛つて出されたという逸話がある。

その日以来どうやつたらマンガを読んでいることがバレないかを研究しているようだ。

その一つが今しているマンガにブックカバーをつけて読むと言つて

と。『コレをすることにより見た目はちゃんとした本にしか見えない。本人はブックカバーのことを『神の彩色』、ブックカバーでのカモフラージュのことを『人の皮を被つた神（ネ申ktkr）』と呼んでいる。

それで『人の皮を被つた神（ネ申ktkr）』は何気にバレないらしい。

マンガにコレをして鉄人とすれ違つてもバレなかつたと嬉しそうに話してくれた。

……マジで仕事しろ。

「はあ……仕方ないね。その娘は適当にそこら辺に転がしておいてくれないかい？」

「鉄人に言うぞ」「！」

「宇童様！あの筋肉達磨を呼ぶのだけは！」勘弁を！」

そう言つてバツと土下座をするヤブ。

……プライドはねえのかよ。

「わかつたから土下座なんにしてねえで働け」

「はい。

それじゃ、ベッドに寝かせてあげて」

そう言われスネークをベッドに寝かせるとヤブが尋ねてくる。

「気になつてたんだけど清水君はDクラスなのになんで宇童君が連れてきたんだい？」

「あー、それはスネークがFクラスで倒れたからだ

「スネーク？……ああ、清水君のことだね。

それって宇童君が『押し倒した』の間違えじゃないのかい？」

「んなことしてねえよ。

純粋の塊にやられただけだ」

純粋の塊＝琥珀

名前つけてから黒いところが無くなつたな。

「なんだいそれは？」

「琥珀のこと」

『はいなー。琥珀なのー』

裏表のない純粋な笑みを浮かべて自己紹介すると

「……かはつ！？」

ヤブがスネークと同じように吐血をする。

……耐久力ねえなオイ。

「大丈夫か？」

「……なるほど。『レならあの清水君がやられたのもわかるよ。

それにしてもなんてLOVELY FACEなんだ！－！」

……なんで英語なんだよ。無駄に発音いいし……。

「お持ち帰りしていいかい？」

「『ブラックジャック』みたいに体中縫い目だらけにしてえんならいいぞ？」

「冗談抜きで。

「……仕方ない。止めておくよ。

それで琥珀君は宇童君にそつくりだけどもしかしなくとも宇童君の

「あー、もし広がつてたら鉄人に言わねえといけねえことがあるかもしんねえな。マンガのこととか」

俺はわざとじりしく囁く。

「ぐ、口が堅いと尊されるこのワタシがそういうことを言いふらすわけがないだろう！」

だから！だから、あの筋肉達磨には『本当』に何も言わないでくれ！！

「大丈夫だ。広がつてなかつたら言わねえよ」

誰が広げようとも鉄人に言うつてことだがな。
ハツ、人の弱みを握るつてのはなかなか気分がいいな。

フハハハハハハハツ！

「んじゃ、そろそろ戻るな。スネークのこと頼んだぞ？」「職務を全つします！」

シユバツとヤブが敬礼したのを見ると俺は保健室から出て行つた。

Fクラス教室

『 “ I wish I were a bird . ” これは仮定法過去という』

扉越しのためか鉄人の声がくぐもって聞くこえる。
ちゃんと説明しているところを聞くと脳筋じゃねえらしい。

ガラガラ

「つまり お、宇童帰ってきたか。ならすぐ「席に着け」

「了解」

「つまり直接的な日本語訳は 」

俺を席に座るよう促した後、鉄人は説明を続け出す。
それを気にせず俺は自分の席へと向かい座ると島田が話しかけてきた。

「あ、宇童。美晴の様子はどうだつた?」

「まあ、大丈夫だと思うぞ。」

それについてなんでここにいんだ?」

本来俺の隣には明久しかいないハズなのに島田がプラスされている。
マジでなんで?

「宇童たちが停学処分を受けてた先週に美晴と色々あつて使いにくくなつちやつて……」

「あー、なるほど。」

「でも狭くねえか?密着してんじ」

「み、密着つて……!?

じゅ、授業を聞くためには同じ側に座らないと駄目でしょー…?」

……島田も島田で隠すの下手だよな?

「本当のところは『明久の隣になれて嬉しい』と」

「そ、そんなこと一言も言ひてないでしょー…?」「でも明久と付き合つてんだろ?」

朝の明久の様子から言つて島田の勘違いだとは思つが。

「え、あ、そ、そうね……」

「んでいつ告つたんだ?」

「え? えーっと……それは……『恋のとき』……アキから……」

いつもの強気な性格が嘘のよつに消え去つもじもじしながら島田が告げる。

恋は人を変える、とか聞くけどマジで変わつてんな。女の子らしくていいと思つ。

でも勘違いだつて知つたらすんげえショックだらうな……。

…どうにかできねえかな?

「宇童、どうしたの?」

「あ、いや何でもねえよ。

俺は島田のこと応援してゐるからなー。」

「へ? あ、うん! ありがと!」

「宇童、島田! 私語は慎め!」

小声で話していたと「うのに鉄人に注意される。

「宇童。ごめんね」

「お互い様だ」

島田が手を合わせて謝つてきたので俺は『氣にしてない』といつ意味を込めて微かに手を振る。

そして、俺は意識を島田から琥珀に移し、尋ねる。

「琥珀。膝の上に乗つとくか？」

《やうするー》

そつ返事をすると『よいしょ』と言つて肩から降り、トテトテ歩いて俺の膝の上までやつて来て座る。

「授業中は暇じゃねえか？」

《パパと一緒にだから大丈夫なのー》

「やうか」

純粹な言葉にもだいぶ慣れてきたな、と考えていると隣の明久の方から

「ひあつー！」

と肺から空氣を絞り出したような声が聞こえてきた。

「あ、ごめんねアキ」

「い、いや、別にいいけど……」

島田の尻尾ボニー・テールが明久の首筋に触れたらしい。

《パパー。お馬さんの尻尾みたいだねー？》

「まあ、ボニー・テールって言つくらいだしな」

「ひあつー！」

またしても明久から悲鳴が。

今度は島田が自分の髪の毛を片手に楽しげな表情をしている。

先ほどのが偶々であれば、今回のはわざとのようだ。

「アキツてば『ひあつー』って。変な声」
「く……つ……トイツで美波に仕返しを」

そういつて筆ペンを取り出すが

サワツ

「ひあつー。」

先に島田に攻撃される。

これで3度目だ。いい加減聞き飽きたな。

『おーつ！…パパ、僕もあの髪型してみたいー…』

「わかった。ちょっと待つてろよ」

島田の尻尾に興味を持つたのかそういつててきたので、一ナット帽を取り肩辺りまである琥珀の髪を結つてやる。

優子に似たのか髪質が良い。

「これでどうだ？」

『おおーつー？』

感動しながらブンブンと首を振り尻尾でペシペシと俺を叩いてくる。

「琥珀。首が痛むからあんまりしない方がいいぞ？」
『あ、うん…わかったのー』

そういう琥珀とのやりとつをしていた間に島田と畠久のやりとつが続いており

「ず、ズルいぞ美波！今度は僕の攻撃のはず！」

「邪魔はナシだよ！」

「そんなもの用意されたら邪魔するに決まってるでしょ！？」
思いつきりインクがつくじゃない！」

そう言つて島田に手をパシッと叩かれ筆ペンを落とされる明久。
オイ、畳が汚れるだろうが。

「僕の攻撃手段が……っ！」

くそつ！それなら美波の髪を使うまでだ！」

「ちよ、ちよっとー？」

明久に掴ませまこと髪を押さえられる島田の頭に明久は手を伸ばす。

程なくして島田の束ねられた後ろ髪は明久の手中に収まつたが一向
に反撃する気配を見せない。

その様子を訝しんで島田が明久の顔を覗き込む。

「……あ、アキ？どうしたの？」

「…………なる

ほど。ジラか……」

「アンタ何言つてんのー？」

明久は申し訳なさそうに手を引く。

「ー」「あつー物凄い誤解したまま手を離さないでよー。
きちんと触つて確かめなさいよねー！」

やつぱり島田は頭の後ろに手をやると、スルッとリボンを抜き取る。

そしてその直後、束ねられていた柔らかそうな髪の毛が宙に広がる。陽の光を受けて流れるそれは、まるで絹のように艶やかで銀細工のように煌びやかだった。

ま、優子には負けるがな。

愛子の髪は少々傷んでいるが、それは水泳部の宿命だらう。しゃあねえ。

「これでもきちんと手入れをしている白瀬の髪なんだからね！
ジラ扱いなんて冗談じゃないわ！

触つて確かめてみなさいっ！」

「じめん、美波。僕の誤解だつたよ」

「？怪しいわね。本当にちやんとわかったの？」

やつぱり島田は明久に疑わしげな視線を送る。

「もちろんだよ。いくら僕でも、その、こんな…………を作り物と間違えたりはしないよ」

「こんな、何？」

「そ、その……、こんな、綺麗なもの、を……」

「…………え…………？」

見せつけてくれるな。

「こんな」としたらFクラスの奴らが

『『『もう我慢ならねえ——つづき』』』

案の定Fクラスの奴らが暴走しだす。

『さつきから見てりやあ、これ見よがしにイチャイチャしゃがつて
！』

『殺す。マジ殺す。絶対的に殺す。魂まで殺す』

「……お姉さまの髪な触るなんて……ハツ裂きにしても尚、赦され
ません……！」

『出入りを固めろ！』こじて確実に殺るぞ！』

全員がカッターを構え一斉に投擲モーションに入る。

つこさつき貧血で倒れたスネークがもう復活してやがる。

お前は自分の教室に帰れ。

「全員カッターの投擲終了後、間髪入れずに卓袱台を吊りつけるの
ですっ！」

決してお姉さまと子豚ちゃんに当たらなように注意するのですよ
つ！』

『『『了解つー』』』

スネークはさりげなく琥珀にも気を配る。

俺については何も言わないところを見ると俺も潰す氣らしい。

恩を徒で返すとほこのことだな。折角保健室まで運んでもうたつて
のう。

「お姉さまー早くこひらへ避難して下せー！

そんな豚野郎と一緒にいると危険ですー！」

「清水さんいつの間にー？」

しかも監禁して清水さんの言つことを聞いて卓袱台まで構えて
のー？

クラスメイトを大事にしようよー！

「美晴、まだウチのことを諦めてくれないのー？」

「こんなこと続けても、お互にツラいだけなのに……」

「お姉さまはそこの豚野郎に騙されていいだけなんです！」

お姉さまのことを本当に想つているのはこの美晴以外

「お前らー今は授業中だぞーーー！」

言い争う明久たちに、とうとう鉄人の一喝が入り教室が静かになる。鉄人の怒声の効果は抜群だが琥珀が泣きそうだ。

大丈夫だぞ。よしよし。

「清水。授業はどうした？」

「そ、それどころじゃありません……ーお姉さまが

「清水」

低い声で静かに名前を呼ぶと、それだけでスネークは押し黙る。

「大人しく自分の教室に戻れ。それと、この教室への出入りを禁止する。

わかつたな？」

「……わかりました」

不承不承といった体でスネークが教室から出て行く。その時、明久を親の敵のように睨みつけていた。

……スネークが変なこと仕出かさねえといいがな。

「お前らも授業中に遊ぶんじゃない。そういうことは休み時間にやれ

鉄人に言われた通りに卓袱台を元の位置に戻し、カッターをしまう
バカ共。

こうして、この場は事なきを得た。

バカと俺と鬼」ついこ（前書き）

真のシンデレラが姿を現す！！

バカと俺と鬼」つい

学園長室

「ババア、召喚獣くれ」

「入つて早々になんかいアンタは。

それは一新してからだつて言つたさね」

「メンテナンスも一新するのも大して変わらねえだろ?」

「変わる変わる、大変わりさね。」

そもそも一新するつてことは大半をプログラミングし直すつてことだよ。それなら1体だけ新しく作るよりもまとめてした方が手間がかかるなくていいに決まつてるさね」

「……そういうもんか。

てかなんで今の時期にメンテナンスしてんだ? いつそのこと一新すりやいいだろ」

「そうはいかないさね。

まずは問題点を洗い出さないといけないよ」

「それなら今までのデータを見りや済むんじやねえのか?」

「2年になつて早々アンタたちがドンぱり騒ぎを起こしてくれたおかげでデータを整理するのも一苦労さね」

「…………悪い。

でもなんでそれがメンテナンスに繋がるんだ?

「新してからの方がすぐ見つかるだろ?」

「わざわざ問題点を見つけるためだけに一新するなんて時間の無駄さね。

それならメンテナンスで全ての数値がある一定の値に揃えて、そこからの変動を見る方がいいさね」

「あー、なるほどな」

確かにその方が効率的だな。

けどこの調子だと一新までどれだけ待たねえといけねえんだ?
一向に俺の召喚獣が手に入る気配がねえんだが。
そう考へているとババアが琥珀のこと尋ねてきた。

「それはそうとその子が自立した召喚獣かい?」

「あ?……まあ、そうだが」

俺がそう答えるとババアはじっと琥珀を見だす。
すると琥珀はババアのことが気になつたのか自己紹介をする。

『琥珀なのー。おばあちゃんよろしくー』

「ほう、これは本物の人間みたいさね」

「そりや人間だからな」

俺の体の半分からできてるしな。

「琥珀ちゃん。私は藤堂 カヲルだよ。好きに『おばあちゃん』って呼びな

そう言つていつものババアにあるまじき笑顔。

子どもに好かれそうな柔軟な笑顔だ。

それに男の子だとわかつた上で意図的に『ちゃん』付けをしている
ように思える。

後、好きに呼べって言つ割には『おばあちゃん』1択だけらしい。
にしても、ババアのビグザム装甲（鎧びついた心の扉）をこじ開け
るとは……。

琥珀、恐るべし。

「それで人間って言うのはどういう意味さね？」

「どういう意味ってそのままの意味だが？」

「この子は〇と一の羅列じゃないってのかい？」

「ああ。

飯食うし風呂も入るし寝もする普通の人間だ。あ、ちゃんと成長もすんぞ」

「……アンタの周りにはオカルトがありふれているようだと思つたね」

「あー……俺もそう思うな。

ま、今日来たのは召喚獣のことだけだからもう教室に戻るな

『おばあちゃん、ばいばい』

「はい、ばいばい、琥珀ちゃん。好きな時に来るといいさね。

今度はお菓子を置いておくよ」

『わかつたのー』

ババアの言葉に琥珀は元気よく返す。

……ババアの『テレ具合が半端ねえ。

Fクラス教室

俺が学園長室から戻ると、坂本・明久・秀吉・康太の4人が坂本の席で顔を突き合わせて何かを話し合っていた。

「お前ら真面目な顔して何やつてんだ?」

「む、空か。丁度いいところに来おつたな」

秀吉が俺にも座れといった具合に坂本の前の席を空けてきたが、元々俺の席だ。

そんなことを考えながら席につき、琥珀を膝の上に乗せて話を切り出す。

「んで、何やつてんだ？」

「明久のせいで面倒なことになりそうなんだよ」

「……ん？僕のせい？」

何が起こっているのか分からぬといつた表情で首を傾げる明久。

「明久のせいつてのは島田関係か？」

「正解じゃ」

「…………Dクラスで試験戦争を始めようとする動きがある」

「試験戦争？Dクラスが？」

別にDクラスがBクラスに攻め込んで僕らに関係ないんじゃないの？」

「？」

「……俺が『明久の島田関係』って言ったのを聞き逃したのか？間違いなくDクラスは俺らFクラス狙いだろうな。

「お主の言つ通り、Dクラスの目的がBクラスであれば問題はないのじゃが……」

「え？違うの？」

だとすると、まさかAクラス狙いとか？

「……『イツの頭涌いてんのか？』

「それなら坂本が『面倒なこと』なんて言つワケねえだろ？」「だとしたら、まさか……？」

「…………（「クリ）。Dクラスの狙いはこの教室、Fクラス」「えええつ！？」

だって、僕らはまだ試召戦争をする権利は無いはずだよね？」

「『Fクラスから他クラスへ試召戦争を申し込む権利』が無いだけで試召戦争をする権利がないワケじゃねえ。」

だから申し込まれたら応戦しねえワケにはいかねえよ」

「けど、僕らの最低設備のFクラスなんだし、攻めてくる相手なんていないはずじゃないの？」

「だからさっさと言つただろ？」

『お前のせい』で面倒なことになりそだ、と

「明久よ。相手はDクラスじゃ。」

思い当たるフシがあるじやろ？

「……もしかして、清水さん？」

「もしかしなくともスネークしかいねえだろ……」

はあ、と溜め息が漏れる。

「やつてくれたな明久。

お前が島田とイチャついてくれたおかげで、ヒートアップした清水はDクラスの連中を巻き込んで俺たちに八つ当たりをするつもりだぞ」

「そ、そんな！僕は全然そんなつもりは……！」

「じゃが、お主にそんな気はなくとも清水はそうは思つておらん」「大方、明久と島田の席を離す為に卓袱台をみかん箱にする気だろうな」

ま、俺は卓袱台でもみかん箱でもどっちでもいいが。

「け、けど、Dクラスだって全員が乗り気なわけじやないでしょ?」

そんな目的でクラスの皆が関わる戦争をするとは思えないよ。

Dクラス代表だって反対するんじゃないかなー

「そこで今の状況が問題になる。

空を除き、今俺たちは例の集団覗きの主犯だ。

むしろ自分たちの手で罰を与えたいと考えていぬべからだらうな」

お主の知二てのどおり、ロケテスの代表は男子生徒じ
かの鬼子見及いのこつな代記、せきじゆうぢは、おほせう。

怒りに燃える女子一同と嫉妬に燃える清水を抑えきれるとは思えん」

そんなん

「おまえ達はわざと勝てた自信はある？」

を補充できていながら、空が最初から飛ばして闘つてくれれば勝てる見込みはある。

姫路もいるし最低でも引き分けに持ち込めるだろ?」

「悪いが俺は今召喚獣ねえから」

明久が言い切る前に俺は告げる。

こんな「J」とはなんなん?無理言ってでも作ってもどうだよか?たな

「お前ひどい黙だらけなんだ？」

アホ面まで晒して。

「ほ。よく聞こえなかつたからもう一度言つてくれないか？」

「あへ、よく聞いとけよ。

「ホン……ンシンシ、……今召喚獣ねえから」

声の調子を整え爽やかな笑みとともにしゃべり出す。

「……今『召喚獣がない』と聞こえた気がするんだがお前ひめどりだ？」

「……聞こえたね」

「……聞こえたのじや」

「…………（口ク口ク）」

「…………ふう…………」

お、コレは朝のパターンか。

「くたばれっ！」

「くたばれっ！」

案の定俺の顔面に向けて坂本のパンチが放たれるが甘いな！

坂本のパンチが俺の顔面ではなく額に当たるよう調節し、坂本の拳が俺の額に接触すると鉄板を殴ったような音が発せられる。

「ぐお……つーつーお前頭に何仕込んでるんだーーー！」

ガンッ

「フフフ、こんな事もあらうかと『頭蓋骨』を仕込んでいたのだ！」

！」

クワツと田を見開いてネタバラし。

ネタもクソもねえとか言っちゃダメだぞ？

「なるほど！」

「…………手強い……！」

「おおっ！？ そんな秘密兵器があつたとはの……」

『おおーっ！？ パパす』——！！』

「DA RO？」

そう言つてニヒルな笑みを浮かべると坂本がまだ痛む拳をさすりながら言ひ。

「くつ……、お前らバカだる」

「オイ、琥珀のことをバカとか言つんじやねえよ」

この可愛らしい容姿のビニにバカの要素があんだけ？

「その子どものことじやねえよ。そここのバカ3人のことだよ」

「お、どうか。なら許す」

「それで話を戻すが、空が無理だと言つのなら苦しいな。

さつきも言ったようにクラスの連中は点数を補充できていない。その上まともに戦えるのは姫路と島田のわずか2人だけ。

余程のことがないと勝ち目はない」

「今の状況じやと戦力は女子のみといふことじやからな。ワシらのFクラスに女子は2人、Dクラスには20人以上。

いくら姫路があるとしても戦力差は歴然じやな」

「空が戦えないのは相当キツいんだね」

「ああ、そうだな。」

つてなワケで、今日は戦争を回避する方が賢明だな。

勝ったとしてもロクラス程度の設備じゃあまりメリットが無いし、折角貸しがあるクラスをわざわざ敵に回すこともないだろ？

「え？ 回避できるの？」

「お前と島田次第だけだ」

そう言つて坂本はあたりをキョロキョロと見回し始めた。

「坂本、どうかしたのか？」

「ああ。島田が近くにいるかと思ってな」

「美波ならさつき姫路さんと同じに行つたけど」

島田を探していた坂本に明久が言つ。

明久のことを行つたのか……。ここでは

「修羅場だな」

「つむ。修羅場じやの」

「…………（「ク」「ク）」

「……それより明久、一つ確認しておきたいことがある」

「ん？ なに雄一？」

「島田とお前は付き合つてゐるのか？」

「僕の記憶だと、付き合つてはいない、と思つ……」

「やつぱそつか……。

「じゃが、島田の態度は明らかに付き合つてゐる者のそれじゃぞ？」

「うん。それは多分、僕の送つたメールが原因で」

「

説明が長いのでまとめる

始まりは強化合宿の夜

送信者：須川

【気になつたんだけど、お前はなんで覗きにそこまで必死なんだ？
そもそも本当に女が好きなのか？

坂本や木下の尻が好きだつて言つていた気がするんだけど】

このメールに対し

【勿論好きだからに決まつているじゃないか！
雄一なんかよりもずっと…】

と送つたが

【メール送信完了】……

島田 美波】

という具合に島田に送つてしまい、弁明する前に不慮の事故によりケータイは大破。坂本のケータイで弁明しようとするも登録されたアドレスは霧島のみ。

その後もずっと弁明できずに今に至る。

「なるほどのう。明久も明久じゃが……雄一、お主も素晴らしいタイミングでやらかしてくれたものじゃな……」

「全くだよ雄一。腹を切つて詫びるべきだよ」

「う……まあ、確かに悪かつた。すまん明久」

「…………けど、そもそもの原因は明久の確認不足」

「うう。確かに」

「だが、誤解だといつのなり話は早い」「え？ 何が？」

「Dクラスとの試合戦争の話だ。

島田の誤解を解いてお前らがいつも姿に戻れば清水もおとなしくなるだろ？」

そうすればDクラスは俺たちに不満はあっても、開戦するほどの意気込みがある核がいなくなつて、戦争の話は流れる。

俺たちはいつも日常を取り戻して万事解決というわけだ

「でもよ、島田はあんなに嬉しそうなんだぜ？」

誤解でした、つて終わらせるのに俺は納得いかねえ」「空。夢は覚めるモノだ。

遅かれ早かれどうせ誤解だということは伝わる。

それなら早い内に知つた方が傷つかなくて済むだろ？」「

「そうかもしんねえけど」「

「あ、あの、明久君っ！」

聞きたいことがありますっ！」

俺が坂本と言い合つていると突然教室の扉が開き、姫路が駆け寄つてきて告げる。

普段あつとりしている姫路にしては珍しい剣幕だ。

「え？ な、なに？」

「そ、その……っ！ あ、明久君は……美波ちゃんに告白したんですか……？」

徐々に尻すぼみになつていく姫路の声。
だが何が言いてえのかは理解できる。

「え、えっと……それなんだけど……」「

「姫路、その話なんだが、島田も一緒にいいだろ？」

どにいるかわかるか？」

言いよどむ明久に坂本が会話に割って入る。

「美波ちゃんなら、さつきまで一緒に屋上にいましたけど……」

「よし。それなら俺たちも屋上に行くか。

ここで話すのもなんだしな」

「そうだね。姫路さんには往復になつちやつて申し訳ないけど」

「あ、いえ。私は全然構いませんので」

「んじゃ、行くか」

坂本がそう言うと全員席を立つ。
いつの間にか眠っていた琥珀をだっこして俺も席をたち屋上に向かう。

屋上への道中

「明久。どうするつもりなんだ？」

「どうするもなにも誤解だつたつてことを言つつもりだよ」

それだけか？

「……なあ、明久。お前がもし好きな人に告られたとしよう。
だがそれは偶然が重なつてできたただの誤解。

それをその相手から『誤解だつたのごめんね』って言われて、『

はいそーですか』つて笑つて引き下がれるか?」

「急にどうしたの?」

「いいから答える」

「え、うーん……引き下がれない、かな」

「そうだろ?」

もしそんなことになつてそれをお前はどう感じる?」

「……胸がキュウとなるようで苦しい」

「ソレが今から島田が味わうかもしれねえ気持ちだ。

お前の返答次第では島田を傷つけることになる」

「で、でも戦争を回避するにはコレしかないんだよ?」

「戦争なんてどうでもいい。」

問題なのはお前が島田をどう思つてるかだ。

島田が明久のこと好きなのは知つてんだろ?」

「……うん、なんとなくだけど」

「なら、それにきりんと答えてやれ。

屋上では島田と2人つきつにしてやるから」

「……わかつた」

明久は一度頷くと決意の籠もつた目で俺を見る。

「んじや誠心誠意貰くせよ」

ポンと脇中を軽く叩きつつの間にか止まつていた足を再び動かし屋上に向かつ。

屋上に続く扉を開くと、その向こうには晴れ渡る青空と、その下に静かに佇む島田・坂本たちがいた。

「お、やつと来たか」

「ああ、ちょっと明久と話しててな」

「ねえ、雄一」

明久はさつき俺が言つたことを実行に移すためか早速切り出す。

「僕と美波の2人つきりにさせてくれないかな?」

「それまた急にどうした?」

「坂本。ここは深く考えずに2人つきりにさせり」

「……絶対Dクラスとの戦争を回避しろよ?」

「……それは約束できない」

坂本はしばし考え込んだ後に妥協案を告げるがそういうのは気に入など言つてあるため明久は頷かない。

「は? それは もがつ! ?」

「いいから2人つきりにさせてやれ。

お前らも来い

「え、でも 」

「 来い」

「……はい」

俺は坂本の口を手で塞ぎ、姫路たちも含めて屋上から強引に去らせ

て行く。

扉を閉じる時にチラッと見てみると屋上に残ったのは島田と明久の

2人だけ…… + 虞珀。

……あ？今幻覚が見えた気がするな。

ゴシゴシと目をこすつて再び明久たちの方を見るとやはりそこには虞珀の姿が。

そういうや右腕にあつた温もりが今はねえ。

ダツ

俺は閉じかけていた扉を開き、島田と明久の間にいる虞珀に向かつて疾走。

「虞珀！教室に戻るぞ！」

『きやー！パパが鬼ねー』

そう叫びながら俺から逃げる。

虞珀の中では鬼ごっここということになつていてるらしい。

ハツ、面白え！

子どもは大人には適わねえってことを教えてやる！（明久のこと
が忘却された瞬間）

「虞珀。今捕まつたら今日の夜はオムライスにしてやるぞ？」

モノで釣ると言う大人の高等技術。

我が頭脳が恐ろしい！

コレで虞珀も捕まるだろ？

《パパの考えてることわかるから捕まらないもーん。

あつかんべー』

そう舌を出して駆けて行く。

……悪ガキになってきたな。
ま、可愛いから許す。

「琥珀！覚悟！」

琥珀を追いかけ追いついたところを、琥珀を胴からかつ攫^{いざら}うようこ^るり、両腕を伸ばし振るうが、琥珀はそれを察知したのか前転をして腕の範囲外に。

子どものする動きじやねえよ！？

足は子ども並なのにしなやかさが尋常じやねえ！？

『パパ、怖^{ひる}い』

きやつきやつと笑つて琥珀はそう言つ。

……なんかナメられてる氣がすんな。

子どもにナメられちや俺の立つ瀬^{いの}がねえ。

真つ正面からが無理なら

キュッキュッ

フェイントを織り交ぜりやいいだけだ！

琥珀に併走し右から再び胴をかつ攫^{いざら}うよつて腕を伸ばすがそれはフェイント。

琥珀の体が左に傾き、避ける体勢となつたところで俺はキュッキューとステップを踏み左に回り込む。

そのまま、左からタックルするかのように抱え込もうとする。

『コレで終わりだつ！』

そう考えると思わずにやける俺。

子どもを追つてにやけるヤツって危険に思われそうだな……。

だが俺のフェイントに琥珀はいち早く反応し、転がりかけた体勢を左足で踏ん張り右に修正。

その結果俺の左腕から逃れ、俺は背中を一人床に擦り付けることとなる。

ズザザザザツ

周りからすれば1人勝手に床に背中を擦り付けて喜んでいるただの変態に見えるだろう。

『コレで終わりだつ！』とか考えてにやけた数秒前の俺を思いつきり殴りたい！

『パパー。大丈夫？』

「大丈夫だ。問題ない」

琥珀が俺の体を心配しながら近づいてくる。
ぶつちやけ俺の体より制服の方が気がかりだ。

『ちょっと汚れてるけど、穴はあいてないよー』

「お、そうか。ならよかつた。
んで琥珀捕まえたぞ？」

近づいてきた琥珀をガシッと抱く。

『あわわっ！？捕まっちゃったー』

「さ、教室に戻るぞ？」

二〇四

琥珀を肩車して立ち上ると島田の声が聞こえてきた。
そういうや明久たちのこと完璧に忘れてた。

「どうしてくれんのよーーー?」

ウチのファーストキスーっ！？

「…………」ねんなさいつー僕も悪気はなかつたんですねつー。

「新編 金瓶梅」

「なによー?」

えーと……僕も初めてだーたから、おあいこーどじや、ダメ

かたづけ

卷之二

なんかよくわからん。

「えっと……じゃあ、教室に寝ろつか?」

「あ、うん。そうね」

なんかどうせやがってんな。

「明久ちよつと寺つた」

へ？えー！？窓したの！？

何だよその狼狽えつぱりは。

「島田の言動からして（誤解だつたと）教えたつぽいけどどうなつたんだ？」

鬼ごっこしてて聞いてなかつた」

「あ、え、そ、それは もがつ！？」

「あ、アキ！アレは言つちや駄目！」

『アレ』ってなんだ？

「あ、うん。……わかつた」

島田は兎も角なんで明久が赤くなつてんの？

「空。僕たちはもつ教室に戻るね」

「あ？ああ」

結局どうなつたかわからねえな。

バカと俺とHンクレム（前書き）

エア・ギア色濃いめ

バカと俺とHンフレム

Aクラス教室

屋上的一件によりロクラスとの戦争はなくなりそうらしい。明久の話によると島田に誤解だつたと告げたら叩はたかれたつてことになっている。

屋上にいたときにはなかつた紅葉マークをしつかりつけて説明してあたり明久が口を滑らした『アレ』なるモノをよっぽど隠したいんだろうな。

んで明久の説明をうまい具合にスネークに伝えれば無事終了。

それから時は進んで今は昼休み。

俺は優子たちと飯を食つためにAクラスに来ていた。

「邪魔すんぞ」

『すんぞー』

ガラガラと扉を開き中に入ると琥珀を肩車しているためか俺に視線が集中する。

……なんか居ずれえ。

そんな俺に優子から声がかかる。

「あ、空。

今日は天気がいいし屋上で食べましょ？」

「了解。

んで愛子は？」

《お姉ちゃんは寝てるよー?》

そつ言つて琥珀が指差した方を見ると愛子がシステムスクに突っ伏して眠つていた。

「愛子。飯食つん？」

「すぴー……すぴー……むしゅ むしゅ……」

「おーい。愛子食つん?」

「空腹大胆だね」

いやーんと言つて体をくねらせながら田嶺めの愛子。
今のが『H』ことJがあつたんだよー?

「だつて空腹が『(起きねど) 愛子食つん?』って言つたから」

……なんか認識に食い違이がある気がすんな。
ま、今はいい。

「今日は屋上で食つん？」

「野外プレイあるのー?」

「そつちの『食つ』じゃねえよー。

「飯の方だ!」

わつかの『食つ』もそつちのひとだったのかー?

「そつちなの? もう、【空】紛らわしこよ。

普通の人だと間違えちゃつ

「ふーふーと口を尖らせる愛子。

……うん、可愛いな。

「普通は間違わねえよ」

『ねえパパ。どういう意味ー?』

「琥珀君。それはねー」

「どうこいつ意味もなにも『飯を食つ』って意味しかねえよ

愛子が変なことを刷り込む前に言ひ。

琥珀は純粋なままでいいんだ。

……そもそも知るには早すぎる。

「そんなことより飯食いに行くぞ?

優子が弁当持つて待つてんだ」

「うん、わかった

屋上

「はい、琥珀君。あーん」

『あーんなのー』

只今愛子が琥珀に餌付け中。

「「」して見ると愛子が世話好きな姉みたいね

「あー、確かにな。

でもいい母親になると想つた?」「そうね。

「琥珀のポーテールって空がしたの?」

「ああ。してくれって言われてな」「似合つてるわね」

「本人に言つてやれ」

「そうね」「そうね」

そこで一回会話は終了。

ほのぼのとした空気がこの場を包む。
ふう……いい天氣だ。なんかいいことあります

ガシャンッ

あ?なんの音だ?
そう思いフェンスから外を覗いてみるとそこにはオレンジ色のフルフェイスヘルメットを被つて上下長袖ジャージの5人組が門を破つてグラウンドに侵入していた。

「空君。今の音何?」

「下見りや分かるからこっちに来い」

「わかった」

「空。の人たちが何かわかるかしら?...
門を壊すなんて普通じやできないわよ?...
俺に聞かれてもよくわかんねえよ」

マジでひきぱり。

『お前らー何をしているー』

それなりに音は大きかつたため鉄人が様子を見に来たようだ。

『リーダー。なんか来たぞ』

『ああ？ あんなヤツほつときな』

リーダーは女らしい。

性別判断しずれえな。声も聞きずれえし。

マスクとれ。それから上のジャージ脱げ。

『向こうはやる気満々だすよ?』

『じゃあ、あんたが相手しな。

アタシたちは探してくるから』

『お、女の子のわだず（私）にあんな筋肉達磨を任せるとだすか！？

無理だすよ！…』

『……じゃあ、あんた。変わりにやってあげな』

『俺ですか？ まあ、言われたならやりますがキッチリカッチリ探し

て下さいよ』

『言われなくともそうするよ！

あんなひょろひょろしたモヤシをブシ倒すだけで100万も貰える
んだぜ！？

気合を入れて闘るに決まつてんだる！…』

『姉御。あの男を闘るのはいいッスけど他のヤツ巻き込んでしまうと
俺らお巡りさんのお世話になっちゃうッスよ？』

『そんなこと分かってるよ。

そもそもお巡り如きに捕まるとは思つちやいないけどね

『丸風来ちまうッス』

『……あんた！ 男なんだからくみくよしてんじやないよ！』

『は、はいッス！…』

……気分的には漫才見てる感じだな。

あ、丸風の説明しとか。

丸風つてのはA・Tによる犯罪を取り締まる警察機関。この町にはどういうワケかA・Tが普及してねえから普通はお世話になることはねえ。

だから白バイしか追つて来ねえ。

『それじゃあ見つけたら大声上げるんだよ?』

『……もつとマシなのないのか?』

『アナログが一番いいんだよ!!』

『ほら、散りな!!』

『了解』

鉄人の足止め係りを残し散つていく5人組。

走るにしては速すぎる。あいつらA・T履いてんな。
マジ物の『ストームライダー暴風族』か。

すんげえ面倒そうだ。

にしてもこの町に『ストームライダー暴風族』はいねえハズだぞ? どつから来たんだ?
帰つたら調べてみつか。

『お前ら待たんか!』

『筋肉達磨の相手は俺ですよ』

『年上に対する口の利き方がなていないようだな。』

補習室送りにしてやる!』

お、鉄人VS足止めマスク(今命名)の戦の勃発っぽい。

なんかワクワクすんぞ。

『唸れ俺の右腕！』

そう叫び鉄人は地面を思いつきり殴る

ガツドゴオオオオツツ

と半径5m程のクレーターができ足止めマスクを土砂が飲み込む。

「　　『…………』」

屋上組は絶句。

鉄人つて人間か……？

『補習室行き1人目確定』

土砂に埋もれ氣絶した足止めマスクを掘り起こしそう告げる鉄人。

『見つけたあ』

「つー？」

不意に背後から声が聞こえ俺はぱつと振り向くと、貯水タンクの上に（話し方からして）リーダーマスク（今命名）が立っていた。フルフェイスヘルメットで見えないがおそらくその下にはニタアツと嫌な笑みを浮かべているのだろう。

モヤシって俺のことかよ！？

カツ カツ カツ

フェンスの上に残りの3人が姿を現す。

- 7 -

『女の歴史100年』編集部

『女の子侍にしていい御身分だすね』
『お、可愛い子猫たち見つけたッス。

『オイテと熱い夜を過ごさないマスか?』

あア？なんつたアアアアこのチャラマスク（今命名）ウウウウ！

! ! ! ! !

「テメエ、ナツメたことオオオ、言つてんじやアアアア、ねエぞオ
オオオオオオツ！－！－！－！－！－！」

ゴオオオオオオオオオオオオ

俺の感情の高ぶりの影響か背後に現れた狼の纏う炎が巨大になつていた。

『あ、姉御おつ！？』

こんな弱そうなモヤシなんかに！』

弱そう……だと……？

「テメヒらに教えといてやる。俺の嫌いなことワースト3を。

ピット指を3本立てる俺。

「テメエらみたいなウンコクズ共」と

『んたとこのモヤシ!』

『活閻ナコラ!』

立てていた指を一本減らす。

『俺のことを蔑むテメエらみたいなウンコクズ共』
『あんたたちつ、口イツをモヤシ炒めにしてやるよーーー』

「そして、堂々の第1位」

指を立てるのを止め『天使の力』^{テレーズ}でA・Tを作りだす。

「優子たち（優子・愛子・琥珀）にナメた口利くテメエらみたいな
ウンコクズ共」

『日本書紀』

『...アタシがお母さんのお葬式に参列するの...』

『100万のためにやられるだす！――』

それぞれが叫びながら俺に飛びかかってくる。

「『時』よー愚かなる者にその誓約を『えんーー』」

パパパパパパパッ

『時』の連打。それを全方位に。

『つ！？』

『なんスかコレ！？』

『体が……！？』

『う、動かないだす……！？』

突如自分の意志に関係なく体の動きが止まつたことに戸惑う4人。
なんだコイツら？すんげえ弱えぞ。

なんか弱い者いじめしてるみてえで嫌になってきたな。

「言つちやなんだが俺は『王』だ。

『王』にケンカ売るならそれに見合つた『力』を持つてからにしろ。
命の無駄遣いだ。

今回は見逃してやるが次来たら容赦しねえからな。

特にチヤラマスク。テメエは跡形もなく徹底的に消してやるから覚
えとけ。

ほら、リーダーマスクさつさと帰れ

『……いい（ボソッ）』

「あ？なんだリーダーマスク？」

『あんたスゴくいい！！』

「は？急にどうした？頭涌いたか？」

『ああ、いいよ！－もつとアタシを責めて！－
圧倒的な《力》で敵をねじ伏せる！でも優しい！
そんなあんたにアタシは責められたい！－』

。

『あ、姉御！？何言つてるツスか！？』

『リーダーにこんな性癖があつたとは
『ぜ、全然知らなかつただす』

「そんなこと堂々と言つ人初めて見たよ！？』

『。あの人怖いよー』

「はあ……知らない間に落としてるわね。空にお仕置きしないと
「優子！俺は誰も落としてねえよ！－！」

お仕置きとか何されんだよ！－？あー、怖え！－

「その人の顔を見たらすぐ落としたのがわかるじゃない」

なんすかその『何当たり前のこと聞いてるの？』みたいな顔は？
ヘルメット被つてんだぞ！？素顔は見えねえだろ！－！

「ならヘルメット取りなさい」

「……はい」

そう返事をし床に倒れたままのリーダーマスクに近寄りヘルメット
に手を伸ばす。

『姉御に触るなツス！』

『止めるんじゃないよ！－

さ、好きに責めて』

『あ、姉御……』

リーダーマスクの声が艶っぽい。
んじや御対面。

サワアアア

ヘルメットを取つてやると無理矢理詰め込んでいた明るい茶髪が宙に広がり陽の光を受け輝いている。

そしてリーダーマスクの素顔。

整つた顔立ちをしておりクールな印象を受ける。

さらに俺をトロンとした目で見ており、頬を赤く染め、熱っぽい息を吐いていた。

……吐息工口し。

「空° わかつたかしら?」

「……はい」

「ほり、早くしな!」

何かを急かすリーダーマスク。
何をしようと?

「やるなら今のうちだよ!」

抵抗できないアタシを存分に責めて! !

……ふっちやけ怖え。

「ツツツツツツツツツツツツ

『時』で動きの止まつたままの4人の頭を小突く。

『何するッスか！』
「うるせえ。コレで動けんだろ？」「あ、本当だす！？」

そう言つて床にひれ伏した状態から立ち上がる4人。

『……何故といった？』
「リーダーマスクを持つて帰つて貰おうと思つてな」
『ああ、なるほ』
「いい加減『リーダーマスク』なんて他人行儀な呼び方はするんじゃないよ！」
笑つて呼びな！
「……なるほどMか」「やん、いけずう」「やん、いけずう」

くねくねすんな。

『リーダー、帰るぞ。このモヤシキングには勝てない』
「おい、クーデレマスク（今命名）。斬新なあだ名つけてんじゃねえよ」

確かに『王』だがそのあだ名はあんまりだ。

『お前の名前を知らないんだ。』
『……何がいいだろ？』
「は？お前ら名前知らずに襲つてきたのか？人違いだつたらどうしたんだよ？」

『如月学園にいる金髪碧眼のハーフって言えばもう何でもないだろ。』

それで名前は?』

その情報源が気になるがひとまず、紹介でもすつか。

「俺は宇童 空。『獣の道』。」

そして『煉獄の王』

『『煉獄の王』? 聞いたことないツスね』

『『獣の道』も初めて聞いただす』

『そりや俺が名乗ってるだけだからな』

『全部自称ツスか!?』

『あー……そうだな』

『ならぶつちやけ『王』でもなんでもないんじやないんツスか?』

『実力で言えば一介の『王』レベルだと自負してる』

『本当か?』

「ああ」

『リードで戦^{バトル}レベルを計ればいいんじやないだすか?』

『あ、確かにツス』

そう言ってチャラマスクがジャージのポケットからリードを取り出
し俺に向ける。

ペペッ

『えーと……A・T稼働時間285時間、……始めて3ヶ月半く
らいツスか』

『おい、俺は始めて2ヶ月くらいしか経つてねえぞ』

『清涼祭』の月から始めたしな。

『……は？いやいや嘘はいけないッスよ。

そんなの有り得ないじゃないッスか』

「1日5時間くらい走つてつから」

『走りすぎだ』

楽しいことやつてなにがいけねえってんだ。

『まあ、気を取り直して次いくだす』

『対地平均速158km/h……。』

『レ58km/hの見間違えッスか？』

そう言つてチャラマスクはクーテレマスクとダスク（語尾の『だす+マスク）にリードを見せる。

『158km/h……だな』

『そうだすね……』

白バイから逃げ切るにはそれ以上で走らねえといけねえけどな。言つとくが道路走らなかつたらよくね？とかいう意見は受け付けねえから。

『最高速……289km/h……。OK。いい加減慣れたッス。

最大工ア』

(作者：最大工ア・・・おそらくホイールに一定以上の力がかからない滞空時間のことだと思われる。空中で空気の『面』を蹴つてどれだけ地面に触れていくとも、『面』を蹴つた時にホイールにそ

れなりの力がかかるため滞空時間には加算されないと予想。ぶつち
やけよくわからん）

『 726秒……』

『 ど、どいつたら10分も飛んでいられるだすかっ……？？』
「あー……気分？」

『 千の風になつて』のタイトルを見て『風』になつてみるか、って
思つてやつてみた。
俺の『炎狼の玉璽レガリア』が『風』を取り込んでるから樂にできただけだ
とは思うが。

『 それで戦レベルはいくらなんだ？』

『 えーっと^{バトル}ススね』

そつ言つてチャラマスクはリードをポチポチといじり始めた。

『 うし、出た^{バトル}ス。

戦レベル269^{バトル}ス。

普通に化け物^{バトル}スね』

だいぶ慣れてきたのかチャラマスクは普通に告げる。

糸田と戦ったときからレベルが20も上がつてんな。

あれか？死に瀕したら強くなんのか？

それにしても上がりすぎじやね？糸田と戦ったのは4、5日前だぞ。

『 確かに一介の『王』以上の『力』があるよつだな』

『 俺らもそれなりに鳴らした口なんスけどね』

『 始めて2ヶ月のそれも同じ年くらいの人には抜かれるのはショック

だす……』

「あ？お前ら高校生なのか？」

学校どうしたんだよ」

『サボったツス』

「学校行つて勉強しろよ。目先の100万よりこれから先に稼ぐ金の方がデカくなんだろうが」

『ぐ……つーち、違うだす！』

リーダーが行くつて言つたから仕方なく着いてきただけだす！』

『ヘルメットで見えねえけどぜつてえ目泳いでんだろ』

『なつ！？宇童はエスパーだすか！？』

『なあ、コイツつて結構頭残念な娘？』

俺はダスクを指しながらクーデレマスクに尋ねる。

『ああ、そうだ』

『お前ら見つけたぞ！』

突如屋上の扉が開き鉄人が入ってきた。

クーデレマスクって話遮られることが多いな。

『なつ！？さつきの筋肉達磨！！』

『どうやらあいつはやられたみたいだな』

『は、早く撤退するだす』

そつ言つてフェンスの方に向かつが

『動くなああああああああ！？！？！』

『ギリッギリッ

大気を揺るがす鉄人の咆哮により体の筋肉が強張り、動きを強制的に止められる。

やべえ！！琥珀が泣いちまう！！

俺は優子・愛子・琥珀・Mの4人がいる方へ駆ける。
さつきから静かだと思ったらここにいたのか。
しかも文月の制服着て。シユシユでポニーテールにしてる。
……似合ってんな。

だが敢えてMには触れずプルプルと震えている琥珀をだっこする。

『うう、パパー！……ひっく、怖かつたよーー』

俺が来たことに安心し、せき止められていた感情が決壊して泣きだす琥珀。

「よしよし、大丈夫だぞ」

俺は琥珀の背中を優しくポンポンと叩きながらさう告げる。

「子どもをあやす宇童……。
いいースゴくいい！」

……いいからお前は黙れ。

「宇童。コレはお前の知り合いか？」

Mを除く3人を肩に担いで鉄人が俺に問う。

「あ？全然知らねえ。

今日初めてあつた

『なつ！？宇童！オイラとはあの時夢を語り合つた仲じゃないッスか！！』

「『あの時』ってどの時だよ！？」

勝手に捏造すんな！！」

『わだず（私）とのことは遊びだつたんだすね！！』

「おい、『ラ。お前とそんな関係持つた覚えねえ！』

『俺の楽しみにとつておいたプリンを食べたのはお前だな！！』

「なんの話だ！！」

「……お前に慣れ親しんでいるように見えるんだが？」

「コレはマジで初対面」

鉄人の目を見てきつちり断言する俺。

「……ふむ。嘘をついているよつには見えないな。

授業に遅れないよう教室に戻るんだぞ。もうすぐ昼休みが終わる」

「了解」

そう返すと鉄人は屋上から去つて行つた。……Mを残して。

「作戦成功！」

『作戦成功！』じゃねえよ。

「おい、どつからその制服調達してきたんだ？」

「優子が貸してくれた」

「ジャージのままじゃ折角の笑の美貌が台無しだと思つてね
「そんなこと言わると照れちまうじゃないか」

……もう名前で呼び合つ仲になつたのか。

にしてもなんで制服をもう一着持つて来てんだよ。

「もうか……。

んでもはこれからどうす

「あ、宇童にコレ渡しとくよ」

そう言つて手渡されたのは恐竜の頭をモチーフにされた金属製のピ
ンバッヂ。

「『^{エンブレム}族章』…………？」

『^{エンブレム}族章』。

それはチームの誇りでありチームそのもの。

それを手放すということはそのチームの解散を意味する。
そんな大事な物を俺に渡すM。

「そう『^{エンブレム}族章』。

アタシたちはあんたに負けた。だからそれをあんたに渡す。
分かり易くていいだろ？」

「…………『^{エンブレム}族章』ってのは、…………『誇り（エンブレム）』ってのは、

……そんな簡単に誰かに渡していいもんじゃねえだろ…………？」

それに……俺はA・T使い（ライダー）だがチームを持つてるワケ
じゃねえし、今回のは正式な戦じゃねえ…………。

……正直『族章』を渡す必要性がねえ……

「……素直に受け取れ。

渡すか渡さないかの決定権はアタシにある。あんたでなくあいつらでもなくアタシだ」

そう言つて開いたままだった俺の手を握らせるM。

「…………わかった」

「それじゃアタシは帰るよ。優子に愛子、またな。

琥珀ちゃんは……眠りちゃつてゐるな。起きたらよろしくへ言つといてくれ

「わかったわ。またね

「ばいばい」

そう言つてMは帰つて行つた。

「…………

俺もチーム創るか……。

バカと俺とH�ンフレム（後書き）

チームの『夢』を潰したことにより『天』を駆る覚悟のできた空で
した。

補足

MのA・Tチーム名：『T・REX』

エンブレム・デザイン：ティラノサウルスの頭蓋骨

バカと俺とじゃんけん大会（前書き）

少々可笑しなところがあるので正常な判断ができない興奮時に読むことをオススメします。

バカと俺とじゃんけん大会

Fクラス教室

「少々マズい」とになった

5時間目始まって早々坂本がそつ切り出した。

「マズいって何が?」

現在自習時間のためしゃべっていても無問題。
テストを受けているクラスの採点やら監督やらで教師の手が回らない上に試験召喚システムのメンテナンスが難航しているためらしい。
んで琥珀は俺の腕の中でお休み中。最近よく寝てるな。

「Bクラスが攻めてくるかもしれない」

「それマジか!?

今来られたらさすがにやべえぞ!?

もし来られたら

「ああ、もし来られたら」

「琥珀が起きちまつ!…」「みかん箱に逆戻りだ!」

。

「みかん箱なんざどうでもいい。
家からダンボール持つて来ちまえばそこいらのクラスより豪華になつて万事解決だろ。」

Aクラスのリクライニングシートも田じゅねえ

みかん箱を嫌がる意味がわからねえ。

「いや、さすがにそれは無理だろー?」

「やでやつて『自分、武器用 違つた 不器用ですから……』
つづーAPEELすりや作つて貰えると思つてんのか?」

世の中そんな甘くねえんだよ!—

「アペツてねえし!—」

「うわー、出たよ。男のシンナー。

「前から言つてるよ!て男のシンナーは氣色悪いんだよ」

「シンナーじゃねえ!—」

「坂本つるせえ。琥珀が起きあがつ」

「ぐぬぬ……つ!—」

俺から振つとこ!この返し。なかなかムカつくよつだ。

「んで俺じうじうと?」

「…………まず、今やつてこ!じだが、今はBクラスとの戦
争を回避するために明久と島田を使ってDクラスを焼き付けている

Dクラスつーかスネークだよな?

「焼き付けてどうすんだ?」

「俺たちと戦わせる」

「そんなことしたらBクラス戦が辛くなんだろう?」

「……一つの戦争の終了後に点数補充期間があることを忘れたのか？」

「んなもんあつたか？……ま、坂本が言つてられないだしあんだろ。

「んじや、Dクラス戦が終わつてしまつかり補充してからBクラス戦に入んのか？」

「いや、そうじゃない。

補充するのはBクラスを牽制するためだ」

「？……十分に補充できりゃ向こうのは戦争を踏みとどまるかもしんねえってことか？」

「ああ。だが、Bクラスは俺たちが向こうの動きに気づいたら即宣戦布告をするつもりのようだ。

だから俺たちは何も知らない風を装わなければならぬ」

ふむふむ。

「そこで、だ。廊下をフラフラするぞ」

。。。。突然だなオイ。

「あー……分かつたが明久はどうすんだ？」

「清水に島田と仲睦まじいところを見せつけるために別で動いて貰つている」

「なるほどな。んじや行くか」

廊下

「なあ、坂本。ただフリフリ歩き回るだけじゃ面白くねえしゲームしねえか?」

「それもそうだな。それで何するんだ?」

「『叩いて被つてじゃんけんポン』」

(解説:今週(2011.10.11現在)のジャンプで銀が金になっていた漫画の過去の巻を参照)

「なんだそれは?」

「ルールは簡単。じゃんけんで負けた方がこのダンボール製のヘルメットを被つて、勝った方が負けた方がヘルメットを被るより先にこのダンボール製のバットで殴るだけ」

そう言いながらどこからともなくダンボールヘルメットとバットを取り出し、それらをどこからともなく取り出したダンボールの上に置く。

琥珀は俺のどこからともなく取り出したダンボールベット(布団付き・防音対策済み)の中でスヤスヤお休み中。

『どこからともなく』が多いが気にすんな。

「……ヘルメットの強度が心配なんだが」

「ダンボールの間に金属挟んでつから大丈夫だ」

坂本には教えねえがもちろんバットにも。

「……そうか。んじや」

「「じゃんけんポン！」」

俺パー、坂本グー。

俺は素早くバットを掴み体を捻り力を溜め、

「ふんっ！！」

すでにヘルメットを被っている坂本の側頭部に向けて居合い斬りの
ように振り抜く。

「おいいいっ！？？」

何か叫んでいる気がするが気のせいだろ。

ガコッ

「ぐおっ！！」

ドゴオオオオオオ

坂本が何かに弾かれたかのように吹っ飛び壁を粉碎する。

「おいおい坂本。壁壊すなよ」

やれやれ1人遊び（下ネタではない）が好きなヤツだな。

「ぐ……つーーーお前がやったんだろ？が！？」

それよりヘルメット被つてから殴るな！－！

「あ？ ヘルメット被つてたか？」

悪い悪い、坂本と同じ色してたから見分けつかなかつた」

「クソ……つ……空、もう一回だ……」

「いいぞ」

「「じゃんけんポンー。」」

俺チヨキ、坂本グー。

「よし……空、くたばれええええええええ……」

そう叫び素早くバットを取つて俺に振り下ろす坂本。

バキンツ

だがバットもとい鉄の棒が打ち碎いたのは床だけ。俺は坂本が振りかぶつて早々に退避したためノーダメージ。

「避けるなーー！ヘルメット被つて構えてろーー！」

「床を碎くような一撃にヘルメットが耐えられるワケねえだろーー！」

「なら一発殴らせう…！」

「嫌に決まつてんだぞ！！」

お、
諦め

「力付くで殴るまでだ！！」

るワケねえよな。

坂本がバットを下段に構え俺に迫る。

『どうやら拳ではなくバットで殴る気らしい。』

……『この鬼畜』ココラめ。

「食らえ！！」

俺の胸を両掛けで振るわれるバット。

ブォンッ

俺が振るわれるバットに合わせて思いつきり後ろに跳んだためバットは空を切るだけに留まる。

「そんな大振りがあたるワケねえだろ」

「『大振りは当たらない』？」

誰が決めたそんなこと……

『殺したいほど殴りたい』という殺意の極致を思い知れ……

不可能を可能にするその極致を……！」

坂本は振り抜いたバットを頭上に構え、力を溜め始めるとバットがどす黒いオーラを纏いだす。

……なんかやべえ気がする。

「ふつ……月牙ああああああ……天衝おおおおおお……」

どす黒いオーラがバットから二日月状に放たれ、床を抉りながら突き進む。

「なんだそれええつつ！――――？？？」

「マジなんだそれええつつ！――――？？？」

「ふつ、俺の『殺意』受け止められるか？」

二ヒルな笑みを浮かべそう告げる坂本。
クソが……つ――琥珀が後ろにいるから避けらんねえ――――

「バリアアアアアアア――！」

俺は黒いのを防ぐため風の『面』を押し出し前方に空氣の『壁』を作り出す。

「ぐ……つ――！」

だが『溜め』がほとんどなかつたため『壁』は薄く防ぎきれそうにない。

『お前ら――こんなところで何をしていい――』

『なつ――鉄じごはつ――』

不意に坂本のいる方から鉄人の声が聞こえてきた。
こんだけ騒げばバレてもしょうがねえが、今はそんなことはどうでもいい。
この黒いのを何とかしねえと――

そんなことを考えていると突如黒いのが消える。

「ああ、守童もいくぞ」

のそつと田の前に現れる鉄人。

「つー?『時よ』つー?」

それに驚き、俺は咄嗟に『時』を放つ。
あまりに疲れるために『清涼祭』以来やつていらないA・Tなしでの
無理矢理の『時』を。

「ぐぬ……つー?」

よし、止まった!!今のうちこ

「ふんつー!ヌルいつー!」

バチイツ

つー?なぜ『時』を破れる!ー??

撃つてるとこには一応人間の弱点だぞー!ー!ー?ー?ー?

「ああ、行くぞ」

合宿のときによなママ言つたのは俺が悪かった!!だから俺を見逃がせ
!!!!

「補習室なんて行つてたまるか！！」

「安心しろ。お前は補習室ではなく職員室だ」

「…………？ なんで？」

「くれば分かる。

琥珀君も連れて一緒にいくぞ」

「了解」

バカと俺とチーム勧誘（前書き）

「」……日本語

『』……英語

バカと俺とチーム勧誘

職員室

坂本を補習室に放り込み、起きた琥珀をだっこして現在職員室に来ている。

教師が出払っているため職員室はがらんとしているが、唯一奥の一角にある、床が畳張りで卓袱台の置いてある教師の休憩所にだけ人の姿があった。

その人物は煎餅をバリバリと食べている金髪碧眼で20代くらいに見える西欧系の女性、もとい俺の母さん。

20代くらいに見えるだけで実年齢は35（いや36だったか？）。

……そう考えると俺を産んだの結構早いよな。

『……母さん何やってんだよ』

『おー、久しぶりー。

細いけどちゃんと』飯食つてるか？』

初っぱながらスルースキルを発動しやがるmy mother。

『ああ、ちゃんと食つてる。
んで何やってんだ？』

『煎餅食つてる』

『んなの見りやわかる。

俺が言いたいのはなんでここにいんのか？ってことだ』

『あー、そーゆーこと？

それは、今空の隣にいる人に呼ばれたから』

そう言つて鉄人を指差す母さん。

そういうや朝、鉄人が電話かけてたな。なんでかけたのか知んねえけ

ゞ。

「宇童」

「あ？ どした？」

「お前の母親に伝えたいことは伝えてある。」

後は家族で話し合つた方がいいだろ？」

「まへビうこう」とへ話し合つしなんざなんもねえよ？」

そんな俺の困惑など露知らず鉄人は母さんに向かって一度会釈をすると職員室から出て行つた。

『ほれ、空座れ』

『……あ？ ああ、そうする』

母さんに促され俺は靴を脱いで畳に上がる。
もちろん琥珀の靴も脱がして。

あ、ついでだし言つとくが琥珀の靴とか服は俺んちの納戸にあつた俺のおさがりだ。

『天使の力』^{テレグラフ}でも作れるらしげ何かあつたときにつまに真っ裸になるのが可哀想なためにおさがり。
その内服買つてやんねえとな。

そして畳の上で胡座をかき、その上に琥珀を乗せると母さんが尋ねてきた。

『空。 その子の名前なんてーの？』

『琥珀』

『へー琥珀ちゃんか。 女の子みたいで可愛いな。』

でもビーセなら《シユバルツ》の方が良かつたんじゃね？
カツコイー子に成長しそーだし』

『うやら俺と母さんは血のつながった親子のよつだ。
……ん？ ちょっと待て。今の方からして俺が名付けたって
のを知ってるよな？ あれ？ なんで？

『急に黙りこんでどーした？』

『なあ、なんで俺が琥珀の名前をつけたこと知つてんだ？』

『あー、それはさつき西村つて人から教えて貰つた』

『なるほど』

理由はわかつたけどなんで鉄人が知つてんだ？

……もしかしてヤブが喋つたのか？ ……ふむ。もしかしなくてもヤ
ブが喋つたのか。

マンガのこと鉄人に言つとこ。

『琥珀ちゃんだっこさせとてかさせろ』

急だなオイ。

「琥珀。俺の母さんが琥珀のことだっこしたいんだつてよ。
どうする？」

『パパのママー？ パパのママならいいの一』

『おー！ おしゃべりできんのか！ ？ スゲエな！ ？』

『オイ、興奮してねえでどうすんだ？』

『琥珀ちゃんを早くー』

『早くー早くー』と手を振つて俺を急かすので琥珀を渡すと

「琥珀ちゃん。ねーちゃんだぞー」

「ぶつ！？ゴホッゴホッ！？」

そんなことを宣いだせる我が母君。
のたま

「急に何言つてんだよー?」

「だって空の子じもかでことは私の孫だろ？」

いや……まあやうだが……。

琥珀ちせん。ママほどいにいんの？

心をこもるほど

「いや、今授業中だし」

「そんなことよりも」

「いやいや、母さんは良くても優子は点数補充して……」

。せひまつた。

「ターリー? あ、 もしかして近所のターリーちゃん?

……そー言えば田がゆーこちゃんに似てるかも。
琥珀ちゃん。ゆーこちゃんであつてつか?「

『うさーママでもある horizonー』

「…？」

うん！

「琥珀。呼んだかしら?」

突如職員室の扉が開き優子が入つて來た。
……え? 何このテレパシー?
シンクロ率400%超え?

「ゆーこちゃん。久しぶり」

「あ、おばさん! 久しぶりです!」

「最後に会つた時より綺麗になつてんな」

確か母さんと優子が会つのは5年ぶりくらいなんじゃねえか?
母さんが何やつてんのか知んねえけど全然家に帰つて来ねえからな。

「あ、ありがと!」「やあ! ます!
おばさんも変わらず綺麗ですね」

「おー、ありがと。」

それはそーといつ琥珀ちゃんが産まれたんだ?」

「あ、えつと、琥珀は私が産んだわけじゃなくてどちらかど^{ヒリヒリ}うつと
空が」

「え? どーゆーこと?」

優子の言葉を聞いて母さんが『お前何者?』みたいな顔でこっちを見つめてくるんだが……。

「文月学園に試験召喚システムつてのがあることは知つてつか?」

「知つてる。結構有名だし」

「それで召喚獣を使って戦うんだが、俺の召喚獣はいろいろあって

自立した

「それが琥珀ちゃん?」

「ああ」

「へー、不思議だな。

ま、それは置いとい。

優子ちゃん。空とはもいつやつたのか?」

不意に話題転換をし、ヤニヤとイヤラシい笑みを浮かべて優子に迫る母さん。

息子がいる前でそんな話すんなよ。

「えー? あ、そ、それは……」

「母さん。優子が困つてんだろ。

それに変態丸出しじゃめろ」

「あア? 親に向かつて『変態』だと? む前シバくぞ?」

「ハツ、やれるもんならやってみり!」

昔の俺とは違え!」はつ!?

母さんから鳩尾への鋭く思いの拳が連続で叩き込まれる。もちろん視認不可。

弱点に連撃……なん……たる……鬼ぢ……く……(ガクッ)。

そのまま俺は意識を失った。

「……うひ……」

『おー、やつと起きたか』

目が覚め周りを見ると、いたのは母さんだけだった。

『……優子と琥珀は?』

『教室に帰った。』

……それはいーとして、大事な話がある』

母さんは真面目な表情でそう告げる。

『こんなところで話すのか?』

『ああ。今ここには私ら以外に誰もいねえしちょうどいい』

『……そうか。んで大事な話ってのは?』』

『最近A・Tしてんだろう?』

『やつてるがなんで知つてんだ?』』

『ヤブから聞いた』

『ヤブって保健室の?』

『ソイツ以外に誰がいる』

ふむ。俺のネーミングセンスは母さん譲りのようだ。

『ヤブと母さんは知り合いなのか?』

『知り合いつてか仲間だ』』

『仲間?』

『ああ。『アルテミス』の仲間』

『なんそれ?』

『パー・ツ・ウォウAクラスのA・Tチーム』

『は!/?母さんたちつてA・Tやつてたのか!-?』

『ああ。空より大先輩だぞ。』

だから敬え。称える。跪け『たたひざまます』

ゆうごがどや顔をしてリズムよくしゃべ。

どや顔やめり、とは言わねえ。言つたらまた強制的に黙らされそうだしな。

『ま、冗談はいいまにして、本題だが』

『何がつらんだ？ ちよつとジドキデキすんぞ。

『私のチームに入れ』

バカと俺と単語集（前書き）

「…………英語

宇童家の公用語は英語テス。

『ちょっと話がブレてる気が……』な出来です。

バカと俺と単語集

「私のチームに入れ」

そんなことを母さんから言われ現在頭に『?』が浮かびまくつている俺。

「なんで?」

「私の目的のためにお前の『力』が必要だからだ」

へえ、俺の『力』、ね。どうから俺の戦バトル見てんだろうな?
ま、今はいい。

「目的ってのは?」

「…………復讐」

ポツリと呟く母さん。

「復讐…………?」

「ああ…………復讐だ…………!」

私の『翼』を……ラグナの命を奪つた『アイツら』にな…………!」

ゾクッ

「つ…………! ?」

突如背筋が凍りつくような鋭利な殺氣を感じブルッと身震いをする。
だがそれを感じながらも気になったことを尋ねるため、俺は口を開

く。

「……ラグナってのは誰だ？それに『アイツら』ってのも……」「あ？ ラグナか？ ラグナは私にA・Tを教えてくれた人であり最愛の男性。^{ひと}」

そして空。お前の父親だ

声の質が先程の鋭いモノからいつものモノに戻り一安心。だがなんでもないかのようにサラリと爆弾発言をましてくれやがった。

「今『俺の父親』って言ったか？」

「あー、言つたぞ」

「んじゅ父さん、父さんじゅねえの？」

「そうじつことだ。

空は今の旦那との子じゅなくラグナとの子」

「…………」

……いやー、参つた参つた。パピーが赤の他人だったなんて。あ、でも血のつながりはねえけど家族か。

……どひちにしるこんな時どういう顔をしたらいいかわからんねえよ。

「笑えばいーと思つたぞ？」

「心を読むな。プライバシーの侵害だ」

優子たちが読むのは無問題。

『だつて愛し合つているんだもの そりを』。……なかなかいい詩だと思つたがどう思つ？..

「心なんぞ読んでねえ。私は空の母親だぞ？ 何考へてるかぐりこ手

「取るよ」わかる

……それって結局心読んでね？

「てか反応薄いな。もつと動搖するかと思つた」

「あー……うん、そうだな。

意外とそういうのには取り乱さないらし」

「面白くねえな。慌てふためくところが見たかったのに。

……ふふつ、滑稽だ」

俺がそつなるところを想像し笑つてゐる母さん。
わつかの殺氣の^{キャラクではない}こともあつてぶつりやけ不気味で怖い。

「んじや今の父さんは？」

「私の『調律者』だ」

「…………『調律者』…………わからぬえな。

聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥、つてことで聞いてみる。

「なんだそれ？A・Tを『調律^{チュー二ング}』する専門家？」

「あー……まーそんなとこ。正確に言えば『王』に『玉璽^{レガリヤ}』を合わせるヤツの」と

「へえ。『王』に『玉璽^{レガリヤ}』合わせ……ん?……『王』に『玉璽^{レガリヤ}』合わせん……?」

つてことは

「まさか母さん『王』かー?」

「正解。立つべき『アイツ』りも『王』だからな。

同じ土俵に立たないと辛いもんがある

また『アイツ』だ。

「さつきも聞いたが『アイツ』って誰なんだ？」

「私の復讐対象」

「いや、それはわかる。名前とか特徴は？」

「名前は分からねえが、特徴は……瞳孔に十字架が刻まれてる」

「瞳孔に十字架……？」

「変わったコンタクトしてんな」

「コンタクトじゃねえ。直に刻まれてんだよ」

ラグナもそうだったしな、と母さんは続ける。

「へえ。俺にも十字架出てくるかもな。ラグナの子どもらしいし。でも出てきたらヤブが『邪氣眼かい！？』とか言って興奮しそうで嫌だ。嫌だ。

「それでソイツらの中で……特に糸田の双子……！
あのウンコクズ共は必ず殺す……！殺されても殺す……！」

再び鋭利な殺気が放たれる。

だが慣れたためか今度はそれに気圧されることはない。

俺の慣れ（『成長』って言つてもいいかもな）はハッキリ言つて異常だな。常人の数倍はいく。

にしても『糸田』か……最近あつたような気が……。

……！……そりいや『sky』『エア』に不気味な糸田がいたな！！

もしかしてアイツのことか？……でもアイツは一人だけだったし、

開いてんのか瞑つてんのか分かんねえほゞ糸田だつたから十字架あるかわからなかつたな……。うーむ……。

ま、次あつたらアイツを殺すことに変わりねえ。俺だけ1回死にかけてアイツは死んでねえとかフェアじゃねえ。

そんな子どもじみた理由で糸田の抹殺を考えていると母さんが話を続ける。

「それで瞳孔に十字架のあるヤツらを『重力子』って言ひつい

ふむ、そんな言葉初めて聞いたな。

「『重力子』^{グラビティ・チャルドレン}は常人と比べ身体能力が高くA・Tの扱いに長けてる。……空。^{ヒーロー}で問題だがA・Tはなんだと思う?」

急に『重力子』の話からA・Tの話に転換。母さんのこと困る。話が行ったり来たりしてワケわからん。

「あー……趣味?
「真面目に答える」

別にふざけてたワケじゃねえんだが。

空飛べるし。

「さつきよりまともだが違う。

正解は『兵器』だ」

「『兵器』……？」

「ああ。A・Tは『神』を殺すための『兵器』。
んで『重力子』グラビティ・チルドレンはそれを使って『神』を殺すための『戦士』つてと
ころか」

……スケールでけえな。でも『天使の力』テレスマがあるし神様がいても別におかしくねえか。

「てか、どこに神様いんの？」

「すぐそこにある」

「?どこ?」

「今感じてんだろ?」

……え?なんか怖い。

母さんって凡人には見えねえもんが見える人だつたのか?

「お前は『重力』感じてねえのか?」

「は?……まあ、感じてんじゃね?」

「それが『神』だ。『世界の理』つて言一かえてもいいな。

『重力』つつーのは人類が逆らえねえモノだろ?」

凡人うんぬんは違つたようだ。

「あー……そうだな。

んじゃ『重力』に打ち勝つ」と=『神』を殺す。つつーことか?」

「あー、そーなんじやね?」

「……どつちなんだよ」

「いやー、『兵器』うんぬん『神』グラビティ・チルドレンうんぬんは聞いた話だしよくわ
かんねえんだよ。後『重力子』も」

「誰に聞いたんだよ……」

「南とかゆー博士。宿した満点だつたけどな

……そんな簡単にそのHセ博士の話を信じていいもんかね？

「いーんじゃねえの？自分のことA・Tの開発者だとかなんとか言つてたし」

「ナチュラルに心読むな」

「だから心なんざ読んでねえ」

頑なに否定するシンデレ母ちゃん。

まったく困ったもんだ。

「んでどうやってその『重力子』ケーリンピティ・チルドレン殺すんだ？」

「A・Tで」

「いや、そうじゃなくて有象無象がいくら束にならうと『王』は殺せねえじやんか？」

「あー、そーゆーことか。

それなら安心しる。『アルテミス』には『王』しかいねえから

「…………それって名字が『王』とかいつオチ？」

「バカか！？んなワケねえだろ！？」

メンバー全員が『王』なんだよ！――

「バカとか言うんじゃねえ！――」

「うつせえバカ！――話聞けコト――」

「コト

「へふつ！？……痛え……」

頬をグーで殴られ、痛みを和らげるために、豊の跡を隠す康太よろしく頬をさする俺。

「……メンバー全員が『王』ってことはヤブも『王』なんだよな？」

「あー、そーだぞ」

「全然『王』には見えねえんだが？」

「能ある鷹は爪を隠す、つつーだる?」

「んで後2人『王』がいるがソイツらはテストの時に会わせてやるよ」

『アルテミス』のメンバーは全員で4人っぽいな。
ま、それよりも

「テスト？」

「そ、入団テスト。私ら『王』が相手をしてある程度戦えれば即採用」

「へえ、『王』が相手すんのは面白そうだな」

「だろ。それでテストだが今夜」

「けど、俺は『アルテミス』に入る気はねえから」

母さんが言い切る前に声を被せる。

「…………は?……な、なんでだ!…?」

珍しく狼狽する母さん。

そんなに俺に『アルテミス』に入つて貰いたかったのか。なんか悪いことしたかな?

ま、俺は俺の『道』を行くだけだ。誰かが作った『道』なんざ歩かねえ。

「ラグナは俺の父親なんだろ？が今の父さんが俺の父さんだし仇を取りてえワケじやねえ。それに俺は『重力子』^{グラビティ・チルドレン}を憎んでるワケじやねえからな。戦う理由がねえ」
「で、でも！！『重力子』^{グラビティ・チルドレン}がいたから私はこんなにも不幸になつたんだぞ！！！」

「そんなこと言われても俺は自分のチームを創る気だし、他のチームに入る気はねえ」

なら始めからそう言つとけつて話なんだが俺の知らねえこと知つてそうだつたし聞いといた。

「…………は…………ねえ…………（ボソツ）」

そういうや、チーム名とか『族章』^{エンブレム}とか考えねえとな。

「…………私は…………ねえ…………（ボソツ）」

あ、後メンバーどうすつかな？
明久たち誘つてみるか？

「私は認めねえ！！！！」

「つー？」

母さんが突如大声を上げ、それに驚く俺。
急に大声出すのはやめる。心臓に悪い。

「てか、何を認めねえの？」

「空がチームを創ることーそんなことせずに私のチームに入れ！！」

「やだ」

ベーと舌を出してそう告げる。

ブシコウウツ

あ、母さんの血管から血が。

「……お願いだから呪。

私が……優しく言つてゐるだけ……私のチームに入れ

「メカニカルピクセナガラ母さんが告げる。

うへえ、怖え。だが

「そんなんに俺の『力』が欲しいなら賭けるよ

『誇つ（ハングレド）』を

ビシッヒと呻あんを堪忍しておひがむ。

「俺が負けたら母さんのチームに入つてやる。

そのかわり……俺が勝つたら俺のチームを創らせてもらひつ……」

「…………」

「…………」

しばらく睨み合ひが続き、俺が揺らがなことを感じてか母さんは口を開く。

「……フンッ！ 今夜12時にここにグラウンドへ来い……」

「……了解」

「狩の女神の力を思い知らせてやる……！」

そう告げると母さんは不機嫌オーラを撒き散らしながら職員室から出ていった。

バカと俺と単語集（後書き）

『チューニング
調律』

A・Tを使用者の生体リズムに合わせること。
本来は『調律者』^{リンクチューナー}が『玉璽』^{レガリア}を『王』に合わせること。

『リンクチューナー
調律者』

男性の『王』なら女性の『調律者』が、女性の『王』なら男性の『調律者』がそれぞれつく。
『エア・ギア』を読んでいる限りで言えば、時間を（秒単位で）正確に刻み続けることができれば『調律者』としての素質はあると思われる。

……窓の『調律者』は誰にしようか？

バカと俺と6時間目（前書き）

今回は短めです。

帰宅後のことに入れようと思ったのですが変になつたので次の投稿で。

バカと俺と6時間目

Fクラス教室

今は6時間目の半ば頃。

ヤブのマンガのことを鉄人にリーアクして、琥珀を優子に預けたまま俺は教室に戻ってきており、坂本の席にいつものメンバー（坂本含む）と集まってDクラスとの試合戦争のことについて話し合っている。

坂本についてだが、今メンテナンスとか採点とかで教師の手が足りねえからって補習はなくなつたらしい が、かわりに反省文を明日までに書いて来なけりやならねえんだと。面倒そうだ。

んでそれに対して俺は何も課されてねえけど、1時間も何をやってたんだ？って訝しがられたから鉄人に鉄拳制裁を下されて気絶してたことにした。

実際母さんに50分くらい氣絶させられてたし嘘は言つてねえ。

「んで『スネーク焚き付け作戦』は成功したのか？明久も島田も教室に戻つて來てるし」

俺は隣に揃つている明久と島田を一瞥し坂本に尋ねる。

「ああ、成功だ。おもしろいくらいに引っかかつてくれたから明日の朝には宣戦布告をしにDクラスの使者がくるだろうな」

「そうか、んじゃBクラスの方は？こっちに攻めてくるかもしんねえんだろう？」

「それも大丈夫そうだ。俺と空が廊下で大分騒いだおかげで『またバカをやっているな』とは思われても、『目論見に気づいているな』とは思われないだろう。

それに保険としてDクラスがBクラスに攻め込むために試合戦争の準備をしているつていう偽情報を流しているし、その偽情報を聞いてDクラスに同盟を結びに行こうとしたBクラスの使者を一人、ムツツリーに殺つてもらつた。

それでDクラスがBクラスに敵意を持つていることに信憑性が増しだろう

上出来だ、と坂本は笑う。

「そうか。なら明日頑張んねえとな

「ああ。みかん箱は『めんだからな

「.....」

今度坂本にみかん箱の良さを語つてやるが、と俺は心に誓つた。

バカと俺との6時間目（後書き）

感想待つてます（、ー、）△

バカと俺と調べ物（前書き）

微妙な出来

バ力と俺と調べ物

家童字

只今俺の部屋にいるのは琥珀と俺の2人だけ。
俺が『調べモノをしねえといけねえから何もできねえよ?』って言
つたから憂子や愛子は来てねえ。

んで何を調べるのかつづーとMのチームのこととか俺に懸かつてゐる懸賞金のこととかだ。

ま、とりあえずパソコンの電源を付けてYAPOO!に接続。
別に〇〇〇logueでもいいがな。

『パパー、何調べるのー?』

俺の膝に座っている琥珀からそう声がかかる。

「ん？あー、Mのチームについてとかだな」「なら、僕に任せてー！」

ん？親の手伝いをしたいお年頃か？そう言つてくれるのは嬉しいが

「パソコン使えんのか？」

『大丈夫なのー！パソコン使わなくても調べられるのー！』

「？……どうやんだ？」

『…………どうやんだ？』
『もちろん【天使の力】^{テレスマ}使うのー！』

「へえ、【天使の力】^{テレスマ}ってマジで便利だな。

それって俺にもできんのか？」

『できるよー。でもパパのお手伝いしたいから今日は教えなーい』

「そうか。なら、今日は頼むな」

『はいなー！』

そう元気よく返事をすると両方のコメカミに人差し指をあて、目を瞑つて唸りだす。

シャキンッ

琥珀の前髪が一束重力に逆らつて天を向く。

電波受信中、つてか？面白えな。

『えーっとねー。パーソ・ウォウCクラスチーム【T・R E X】。メンバーハ五人。^{パトル}平均戦レベル約50。拠点は如月高校だってー』

「ふむ、Cクラスつてどれくらいだ？」

『うーん……それなりに努力しないといけないらしいよー』

「なるほどな」

ならアイツらのためにもチーム創んねえとな。
んで如月高校つて言や隣町か……。隣町にはあんのになんでこの町にはA・Tがねえんだろうな……？

『それはねー、【アルテミス】つてチームの拠点が文月市だかららしいよー』

「……どういうことだ？」

『市内のA・T使い（ライダー）を徹底的に潰してたから、市内を

走るようなA・T使いがいなくなつたんだつてー』

それでパー^ツ売つても全然儲かんねえからパー^ツ売る店がねえのか。
いい迷惑だ
が、そのためか家ン中にいろんなパー^ツがある
からいいか。

……あ、ついでだし言つとくがA・Tとか【玉靈】創つた時も勝手
にパー^ツ押借した。

んで基本的に走る時は【天使の力】^{テレスマ}で創つたA・Tではなく自作の
A・Tを使つてる。【天使の力】が使えなくなつた時のために慣れ
とかねえといけねえって意味合いがあるからな。

それに自分で創つたんだし、使わねえともつたいたいねえつてのもある。

「あ、琥珀。【アルテミス】のこと調べられるか?」

『できるよー。むむむー……!

……えーっとねー。パー^ツ・ウォウAクラスチーム【アルテミス】。
メンバーは4人で、全員が【王】。平均戦レベル約210。拠点は
文月市だつてー』

平均レベルが210か。強敵だな。

「【王】の名称を教えてくれ

『はいなー。

【朔風の王】【閃響の王】【鉄の王】【轟鍼の王】。
コレで全部なのー』

「さんきゅ

んー……【朔風の王】はおそらく風系のA・T使い(ライダー)だ
な。

それ以外は皆目見当がつかねえ。

「んじゃ次は俺に懸かつてる懸賞金のこと調べられるか?」

《懸賞金ー?》

「Mたちが100万円がどうとか言ってただろ?」

《そりだつけー?》

うーん……あんまり覚えてないけど調べてみるのー。むむむーー。』

そう言って再び唸りだす琥珀。

《……えーっとねー。金髪碧眼の文月学園に通つているハーフ。懸賞金500万円だつてー。100万円から上がつてるねー》

わやわやわやわと笑つて琥珀が言つ。

某海賊王を田指してる麦藁つてワケじやねえから懸賞金上がつても嬉しくねえんだが……。

「どこのどいつが俺を狙つてるか分かるか?」

《うーん……消されちゃつててわかんなーい》

「消されてるつてどうこいつ意味だ?」

《えーっとねー……【skylight】にアクセスして調べてるんだけど、狙つてる本人が見つかりたくないからなのかそこの情報が消されちゃつてるのー》

「そりだつけー?」

いかにも面倒事です、つづー嫌な二オイがブンブンするな。
周りに迷惑になんねえといいけど……。

「琥珀」

『なにー?』

「今日は優子んちに泊まつとけよ?俺は用事があるから」

『ええー、やだー!僕もパパと一緒に行くのー!』

「……今日はマジでダメだ。優子と一緒にいひ。明日田一杯遊んでやるから

「むー……約束だよー?」

そう言いながら琥珀は小指を立てる。
それに俺は自分の小指を絡ませ、

「ああ、約束だ

バカと俺と調べ物（後書き）

読者の中には【王】の名称からどの【道】を走っているのか予想のつく方がいると思いますが、空は自分の走っている【道】に関係のある【道】（【風】【炎】【牙】【棘】）にのみ興味があるので、例えば【轟鍼の王】なら【轡藍の道】の【壁】が関係している（かもしれない））こうつ事が分かっていません。

感想待つてます

俺と自由と鮮血の用（前書き）

これからはH・ア・ギア色が強いときのサブタイトルは『俺と自由と
～』になります。

俺と自由と鮮血の月

A
M
0
:
0
7.
o

「んじや “今から” 行くか」

言葉の通り俺はまだ文翔学園のグラウンドには行つてねえ。
それはなぜか？体を温める為に走つてたらいつの間にか時間が過ぎ
てたから。

つてなワケで今から急いで行かねえとな。

「……にしても、今田の用はやたら赤えな……」

空を見上げるとそこに浮かぶのは【鮮血の虹】

『URYYYYY—ツツツツツツ—！—！—！—！』

文月学園の方から叫び声が聞こえる。

この独特な叫びからしてたぶん【プラグ・マン】が来てんだろう。【プラグ・マン】つついの人は3度の飯よりA・Tが好きな頭に、ダイヤル式のテレビをモチーフにしたヘルメットを被つた謎の男。よく動画で戦^{バトル}のナレーションをしてるのを見かける。

『グツ……モ～～一ンツ、ザ・世界^{ワールド}!! 燃えるゼツ世界地上波生中
継ツ!!

こちら【P・G・TV】【P・G・TV】 プラグ・マン・ゲリラ・
テレビ!!!!』

にしても声デカすぎだ。近所迷惑とかお構い無しだな。

『さあさあ始まつたゼツ!! ガン首そろえた変態共ツ!!

今夜ツ数年前に突如姿を消したツ!!あの最強のチーム【アルテミス】がついに復ツ活ツだアアツツ!!!!』

『『『ウオオオオオオオオオオオオ!!』』』

ふむ、それなりに観客^{ジャニオンギー}がいるらしいな。んでもつて母さんたちは活動停止してたらしい。【重力子^{グランピティ・チルドレン}】を殺してえんだつたらとっと殺せばいいの何考えてんだ?

そんなことを考えながら文月学園へ続く坂道を駆けているとプラグ・マンの聞き捨てならない台詞^{トライク}が耳に入ってきた。

『 だがツ【アルテミス】にケンカ売ったチームはビビッてんのかなかなか姿を現さねエゼツ!!』

あア?誰がビビッてるだア!!
ビビッてねえとこをみせてやるよ!!

俺は直接グラウンドに行かず校舎の壁を登つて屋上へ。そこから文字通り【風】に乗つてグラウンドの上空へ駆け上がり、そしてパイルトルネード（風をコイル状に操つて蹴り出す技）で地面に向か人為的に螺旋状の【風】の【道】を作り出す。

『な、なんだなんだッ！？？突然竜巻が発生した
たら炎の渦になつたぜッ！？？』

プラグ・マンの解説する通り砂を巻き上げ黄色くなつていた巻も
といパイルトルネードは俺がその中を駆ける事により紅く染め直さ
れる。

ト
ツ

軽やかな音と共に地面に到達。そして、魅せる技を。
トロック

キュー、キュー キュウッ ポッ ボアッ

trick: ikaros Pteron

【炎】の渦が消えるのを見計らつたかのように足元から3対6翼の紅蓮の翼が開かれる。

【アルテミス】に挑戦するA・T使いかツ！？？

ヤロウチー！！！

校舎側にいつもの放送用のセットではなく【マージーTV】と書かれた中継車でナレーションをしているプラグ・マンから俺を称讃する声があがる。

に用途不明のポールがたつていた。

なんに使つんだらうな？ そんなことを考えながら、形だけの謝罪を。

「よお、母さん。待たせたな」

白のパーカーを上に、【アルテミス】のチーム・ウェアと思われる黒に赤のラインの入つたジャージを下に着た母さんにそう投げかける。

「おー、やつと来たか。なかなか来ねえから逃げたのかと思つたぜ」「あ？ 母さん相手に逃げる？

ハツ、んなワケねえだろ。母さんなんざ叩き潰してやるよー。」

「フンッ、今の内に吠えとけ。実力の差を思い知らせてやるよ。」

互いに挑発していると、上はいつもの白衣（ナースが着ている物ではない）ドトは母さんと同じジャージを穿いているヤブから声がかかる。

「宇童君！ あの筋肉達磨にワタシの漫画のことをリークしただろ！ おかげでワタシの半身が焼却炉で焼かれてしまつたじゃないか！」「は？ なんのことだ？」

「惚けるなよ！ ……筋肉達磨から『宇童から聞いたぞ』って聞いたんだよ！」

「……ちつ」

鉄人の野郎いらねえ」と言いやがつて……。

「今舌打ちしたなー？」

よろしい！ ならば戦争だ！

ヤブがそう告げるとき、ヤブの背後に【影技】^{シャドウ}が姿を現す。

その【影技】はブラックジャック。

よっぽどブラックジャックが好きなようだ。

……【影技】とは関係ねえか？

『おおッ！？両者共に殺る気マックスのようだぜッ！？』

それじゃ恒例の【READ】起動オーネット……『……』

ポチッとな、とこう感じでリードのボタンを押し俺たちのレベルを計るプラグマン。

それによつて文月学園の上空に（どうこう仕組みかわからないが）スクリーンが展開され俺たちの姿と共に戦レベルが表示される。

『『『！？？』』』

そこに表示された俺のレベルを見て周りが驚愕している。

『チーム』

269

VS

チーム【アルテミス】

アトロポス	228
クロートー	202
ヘーパイストス	211
ラケシス	209

（半袖の赤パークーを着ている俺）

アトロポス（パーカーの袖を捲つた母さん）

クローテー（母さんの右後ろにいるヤブ）

ヘーパイストス（ヤブの右隣にいる上半身裸の筋肉達磨）

ラケシス（母さんの左後ろにいるシャーリーを腰に巻いた女性）
下はみんなジャージのズボン。

全員洒落た名前してんな。俺と大違ひだつづーか名前がねえ。なぜに？

平均レベル200超えの【王】ならぬ【魔王】たらばの【アバランチ】に見劣りしねエコノヤロウはツ一体何者なんだツツ！！！！！
にしてもレベル以外表示されねエつてことは「ノヤロウはパーツ・
ウォウに登録してねエらしいゼツ！！？？」

へえ、名前がねえのはそりこいつことだったのか。

「空つて結構レベル高えんだな」

「あ？なんだ？ ビビったのか？」

「フンッ、バカ言つてんじやねえよ。」
ストーム・ライダー

【暴風族】 同士の戦いは合計レベルの高い方が勝つんだ。
ベルが高かるーが空一人じゃ私たちにや勝てねえよ。

恥かく前に帰つたらどうだ？そして私のチームに入れ
「ハツ、闘る前から勝手に決めつけてんじゃねえよ。俺は絶対母さん倒してチーム創るからな。

にしてもジジババのチームをフルボッコにしねえといけねえっての

は心が痛むな

「あア？ ナメてんじやねえぞ！！」

「ナメてるワケじゃねえ、眼中にねえだけだ」

「ハアツ？ 殺すツ！ お前マジ殺すツ！」

仲間に引き入れたいんだつたら殺すなよ……。

そうやつて母さんを挑発している間にプラグ・マンは戦バトル方式の説明に入っていた。

『 勝負方式は四方にたつポールで囲まれたグラウンドを、檻に見立た【キューブ】ツ！上への制限は無しツ 』

（解説：【キューブ】とはパーツ・ウォウの中で最も過激で危険でポピュラーな戦。本来なら1対1での漬し合いで完全な密室である。今回は1対4）

んじやそろそろ用意でもするか。

俺は意識的に過呼吸を行い、そして息を吐くと、激痛を伴いながら体の各関節に気泡が発生し無理矢理股関節の可動域を広げる。

『 ケダモノ5匹檻の中！…生き残るのは一体誰だツ？？ 』

まずは小手調べとするか。

右足を大きく後ろにひきそして前へ振り抜くと、パパパツと乾いた音をたてて【玉璽】についている“爪”が空気を弾き【棘】を撃ち出す。

（解説：A・Tによりある程度の“タメ”があれば【牙】を放ち、なければ【棘】を、という具合に使い分けができるのが【炎狼の玉璽】の特徴の1つ。

ただ、普通に蹴つただけでは【棘】は出す可動域を限界以上に広げた時の思いつきりの蹴り、または“タメ”た力をうまく分散した場合にしか放つことができないため、なかなか扱い辛い。

ぶつちやけ空の【道】に【棘】を入れるかどうか悩みどころ。

人特有の膝を中心としたバネでの切り返し（ターン）ではなく犬のような“全身のバネ”での切り返し（ターン）を目的として取り入れたため、空は【棘】を攻撃として使用するのは苦手）

『URYYYYY---ツツツツ---

金髪ヤロウがいきなり戦^{バトル}をおっ始めやがったツ---

しかもまさかの【棘】による攻撃だツ---

本来【荆棘の道】^{シニア・ロード}を走るにはヤロウの股間じゃ役不足ツ---それなのに余裕気に【棘】を撃ちやがったぜコノヤロウツ---チ?コ付いてんのかツ---??』

いつものことだが中継中にとんでもねえこと口走つてんじゃねえよ
!?

そんなことを考えてこると母さんが口を開く。

「Eh。こんな爪楊枝飛ばしてどうにかできると思つてんのか?」

「思つてねえよ。ただの小手調べだ」

「『小手調べ』ね。ナメられたもんだ、なつー」

ブアツ

母さんは手を前方に突き出し空氣の【壁】を作り出して俺の【棘】を防ぐ。

なるほど、母さんが【朔風の王】か。

なら俺の【道】と相性がいいな。そうと分かれば即行動。

タツ

母さんに迫り、

ザザーッ

目前で急停止。そして

trick : Grand Fang Fire Bird

ゴオオオオオオオッ

右足を振り抜きほぼ零距離で特大の【炎】の【牙】を放つと母さんはそれに呑み込まれ悲鳴をあげる。

「……口ほどにもねえ。ま、とりあえず一人、つと」

戦はまだ始まつたばかり

俺と自由と鮮血の月（後書き）

鮮血の月・戦の前兆

READ：A・Tに付属しているメモリースティックに記録されている走行データを読み込んで戦レベルを算出するソフト
アルテミス：ギリシア神話に登場する狩猟・純潔・月の女神。

チーム：【アルテミス】

エンブレムデザイン：右翼を閉じ左翼を広げた天使

感想待つてます

俺と自由と新たな【道】（前書き）

息抜き更新です

受験勉強の合間に書いたモノなので可笑しなところがあるかもしれません

感想待つてます

俺と自由と新たな【道】

「……まずは1人……」

俺はポツリと呟く。

『アーネンアーネンアーネンベリイイバボオオオオ――ツツツツツツツツ

誰か予想したこの展開ッ!! 【朔風の里】と謳われるアトロボスを苦もなくあつさり倒しやがつたぜッ「ノノヤロウー!! まったくなんて化けモンなんだッ!!

俺の予想した通り母さんが【朔風の王】だつたようだ。

【道】走つてんのかわかんねえし。

油断せずにいくか

……つって相手が動くのを待つて何もしねえってのは勝ちから逃げてるってことだし、とりあえず

「攻撃あるのみつ！！」

次の獲物はいきなりのことで固まっているラケシスと呼ばれる女性。ヘーパイストス（上半身裸の筋肉達磨）とクロートー（ヤブ）は素早く反応し距離をとったため放つておく。

「ふう！」

軽く息を吐き出し、ラケシスの右側頭部に蹴り。

「……つー?」

咄嗟に反応し腕を交差して俺の蹴りを防ぐ。腕からはメキッと骨の軋む音が聞こえてくるが吹つ飛ばないことから力を受け流したようだ。

この至近距離での蹴りを受け流すか……なかなか手強いな。だが、

「ううなうそうもいかねえだろつー!」

素早く足を戻し今度は脹ら脛へ蹴りを放つ。

パンッ

乾いた音と共に重力から解放されるラケシス。

「……え……?」

その場で無理やり側転（腕と足は投げ出されるような形になつている）させられ痛みよりも自分の状況が飲み込めないことに氣の抜けた声を発した。

「どうだ？ 重力から解放された気持ちは？」

そんなことを尋ねながら腹にガゼルパンチ。

ドゴッ

「うう……げほつ……！ー？？」

人が発するハズのない重々しい音を立てポールで囲まれた範囲外へ吹っ飛んでいくがすんでのところへヘーパイストス（上半身裸の筋肉達磨）に受け止められた。

失格にならなかつたが氣絶しているので邪魔にはならないだろ？

「出しどきやいいのに……。ま、とりあえず二人目つと」

次はヤブに狙いを定める。

ヘーパイストスの方が両手が塞がつて倒しやすそうだがヤブがそれを黙つて見過ごすワケねえだろ？からな。

trick : After Burner

【炎】と音を置き去りにした超高速移動。

俺の姿が突如消え、元いた場所に【炎】と、数瞬遅れて衝撃波による乾いた音が響く。

「ヤブー・マンガのことで文句があるんなら“走り”で語れ！」

trick : Leviathan

毎度のことながら背後に現れ【牙】を放ちながら告げる俺。

“花束（【牙】を放つたため当たれば真っ赤な花が咲くだろ？の意）

”をプレゼントするあたり俺はなかなか紳士なヤツだと想つ。

「言わなくてもそうあるつもつだよ

背後に現れた俺に素早く反応し距離をとった かと細つて血【】

【牙】に迫るヤブ。

「……血迷つたか……？」

「いや、ワタシは至つて正常だよ？

折角だしワタシの【道】を教えてあげよつ

そう言ひてヤブが【牙】に“向かつて”蹴りを放つ。

ハユゴキユウカウウツー！

「な……つーー？？」

俺の【牙】がかき消され……いや

「“喰”つたのか！？」

「御名答。宇童君の【牙】は美味しいだいたよ。

……そうだね。ワタシだけもうのは悪いからお礼に“コレ”を返

やつ

にっこりと笑つてヤブが足を完全に振り抜く。

すると、パパパッとA・Tのホイールについている突起物が空気を
弾く音が聞こえ、俺に向かつて無数の細く鋭い【棘】が放たれる。
しかも俺の【棘】と段違いの速さで、俺の視界を埋め尽くし【壁】

のよひに、だ。

「ひ……！？？」のクソつたれがつ――」

ボツボツ

俺の前方の左右に【炎】で上昇氣流を発生させ、

ブツツ

【風】で前方に流し、

ゴアツ

【牙】を放つ。

前方向への上昇氣流と【風】により【牙】の威力を増して、【棘】の【壁】に接触。

今のうちに範囲外に――

そう考え動きださうとしているとバキンッ！…と何かが碎ける音が耳に入り、それに目を向けると

「クソがつ――いくらなんでも早すぎんだろ―？」

やはつと詰つべきか【牙】が破られ【棘】の【壁】が迫ってきていた。

やっぱ“タメ”がねえといへら【炎】と【風】で威力上げようがナマクラ以下か……つ――

軽い音を立てながら【棘】が俺に刺さっていく。

「……………」

軽い音に反して絶大な威力を体感し声にならない叫びをあげながら俺は地面に倒れ込む。

それを満足げに見つめてヤブが口を開く。

……ぢや顔うぜえ……。

「それじゃあ改めて血口紹介をしようか。

ワタシはクロート。【轢藍の道】オーヴァ・ロードと【荆棘の道】ニニア・ロードを融合させた新しい【道】、【震楚の道】ローン・ロードを駆る【轟鍼の王】だ

……オーヴァ……ロード……。……なんだそれ……？

俺の表情を読み取ったのかヤブは親切に説明しだす。

「田の前に立ちはだかる者全てを叩き伏せ、轢き潰すのが【轢藍の道】オーヴァ・ロード。

その轢き潰すのに“ラム・ジェット理論”といつものを利用しているんだけど、宇童君は“ラム・ジェット理論”といつものをご存知かな？

……興味ねえことば知らねえよ。

“ラム・ジェット理論”といつのは、超々音速飛行機のために開発が進められている究極の推進システム。

その推力は“向かい風”

……“向かい風”……なら俺の【牙】も【風】も相性最悪じやねえか……。

「吸気孔に入った“向かい風”は自らの[圧]力によつて[圧縮]されさらなる加速を生んで後方へと噴射される。

押し寄せる『風』が強ければ強いほどさらに加速されていく。

それは[口]への風が強ければ強いほど自らの力にかえて猛り狂う風車の如く、ね」

そしてヤブは俺に手を差し出す。

「解説はこれくらいにして、同じチームの仲間として以後よろしく頼むよ

どうやら『俺が負けたら【アルテミス】に入る』ってことを言つてゐるらしい。

「…………」

「ほひ、どうしたんだい？」

「…………」

「握手だよ、あ・く・しゅ。仲間になるんだから握手くらいいじやないか」

その言葉を聞き俺はヤブに手を伸ばし

「まったく宇童君はシン『レだね

パンツ

やれやれと呆れているヤブの手を弾く。

「……………」れはびつこうことかな?」

「……そんなの言つ今までねえだろ。」

俺は【アルテミス】に入る気はねえ。そもそも負けてねえし……！」

「……往生際の悪い子だね。そんな子は轢き潰してあげないと」

「そう簡単にいくかよ!!」

うつ伏せの状態から素早く起き上がりヤブから距離をとる。

【棘】が体の芯まで届いたためなかなか体力が回復しないが動く分には問題ない。

「ヤブの“ソレ”は【風】とか【牙】とか強力な“向かい風”がねえと使えねえんだろ?

なら俺が【風】と【牙】を使わなかつたらいい話だ!!」

『時よ』つ!!

高速の拳打が破裂する。

俺と自由と新たな【道】（後書き）

ラケシスの【道】が不明のまま倒されてしまったが、機会があればだします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1732w/>

バカと暴風と召喚獣

2011年11月27日10時51分発行